

**IBM Content Manager
for Multiplatforms**



Information Integrator for Content の計画とイン ストール

バージョン 8 リリース 2

**IBM Content Manager
for Multiplatforms**



Information Integrator for Content の計画とイン ストール

バージョン 8 リリース 2

お願い

本書、および本書で記述されている製品をご使用になる前に、231 ページの『特記事項』をお読みください。

本書の内容は、新版で特に断りがない限り、IBM Enterprise Information Portal for Multiplatforms (製品番号 5724-B43) バージョン 8 リリース 2 以上のすべてのリリースおよびモディフィケーションに適用されます。

"CUP Parser Generator Copyright Notice, License, and Disclaimer

Copyright 1996-1999 by Scott Hudson, Frank Flannery, C. Scott Ananian

Permission to use, copy, modify, and distribute the CUP Parser Generator software and documentation for any purpose and without fee is hereby granted, provided that the above copyright notice appear in all copies and that both the copyright notice and this permission notice and warranty disclaimer appear in supporting documentation, and that the names of the authors or their employers not be used in advertising or publicity pertaining to distribution of the software without specific, written prior permission.

The authors and their employers disclaim all warranties with regard to this software, including all implied warranties of merchantability and fitness. In no event shall the authors or their employers be liable for any special, indirect or consequential damages or any damages whatsoever resulting from loss of use, data or profits, whether in an action of contract, negligence or other tortious action, arising out of or in connection with the use or performance of this software."

本マニュアルに関するご意見やご感想は、次の URL からお送りください。今後の参考にさせていただきます。

<http://www.ibm.com/jp/manuals/main/mail.html>

なお、日本 IBM 発行のマニュアルはインターネット経由でもご購入いただけます。詳しくは

<http://www.ibm.com/jp/manuals/> の「ご注文について」をご覧ください。

(URL は、変更になる場合があります)

お客様の環境によっては、資料中の円記号がバックスラッシュと表示されたり、バックスラッシュが円記号と表示されたりする場合があります。

原 典： GC27-1345-01
IBM Content Manager for Multiplatforms
Planning and Installing Information Integrator for Content
Version 8 Release 2

発 行： 日本アイ・ピー・エム株式会社

担 当： ナショナル・ランゲージ・サポート

第1刷 2003.2

この文書では、平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、平成角ゴシック体™W5、および平成角ゴシック体™W7を使用しています。この(書体*)は、(財)日本規格協会と使用契約を締結し使用しているものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

注* 平成明朝体™W3、平成明朝体™W9、平成角ゴシック体™W3、
平成角ゴシック体™W5、平成角ゴシック体™W7

© Copyright International Business Machines Corporation 1999, 2003. All rights reserved.

© Copyright IBM Japan 2003

目次

本書について	xi
本書の対象読者	xi
Enterprise Information Portal のインストールに 必要なスキル	xi
参考情報	xi
製品パッケージに含まれる情報	xi
Web 上で入手可能なサポート	xiii
EIP バージョン 8 の新機能	xiii

第 1 章 Enterprise Information Portal の紹 介	1
顧客情報の検索	1
ニーズ	2
ソリューション	2
Enterprise Information Portal コンポーネントの 紹介	2
管理	4
コネクタ	5
フィーチャ	6
コンテンツ・ビューアー	7
コネクタ・ツールキットおよびサンプル	7
Information Center	8

第 2 章 Enterprise Information Portal シス テムの計画	9
ビジネス情報の要件の分析	9
構成の計画	9
サーバー構成の選択	10
開発ワークステーション構成の選択	12
クライアント構成の選択	13
Windows サーバー・マシン・タイプの概要	14
システム管理の計画	15
Enterprise Information Portal ネットワーク・セ キュリティーの計画	16
一般的な計画のヒント	17
ワークフローの計画	19
情報マイニング・インストールの計画	19
EIP パフォーマンスの計画	19
パフォーマンスの計画に関する詳細情報の探 索	21

第 3 章 EIP のハードウェアおよびソフトウ ェア要件	23
Windows の要件	23
EIP クライアント、サーバー、および開発 ワークステーションのハードウェア要件	23
EIP サーバーおよび開発ワークステーショ ンのソフトウェア要件	24
情報マイニングおよび Web Crawler のソフ トウェア要件	26
システム管理クライアントのハードウェア 要件	26
システム管理クライアントのソフトウェア 要件	27
Information Center のハードウェア要件	27
Information Center のソフトウェア要件	27
AIX の要件	27
AIX のハードウェア要件	28
AIX サーバーのソフトウェア要件	28
Solaris 要件	30
Solaris のハードウェア要件	31
Solaris サーバーのソフトウェア要件	31
RMI サーバーの要件	33
クライアント/サーバーのサポート・マトリッ クス	33

第 4 章 Windows の場合の前提条件プログラ ムのインストールおよびアップデート	35
Windows でのソフトウェア前提条件の検証	35
前提条件のインストール/アップデート	38
Microsoft Windows オペレーティング・シ ステム	38
IBM DB2 Universal Database™	38
IBM DB2 Net Search Extender (NSE) およ び Text Information Extender (TIE)	41
Microsoft Visual C++ Compiler	42
IBM WebSphere Application Server (WAS)	44
Java Development Kit (JDK) のバージョン	46
Workflow の Windows へのインストール	46

第 5 章 Windows でのプリインストール手 順の実行	51
---	-----------

適切なユーザー権限および特権を持つユーザー ID の作成	51	IBM VisualAge C++ Professional Batch Compiler	86
システム上に十分な一時スペースがあることの確認	53	IBM DB2 Universal Database	88
%PATH% が長すぎないことの確認	53	IBM DB2 Net Search Extender (NSE) および Text Information Extender (TIE)	93
第 6 章 Windows での Enterprise Information Portal コンポーネントのインストール	55	IBM WebSphere Application Server (WAS) MQSeries Workflow の AIX へのインストール	93
管理データベースのインストールの前に	55		94
Content Manager バージョン 8 データベースの共用	55	第 9 章 AIX でのプリインストール手順の実行	101
EIP の旧バージョンの除去	57	正しいバージョンの Java の確認	101
EIP Windows インストールのクイック・スタート	58	ユーザー ID の作成	101
EIP のインストール・ウィンドウ	58	新しいユーザー ID の .profiles の更新	103
共通のインストール・ウィンドウ	63	DB2 インスタンスの profile.env ファイルの更新	103
固有のインストール・ウィンドウ	67	Content Manager 環境設定に合わせた userprofile ファイルの作成	103
EIP コンポーネントを Windows にインストールした後に	76	データベース環境の確立	103
第 7 章 Windows での Enterprise Information Portal の正常なインストールの検証	77	第 10 章 AIX での Enterprise Information Portal コンポーネントのインストール	105
システム管理データベースおよびシステム管理クライアント通信の検証	77	AIX での Enterprise Information Portal コンポーネントのインストール	105
Enterprise Information Portal システム管理データベースの検証	78	EIP AIX インストールのウィンドウ	106
低レベル接続テストの実行による接続の検証	79	コンポーネントの選択 (Component Selection)	106
Enterprise Information Portal First Steps の実行によるインストールの検証	80	システム構成 (System Configuration)	106
Enterprise Information Portal コンポーネントが単一マシン上にインストールされている場合の First Steps の実行	80	LDAP サーバーの定義 (Define LDAP Server)	108
Enterprise Information Portal コンポーネントが複数のマシン上にインストールされている場合の First Steps の実行	81	LDAP サーバーの構成 (Configure LDAP Server)	109
First Steps の検証	84	LDAP サーバー・セットアップ情報の確認 (Confirm LDAP Server Setup Information)	109
第 8 章 AIX の場合の前提条件プログラムのインストールおよびアップデート	85	Content Manager V8 サーバー接続の構成 (Configure Content Manager V8 Server Connection)	109
AIX でのソフトウェア前提条件の検証	85	Content Manager V8 コネクター: サーバー・セットアップ情報の確認 (Content Manager V8 Connector: Confirm Server Setup Information)	110
前提条件プログラムのインストールまたは更新	85	統合接続の構成 (Configure Federated Connection)	110
AIX オペレーティング・システム	85	統合コネクター: サーバー・セットアップ情報の確認 (FED Connector: Confirm Server Setup Information)	111

システム管理データベースの構成 (Configure system administration database)	111	Solaris でのソフトウェア前提条件の検証	121
データベースはすでに存在 (Database Already Exists)	113	前提条件のインストール/アップデート	123
システム管理サーバー・オプションの選択 (Select System Administration Server Options)	113	Solaris 8 操作環境のパッチ	123
システム管理データベース・セットアップ 情報の確認 (Confirm System Administration Database Setup Information)	113	Sun Forte C++ Compiler バージョン 6.1	124
イメージ検索: クライアント・セットアップ 情報の入力 (Image Search: Enter Client Setup Information)	113	IBM DB2 Universal Database	124
イメージ検索クライアント: セットアップ 情報の確認 (Image Search Client: Confirm Setup Information)	114	IBM DB2 Net Search Extender (NSE) およ び Text Information Extender (TIE)	131
テキスト検索: クライアント・セットアップ 情報の入力 (Text Search: Enter Client Setup Information)	114	IBM WebSphere Application Server (WAS)	132
テキスト検索クライアント: セットアップ 情報の確認 (Text Search Client: Confirm Setup Information)	114	MQSeries Workflow の Solaris へのインス トール	132
インストール状況 (Installation Status)	115		
RMI ホスト名とポート番号の指定 (Specify RMI Host Name and Port Number)	115	第 13 章 Solaris でのプリインストール手 順の実行 137	
インストール完了 (Installation Complete)	115	正しいバージョンの Java の確認	137
AIX でのクラスパス、環境変数のエクスポート	115	ユーザー ID の作成	137
AIX での EIP インストールの検証	115	新しいユーザー ID の .profiles の更新	139
		DB2 インスタンスの profile.env ファイルの 更新	139
		Content Manager 環境設定に合わせた userprofile ファイルの作成	139
		インストールを始める前のデータベース環境 の確立	140
第 11 章 AIX での Enterprise Information Portal の正常なインストールの検証 117		第 14 章 Solaris での Enterprise Information Portal コンポーネントのイン ストール 141	
Enterprise Information Portal First Steps	117	EIP コンポーネント・パッケージのインスト ール	142
Enterprise Information Portal システム管理デ ータベースの検証	117	1. インストールおよび構成 (Install and configure)	143
システム管理データベースおよびシステム管 理クライアント通信の検証	118	2. インストールのみ (Install Only)	143
低レベル接続テストの実行	118	3. アンインストール (Uninstall)	144
テストを実行する前に	118	4. 構成 (Configure)	144
接続テストの実行	119	5. インストール済みコンポーネントのリス ト (List installed components)	145
Content Manager バージョン 8 への		6. 終了 (Quit)	145
Enterprise Information Portal 接続の検証	120	Solaris でのクラスパス、環境変数のエクス ポート	145
		EIP インストールの検証	145
第 12 章 Solaris の場合の前提条件プログ ラムのインストールおよびアップデート 121		第 15 章 Solaris での Enterprise Information Portal の正常なインストール の検証 147	
		Enterprise Information Portal First Steps	147
		Enterprise Information Portal システム管理デ ータベースの検証	147

システム管理データベースおよびシステム管	
理クライアント通信の検証	148
低レベル接続テストの実行	148
テストを実行する前に	148
接続テストの実行	149
Content Manager バージョン 8 への	
Enterprise Information Portal 接続の検証	150
第 16 章 Enterprise Information Portal	
コンポーネントの構成	151
Windows でのコンポーネントの構成	151
管理クライアントのローカル管理データベ	
ースへの接続	151
リモート管理データベースへの管理クライ	
アントの接続	151
Windows でのワークフロー・サービスお	
よびユーティリティーの構成	156
開発ツールキットの環境変数の設定	157
コネクタ・ツールキットからのサンプル・	
プログラムの使用	157
コンテンツ・サーバーの定義	157
AIX および Solaris でのワークフローの構成	159
EIP カスタム・インストールを使用した場	
合の MQSeries の構成	159
EIP カスタム・インストールを使用しな	
かった場合の MQSeries の構成	159
EIP タグ・ライブラリーおよびサプレット	
用 Web アプリケーション・サーバーの構成	160
WebSphere アプリケーション・リソース	
(WAR) ファイルの作成	160
エンタープライズ・アプリケーション・リ	
ソース・ファイルの作成	163
Panagon Image Services (IDMIS) 3.5.0 コ	
ンテンツ・サーバーの使用	164
Domino.Doc コンテンツ・サーバーの使用	165
サービスの適用後	165
Web 用 IBM Web Crawler の構成および実行	165
基本構成	166
IBM Web Crawler DB2 オプションの構成	166
クロールの有効範囲の設定	167
IBM Web Crawler の開始	168
情報マイニングのインストールおよび構成	168
インストールの手順	168
Information Structuring Tool 用 Web アプ	
リケーション・サーバーの構成	170
ブラウザー設定	181

JSP サンプル用 Web アプリケーション・	
サーバーの構成	182

第 17 章 RMI サーバーの構成 193

RMI サーバーの構成	193
複数の RMI サーバーの構成	195
情報マイニングの構成	198
ローカル RMI サーバーにおける情報マイ	
ニングの構成	198
リモート RMI サーバーにおける情報マイ	
ニングの構成	198
RMI サーバーのロケーションを認識させるた	
めのクライアントの構成	199
RMI サーバーでのワークフローの構成	199
リモート管理データベースの位置決め	200

第 18 章 構成ファイルの生成 201

cmbcmenv.properties	202
INI 構成ファイル	205
cmbcmenv.ini (ICM コネクタ)	207
cmbicmsrvs.ini (ICM コネクタ)	208
cmbfedenv.ini (統合コネクタ)	210
cmbds.ini (統合コネクタ)	211
cmbcs.ini (Java コネクタ)	213
cmbclient.ini (Java コネクタ)	214
cmbjdbsrvs.ini (JDBC コネクタ)	215
Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)	
データ・ソース	216
Java ICM コネクタ用の LDAP (IBM	
Directory Server) データ・ソース	217
Java ICM コネクタ用の LDAP (MS	
Active Directory) データ・ソース	220
Java 統合コネクタ用の LDAP (IBM	
Directory Server) データ・ソース	221
Java 統合コネクタ用の LDAP (MS	
Active Directory) データ・ソース	224

EIP Version 7 データベースのマイグレーション 225

EIP Version 7 マイグレーションの計画	225
EIP 7.1 データベースのマイグレーション	226
マイグレーションする前に	226
マイグレーション・ユーティリティーの使	
用	227

EIP サンプル・クライアントでの作業 229

特記事項	231	索引	247
商標	233		
用語集	235		

本書について

本書では、サイト計画者およびインストール担当者に、IBM® Enterprise Information Portal (EIP) の準備およびインストールのための情報を提供します。この手引きでは、ハードウェアおよびソフトウェア要件の概要を示すとともに、EIP のインストールと構成に関する特有の情報を扱います。

本書の対象読者

本書は、Enterprise Information Portal の計画、インストール、または構成を行う場合に使用します。本書は、システム・アナリストやシステムの計画担当者がこの製品を活用して目的の操作を行う方法を理解するために役立ちます。

Enterprise Information Portal のインストールに必要なスキル

インストール担当者は、以下のことに精通している必要があります。

- AIX®、Windows® サーバー、または Sun Solaris® へのソフトウェアのインストール。
- Microsoft Windows NT®, Windows 2000、AIX、または Sun Solaris® でのユーザー ID、パスワードの作成および管理、およびユーザー権限の定義。
- DB2® Control Center、コマンド・プロンプト、およびコマンド・ウィンドウのインターフェースの使用。
- 環境設定および環境変数を構成するための .INI および .BAT ファイルの修正。
- コマンド行インターフェースの使用。
- ネットワークを経由した分散コンポーネントへの接続。
- ローカルおよびリモート・アクセスを行うための DB2 データベースの構成、DB2 Client Configuration Assistant および DB2 Satellite Control Center を使用したデータベース認証やターゲット情報の設定。

参考情報

製品パッケージには、システムの計画、インストール、管理、および使用に役立つ情報が含まれています。また、製品の資料およびサポートは、Web から入手することもできます。

製品パッケージに含まれる情報

製品パッケージには、Information center および PDF (.PDF) 形式の資料が収められています。

Information center

製品パッケージには Information center が収められています。これは、製品をインストールする際にインストールされます。Information center のインストールの詳細については、「*Content Management System* の計画とインストール」を参照してください。

Information center には、Content Manager、Enterprise Information Portal、および IBM Content Manager VideoCharger に関する資料が含まれています。トピック・ベースの情報は、製品別およびタスク別（たとえば、管理）に編成されています。用意されているナビゲーション機構および索引のほかに、検索機能も検索の助けとなります。

PDF 資料

オンラインの PDF ファイルは、ユーザーのオペレーティング・システムにインストールした Adobe Acrobat Reader を使用して表示できます。Acrobat Reader がインストールされていない場合は、Adobe の Web サイト (www.adobe.com) からダウンロードすることができます。

表 1 は、IBM Content Manager for Multiplatforms に含まれている Content Manager 資料を示しています。

表 1. *Content Manager* 関連資料

ファイル名	表題	資料番号
install	<i>Content Management System</i> の計画とインストール ¹	GC88-9200-01
migrate	<i>Content Manager V8.1</i> へのマイグレーション	SC88-9202-01
sysadmin	システム管理ガイド	SC88-9201-01

IBM Content Manager for Multiplatforms を注文した場合、IBM Enterprise Information Portal for Multiplatforms も受け取ることになります。もしくは、IBM Enterprise Information Portal for Multiplatforms を別個に注文することもできます。表 2 は、製品に含まれる Enterprise Information Portal 資料を示しています。

表 2. *Enterprise Information Portal* 関連資料

ファイル名	表題	資料番号
apgwork	ワークステーション・アプリケーション・プログラミング・ガイド ¹	SC88-9205-01
ecliinst	<i>eClient</i> のインストール、構成と管理	SC88-9207-02
eipinst	<i>Information Integrator for Content</i> の計画とインストール	GC88-9203-01
eipmanag	<i>Information Integrator for Content</i> の管理	SC88-9204-01
messcode	メッセージとコード ²	SC88-9206-01

表 2. Enterprise Information Portal 関連資料 (続き)

ファイル名	表題	資料番号
注:		
1.	「ワークステーション・アプリケーション・プログラミング・ガイド」には、Content Manager と Enterprise Information Portal の両方のアプリケーションのプログラミングに関する情報が記載されています。	
2.	「メッセージとコード」には、Content Manager と Enterprise Information Portal 両方のメッセージおよびコードが記載されています。	

Web 上で入手可能なサポート

製品サポートは、Web から入手することもできます。以下の製品 Web サイトで、「サポート (Support)」をクリックします。

www.ibm.com/software/data/cm/

www.ibm.com/software/data/eip/

資料は、ソフトコピー形式で製品に同梱されています。Web 上の製品資料にアクセスするには、製品 Web サイトで「ライブラリー (Library)」をクリックします。

Enterprise Documentation Online (EDO) と呼ばれる HTML ベースの文書インターフェースも、同 Web から入手可能です。現在、これには API 参照情報が含まれています。EDO へのアクセス方法に関する詳細については、Enterprise Information Portal Library Web ページで参照してください。

EIP バージョン 8 の新機能

バージョン 8.2: バージョン 8.2 には、さまざまな機能強化が含まれています。バージョン 8.2 では、システム管理ワークフローの機能性が増大し、最新のデータベース・テクノロジーである DB2 Universal Database バージョン 8.1 をサポートします。それらの重要点や、バージョン 8.2 製品のその他の機能強化について、以下に要約します。

IBM Information Integrator for Content への、Enterprise Information Portal の名称変更

Enterprise Information Portal は、名称が Information Integrator for Content に変更されました。バージョン 8.2 について資料の名称は変更されていますが、資料の本文では、引き続き、製品名 Enterprise Information Portal が使用されます。詳細を Web で検索する場合、新しい名称への移行が完了するまでは、引き続き Enterprise Information Portal すなわち EIP を使用できます。

DB2 UDB V8.1 のサポート

Enterprise Information Portal V8.2 のサポート。DB2 V8.1 の接続の集中フィーチャーにより、2 層アプリケーションおよびクライアントのスケーラビリティが増大します。

統合フォルダー

eClient は、複数のリポジトリから文書およびネイティブ・フォルダーを 1 つの統合フォルダーに編成し、そのフォルダーをワークフローで開始できるようになりました。統合フォルダーにより、ユーザーは EIP 統合データベース内に検索結果を永続的に保管し、いつでもそこで検索することもできます。これらの統合フォルダーに対して、再索引付けせずにフル CRUD (作成、検索、更新、および削除) 操作が有効です。

拡張ワークフロー・コレクション・ポイント

ワークフローが AIX および Solaris で完全にサポートされるようになりました。ワークフロー・ビルダー、API、および JavaBeans のワークフロー機能が改善され、使いやすくなりました。

アプリケーションを作成するための Microsoft Visual Studio .NET

Enterprise Information Portal 8.1 以上の API は、コンテンツ・マネージメント・アプリケーションを作成するため、あるいは Microsoft Visual Studio .NET を使用して作成されたアプリケーションを統合するための Microsoft Visual Studio .NET をサポートします。

バージョン 8.1: バージョン 8.1 は統合と多様性のレガシーの開始となっています。多数のハイライトおよび、従来の Content Manager 製品からの改善点の 1 つは、新しいデータ・モデル構造で、これによって、文書のカスタマイズが強化されます。バージョン 8.1 の Content Manager 製品の変更点を、以下に要約します。

Sun Solaris のサポート

Solaris システムへの Java コネクタ、フィーチャーおよびデータベースのインストールが可能です。

共通システム管理

単一のクライアント・アプリケーションで、Content Manager および Enterprise Information Portal 管理に対して、別々にアクセスできます。

新規コネクタ

- Content Manager バージョン 8 リリース 1 用 ICM コネクタを使用することにより、Content Manager バージョン 8 の強力な文書保管フィーチャーを利用することができます。
- 新規 C++ 拡張検索バージョン 3.7 コネクタが、AIX 環境で稼働するようになりました。

改善されたコネクタ

- パラメトリック・テキスト検索は、統合されたレイヤーや、直接の拡張検索接続を通じてサポートされます。
- OnDemand コネクタの機能拡張およびパフォーマンス向上には、以下が含まれています。
 - OnDemand DDO の構造の変更
 - 非同期検索のサポート

IBM Web Crawler

IBM Web Crawler。このフィーチャーを使用することで、ユーザーは Web あるいは Lotus Notes® データベースにある情報を検索および要約できます。

ワークフローの拡張

ワークフローが AIX および Solaris で完全にサポートされるようになりました。ワークフロー・ビルダー、API、および JavaBeans™ のワークフロー機能が改善され、使いやすくなりました。

Information Center

ブラウザー・ベースの Information Center には、Content Manager、Enterprise Information Portal、および IBM Content Manager VideoCharger™ の資料が掲載されています。トピック・ベースの情報は、製品別およびタスク別（たとえば、管理）に編成されています。用意されているナビゲーション機構および索引のほかに、検索機能も検索の助けとなります。

アクセス支援

アクセス支援機能は、運動機能に障害がある方や目が不自由な方など、身体に障害がある方にソフトウェア製品を支障なく使っていただくことを目的としたものです。本製品の主なアクセス支援機能には、以下が含まれます。

- マウスの代わりにキーボードを使用して、すべての機能进行操作する機能
- 拡張表示プロパティのサポート
- ビデオおよびオーディオ・アラート・キューのオプション
- 支援テクノロジーとの互換性
- オペレーティング・システムのアクセス支援機能との互換性
- アクセス可能な文書フォーマット

第 1 章 Enterprise Information Portal の紹介

保険会社や金融機関などの、書類業務が中心となる企業の多くは、業務関連の大量のコンテンツを管理します。業務情報の管理とアクセスのための企業ソリューションのニーズは、多くの業界に共通してあります。

コンテンツ・サーバー は、マルチメディア・オブジェクト、ビジネス・フォーム、文書、および関連データを保管します。コンテンツ・サーバーには、社内におけるコンテンツの処理および作業を可能にするメタデータも含まれます。異なるコンテンツ・サーバーのすべての情報に効率よく接続することができないと、情報の重複が生じたり、複数の検索を実行できるよう社員を研修するために、時間と経費を浪費することがあります。

Enterprise Information Portal では、最先端のテクノロジーによって、すべての企業リソースをワークステーションのデスクトップ上で扱うことができます。EIP を利用すると、さまざまなコンテンツ・サーバーに 1 つのクライアントから接続することで、企業の情報およびマルチメディア資産の価値を最大限に活かすことができます。EIP クライアントを使用すると、ユーザーは接続されているすべてのコンテンツ・サーバー上の情報に、高速かつ同時にアクセスできるようになります。また、情報マイニング、複数のコンテンツ・サーバー (Web やイントラネットを含む) からのインテリジェント検索、ビジネス・プロセス内でのワークフロー・タスクの実行も可能になります。

Enterprise Information Portal では、コネクター・ツールキットおよびサンプルをインストールすることにより、アプリケーションを企業の業務に合わせてカスタマイズすることができます。アプリケーション・プログラマーは、コネクター・ツールキットおよびサンプルを使用して、デスクトップ・アプリケーションおよび Web ベース・アプリケーションを作成することができます。

次のセクションでは、架空の保険会社「XYZ 保険」のシナリオを使って、製品のフィチャーと機能をデモンストレーションします。

顧客情報の検索

XYZ 保険 (XYZ) は、大手の自動車保険会社であり、写真、保険金支払請求、保険証券、査定人のメモ、専門家からの報告書、および他の書類を多量に抱えています。XYZ は、国内各地に支社を持つ大規模な組織であり、多くの社員がインターネット、ネットワークなどのさまざまなメディアに保管された文書に素早くアクセスできるようにする必要があります。

ニーズ

XYZ 社では、そのデータの大部分をファイリング・キャビネットに物理的に保存しており、文書のファイリングは時間のかかる作業でした。情報の一部は、さまざまなメディア・タイプのデジタル化情報としても保有しています。紙ファイル管理の收拾がつかず、保管されたビデオ資料が倉庫内で紛失する事態が発生しました。このようなシステムでは、誤ってファイリングした文書の検索が困難になり、生産性の低下を招きます。XYZ 社では、顧客情報を管理し、その情報を社内の各種システムから迅速に収集するためのシステムが必要になりました。このため全社員に対し、クライアント情報にアクセスするための単一の Web インターフェースが必要となります。XYZ 社の希望として、低コストの情報管理システム、運用コストの削減、顧客サービスの改善、およびマーケット・シェアの拡大が挙げられました。

ソリューション

XYZ 保険では、IBM Content Manager for Windows NT、VideoCharger、EIP、および eClient を展開しました。これらのコンポーネントが共に機能して、XYZ のビジネス・ニーズに個別に対応するソリューションを提供することを目的としています。XYZ は、Content Manager により、保険申込書のスキャン、データベースへの顧客情報の入力、およびワークフロー処理を行います。受け取ったビデオ資料は、VideoCharger に保管されます。EIP は、すべての Content Manager コンテンツ・サーバーにアクセスするためのミドルウェアとして使用されます。eClient により、リモートのオフィスから Web 経由での情報アクセスが可能になります。

このソリューションを展開することにより、社員による情報検索、新規情報の入力、および顧客への応答をタイミングよく行うことができるようになりました。文書検索が単純かつ正確に行われ、社内のすべての情報の整合性が完全に保たれるようになりました。XYZ 社では、紙文書をファイリングしたり誤ってファイリングした文書を探し出す必要がなくなり、結果的により多くの文書処理が可能になりました。この結果、マーケット・シェアが拡大しました。

XYZ 保険は、Enterprise Information Portal を導入します。その理由は、その包括的な検索テクノロジーを利用して、すべてのコンテンツ・サーバーに接続して検索し、データを取り出すことができるからです。現在、XYZ 社の顧客対応センターの担当者は、電話連絡を受けてから、1 回の統合検索で保険契約者の必要情報をすべて取り出すことができます。

また XYZ 保険は、社内イントラネットからの情報検索に情報マイニング・フィーチャーを使用しています。さらに、ワークフロー・プロセスの使用を拡張することを検討しています。

Enterprise Information Portal コンポーネントの紹介

このセクションでは、各 EIP コンポーネントおよびインストール・オプションについて説明します。

コンポーネントの前提条件については、23 ページの『第 3 章 EIP のハードウェアおよびソフトウェア要件』を参照してください。

表 3 はコンポーネントおよび互換性のあるオペレーティング・システムのリストです。

表 3. EIP コンポーネント・オペレーティング・システム互換性

コンポーネント	Windows	AIX	Solaris	注
管理データベース	有	有	有	データベースにはワークフロー・ビルダー機能が組み込まれています。
管理クライアント	有	無	無	クライアントは Windows、AIX または Solaris オペレーティング・システムにインストールされたデータベースに接続可能です。
コネクタ	有	有	有	
情報マイニング・サーバー	有	有	有	
情報マイニング・クライアント	有	無	無	
IBM Web Crawler	有	有	有	
テキスト検索クライアント	有	有	有	
イメージ検索クライアント	有	有	有	

表 3. EIP コンポーネント・オペレーティング・システム互換性 (続き)

コンポーネント	Windows	AIX	Solaris	注
コネクタ・ツールキットおよびサンプル	有	有	有	<ul style="list-style-type: none"> Windows パージョンにはサンプル・クライアントをコンパイルするためのソース・コードが含まれています。AIX にはサンプル・クライアント・コードはインストールされていません。 ワークフロー・サンプルおよび API は、統合コネクタ・サンプルとともにインストールされます。
ビューアー	有	無	無	OnDemand クライアントおよびビューアーをインストールします。
Information Center	有	有	有	

管理

管理コンポーネントは、管理データベースおよび管理クライアント・サブコンポーネントを提供します。管理データベースをインストールすると、ワークフロー・フィーチャーもインストールされます。

管理データベース

管理データベースは、EIP ユーザーとグループに関する情報、特権レベル、パスワード、ユーザー ID、およびその他の情報を管理する DB2 データベースです。データベー

スには、ワークフローと、オプションで情報マイニング機能も提供されます。複数のデータベースをインストールすることができます。それぞれのデータベースは EIP ワークフロー機能を提供します。Content Manager Version 8 システムを使用している場合、EIP 管理データベースを Content Manager Version 8 ライブラリー・サーバー・データベースと共用できます。ライブラリー・サーバー・データベースには EIP で必要な情報がすべて含まれるため、データベースの共用が可能です。

管理クライアント

管理クライアントは、Windows ワークステーション上にのみインストール可能です。複数のクライアントをインストールすることができます。コンテンツ・サーバーとして Content Manager バージョン 8 システムを使用している場合、同一のクライアントから EIP Administration データベース (異種/統合データ・マッピング・レイヤー) と Content Manager バージョン 8 バックエンド・データストアを管理できます。

クライアントは、管理者が以下を行うためのインターフェースとなります。

- 統合検索に使う各コンテンツ・サーバーを定義します。
- コンテンツ・サーバー上の固有エンティティおよび固有属性を識別し、それらを統合エンティティにマッピングします。
- EIP システム管理者によって定義されたすべてのコンテンツ・サーバーのインベントリを保持します
- 検索テンプレートを作成します。
- ユーザーとグループを識別し管理します。
- ユーザーとグループに特権を割り当てます。
- 検索テンプレートへのアクセスを定義し、検索から取得した情報に対するアクションに条件を設定します。
- ビジネス・ワークフロー・プロセスを定義および管理します。

コネクター

コネクターは、EIP クライアント、コンテンツ・サーバー、および管理データベース間の通信インターフェースを提供します。Content Manager バージョン 7.1 コネクターなどのコンテンツ・サーバー・コネクターにより、EIP はサーバーにログインして情報を検索し、管理クライアントまたはエンド・ユーザー・クライアントに情報を戻すことができます。統合コネクターは管理クライアントを管理データベースに接続します。

EIP は以下のコネクターを提供します。

- 統合コネクターは EIP クライアントを管理データベースに接続します。
- DB2 Universal Database 7.2、JDBC ドライバー 1.3 (Java™ のみ)、ODBC 3.0 (C++ のみ)、DataJoiner® 2.1.1 用リレーショナル・データベース・コネクター
- Content Manager V7.1 サーバー用 Content Manager コネクター
- Content Manager V8.2 サーバー用 Content Manager コネクター

- Content Manager OnDemand V7.1 用 Content Manager OnDemand コネクター
- VisualInfo™ for 400® V4.3 および V5.1 用 Content Manager
- ImagePlus/390 Folder Application Facility V3.1 および Image Plus/390 ODM V3.1 用 Content Manager ImagePlus for OS/390® コネクター
- Domino.Doc™ V3.0a、Desktop Enabler V3.0a 用 Lotus® Domino.Doc コネクター
- バージョン 3.7 用 Extended Search コネクター
- DB2 Universal Database Visual Warehouse™ バージョン 5.2 および DB2 Universal Database バージョン 7.2 用インフォメーション・カタログ・マネージャー・コネクター。

フィーチャー

EIP には以下の 4 つのオプション機能があります。

情報マイニング

情報マイニングは、コンテンツ・サーバー上のテキスト文書に隠された情報を検出するための、言語サービスを提供します。テキスト文書の処理中に、要約、分類および検索可能なメタデータが作成されます。WebSphere® Application Server 5.0 (Standard Edition または Advanced Edition) が情報マイニングの前提条件です。さらに、類似の文書のクラスター化、文書からのフィーチャー（人や会社名）の抽出、および文書の言語の判別が可能です。

イメージ検索クライアント

Content Manager バージョン 7 コンテンツ・サーバーのイメージ検索機能へのアクセスおよびその管理に必要なインターフェースを提供します。

テキスト検索クライアント

テキスト検索サーバーのテキスト検索機能へのアクセスおよびその管理に必要なインターフェースを提供します。

IBM Web Crawler

Web Crawler は、Java ベースのコンテンツ Crawler およびマイナーです。Web Crawler は、イントラネット、エクストラネット、インターネット Web、または Lotus Notes データベースのコンテンツを、Domino、ローカル・ファイル・システム、および FTP コレクションを使用してクロールすることができます。

Web Crawler は、多くの種類のコンテンツからメタデータおよびテキストのマイニングを行うことができます。たとえば、HTML コンテンツをマイニングして URL、タイトル、本文、最終更新時刻、および作成者、キーワード、説明などのメタタグを取得することができます。ユーザーは、指定タイプのコンテンツについて、あらかじめ定義されたマイナーの設定から選択をします。コンテンツおよびマイニングされたメタデータ（あるいはその両方）は、ローカル・ディスクに保管されます。

コンテンツ・ビューアー

OnDemand ビューアーをインストールすると、OnDemand サーバーから検索されたドキュメントの表示に必要な OnDemand クライアント、およびその他ファイルがインストールされます。

コネクタ・ツールキットおよびサンプル

EIP は、次のような、各種の EIP 機能の試用およびテストに使用できるサンプル・プログラムが組み込まれているコネクタ・ツールキットを提供します。

- コンテンツ・サーバーとの間での接続および切断
- コンテンツ・サーバーでの SQL およびその他の照会サンプルの実行
- コンテンツ・サーバー MIME タイプなどの判別

Windows コネクタ・ツールキット

Windows サーバーにコネクタ・ツールキットおよびサンプルをインストールするには、開発ワークステーション・マシン・タイプを選択する必要があります。次に、コネクタ・ツールキットおよびサンプル・コンポーネントを選択します。すべてのコネクタについてサンプル・プログラムをインストールできますし、あるいはインストールしたコネクタに一致する個々のサンプルを選択することもできます。

Windows サーバーで、コネクタ・ツールキット・サンプル・プログラムは次のような編成になっています。

```
c:\%CMBROOT%\SAMPLES\activex\%xx
c:\%CMBROOT%\SAMPLES\cpp\%xx
c:\%CMBROOT%\SAMPLES\java\%xx
c:\%CMBROOT%\SAMPLES\jsp\%xx
c:\%CMBROOT%\SAMPLES\server\%xx
```

ここで、xx は、たとえば、db2、od、d1 など、適用可能な各コネクタのサンプル・プログラムが含まれているディレクトリー名です。

サンプル・プログラムを使用して EIP インストールを検証し、EIP 統合データベースに接続する方法については、79 ページの『低レベル接続テストの実行による接続の検証』を参照してください。

AIX サーバーで、コネクタ・ツールキット・サンプル・プログラムは次のような編成になっています。

```
/usr/lpp/cmb/samples/cpp/xx
/usr/lpp/cmb/samples/java/xx
/usr/lpp/cmb/samples/jsp/xx
/usr/lpp/cmb/samples/server/exit
```

ここで、*xx* は、beans、servlets といったサブディレクトリー名です。

| Solaris サーバーでは、開発ツールキットは Content Manager EIP バージョン 8.1 開発
| ツールキット・ベースという名前です。パッケージ名は cmbcomub です。Solaris 上の他
| の EIP コンポーネントと異なり、パッケージはデフォルトとしてインストールされ、選
| 択可能なオプションではありません。開発ツールキット・ベースは、Solaris サーバーで
| は次のような編成になっています。

| /opt/IBMcmb/samples/java/aa
| /opt/IBMcmb/samples/jsp/bb
| /opt/IBMcmb/samples/server/exit

ここで、*aa* は、icm、beans、servlets、または servlets といったサブディレクトリー名です。

ここで、*bb* は、servlets または taglib というサブディレクトリー名です。

| サンプル・プログラムには、プログラムについて説明し、サンプル・コードと連動する
| のに必要なサーバー設定 (環境設定、メモリーなど) を提供する資料が含まれていま
| す。

Information Center

Information Center コンポーネントは、Enterprise Information Portal Information Center を含んでいます。Information Center は、Web ベースの検索可能バージョンの Enterprise Information Portal ライブラリーです。

第 2 章 Enterprise Information Portal システムの計画

以下のセクションでは、Enterprise Information Portal システムの計画に役立つ情報を提供します。計画の過程で、IBM 営業担当員が詳細な情報を提供し、共同で作業を行います。

ビジネス情報の要件の分析

ビジネス情報に関するアクセス、検索、取り出し、および処理の各ニーズを分析します。この分析は、適切な Enterprise Information Portal 構成を決定するために役立ちます。以下に、ビジネスに応じたシステムを計画するための、共通の考慮事項をいくつかリストします。

- 企業のネットワーク・トポロジ・ストラテジー
- 配置するクライアントのタイプと数
- コンテンツ・サーバー内にすでに含まれている既存のアプリケーションにとって有用な情報
- この情報を使用するビジネス・プロセス
- 潜在的なユーザーの数、そのロケーション、および予想されるネットワーク・トラフィック
- 検索および表示対象とするファイル形式の数とタイプ
- ハードウェア能力
- コンテンツ・サーバーの数、バージョン・レベル、およびロケーション
- 1 つまたは複数のサーバーに同時にアクセスするユーザーの平均数

たとえば、ネットワーク全体のワークロードのバランスをとるため、複数の Enterprise Information Portal サーバーを使用するよう決定することができます。一部のクライアントを Windows 2000 上に配置し、他のクライアントは Windows 98 上に配置することもできます。また、一部のクライアントだけをビジネスのワークフロー・プロセスにアクセスさせたり、情報マイニングを行わせることを決定することもできます。

構成の計画

EIP は、複数のシステム構成方法を提供します。構成を計画する際には、使用するクライアントおよびサーバーの構成方法について理解する必要があります。すべてのコンポーネントを単一のサーバー (Windows のみ) にインストールすることも、複数の AIX、Sun、または Windows サーバー (混在も可) に分散させることも可能です。Enterprise Information Portal は、RMI サーバー構成をサポートしています。12 ページの『リモート・メソッド呼び出し (RMI) サーバー』を参照してください。

Enterprise Information Portal では、アーキテクチャーの柔軟性により、多数のさまざまなシステム構成を設計することができます。以下について考慮し、コンポーネントのインストール先を決める手助けとしてください。

- ローカルまたはリモート・コネクターか
- コンテンツ・サーバーのタイプは
- 情報マイニング、ワークフロー、IBM Web Crawler などのフィーチャーをどうするか
- ランタイム環境、または開発環境のいずれを使用するか
- パフォーマンス向上のために、複数の RMI サーバー (RMI サーバー・プール) を使用するか

サーバー構成の選択

環境をサポートする構成を設計する際には、適切な応答時間を決定します。応答時間は、以下によって異なります。

- 検索して表示するオブジェクトのサイズ
- CPU 速度、メモリー、ディスク・スペース、ネットワーク速度
- DB2 Universal Database (UDB) のワークロード

それぞれの要件に従って、このセクションで説明されている可能な構成の評価および調整を行ってください。

Enterprise Information Portal 用のサーバーを構成する際には、環境に応じて多くの方法が選択できます。以下のセクションでは、サーバーで可能な構成について説明します。

- フル・サーバー
- 管理サーバーおよび情報マイニング・サーバー
- RMI サーバー
- RMI サーバー・プール
- Web サーバー
- ワークフロー・サーバー

フル・サーバー (Windows のみ)

フル・サーバー構成は、すべての前提条件および EIP コンポーネントを含む 1 つのサーバーから構成されます。フル・サーバーは、管理クライアントが Windows オペレーティング・システムとのみ互換性があるため、Windows オペレーティング・システムでのみ使用可能です。フル・サーバーには次のものが含まれます。

- IBM DB2 UDB
- WebSphere Application Server
- MQSeries® Server および MQSeries Workflow
- 管理データベースおよびクライアント

- ローカルおよびリモート・コネクタ
- コンテンツ・ビューアー
- コネクタ・ツールキットおよびサンプル
- Information Center
- 情報マイニング
- IBM Web Crawler

フル・サーバー構成を使用して、アプリケーション開発、製品の学習、または Enterprise Information Portal の試験的実行が可能です。ただし、十分なパフォーマンスで複数のユーザーをサポートするには、ワークステーションの分散セットに Enterprise Information Portal をインストールすることを検討してください。

管理サーバー (Windows 専用構成)

単一のサーバーに管理クライアント、データベース、統合コネクタ・コンポーネントのみをインストールすることにより、1 つのサーバーで管理サービスを提供するよう構成することができます。管理クライアントが Windows アプリケーションであるため、管理サーバー構成は、Windows サーバーとのみ互換性を持ちます。

管理サーバー (マルチプラットフォーム構成)

マルチプラットフォーム管理サーバーを構成するには、AIX または Solaris に管理および統合のデータベースおよびコネクタをインストールし、Windows に管理クライアントをインストールします。EIP 管理クライアントをデータベースに接続するには、RMI サーバーまたは DB2 UDB Client Configuration Assistant が必要です。

Web サーバー

ワークステーションを Web サーバーとして構成し、統合検索を実行して、その結果を Web ブラウザーで表示することができます。Web サーバーは、情報マイニング・フィーチャーをサポートしています。情報マイニングのサンプル Java Server Pages (JSP) および Information Structuring Tool (IST) を利用するには、情報マイニング・フィーチャーをインストールしたワークステーションに WebSphere Application Server をインストールする必要があります。WebSphere Application Server が別のワークステーションにある場合は、情報マイニング・サーバーへの RMI 接続を構成する必要があります。

ワークフロー・サーバー

それぞれの管理データベースには、EIP ワークフローで要求されるテーブルが含まれます。1 つのサーバーを構成してワークフローをサポートすることができます。これは推奨されている構成です。ワークフローには、IBM MQSeries Server、IBM MQSeries Workflow、DB2 UDB、および管理データベースが必要です。

リモート・メソッド呼び出し (RMI) サーバー

RMI サーバーを構成して、クライアント要求をコンポーネントに分散させることができます。23 ページの『第 3 章 EIP のハードウェアおよびソフトウェア要件』には、AIX、Windows、または Solaris プラットフォームにおける RMI サーバー構成の前提条件が記載されています。

このセクションでは、RMI サーバーに関する計画のガイドラインをいくつか示します。RMI を使用することにより、ネットワークを介して他の Java アプリケーションと通信してオブジェクトを渡す Java アプリケーションを作成することができます。

RMI を使用すると、RMI サーバーにインストールされたコネクタを経由して、複数の EIP クライアントでコンテンツ・サーバーを検索することができます。RMI サーバーを含むシステムを選択した場合、リモート・コネクタをそれぞれのクライアントにインストールする必要はありません。RMI サーバーはコネクタをサポートし、EIP クライアントは検索の実行時に RMI サーバー上のコネクタにアクセスします。

クライアントとコンテンツ・サーバーの接続に RMI を使用する場合、EIP クライアント・マシンにリモート・コンテンツ・サーバー・コネクタをインストールする必要はありません。RMI を活用するため、すべてのカスタム・クライアント・アプリケーションは、Java で作成する必要があります。

RMI サーバー・プール

複数の RMI サーバーで Enterprise Information Portal を構成することによって、クライアント要求を分散させることができます。RMI サーバーのグループは、RMI サーバー・プールです。クライアントが RMI サーバーと通信する場合、この RMI は、サーバー・プールの他のメンバーへのクライアント要求を代行することができます。このシナリオでは、この RMI サーバーがマスター・サーバーの役割を果たします。サーバー・プールのすべてのメンバーが接続の最大数に達した場合、マスター・サーバーがクライアント要求に対応します。

クライアントおよび Web サーバーは、RMI サーバー・プール構成にある RMI サーバーに接続します。すべてのリモート・コネクタは RMI サーバー上で共用できるため、RMI サーバー・プール構成はスケーラブルで、保守も簡単です。

開発ワークステーション構成の選択

開発ワークステーションは、単一のワークステーション上でフル・システムのサポートが可能です。開発ワークステーションは、クライアントおよびサーバーの機能を実行します。開発者は、サンプル・プログラムとコネクタ・ツールキットを使用して、個々のコンテンツ・サーバーのデータおよびコンテンツにアクセスする、カスタム Web アプリケーションまたはカスタム・クライアント・アプリケーションを作成することができます。

カスタム・アプリケーションの作成については、「ワークステーション・アプリケーション・プログラミング・ガイド」および「オンライン API 解説書」を参照してください。

クライアント構成の選択

EIP は、管理クライアントを提供するほか、コンパイルするとデスクトップ・クライアントを作成できるコードも含まれています。EIP を Windows にインストールする際には、インストール・プログラムで Client インストール・オプションの選択が可能になります。そのオプションを選択すると、エンド・ユーザー・クライアントをサポートするコネクタやその他のコンポーネントをインストールできます。

Windows および Sun 上の EIP インストール・プログラムでは、Local (ローカル) コネクタまたは Remote (リモート) コネクタのインストール・オプションは選択できません。EIP コネクタを AIX にインストールする際には、インストール・プログラムにより、ローカル・コネクタおよび/またはリモート・コネクタのインストール・オプションの選択が可能になります。

クライアントを以下のタイプのいずれかとして構成することができます。

ローカル・コネクタを使用するクライアント

クライアントを 1 つまたは複数のコンテンツ・サーバーに直接接続する場合は、ローカル・コネクタを使用してクライアントを構成します。クライアントでローカル・コネクタを使用することにより応答時間が改善されますが、多くのディスク・スペースと高速なプロセッサが必要になります。この構成では、該当のコネクタに関連付けられているコンテンツ・サーバーを追加またはアップグレードする際に、すべてのクライアントを更新する必要があります。

リモート・コネクタを使用するクライアント

この構成では、ワークステーションにクライアント・アプリケーションとリモート・コネクタのみをインストールします。クライアントは、RMI サーバーを介してコンテンツ・サーバーにアクセスします。この構成では、システムを変更する際に、リモート・コネクタをアップグレードする必要はありません。ただし、応答時間は遅くなる可能性があります。

ローカル・コネクタとリモート・コネクタを使用するクライアント

Enterprise Information Portal は、ローカル・コネクタとリモート・コネクタの両方を組み込んだクライアント構成をサポートします。クライアントを一部のローカル・コンテンツ・サーバーに直接接続し、他のコンテンツ・サーバーにはリモート接続する場合、この構成を選択します。

Windows サーバー・マシン・タイプの概要

EIP を Windows のワークステーションにインストールする際には、インストール・プログラムで、マシン・タイプの選択が必要になります。EIP を AIX や Sun Solaris にインストールする場合には、マシン・タイプを選択する必要はありません。このセクションでは、マシン・タイプについて説明し、各マシン・タイプで使用可能なコンポーネントを表に示しています。

各マシン・タイプは、2 ページの『Enterprise Information Portal コンポーネントの紹介』で記したシステム構成をサポートする特定のコンポーネント・グループを提供します。マシン・タイプには、EIP クライアント、EIP サーバー、および EIP 開発ワークステーションがあります。詳細については、表 4 を参照してください。

3 つのマシン・タイプによりサポートされるコンポーネントを、どのようにシステム設計に組み込むかを理解することが重要です。たとえば、クライアント・マシン・タイプを選択した場合、エンド・ユーザー・クライアントをサポートするのに必要なコンポーネントをインストールすることはできますが、管理データベースをインストールすることはできません。フル・サーバーまたは分散サーバーをサポートするコンポーネントのインストールには、EIP サーバーを選択します。開発ワークステーション・マシン・タイプを選択すると、エンド・ユーザー・クライアントなど、カスタム・アプリケーションをプログラミングするのに役立つサンプル・コードをインストールできます。EIP クライアント・マシン・タイプは、クライアントのみの構成に必要なコンポーネントを提供します。

表 4 は、3 つのマシン・タイプにより提供されるコンポーネントのリストです。

表 4. コンポーネントとマシン・タイプ

コンポーネント	マシン・タイプ		
	クライアント	サーバー	開発 ワークステーション
管理	無	有	有
コネクタ	有	有	有
フィーチャー	有*	有	有
コンテンツ・ビューアー	有	有	有
コネクタ・ツールキット およびサンプル	無	無	有
情報	無	有	有

表4. コンポーネントとマシン・タイプ (続き)

コンポーネント	マシン・タイプ		
	クライアント	サーバー	開発 ワークステーション
* クライアント・マシン・タイプを選択した場合、インストールできるクライアントは、情報マイニング、テキスト検索、およびイメージ検索のみです。サーバーまたは開発ワークステーションのどちらかのマシン・タイプを選択すると、情報マイニング・クライアントおよび情報マイニング・サーバーの両方をインストールするオプションを選択できます。			

システム管理の計画

管理クライアントを使用することにより、システムのセットアップおよび管理を行います。システムの管理タスクには、統合検索テンプレートの定義、情報マイニングとワークフロー・フィーチャーの管理、およびアクセス制御の管理が含まれます。他の複数の Windows ワークステーションに複数の管理クライアントをインストールすることができます。

以下のリストには、システム管理の計画中に完了する、高レベル・タスクがいくつか含まれています。

- 情報が保管されているコンテンツ・サーバーを識別する
- Enterprise Information Portal を通じてコンテンツ・サーバーのデータにアクセス可能なユーザーを識別する
- ユーザーおよびユーザー・グループに必要なセキュリティのアクセス・レベルを判別する
- 特定の検索テンプレートにアクセスできるユーザー・グループを定義する
- 情報マイニングを実行可能なユーザーを識別する
- 企業のビジネスおよびワークフロー・プロセスに関連したタスクを実行できるユーザーおよびユーザー・グループを定義する

これらのシステム管理タスクの実行方法の詳細については、Enterprise Information Portal のオンライン・ヘルプを参照してください。管理タスクの背景にある概念の説明については、「*Information Integrator for Content* の管理」を参照してください。

Enterprise Information Portal ネットワーク・セキュリティの計画

このセクションでは、Enterprise Information Portal ネットワーク・セキュリティを計画する際に考慮すべき 6 つの点をリストします。

許可

- ユーザーの ID をどのようにして確認するか
- システム内の各種のエレメントがどのように互いを見つけ、信頼できるかどうかを決定するか
- 既存のセキュリティ・インフラストラクチャーを大きく変更することなく、どのように新規の従業員、顧客、またはビジネス・パートナーに対して既存システムへのアクセス権を与えるか
- エンド・ユーザー、サーバー、またはその他エンティティのいずれの ID を許可決定に使用するか

アセット保護

- データの保管時、および比較的信用できないネットワーク内をデータが移動する際に、データの機密性と非公開性を保つことができるか
- データの保管時または転送時に、データが変更を受けていないと保証できるか

責任能力

- 誰がいつ何をしたのか明らかか
- 要求と結果が、不慮または故意に変更されていないと保証、証明できるか

管理

- セキュリティ・ポリシーを定義できるか
- アプリケーション、システム、プラットフォーム、およびネットワークのすべてのエレメントで、ポリシーが一貫していることを保証できるか

保証

- システムがセキュリティ上の約束をどのように守るか
- インフラストラクチャーおよびアプリケーション・リソース (システム、ネットワークおよびデータを含む) が現在危険にさらされていないと言えるか

可用性

- サービスを妨害する原因となるシステム・エレメントに対する攻撃をどのように防ぐか
- どのようにフォールト・トレランスの設計を行い、重大な障害時のアプリケーションとデータの再保存を保証するか
- システムを稼働状態のまま、どのようにしてアプリケーション、システム、および企業ネットワークに必要な変更を行うか

Enterprise Information Portal のセキュリティでは、以下の 3 つのタイプのセキュリティ・リスクを回避します。

- Enterprise Information Portal マシン、クライアント、およびフィーチャーに対する無許可のネットワーク・アクセス
- Enterprise Information Portal の機能に対する無許可アクセス
- コンテンツ・サーバー情報の無許可での表示および使用

一般的な計画のヒント

Enterprise Information Portal は複数のデータベースをサポートします。データベースは互いに独立しています。複数のデータベースにより、スケーラビリティとセキュリティの向上を提供します。複数のデータベースを 1 つの DB2 システムにインストールすることができます。Enterprise Information Portal には、初期インストール後にデータベースを作成するためのユーティリティが付属しています。

接続先として計画しているコンテンツ・サーバーのソフトウェア・バージョン・レベルをチェックして、そのレベルが EIP コネクタのサポートするバージョン・レベルと互換性があることを確認してください。たとえば、VI/400 コネクタをインストールする場合、バージョン番号を選択して、互換性のあるコネクタを確実にインストールできるようにする必要があります。

いずれかのプラットフォームに VisualInfo for AS/400® コネクタをインストールする場合、インストール・プログラムにより、AS/400 ネットワーク・テーブル (frnolint) に保管されている情報の入力を求めるプロンプトが出されます。

- バージョン番号
- サーバー名
- ホスト名
- ポート番号

EIP はネットワーク・テーブル内のデータを使用して、AS/400 コンテンツ・サーバーに接続します。ネットワーク・テーブル (frnolint.tbl) は、cmbroot にインストールされます。

OS/390 コネクタをインストールするオペレーティング・システムに応じて、インストール・プログラムは、IP アドレスやその他の情報など、コネクタ・パラメータの入力を求めるプロンプトを出します。しかし、EIP 管理クライアントを使用して OS/390 サーバーへの接続を定義するために、以下にリストする情報を知っている必要があります。

- FAF ポート番号
- FAF アプリケーション ID
- FAF プロトコル

- FAF IP アドレス
- オブジェクト配布マネージャー CICS
- オブジェクト配布マネージャー IP アドレス
- オブジェクト配布マネージャー・ポート番号
- オブジェクト配布マネージャー端末 ID
- その他のパラメーター (OS/390 サーバー設定により、オプション)

Content Manager バージョン 7 コネクタをインストールした場合、テキスト検索およびイメージ検索という、2 つのオプション・フィーチャーもインストールできます。

テキスト検索フィーチャーをインストールするには、テキスト検索クライアント設定を正しく構成するために以下の情報を取得している必要があります。

- テキスト検索サーバー・ユーザー ID
- テキスト検索サーバー名
- テキスト検索サーバー・ホスト名
- テキスト検索サーバー・ポート番号
- グローバル設定

イメージ検索フィーチャーをインストールするには、イメージ検索クライアント設定を正しく構成するために以下の情報を取得している必要があります。

- 構成ファイル・パス情報 (CMBROOT のインストール・パネル・パス定義に定義された設定に一致する必要があります)
- イメージ・サーバー名
- イメージ・サーバー・ホスト名
- イメージ・サーバー・ポート番号
- イメージ・サーバーに関連した Content Manager バージョン 7 データベースのデータベース名。

DB2 DataJoiner にアクセスするには、Enterprise Information Portal の認証方式が、DB2 Universal Database に定義されたデータベースの server となるようにしてください。

Enterprise Information Portal バージョン 8 リリース 2 をインストールする前に、Enterprise Information Portal バージョン 8.1 アンインストール・プログラム (または AIX/Sun におけるアンインストール・プログラム) を使用して、以前のバージョンの Enterprise Information Portal コンポーネントを除去します。

ヒント: Windows の「アプリケーションの追加と削除」ではすべての EIP コンポーネントは削除されないため、これは使用しないでください。

以前のリリースの EIP を使用して情報マイニング・フィーチャーをインストールした場合は、EIP を除去すると情報マイニング・データベースが削除されます。このデータベ

ース内のデータを保持したい場合には、アンインストールを行う前にバックアップをとっておいてください。db2cmd コマンド・ウィンドウで db2 list db directory と入力します。戻されたデータベースのリストに IKF が示されている場合は、情報マイニング・データベースは存在しています。DB2 コマンド・ウィンドウで、db2 backup database IKF to <dir> と入力します。ここで、<dir> は、ユーザーの選択するディレクトリーです。

ワークフローの計画

バージョン 8.2 では、ワークフローは選択可能なフィーチャーではありません。

ワークフロー・サンプルおよび API は、コネクタ・ツールキットおよびサンプル・コンポーネントを選択した場合、また、統合コネクタ・オプションを選択した場合にインストールされます。

ワークフロー・ビルダーは、管理クライアントと一緒にインストールされ、ワークフロー機能は管理クライアントから管理されます。

情報マイニング・インストールの計画

情報マイニング・サーバーは必ず、管理データベースがあるワークステーションに配置されます。情報マイニング・フィーチャーにアクセスしたい場合 (特に、Information Structuring Tool が別のワークステーションにインストールされている場合)、情報マイニング・クライアントをインストールして、RMI 接続を構成する必要があります。

EIP パフォーマンスの計画

ここでは、EIP システムを計画する際の重要な構成およびアプリケーション設計の選択項目を、そのパフォーマンスの意味合いを中心に、いくつか説明します。

Web クライアントか、あるいはデスクトップ・クライアント

- デスクトップ・クライアントは、通常、Web クライアントよりも高速です
- Web クライアントの方が、通常、展開および保守が容易です

Web クライアントの場合: 直接検索か、あるいは中間層変換

- 直接検索の方が、高速かつスケーラブルです
- 直接検索では、ブラウザーのプラグインまたはビューアー・アプレットが必要になることがあります

Web クライアントの場合: 直接接続か、あるいは統合アクセス

- ライブラリー・サーバーに対しては、統合アクセスの方が直接接続よりも時間がかかります
- 統合アクセスは、異種バックエンド・サーバー全体での検索をサポートします

IBM クライアント・プログラムか、あるいはカスタム・クライアント・プログラム

- カスタム・クライアント・プログラムをユーザーの要件にぴったり合うように調整できます
- IBM クライアントは、すでに、最新の汎用調整メソッドを採用しています

カスタム・クライアントの場合：Beans (非ビジュアルまたは非ビジュアル + ビジュアル) か、あるいは Java/C++ OOAPI

- Beans は、文書モデルのみをインプリメントします
- Beans は統合「到達」で高速アプリケーション開発をサポートします
- OOAPI は最高のパフォーマンスを提供します

Java または C++ OOAPI カスタム・クライアントの場合：文書モデルか、あるいはカスタム・データ・モデル

- 文書データ・モデルには、すでに、最新の汎用調整メソッドが含まれています
- カスタム・データ・モデルをユーザーの要件にぴったり合うように調整できます

文書ルーティングか、あるいは拡張ワークフロー (MQSeries Workflow)

- 文書ルーティングのパフォーマンスおよびスケーラビリティがさらに向上しました
- MQSeries Workflow は、文書ルーティングでは使用できない拡張ワークフロー機能を提供します

バージョン管理

- バージョン管理は、ライブラリー・サーバー・データベース・サイズを増大させます
- 現行バージョンへのアクセスは、以前のバージョンへのアクセスよりも高速です

属性索引

- 索引が適切であると、検索のパフォーマンスが向上し、ライブラリー・サーバー・リソースの使用量が削減されます
- 索引により、ライブラリー・サーバー・データベース・サイズが増大し、保管および更新の回数が影響を受けます

サーバー・プラットフォームの選択項目

- 中間層サーバー
 - AIX、Sun、および Windows でサポートされる CM v8 Java OOAPI
 - その他のコネクタは、Windows のみのものがあります
 - Java 変換エンジンはクロスプラットフォームです
- ライブラリー・サーバーおよびリソース・マネージャー

- スケーラビリティは、AIX または Solaris 上の方が、Windows 上よりも高くなります

パフォーマンスの計画に関する詳細情報の探索

パフォーマンスおよび調整について詳しくは、
www.ibm.com/software/data/cm/cmgr/mp/support.html の「White pages (白書)」カテゴリーにある Content Manager の IBM サポート・ページに記載されているパフォーマンス調整ガイドラインを参照してください。

第 3 章 EIP のハードウェアおよびソフトウェア要件

ここでは、EIP システムのインストールおよび管理に必要なハードウェアおよびソフトウェアについて説明します。

重要

関連する更新やフィックスバック・レベルを含む、最新バージョンの前提ソフトウェア要件については、README を参照してください。

Windowsの要件

Windows用に EIP コンポーネントをインストールする前に、ご使用のワークステーションに正しいハードウェアおよびソフトウェアがインストールされていることを確認してください。このセクションには、EIP クライアント、サーバー、または開発ワークステーションをインストールする前にインストールする必要のあるハードウェアおよびソフトウェアをリストします。

EIP クライアント、サーバー、および開発ワークステーションのハードウェア要件

Windows に EIP をインストールする場合、最初に、クライアント、サーバー、および開発ワークステーションという 3 つのマシン・タイプの 1 つを選択する必要があります。選択したマシン・タイプによって、インストールできるコンポーネントが決まります。各マシン・タイプでインストールできるコンポーネントのリストについては、14 ページの表 4 を参照してください。

表 5 は、サーバーおよび開発ワークステーション・マシン・タイプに必要なハードウェアを示しています。24 ページの表 6 は、クライアント・マシン・タイプに必要なハードウェアを示します。

24 ページの表 7 は、サーバーおよび開発ワークステーション・マシン・タイプに必要なソフトウェアを示します。

表 5. EIP サーバーおよび開発ワークステーション・マシン・タイプに必要なハードウェア

コンポーネント	必要なもの
プロセッサ	Intel Pentium® 800MHz またはその同等品

表 5. EIP サーバーおよび開発ワークステーション・マシン・タイプに必要なハードウェア (続き)

コンポーネント	必要なもの
RAM	最小で 512 MB 1024 MB を推奨
ストレージ	<ul style="list-style-type: none"> • 1 GB のスワップ・スペース • 400 MB インストール・スペース • 10 MB の一時スペース
ディスプレイおよびアダプター	SVGA (800 x 600 の解像度で 256 カラー・モード)
その他の必要なハードウェア	<ul style="list-style-type: none"> • マウス • CD-ROM ドライブ (インストール時のみ) • ネットワーク・アダプター (コンポーネントが複数のワークステーションにインストールされる場合)

表 6. EIP クライアント・マシン・タイプに必要なハードウェア

コンポーネント	仕様
プロセッサ	最小で Intel Pentium II 200 MHz Intel Pentium III 400 MHz を推奨
RAM	最小で 128 MB 256 MB を推奨
ストレージ	<ul style="list-style-type: none"> • 100 MB のスワップ・スペース • 210 MB のインストール・スペース • 30 MB の一時スペース
ディスプレイおよびアダプター	SVGA (800 x 600 の解像度で 256 カラー・モード)
その他の必要なハードウェア	<ul style="list-style-type: none"> • マウス • CD-ROM ドライブ (インストール時のみ) • ネットワーク・アダプター (コンポーネントが複数のワークステーションにインストールされる場合)

EIP サーバーおよび開発ワークステーションのソフトウェア要件

表 7. Windows 上の EIP サーバーおよび開発ワークステーション・マシン・タイプに必要なソフトウェア

コンポーネント	必要なもの
オペレーティング・システム	Service pack 6 以上を適用済みの Microsoft® Windows NT 4.0 Server, Windows 2000 Server, または Windows XP、あるいは >Net Server 2003 (使用可能な場合)
ネットワーク通信	Windowsと一緒にインストールされる TCP/IP

表 7. Windows 上の EIP サーバーおよび開発ワークステーション・マシン・タイプに必要なソフトウェア (続き)

コンポーネント	必要なもの
<ul style="list-style-type: none"> 管理データベース コネクタ・ツールキットおよびサンプル 	<ul style="list-style-type: none"> Microsoft Visual C++ バージョン 6.0 IBM DB2 Universal Database (DB2 UDB) (Enterprise Edition バージョン 7.2 以上) または <ul style="list-style-type: none"> IBM DB2 UDB Enterprise Extended Edition バージョン 7.2 以上 (DB2 Application Development Client 付き) (コネクタ・ツールキットおよびサンプルのみ) Java Development Kit Standard Edition (最新のフィックスパックを適用済み) (オプション) IBM DB2 Universal Database Net Search Extender (NSE) (DB2 バージョン 8.1 と互換のもの) または IBM DB2 Universal Database Text Information Extender (DB2 バージョン 7.2 と互換のもの)。NSE および TIE は、テキスト検索機能を使用して Content Manager バージョン 8 サーバーを検索する計画の場合にのみ必要です。
統合コネクタ	<ul style="list-style-type: none"> IBM DB2 Universal Database (DB2 UDB) (Enterprise Edition バージョン 7.2 以上) Java Development Kit V1.3
リレーショナル・データベース・コネクタ	<ul style="list-style-type: none"> IBM DB2 Universal Database (DB2 UDB) (Enterprise Edition バージョン 7.2.1 以上) JDBC ドライバー 1.3 (Java のみ) ODBC 3.0 (C++ のみ) DataJoiner 2.1.1
Information Catalog コネクタ	<ul style="list-style-type: none"> IBM DB2 Universal Database (DB2 UDB) (Enterprise Edition バージョン 7.2.1 以上) JDBC ドライバー 1.3 (Java のみ) ODBC 3.0 (C++ のみ) DataJoiner 2.1.1
拡張ワークフロー	<ul style="list-style-type: none"> MQSeries バージョン 5.3.0.2 Server (最新のフィックスパックを適用済み) MQSeries Workflow Server V3.4 以上 Internet Explorer V5.0 以上 IBM DB2 Universal Database バージョン 7.2 以上 C++ の場合、クライアント・サイド・アプリケーションの実行には、WebSphere MQSeries バージョン 5.3.0.1 クライアントおよび MQSeries Workflow V3.4 クライアントが必要です。詳細については、MQSeries および MQSeries Workflow の資料を参照してください。 <p>要件：I管理データベースをインストールするマシンでは、MQSeries Server および MQSeries Workflow ソフトウェアをインストールしてください。MQSeries ソフトウェアは、ワークフロー・ビルダー機能を活動化するのに必要です。この機能は、管理データベースと一緒に自動的にインストールされます。</p>

情報マイニングおよび Web Crawler のソフトウェア要件

表 8. Windows 上の情報マイニングおよび Web Crawler に必要なソフトウェア

コンポーネント	必要なもの
オペレーティング・システム	Microsoft Windows NT 4.0 (Service Pack 6 以上を適用済み) または Windows 2000 Server、あるいは Advanced Server
ネットワーク通信	Windowsと一緒にインストールされる TCP/IP
情報マイニング	<ul style="list-style-type: none">• IBM DB2 Universal Database バージョン 7.2 (フィックスパック 2 以上を適用済み)• Java Runtime Environment (JRE) (バージョン 1.3 以上)• DB2 Text Information Extender (フィックスパック 2 以上を適用済み)• 統合コネクタ• Java Plug-in バージョン 1.4.1 以上を推奨• WebSphere Application Server バージョン 4.0.3 (最新のフィックスパックを適用済み)
Web Crawler	Netscape 5.0 以上
情報マイニングのための Web サンプル	<ul style="list-style-type: none">• WebSphere Application Server (WAS) バージョン 4.0.3 Advanced Edition または Advanced Single Server Edition 以降• Java 2 Software Developer's Kit Standard Edition V1.3 (最新のフィックスパックを適用済み)

システム管理クライアントのハードウェア要件

表 9. システム管理クライアントに必要なハードウェア

コンポーネント	必要なもの
プロセッサ	Intel Pentium 800 MHz またはその同等品
RAM	128 MB
ストレージ	インストール済み製品のための 35 MB
ディスプレイおよびアダプター	SVGA (1024x768 の解像度で 256 カラー・モード)
その他の必要なハードウェア	<ul style="list-style-type: none">• マウス• CD-ROM ドライブ (インストール時のみ)• ネットワーク・アダプター (コンポーネントが複数のワークステーションにインストールされる場合)

システム管理クライアントのソフトウェア要件

表 10. システム管理クライアントに必要なソフトウェア

コンポーネント	必要なもの
オペレーティング・システム	Microsoft Windows NT Server バージョン 4.0 または Microsoft Windows 2000 または Windows XP
ネットワーク通信	Windowsと一緒にインストールされる TCP/IP
ツールキット	Java Runtime Environment (JRE) 1.3 (プログラムに付属) DB2 Application Development Client バージョン 7.2 またはバージョン 8.1 (以前のバージョンの DB2 では、DB2 Software Development Kit または SDK と呼ばれていました)

Information Center のハードウェア要件

表 11. Information Center に必要なハードウェア

コンポーネント	必要なもの
ストレージ	150 MB

Information Center のソフトウェア要件

表 12. Information Center に必要なソフトウェア

コンポーネント	必要なもの
ブラウザ	Internet Explorer、バージョン 5 以上 Netscape、バージョン 4.5、4.6、または 4.7 該当せず : Information Center は Netscape バージョン 6.0 以上とは互換性がありません。

AIXの要件

AIX用に EIP コンポーネントをインストールする前に、ご使用のワークステーションに正しいハードウェアおよびソフトウェアがインストールされていることを確認してください。このセクションには、AIX 上に Content Manager コンポーネントをインストールして実行するのに必要なハードウェアおよびソフトウェアをリストします。

AIX のハードウェア要件

表 13. すべての AIX コンポーネントに必要なハードウェア

コンポーネント	必要なもの
サーバー	RS/6000 [®] ベースのプロセッサ
RAM	512 MB
ストレージ	インストール済み製品のための 4 GB
ディスプレイおよびアダプター	VGA (256 カラー・モード)
その他の必要なハードウェア	<ul style="list-style-type: none">• CD-ROM ドライブ (インストール時のみ)• ネットワーク・アダプター (コンポーネントが複数のワークステーションにインストールされる場合)

AIX サーバーのソフトウェア要件

表 14. AIX 上の EIP サーバーに必要なソフトウェア

コンポーネント	必要なもの
オペレーティング・システム	<ul style="list-style-type: none">• AIX4.3.3 および最新のフィックスパック (TCP/IP および Unicode コンバーターが必要) または AIX 5.1 以上• Java Developer's Kit/Java Runtime Environment バージョン 1.3 (フィックスパックを適用済み)• Java Servlet Developer's Kit バージョン 2.2 以上• WebSphere 4.0.3 以上
ネットワーク通信	スタンドアロン・トポロジーを除く TCP/IP (AIXと一緒にインストールされます)
管理データベース	<ul style="list-style-type: none">• IBM VisualAge[®] C++ バージョン 5 以上• IBM DB2 UDB Extended Enterprise Edition バージョン 7.2 以上 (DB2 Application Development Client (以前のバージョンの DB2 では、DB2 Software Development Kit または SDK と呼ばれていました) 付き)• (オプション) IBM DB2 Universal Database Text Information Extender (TIE)、バージョン 7.2 (テキスト検索機能を使用する計画の場合)
テキスト検索クライアント	<ul style="list-style-type: none">• C/C++ibmcxx レベル 3.6.6.1 以上• Text Search Server R6• Content Manager V7.1 コネクター
イメージ検索クライアント	<ul style="list-style-type: none">• C/C++ibmcxx レベル 3.6.6.1 以上• Content Manager V7.1 コネクター

表 14. AIX 上の EIP サーバーに必要なソフトウェア (続き)

コンポーネント	必要なもの
統合コネクター	<ul style="list-style-type: none"> • IBM DB2 Universal Database Extended Enterprise Edition バージョン 7.2 以上 (Application Development Client for AIX (以前のバージョンの DB2 では、DB2 Software Development Kit または SDK と呼ばれていた) 付き) • Java Software Developer's Kit V1.3
リレーショナル・データベース・コネクター	<ul style="list-style-type: none"> • IBM DB2 UDB Extended Enterprise Edition バージョン 7.2.1 以上 (Application Development Client for AIX (以前のバージョンの DB2 では、DB2 Software Development Kit または SDK と呼ばれていました) 付き)。Java Database Connect (JDBC) ドライバー V1.3 (最新の Service Pack を適用済み (Java のみ)) • ODBC V3.0 (C++ のみ) • DataJoiner バージョン 2.1.1
インフォメーション・カタログ・コネクター	IBM DB2 Universal Database Extended Enterprise Edition バージョン 7.2.1
Administration Workflow	<ul style="list-style-type: none"> • WebSphere MQSeries Server バージョン 5.3.0.1 Server (最新のフィックスパックを適用済み) • MQSeries Workflow V3.4 以上 • IBM DB2 Universal Database Enterprise Edition バージョン 7.2.1
LDAP	IBM Directory Server 4.1

表 14. AIX 上の EIP サーバーに必要なソフトウェア (続き)

コンポーネント	必要なもの
情報マイニング	<ul style="list-style-type: none"> • IBM DB2 Universal Database Extended Enterprise Edition バージョン 7.2 (フィックスパック 2 以上を適用済みで、かつ Application Development Client for AIX (以前のバージョンの DB2 では、DB2 Software Development Kit または SDK と呼ばれていました) 付き) • DB2 Text Information Extender 7.2 (フィックスパック 2 以上を適用済み) • Java Runtime Environment (JRE) (バージョン 1.3 以上) • Java Plug-in バージョン 1.4.1 以上 • WebSphere Application Server 4.0.3 (最新のフィックスパックを適用済み) • IBM Visual Age C, C++ Compiler V5 • IBM Web Crawler
情報マイニングのための Web サンプル	<ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server Advanced Edition または Advanced Single Server Edition 4.0.3 以上 (最新のフィックスパックを適用済み) • Java 2 Software Developer's Kit Standard Edition V1.3 (最新のフィックスパックを適用済み)
Information Center ブラウザー	<p>Netscape、バージョン 4.5、4.6、または 4.7</p> <p>該当せず : Information Center は Netscape、バージョン 6.0 以上とは互換性がありません</p>
コネクタ・ツールキットおよびサンプル	<ul style="list-style-type: none"> • IBM Visual Age C++ Compiler V5 以上 (C++ Connector API を使用したアプリケーション開発用) • Java Development Kit、バージョン 1.3 (最新のフィックスパックを適用済み)

Solaris 要件

Solaris 用に Content Manager コンポーネントをインストールする前に、ご使用のワークステーションに正しいハードウェアおよびソフトウェアがインストールされていることを確認してください。このセクションには、Solaris 上に EIP コンポーネントをインストールして実行するのに必要なハードウェアおよびソフトウェアをリストします。

Solaris のハードウェア要件

表 15. すべての Solaris コンポーネントに必要なハードウェア

コンポーネント	必要なもの
サーバー	Solaris SPARC ベースのプロセッサ
RAM	1 GB
ストレージ	4 GB (インストール製品およびデータ・ストレージ用。ワークロードにより異なる)。
ディスプレイおよびアダプター	VGA (256 カラー・モード)
その他の必要なハードウェア	<ul style="list-style-type: none">• CD-ROM ドライブ (インストール時のみ)• ネットワーク・アダプター (コンポーネントが複数のワークステーションにインストールされる場合)

Solaris サーバーのソフトウェア要件

表 16. Solaris 上の EIP コンポーネントに必要なソフトウェア

コンポーネント	必要なもの
オペレーティング・システム	Solaris バージョン 2.8 (パッチ・レベル SubOS hostname 5.8 Generic_108528-08 以上を適用済み)
ネットワーク通信	TCP/IP
管理データベース	<ul style="list-style-type: none">• IBM DB2 UDB バージョン 7.2 以上 (Application Development Client 付き)• Sun Forte C および C++ Compiler Enterprise Edition 6 アップデート 1 以上
統合コネクタ	<ul style="list-style-type: none">• IBM DB2 UDB Extended Enterprise Edition バージョン 7.2.1 (Application Development Client for Solaris 付き)• Sun Forte C および C++ Compiler Enterprise Edition 6 アップデート 1 以上• Java Developer's Kit/Java Runtime Environment、バージョン 1.3.1.2 (IBM バージョン)• Java Plug-ins バージョン 1.3.1
リレーショナル・データベース・コネクタ	<ul style="list-style-type: none">• IBM DB2 UDB Extended Enterprise Edition バージョン 7.2 以上 (Application Development Client 付き)• Java Database Connect (JDBC) ドライバー V1.3 (Java のみ)• ODBC V3.0 (C++ のみ)• DataJoiner バージョン 2.1.1

表 16. Solaris 上の EIP コンポーネントに必要なソフトウェア (続き)

コンポーネント	必要なもの
インフォメーション・カタ ログ・コネクタ	IBM DB2 UDB Extended Enterprise Edition バージョン 7.2.1 (Application Development Client for Solaris 付き)
Advanced Workflow	<ul style="list-style-type: none"> • WebSphere MQSeries Server バージョン 5.3.0.1 Server (最新のフィックスバックを適用済み) • MQSeries Workflow Server V3.4 以上 • IBM DB2 UDB Enterprise Edition バージョン 7.2.1 以 上
情報マイニング	<ul style="list-style-type: none"> • IBM DB2 UDB Extended Enterprise Edition バージョ ン 7.2 以上 (Application Development Client 付き) • DB2 Text Information Extender 7.2 (最新のフィックス バックを適用済み) • Java 2 Runtime Environment バージョン 1.3、Standard Edition (ローカルまたはリモート) • 統合コネクタ • WebSphere Application Server V4.0.3 以上 (最新のフィ ックスバックを適用済み) • Sun Forte C and C++ Compiler、Enterprise Edition 6 • IBM Web Crawler
情報マイニングのための Web サンプル	<ul style="list-style-type: none"> • WebSphere Application Server (WAS) Advanced Edition または Advanced Single Server Edition、バージョン 4.0.3 以上 • Java 2 Software Developer's Kit Standard Edition V1.3 (最新のフィックスバックを適用済み)
LDAP	IBM Directory Server 4.1
コネクタ・ツールキット およびサンプル	Java Developer's Kit/Java Runtime Environment、バージョ ン 1.3 (最新のフィックスバックを適用済み)
テキスト検索	<ul style="list-style-type: none"> • Text Search Server R6 • Content Manager V7.1 コネクタ
Information Center ブラウザ ー	<p>Netscape、バージョン 4.5、4.6、または 4.7</p> <p>該当せず : Information Center は Netscape、バージョン 6.0 以上とは互換性がありません</p>

RMI サーバーの要件

ここでは、EIP RMI サーバーを構成するためのオペレーティング・システムの要件について説明します。

- Windows NT (Service Pack 6 以上を適用済み)
- Windows 2000
- AIX 4.3.4 または AIX 5.1 以上

クライアント/サーバーのサポート・マトリックス

表 17 のマトリックスを使用して、EIP コネクター、システム管理クライアント、および Client for Windows をEIP のデータベース、Content Manager ライブラリー・サーバー、または Content Manager リソース・マネージャー・サーバーに接続するためのサポート基準を判別してください。

このマトリックスは、クライアントとサーバー間のサポートの可能性を理解する上で役立てていただくためのものです。また、最初に Content Manager サーバーをバージョン 8.1 からバージョン 8.2 に最初にアップグレードし、その後で徐々にクライアントをアップグレードする方法を理解する上でも役立てていただくためのものです。

表 17. クライアント/サーバーのサポート・マトリックス

	DB2 バージョン 7.2 Server +TIE ¹ 上の CM バージョン 8.1 Server	DB2 バージョン 7.2 Server +TIE ¹ 上の CM バージョン 8.2 Server	DB2 バージョン 8.1 Server +NSE ² 上の CM バージョン 8.2 Server	Oracle +NSE ² 上の CM バージョン 8.2 Server
DB2 バージョン 7.2 クライアント・ソフトウェアを使用したバージョン 8.1 CM コネクターまたはクライアント	サポート対象	サポート対象	サポート対象	サポートなし
DB2 バージョン 8.1 クライアント・ソフトウェアを使用したバージョン 8.1 CM コネクターまたはクライアント	サポートなし	サポートなし	サポートなし	サポートなし

表 17. クライアント/サーバーのサポート・マトリックス (続き)

	DB2 バージョン 7.2 Server +TIE ¹ 上の CM バージョン 8.1 Server	DB2 バージョン 7.2 Server +TIE ¹ 上の CM バージョン 8.2 Server	DB2 バージョン 8.1 Server +NSE ² 上の CM バージョン 8.2 Server	Oracle +NSE ² 上の CM バージョン 8.2 Server
DB2 バージョン 7.2 クライアント・ソフトウェアを使用したバージョン 8.2 CM コネクターまたはクライアント	サポートなし	サポート対象	サポート対象	サポートなし
DB2 バージョン 8.1 クライアント・ソフトウェアを使用したバージョン 8.2 CM コネクターまたはクライアント	サポートなし	サポートなし	サポート対象	サポート対象
注: <ol style="list-style-type: none"> 1. Text Information Extender (TIE) - DB2 バージョン 7.2 で Content Manager テキスト検索機能と併用するためのオプション 2. Net Search Extender (NSE) - DB2 バージョン 8.1 で Content Manager テキスト検索機能と併用するためのオプション 				

第 4 章 Windows の場合の前提条件プログラムのインストールおよびアップデート

このセクションには、次の 2 つの項があります。

1. 『Windows でのソフトウェア前提条件の検証』。システム上にすでにインストール済みの前提条件のレベルの検査方法を説明します。
2. 38 ページの『前提条件のインストール/アップデート』。独自に予定された構成に必要な前提条件プログラムのインストールおよび構成方法を詳しく説明します。このセクションで扱われる前提条件プログラムは、次のものです。
 - 38 ページの『Microsoft Windows オペレーティング・システム』
 - 38 ページの『IBM DB2 Universal Database™』
 - 41 ページの『IBM DB2 Net Search Extender (NSE) および Text Information Extender (TIE)』
 - 42 ページの『Microsoft Visual C++ Compiler』
 - 44 ページの『IBM WebSphere Application Server (WAS)』
 - 46 ページの『Java Development Kit (JDK) のバージョン』

Windows でのソフトウェア前提条件の検証

以下の確認検査を行って、インストールまたはアップデートする必要がある前提条件を判別してください。インストールされていないか、あるいは予想したレベルでない前提条件の場合は、次のセクション（38 ページの『前提条件のインストール/アップデート』）を使用してそれらの前提条件をインストールします。

表 18. 基本的な前提条件の確認

前提条件	検査方法	値の例
1. Windows NT SP6	Winver	1. バージョン 4.0 (Build 1381: Service Pack 6)
2. Windows 2000 Server SP2		2. バージョン 5.0 (Build 2195: Service Pack 2)

表 18. 基本的な前提条件の確認 (続き)

前提条件	検査方法	値の例
Java Development Kit V1.3	java-fullversion	バージョンは 1.3.1 でなければなりません (たとえば、WebSphere Application Server からのバージョンを使用している場合は、java full version " J2RE 1.3.1 IBM Windows 32 build cn131w-20020403 ORB130" となっています)。
UDB EE v7.2 (フィックスパック 7 以上を適用済み)	DB2 コマンド・ウィンドウから db2level と入力します。	レベルが「SQL07025」以上で、「WR21306」以上のフィックスパック・レベルを適用済みである必要があります。
DB2 UDB Enterprise Server Edition バージョン 8.1 (フィックスパック 1 を適用済み)	DB2 コマンド・ウィンドウから db2level と入力します。	レベルが SQL08010 か、あるいは「DB2 v8.1.1.27」と示される必要があります。フィックスパック情報が「FixPak "1"」と示され、フィックスパック・レベルがリストされる必要があります。(たとえば、「s021124」は、「2002 年 11 月 24 日に使用可能だったフィックスパックです。) Oracle の場合、フィックスパック・レベルは S021110 以上でなければなりません。
DB2 Text Information Extender (フィックスパック 1 を適用済み)	DB2 コマンド・ウィンドウから db2text start と入力します。	<ol style="list-style-type: none"> 1. CTE0185 2. CTE0001 Operation completed successfully

表 18. 基本的な前提条件の確認 (続き)

前提条件	検査方法	値の例
Net Search Extender (DB2 バージョン 8.1 を使用する場合に必要)	DB2 コマンド・ウィンドウから、以下のように入力してテキスト検索プログラムを開始します。 db2text start 次に、以下のように入力します。 db2textlevel	CTE0350 Instance 「DB2」は、レベル ID「tx9_26a」の DB2 Net Search Extender コード・リリース「tx9_81」を使用します。
Tivoli® Storage Manager API Client バージョン 4.2.1	c:¥tsm¥api¥samprun¥dapism	API Library Version = 4.2.1.0
Tivoli Storage Manager Server バージョン 4.2.1	以下の、TSM Server Administration の Web ページにログオンします。 http://<hostname> :1580 ここで、<hostname> は TSM サーバーの名前です。	バージョンが Web ページに示されます。 「Version 4, Release2, Level1.0」と示されるはずです。
1. WebSphere Application Server AE 4.0.3	product.xml ファイルが下記にあるか調べます。	<version> 4.0.3 </version>
2. WebSphere Application Server AES 4.0.3	x:¥WebSphere¥AppServer¥properties¥com¥ibm¥websphere.	
Microsoft Visual C++ Compiler バージョン 6.0	「スタート」->「プログラム」で調べます。	1. Microsoft Visual C++ 6.0 2. Microsoft Visual Studio 6.0
Microsoft Visual Studio .NET Professional	コマンド行で、cl と入力します。	Microsoft 32-bit C/C++ Optimizing Compiler Version 13.00.94966 for 80x86 Copyright (C) Microsoft Corporation 1984-2001. All rights reserved.

前提条件のインストール/アップデート

以下のセクションでは、お試しバージョンおよびフィックスパックを検索およびダウンロードする場所、それらのインストール方法、インストール後の検証方法を含め、各前提条件のインストール方法を説明します。

前提条件をインストールする際の経験法則は、基本コンポーネントのインストール後に必ずフィックスパックを適用することです。たとえば、DB2 インストールで DB2 UDB Application Development Client が見つからない場合、最初にこのコンポーネントをインストールしてから、フィックスパック・コードをインストールしてください。そうでない場合は、新しい DB2 コンポーネントを追加後にフィックスパック・コードを再度インストールする必要があります。

Microsoft Windows オペレーティング・システム

Content Manager バージョン 8 リリース 2 には、以下の Windows オペレーティング・システムの 1 つが必要です。

- TCP/IP を含む、Windows NT (Service Pack 6 以上を適用済み)
- TCP/IP を含む、Windows 2000 Server (Service Pack 1 以上を適用済み)

Windows Service Pack の入手先

Windows オペレーティング・システム用の Service Pack は、以下のところからダウンロードできます。

<http://www.microsoft.com/downloads>

Windows Service Pack のインストール方法

Service Pack のインストール手順については、Windows NT または Windows 2000 製品に付属の手順を参照してください。

Service Pack が正しくインストールされていることの確認方法

コマンド・プロンプトから、次のコマンドを入力します。

```
winver
```

以下のいずれかが表示されます。

- Windows NT の場合：バージョン 4.0 (Build 1381: Service Pack 6)
- Windows 2000 の場合：バージョン 5.0 (Build 2195: Service Pack 2)

IBM DB2 Universal Database™

Content Manager バージョン 8 リリース 2 には、IBM DB2 Universal Database Enterprise Edition バージョン 7.2 または Enterprise Extended Edition バージョン 7.2.1 (以上) が必要です。Content Manager ページには、

IBM DB2 Universal Database のインストールを始める前に

IBM DB2 Universal Database のインストールを始める前に、次のことを行います。

1. サーバーが DB2 Universal Database のインストールに必要なすべての前提条件を満たしていることを確認します。DB2 前提条件の詳細を見るには、DB2 Installation CD を挿入し、DB2ランチパッドから「インストールの前提条件 (Installation Prerequisites)」をクリックしてください。

IBM DB2 Universal Database Enterprise Server Edition、バージョン 8.1 は、Content Manager ソフトウェアと一緒にパッケージに入れて提供されます。

2. DB2 のインストールに使用する予定のユーザー ID が、「Administrators」グループに属するものであり、ローカル・ドメインを持っていること、また、Local Security Policy を介して以下のユーザー権限が割り当てられていることを確認します。

- オペレーティング・システムの一部として機能する。
- トークン・オブジェクトを作成する。
- 割り当て量を増やす。
- 処理レベル・トークンを置き換える。

ドメインがローカルでない場合、SATCTLDB データベースおよび DWCTRLDB データベースは正常に作成されません。ユーザーが上記特権を持っていない場合、インストールで DB2 ユーザー名の妥当性検査は行えません。

詳しくは、51 ページの『第 5 章 Windows でのプリインストール手順の実行』を参照してください。

DB2 Universal Database のインストール

1. DB2 インストールについて定義した Administrator (管理者) アカウントでシステムにログインします。
2. インストール・プログラムが必要に応じてファイルを更新できるようにすべてのプログラムをクローズします。
3. DB2 インストール CD-ROM をドライブに挿入します。使用可能であれば、自動実行機能により DB2 セットアップ・ランチパッドが自動的に開始します。

「IBM DB2 セットアップ・ランチパッド (ようこそ)」ウィンドウから、インストールの前提条件およびリリース情報を見ることができます。インストールの前提条件およびリリース情報を検討して最新の緊急情報を入手しなければならない場合があります。「**プロダクトのインストール (Install Products)**」をクリックして、インストールを開始してください。

プロンプトが出たら、インストール・タイプとして「標準 (Typical)」を選択し、Content Manager のサポートに必要なすべての DB2 コンポーネントをインストールします。

4. DB2 セットアップ・ウィザードがシステム言語を判別し、その言語のセットアップ・プログラムを起動します。セットアップ・プログラムを別の言語で実行する

場合、あるいはセットアップ・プログラムが自動開始できない場合は、DB2 セットアップ・ウィザードを手動で開始できます。

__ a. 「スタート」をクリックし、「ファイル名を指定して実行」オプションを選択します。

__ b. 「名前」フィールドに、以下のコマンドを入力します。

```
x:¥setup /i language
```

ここで、

- x: はご使用の CD-ROM ドライブを表します。
- *language* は、使用言語の国別コード (たとえば、英語の場合は EN) を表します。

/i フラグが指定されない場合、インストール・プログラムは、オペレーティング・システムのデフォルト言語で実行します。

__ c. 「OK」をクリックします。

__ 5. インストールを開始したら、セットアップ・プログラムのプロンプトに従って進みます。オンライン・ヘルプを使用して、残りのステップを進むことができます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「ヘルプ (Help)」をクリックするか、「F1」を押します。いつでも「キャンセル (Cancel)」を押して、インストールを終了できます。DB2 ファイルがコンピューターにコピーされるのは、「DB2 セットアップ」ウィザードの最後のインストール・パネルで「終了 (Finish)」をクリックした場合だけです。

インストール中に検出されたエラーに関する情報については、db2.log ファイルを参照してください。db2.log ファイルには、インストールおよびアンインストール・アクティビティの結果生じた一般情報およびエラー・メッセージが格納されます。特に指定のない限り、db2.log ファイルは My Documents¥DB2LOG¥ ディレクトリーに入っています。My Documents ディレクトリーの名前は、コンピューター上の設定によって異なります。

IBM DB2 Universal Database インストールの検証

DB2 インストールを検証するには、次のようにします。

- __ 1. DB2 コマンド・ウィンドウから、db2level と入力します。
- __ 2. 以下のように表示されるはずです。

```
DB21085I Instance "DB2" uses DB2 code release "SQL07025"  
(or higher) with level...identifier ...  
and informational tokens .... and "WR21306" (or higher).
```

IBM DB2 Net Search Extender (NSE) および Text Information Extender (TIE)

DB2 バージョン 7 Text Information Extender (TIE) の高度なテキスト検索機能は Net Search Extender (NSE) バージョン 8 にマージされます。Content Manager バージョン 8 の (オプションの) テキスト検索機能を使用する予定の場合、次のものをインストールする必要があります。

IBM Text Information Extender (TIE)、バージョン 7.2 (IBM DB2 Enterprise Edition バージョン 7.2 および Enterprise Extended Edition バージョン 7.2.1 付き)

または

IBM Net Search Extender (NSE)、バージョン 8 (IBM DB2 Enterprise Server Edition、バージョン 8.1 付き)

Content Manager と一緒に Oracle をデータベース・アプリケーションとして使用しており、かつ、Content Manager の (オプションの) テキスト検索機能を使用する予定の場合は、TIE ではなく、NSE をインストールする必要があります。

IBM Net Search Extender (NSE)、バージョン 8 は、Content Manager、バージョン 8.2 と一緒にパッケージに入れて提供されます。

Windows オペレーティング・システムへの IBM DB2 Net Search Extender (NSE) のインストール

DB2 NSE を Windows オペレーティング・システムにインストールするには、以下のステップを行います。

1. DB2 Net Search Extender CD を CD ROM ドライブに挿入します。
2. 手順に従って NSE をインストールします。DB2EXT サービスのユーザー ID およびパスワードの入力を求めるウィンドウが表示されたら、DB2 サービスに指定したものと同一ユーザー名を入力してください。

要件:

- ライブラリー・サーバーと同じワークステーション上に DB2 NSE をインストールする必要があります。
- 各 DB2 インスタンスごとに、Windows サービスが作成されます。*log on as user for DB2 services* がこのアカウントとして実行されていること (Windows ユーザー名を使用したシステム・アカウントではない) ことを確認してください。

IBM Net Search Extender (NSE) のインストール後に実行するステップ

情報マイニングで使用するできるように、次のようにして NSE サーバー構成ファイルを更新します。

1. 以下のディレクトリー内にある TIE 構成ファイル db2ext1m.cfg を編集します。
%DB2HOME%\%DB2INSTANCE%\db2ext
2. パラメーター *maxIdxPerDb* のデフォルト値を「100」に増やします。

IBM DB2 NSE インストールの検証

DB2 NSE インストールを検証するには、次のようにします。

1. DB2 コマンド・ウィンドウから、次のように入力します。

```
db2text start
```

2. 以下のような情報が表示されるはずです。

```
CTE0185
```

```
または
```

```
CTE0001 operation completed successfully
```

Microsoft Visual C++ Compiler

この製品の可用性に関する情報については、以下の Web サイトを参照してください。

<http://www.microsoft.com>

Microsoft Visual C++ のインストール

Microsoft Visual C++ 製品に付属のインストール説明書に従います。

インストール時に、必ず「**環境変数の登録 (Register environment variables)**」を選択してください。

Microsoft Visual C++ のインストール後に実行するステップ

Microsoft Visual C++ をインストールした後で、以下のステップを実行してください。

1. Microsoft Visual C++ 環境変数が正しくセットアップされていることを確認します。

Visual C++ の最初のインストール時に、環境変数は、システム変数ではなく、ユーザー変数としてセットアップされます。したがって、Visual C++ 環境変数は、自動的にライブラリー・サーバーのどのユーザーにも使用できるようにはなりません。

すべてのユーザーが Visual C++ 環境にアクセスできるように、ユーザー環境変数をシステム環境変数に変更することができます。

ユーザー変数をシステム環境変数に変更する場合、必ず、あらゆる DB2 または Oracle 値の後に Visual C++ 値を配置します。

環境変数を変更後、システムをリブートして、変数をサービスが使用できるようにする必要があります。

このタスクの実行方法の例を以下に示します。

- a. Visual C++ をインストールしたユーザーとしてシステムにログオンします。
- b. 「スタート」→「設定」→「コントロール パネル」とクリックします。
- c. システム・アイコンをダブルクリックします。
- d. Windows NT の場合、「**環境 (Environment)**」タブをクリックします。

Windows 2000 の場合は、「詳細」タブをクリックし、次に「環境変数」ボタンをクリックします。

(システムにログオンしたユーザーのユーザー環境変数の上にシステム環境変数が表示されます。)

- e. ウィンドウの「ユーザー環境変数」セクションで **path** 変数を見つけます。
(変数名 **path** が「変数:」フィールドに表示されています。ウィンドウの「値:」フィールドに **path** 変数の設定が表示されています。)

- f. この「値」フィールド内で、たとえば、次のように Microsoft Visual Studio 変数を強調表示します。

```
C:¥Program Files¥Microsoft Visual Studio¥Common¥Tools¥Winnt;
```

- g. この強調表示された情報をクリップボードにコピーします (CTRL+C)。

- h. ウィンドウの「システム環境変数:」セクション内の **path** をクリックします。

(すると、「値」フィールドに表示されている情報はシステム変数の **path** である値だということが分かります。)

- i. カーソルを「値」フィールドに置きます。情報フィールドの終わり (または DB2 値の後) までスクロールします。たとえば、次のようになっています。

```
C:¥Program Files¥SQLLIB;
```

- j. ユーザー変数からクリップボードにコピーした情報をシステム変数内のここに貼り付けます (Ctrl+V)。(2 つの変数を区切るセミコロンを必ず入れます。)

- k. 情報が正確にシステム変数の一部であるか検証します。正しければ、「ユーザー環境変数」セクションからこの情報を削除します。(C++ 変数は、ユーザー変数ではなく、システム変数で利用できるものでなければなりません。)

- l. **lib** 変数と **include** 変数の両方についてステップ 1e ~ 1k (43 ページ) を繰り返します。

- m. システムをリブートして、変数をサービスが使用できるようにします。

- 2. Microsoft Visual Studio Enterprise Edition をインストールする場合、インストールにより、新しい 6.0 データベース・フォーマットを使用するか、それともバージョン 5.0 と互換性のある以前のフォーマットを使用するかについて、プロンプトが出されることがあります。このフォーマットの決定は、Content Manager には影響しません。

Microsoft Visual C++ インストールの検証

インストールを検証するには、Microsoft Visual C++ 6.0 または Microsoft Visual Studio 6.0 のどちらがあるか「スタート」->「プログラム」メニューを調べます。

IBM WebSphere Application Server (WAS)

IBM WebSphere Application Server、バージョン 5 は、Content Manager、バージョン 8.2 と一緒にこのパッケージに入れて提供されます。以下のものが含まれています。

- IBM HTTP Server
- Java Development Kit (JDK)

IBM WebSphere Application Server のインストール

サーバーが WebSphere Application Server の前提条件をすべて満たすように構成されていることを確認します。WebSphere Information Center には前提条件が記載されています。これには、次のところでアクセスできます。

<http://www.ibm.com/software/webervers/appserv/library.html>

1. オペレーティング・システムの一部として機能することのできるユーザー ID およびパスワードを使用して、ワークステーションにログインします。
2. WebSphere Application Server CD をサーバーのドライブに挿入します。
3. 使用するロケールの言語を選択して、「次へ (Next)」をクリックします。
4. ランチパッドを使用して、製品概要、ReadMe ファイル、およびインストール・ガイドにアクセスします。「製品のインストール (Install the product)」をクリックして、インストール・ウィザードを起動してください。
5. 「ようこそ」ウィンドウがオープンします。「次へ (Next)」をクリックします。
6. 「ソフトウェア使用許諾契約書」ウィンドウがオープンします。許諾契約を受諾して、「次へ (Next)」をクリックします。
7. ウィンドウがオープンして「インストールのタイプの選択 (Select the type of installation)」が表示されたら、「フル (Full)」を選択して、「次へ (Next)」をクリックします。
8. ディレクトリー・パスを示すためのウィンドウがオープンします。「次へ (Next)」をクリックして、WebSphereディレクトリー、IBM HTTP Server ディレクトリー、および Embedded Messaging Server and Client ディレクトリーのデフォルトの宛先ディレクトリーを受け入れます。各製品について別のディレクトリーを定義するには、「参照 (Browse)」をクリックします。
9. 次のウィンドウで、このインストールのノード名とホスト名を入力します。「次へ (Next)」をクリックします。
10. 「サービス (Services)」ウィンドウがオープンしたら、次の項目にチェックマークを付けます。
 - サービスとして WebSphere Application Server を実行する (Run WebSphere Application Server as a service)
 - サービスとして IBM HTTP Server を実行する (Run IBM HTTP Server as a service)ユーザー ID とパスワードを入力して、「次へ (Next)」をクリックします。

- 11. 次のウィンドウに、インストールするよう選択した機能が表示されます。「次へ (Next)」をクリックします。
- 12. WebSphere が、サーバーへのファイルのコピーを開始します。
- 13. インストールが完了したら、サーバーを再始動します。
- 14. 「スタート」→「プログラム」をクリックして、IBM HTTP Server および WebSphere Application Server AES がリストされていることを確認します。
- 15. 「サービス (Services)」をオープンし、IBM HTTP Server および WebSphere Application Server AES が、Windows NT または Windows 2000 のサービスにリストされていることを確認します。

ワークステーションの再始動後、WebSphere Application Server AES により、いくつかのコマンド行インターフェース・ウィンドウがオープンしてクローズします。これは、正常なインストール・プロセスの一部です。

サーバーを再始動して、インストール・プログラムによる WebSphere Application Server コンポーネントの構成が完了したら、WebSphere Application Server AES は自動的に First Steps アプリケーションを起動します。First Steps では、サンプル・データの構成および定義を行うための対話式チュートリアルを使用して、製品についてより深く理解することができます。

IBM WebSphere Application Server インストールの検証

IBM WebSphere Application Server インストールの検証は、以下のステップに従って行います。

- 1. WebSphere Application Server を開始します。
- 2. 「スタート」→「プログラム」→「IBM WebSphere」→「Application Server V5.0」→「管理者のコンソール (Administrator's Console)」と開くと、「ヘルプ (Help)」→「情報 (About)」の下に情報パネルが表示されます。ここにバージョン 5.0 (またはそれ以上) が示されるはずです。

インストールを検証する方法として、次のような product.xml ファイルを調べる方法もあります。

```
WebSphereAppServerpropertiescomibmwebsphere
```

このファイルに、以下の情報が入っているはずです。

```
<version>5.0/version>
```

WAS のインストールおよび検証後: Application Server 内の JDBC リソースが適切に構成されていることを検証します。これを行うには、WebSphere Application Server が開始されていることを確認してから、「スタート (Start)」メニューから「管理者のコンソール (Administrator's Console)」を開きます。

- 1. 左のパネルで、「**WebSphere 管理可能ドメイン (WebSphere Administrative Domain)**」->「**リソース (Resources)**」->「**JDBC プロバイダー (JDBC Providers)**」と移動します。
- 2. 右のパネルで、「**ノード (Nodes)**」タブを選択します。
- 3. ご使用のノードのクラスパス値が **C:¥Program Files¥SQLLIB¥java¥db2¥java.zip** に設定されていることを確認します。

Java Development Kit (JDK) のバージョン

JDK、バージョン 1.3 は、以下の製品の場合にのみ 必要です。

- EIP ツールキット
- 情報マイニング
- eClient
- VideoCharger
- インストール・ランチパッド

Java Development Kit (JDK) の入手先

WebSphere Application Server に付属の JDK を使用できます。JDK は、以下のディレクトリーにあります。

C:¥WebSphere¥AppServer¥java

JDK は WebSphere Application Server の一部であるため、インストールは不要です。ただし、JDK ディレクトリー (たとえば C:¥WebSphere¥AppServer¥java¥bin) がシステム・パス環境変数に追加されていることを確認する必要があります。

システム上の JDK の正しいレベルの検証

以下のようにすると、正しいレベルの Java Development Kit が備わっているか検証できます。

- 1. コマンド・プロンプトから `java -fullversion` と入力します。
- 2. レベルは 1.3.1 と示されるはずです。

WebSphere に付属の JDK を使用している場合は、次のようになります。

Java full version "J2RE 1.3.0 IBM build cn131w-20020403 ORB130"

Workflow の Windows へのインストール

MQSeries Server の前提条件として、Active Directory Services Interface (ADSI) 2.0、および Microsoft Management Console 1.1 の 2 つが必要です。MQSeries Server の CD の Prereqs ディレクトリーには、両製品のインストール・プログラムが含まれています。Windows 2000 でインストールする場合、ADSI および MMC はオペレーティング・システムの一部です。

MQSeries インストール CD には自動開始機能があります。前提条件をインストールする必要がある場合は、「For (Windows版) - 言語の選択 (Windows - Language Selection)」ウィンドウがオープンしたときに「キャンセル (Cancel)」をクリックして、Prereqs ディレクトリーに移動します。

MQSeries Server ソフトウェアの Windows へのインストール

1. MQSeries Server CD から前提条件をインストールしたら、
Setups/xx_xx/install.exe をクリックします (xx_xx は、使用ロケールの言語)。
ワークステーション構成に既に ADSI 2.0 および MMIC 1.1 が含まれている場合は、CD-ROM ドライブに CD-ROM「IBM for Windows NT Server」を挿入します。
2. インストールが自動的に開始しない場合、以下のようにします。
 - a. Windows のタスクバーから「スタート」→「ファイル名を指定して実行」をクリックします。
 - b. 「名前」フィールドに x:¥setup.exe と入力します。ここで、x は CD-ROM ドライブのドライブ文字です。
 - c. 「OK」をクリックします。

「(Windows版) - 言語の選択 (For Windows - Language Selection)」ウィンドウがオープンします。
3. 使用するロケールをサポートする言語を選択して、「OK」をクリックします。「セットアップ (Setup)」ウィンドウがオープンし、次に「ようこそ (Welcome)」ウィンドウがオープンします。
4. 「次へ (Next)」をクリックします。「ご使用条件の表示 (Read License Conditions)」ウィンドウがオープンします。
5. 「はい (Yes)」をクリックして、ご使用条件を受諾します。
6. デフォルトの インストール・フォルダーを使用する場合、「次へ (Next)」をクリックします。デフォルトを使用しない場合は、変更を行ってから、「次へ (Next)」をクリックします。「セットアップ・タイプ (Setup Type)」ウィンドウがオープンします。
7. 「標準 (Typical)」をクリックしてから、「次へ (Next)」をクリックします。「デフォルト構成のセットアップ (Set Up Default Configuration)」ウィンドウがオープンします。
8. 「デフォルト構成のセットアップ (Set up a default configuration)」チェック・ボックスを選択したままで、「次へ (Next)」をクリックします。「オプションの選択 (Select Options)」ウィンドウがオープンします。
9. 「オプションの選択 (Select Options)」ウィンドウの両方のチェック・ボックスを選択したままで、「次へ (Next)」をクリックします。「デフォルト・クラスターの結合 (Join Default Cluster)」ウィンドウがオープンします。

10. 「はい、クラスターのリポジトリにします (Yes, make it the repository for the cluster)」をクリックして、「次へ (Next)」をクリックします。「リポジトリの位置 (Repository Location)」ウィンドウがオープンします。
11. 「次へ (Next)」をクリックします。「プログラム・フォルダーの選択 (Select Program Folder)」ウィンドウがオープンします。
12. 「次へ (Next)」をクリックします。IBM というフォルダーが、Windows の「スタート」メニューの「プログラム」に追加されます。「ファイルのコピー可能 (Ready to Copy Files)」ウィンドウがオープンします。
13. 「次へ (Next)」をクリックします。インストール・ディレクトリーにファイルがコピーされます。コピーには、10 分以上を要する場合があります。ファイルのコピーが完了すると、「セットアップ完了 (Setup Complete)」ウィンドウがオープンします。
14. 「終了 (Finish)」をクリックして、MQSeries Server のインストール・プロセスを完了します。サービスが、Windows NT サービスとして自動的に開始します。

MQSeries Workflow の Windows へのインストール

MQSeries をインストールした後、ワークフローを使用するために、MQSeries Workflow をインストールしなければなりません。

1. ご使用のワークステーションが前提条件を満たしていることを確認します。
2. MQSeries Server バージョン 5.2h がインストールされていることを確認します。
3. MQSeries Workflow インストール・ファイル用に、ワークステーション上に一時フォルダー (c:\temp\cmbwf など) を作成します。
4. CD ドライブに、CD を挿入します。
5. MQSeries Workflow インストール・ファイルおよび構成ファイルを、CD の WFIInstall ディレクトリーから一時ディレクトリーにコピーします。
6. コマンド・ウィンドウをオープンし、ステップ 3 で作成した一時ディレクトリーに移動します
7. CD を取り出して、MQSeries Workflow CD を挿入します。
8. MQSeries Workflow のインストールが自動的に開始したら、「キャンセル (Cancel)」、「セットアップの終了 (Exit Setup)」をクリックします。
9. MQSeries Workflow のインストールを開始するには、cmbwfinstall <x> <temp> と入力します。ここで、x は CD ドライブの名前、temp はステップ 3 で MQSeries Workflow のインストール・ファイルおよび構成ファイルをコピーした一時ディレクトリーの名前です (例: cmbwfinstall g: c:\temp\cmbwf)。
LAN からインストールする場合、ドライブの名前ではなく、LAN の別名を使用してください。
10. メッセージ「MQSeries Workflow installation completed」が表示されたら、ワークステーションを再始動します。

Windows での MQSeries Workflow の構成

MQSeries Workflow を構成するには、次のようにします。

1. コマンド・ウィンドウをオープンし、以前のタスクで作成した一時ディレクトリーにディレクトリーを変更します。
2. MQSeries Workflow インストールの bin サブディレクトリーが PATH に入っているか調べます。
3. cmbwfconfig と入力し、構成が完了するまで待ちます。このステップで、デフォルトの FMC ワークフロー構成、ワークフロー・ランタイム・データベース、および EIP ワークフロー・データ・コンテナ構造体が作成されます。この手作業手順は、一度だけ行う構成作業です。

Windows での EIP ワークフローの開始

EIP Advanced ワークフローは、MQSeries Workflow を、ワークフロー機能を送達するための基本となるワークフロー・エンジンとして使用します。そのため、EIP ワークフローを開始するのに、MQSeries Workflow を開始するステップが必要です。

1. ノートパッドで cmbupes81.bat を開きます。
2. EIP 管理者ユーザー ID およびパスワードを設定する 2 つの項目を見つけます。ご自身のカスタム設定に合わせてそれらを変更し、結果を保管します。

```
@set CMBUPESUSER=icmadmin @set CMBUPESPASS=password
```

ユーザー ID およびパスワードは、cmbupes81.bat を介して EIP コレクション・ポイント・モニター (upes) を開始するのに使用されます。
3. cmbwfstart と入力して、MQSeries Workflow サーバーと EIP コレクション・ポイント・モニターを開始します。3 つのコマンド・ウィンドウがオープンします。それから 3 つのコマンド・ウィンドウは、次のような表題になっています。
 - トリガー・モニター
 - MQSeries Workflow サーバー
 - IBM MQSeries Workflow PE

コレクション・ポイント・モニターは、MQSeries Workflow Server のコマンド・ウィンドウにその開始状況をプロンプト表示します。cmbwfstart.bat にユーザー ID およびパスワードを設定しないよう選択した場合、upes は、開始時にユーザー ID とパスワードの入力を求めるプロンプトを出します。

EIP Advanced Workflow の実行中、それらの 3 つのコマンド・ウィンドウは起動したままにしてください。

ヒント: コレクション・ポイント機能が必要でない場合は、「quit」と入力して UPES サーバーをシャットダウンしてください。UPES サーバーをシャットダウンしても、MQSeries Workflow はシャットダウンされません。

ヒント: EIP System Administration クライアントで WorkFlow Service オプションを使用可能にしてからでないと、Administration クライアントを介して EIP Workflow オブジェクト (たとえば Workflow プロセスおよびアクション) を定義できません。EIP で WorkFlow Service を使用可能にした後は、必ず、System Administration クライアントにログオンするときに MQSeries Workflow を実行させておいてください。このことは、Workflow オブジェクト定義を EIP Administration データベースと MQSeries Workflow ランタイム・データベース間で同期させておくのに必要です。

ヒント: デフォルトの MQSeries Workflow システム管理者 (構成管理者ではない) ID は ADMIN で、「password」というデフォルトのパスワードを持つものです。セキュリティ上の理由から、これは後で変更する必要があります。これを変更するには、最初に MQSeries Workflow を開始し、fmcautil ユーティリティを使用して、Workflow システムに接続してパスワードを変更します。パスワードの変更が済んだら、必ず cmbwfstart.bat を変更して、行った変更を反映させます。以下にその手順を示します。

1. fmcautil ñu admin ñp password
2. 「u, p」を選択してパスワードを変更し、ユーティリティを終了します。
3. CMBWFStart.bat を更新します。たとえば、fmcxspea -u=admin -p=myPassword -f のようにします。

MQSeries Workflow サーバーを RMI サーバーとして構成する場合は、193 ページの『第 17 章 RMI サーバーの構成』を参照してください。

第 5 章 Windows でのプリインストール手順の実行

Content Manager and Enterprise Information Portal をインストールする前に、すべての必要な前提条件をインストールするほかに、以下の作業を完了する必要があります。

- 『適切なユーザー権限および特権を持つユーザー ID の作成』
- 53 ページの『システム上に十分な一時スペースがあることの確認』
- 53 ページの『%PATH% が長すぎないことの確認』

適切なユーザー権限および特権を持つユーザー ID の作成

以下のようにして、つのユーザー ID を作成します。

- このワークステーション上にライブラリー・サーバーをインストールする場合は、ライブラリー・サーバー「管理」ユーザー ID (たとえば ICMADMIN)。このユーザー ID は、DB2 Admin グループに属するものでなければなりません。
- このワークステーション上にライブラリー・サーバーをインストールする場合は「データベース接続」ユーザー ID (たとえば ICMCONCT)。(これは、DB2 Admin グループに属するものではなく、通常の特権を持つ通常のユーザー ID でなければなりません。)

インストール・プログラムは、デフォルト名で ID を参照しますので、デフォルト名を使用しない場合は、使用する名前を代入する必要があります。

ユーザー ID icmadmin (ライブラリー・サーバー管理に使用) は DB2 管理特権を持つ必要があります。これを実行する簡単な方法として、「Administrators」グループに icmadmin を追加する方法があります。ユーザー ID icmconct には特別な特権は不要です。

また、icmadmin は以下の 4 つのユーザー権限を持つ必要があります。

- オペレーティング・システムの一部として機能する。
- トークン・オブジェクトを作成する。
- 割り当て量を増加する。
- 処理レベル・トークンを置き換える。

3 つの権限を割り当てるのに必要なステップは、Windows NT と Windows 2000 では異なります。

Windows NT オペレーティング・システムの場合:

- __ 1. 「スタート」->「プログラム」->「管理ツール (Administrative Tools)」->「ユーザー・マネージャー (User Manager)」をクリックします。
- __ 2. 「ポリシー (Policies)」メニューから「ユーザー権限 (User Rights)」を選択します。
- __ 3. 「拡張ユーザー権限の表示 (Show Advanced User Rights)」チェック・ボックスを使用可能にします。
- __ 4. 権限のドロップダウン・リストから割り当てたい権限 (たとえば「オペレーティング・システムの一部として機能する (Act as part of the Operating System)」) を選択します。
- __ 5. 「追加 (Add)」をクリックします。
- __ 6. リストに対してユーザー・アカウントを選択します。
- __ 7. 「OK」をクリックし、再度「OK」をクリックして、「ユーザー・マネージャー (User Manager)」をクローズします。
- __ 8. 変更を有効にするためにサーバーをリブートします。

Windows 2000 オペレーティング・システムの場合:

- __ 1. 「スタート」->「設定」->「コントロール パネル」とクリックする。
- __ 2. 「管理ツール (Administrative Tools)」を選択します。
- __ 3. 「ローカル・セキュリティ・ポリシー (Local Security Policy)」を選択します。
- __ 4. トポロジー・ツリーから、「ローカル・ポリシー (Local Policies)」->「ユーザー権限の割り当て (User Rights Assignment)」を選択します。
- __ 5. 割り当てたい権限 (たとえば「オペレーティング・システムの一部として機能する (Act As Part of the Operating System)」) をダブルクリックします。
- __ 6. 「追加 (Add)」をクリックします。
- __ 7. リストからユーザー・アカウントを選択します。
- __ 8. 「OK」をクリックします。
- __ 9. 変更されたユーザーは、変更を有効にするためにログオフしてから、再度ログオンする必要があります。

インストール時に入力できるように、これらのユーザー ID とそれぞれのパスワードを覚えておく必要があります。インストール中 (それらの入力が必要な時点で) にそれらを思い出していただきます。それらの名前をここに書き留めてください。

表 19. 管理および接続 ID

	デフォルト名/情報	ご使用の値を ここに記録します
ライブラリー・サーバーの データベース管理 ID	ICMADMIN	
ライブラリー・サーバーの データベース管理 ID パ スワード		
データベース接続 ID	ICMCONCT	
データベース接続 ID パ スワード		

システム上に十分な一時スペースがあることの確認

Content Manager または Enterprise Information Portal をインストールする前に、%TEMP% があるパーティションで 100MB 以上が使用可能であることを確認する必要があります。

Content Manager および Enterprise Information Portal はどちらをインストールする場合も、%TEMP% 環境変数によって指定される一時ディレクトリー (たとえば、C:\%TEMP または C:\WINNT\%TEMP) が使用されますが、どちらの場合も 100MB のフリー・スペースが必要です。

%PATH% が長すぎないことの確認

Content Manager および Enterprise Information Portal のインストールにより、%PATH% 環境変数に値が付加されます。Microsoft Windows では、パスの長さを約 1024 文字に制限されています。

Content Manager および Enterprise Information Portal のインストール・プログラムは、インストール・ディレクトリー用に選択するものに応じて、約 100 文字をパスに追加する必要があります。%PATH% が長すぎないかどうかを検証する方法の 1 つとして、それをワード・プロセッサにコピーし、それに対してワード・カウントを実行する方法があります。

%PATH% が長すぎる場合、重複する項目を最初に削除し、次に、ディレクトリーにショート・ネーム (たとえば、**Program Files => PROGRA~1**) を試すことができます。コマンド行から dir /x と入力して、ショート・ネームを検索します。

第 6 章 Windows での Enterprise Information Portal コンポーネントのインストール

このセクションでは、Windows サーバーにおける EIP コンポーネントのインストール方法について説明します。

管理データベースのインストールの前に

管理データベース (情報マイニング・データベースを含む)、および Content Manager バージョン 8 コネクターをインストールする場合、または Content Manager バージョン 8 データベースに EIP テーブルを追加する場合、このセクションをお読みください。

Content Manager バージョン 8 データベースの共用

EIP バージョン 8 および Content Manager バージョン 8 は共通のコードを共有するため、Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバー・データベースを共用することができます。

制約事項: ライブラリー・サーバー・データベースを共有するには、インストール中にデータベースで Unicode を使用可能にし、さらにコード・ページを 1208 にしなければなりません。データベースが要件を満たしているかどうかを確認するには 2 つの方法があります。

DB2 コマンド・ウィンドウを使用します (「スタート」→「プログラム」→「IBM DB2」→「コマンド・ウィンドウ (Command Window)」)。

1. プロンプトで、db2 get db cfg for <Content Manager Version 8 database> と入力します。
2. Database code page 設定が 1208 であることを確認します。

DB2 Control Center を使用します (「スタート」→「プログラム」→「IBM DB2」→「Control Center」)。

1. Content Manager バージョン 8 データベースを強調表示します。
2. 右マウス・ボタン・クリックして「構成 (Configure)」を選択します。「環境 (Environment)」タブが表示されます。
3. Database code page 値が 1208 であることを確認します。

Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバー・データベースを共用する場合、特定の Content Manager バージョン 8 データベースのインストール時に定義されたユーザー ID が分かっている必要があります。これは、EIP のインストール・プログ

ラムが Content Manager バージョン 8 データベースへのアクセス、EIP テーブルの追加、およびデータベース変更の保管にユーザー ID を使用するためです。

Content Manager バージョン 8 データベースは、EIP のインストール先のサーバーのローカル・ドライブになくてもなりません。ネットワーク・ドライブ経由でアクセスされる Content Manager バージョン 8 データベースに EIP テーブルを追加することはできません。

EIP を共用する Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバー・データベースを含むサーバー上で DB2 を開始する必要があります。

既存の DB2 データベースを変更するため、DB2 データベースの管理を許可するユーザー ID とパスワードを使用してサーバーにログオンする必要があります。

Content Manager バージョン 8 データベースを作成するときに使用したのと同じのサーバー名、スキーマ名、ユーザー ID、およびパスワードを定義する必要があります。

管理データベースおよび **Content Manager バージョン 8 コネクタ**をインストールする場合

Content Manager バージョン 8 コネクタをインストールする場合、接続先となる Content Manager バージョン 8 データベースのインストール時に定義したユーザー ID およびパスワードが分かっている必要があります。次のステップを実行する必要があります。

1. 「管理データベースの識別 (Identify Administration Database)」ウィンドウで、管理者ユーザー ID と DB2 Connect ユーザー ID を入力する必要があります。管理者および Connect ユーザー ID はローカルに定義されている必要があります。**要件:** Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバーを共用する場合、共用する Content Manager データベースの作成時に定義したのと同じ管理者ユーザー ID および Connect ユーザー ID を入力する必要があります。
2. 「統合サーバー接続の構成 (Configure Federated Server Connection)」ウィンドウで、DB2 Connect ユーザー ID に関連したパスワードを入力する必要があります。
3. 「Content Manager バージョン 8 コネクタの構成 (Configure Content Manager Version 8 connector)」ウィンドウで、Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバー・データベースのインストール時に定義した DB2 Connect ユーザー ID およびパスワードを入力する必要があります。

管理データベースはインストールするが、**Content Manager バージョン 8 コネクタ**はインストールしない 場合

前のセクションのステップ 1 および 2 を参照してください。

Content Manager バージョン 8 データベースを共用する場合

次のステップを実行する必要があります。

1. Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバーを共用する場合、共用する Content Manager データベースの作成時に定義したものと同一管理者ユーザー ID および Connect ユーザー ID を入力する必要があります。
2. 「統合サーバー接続の構成 (Configure Federated Server Connection)」ウィンドウで、Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバー・データベースのインストール時に定義した DB2 Connect ユーザー ID およびパスワードを入力する必要があります。
3. 「Content Manager バージョン 8 コネクターの構成 (Configure Content Manager Version 8 connector)」ウィンドウで、Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバー・データベースのインストール時に定義した DB2 Connect ユーザー ID およびパスワードを入力する必要があります。

制約事項: このセクションのステップ 1 ～ 3 で定義するデータベース接続ユーザー ID (およびその他すべての値) は、各ウィンドウで同じでなければなりません。

EIP の旧バージョンの除去

アンインストール・プログラムを使用して、旧バージョンの EIP コンポーネントを除去します。データベースは DB2 内に格納されているので、除去されません。EIP アンインストール・プログラムは、*.INI ファイルおよび *.BAT ファイルに加えられた変更を検出し、これらのファイルのバックアップ・コピーを作成するかどうかをたずねるプロンプトを出します。

1. 「スタート」→「プログラム」→「IBM Enterprise Information Portal for Multiplatforms」→「アンインストール (Uninstall)」をクリックします。
2. 「セットアップ言語の選択 (Choose Setup Language)」ウィンドウで言語を選択し、「OK」をクリックしてから「はい (Yes)」をクリックしてコンポーネントの除去プロセスを開始します。
3. 修正された *.INI ファイルまたは *.BAT ファイルを cmbroot から除去する場合には、「はい (Yes)」をクリックします。「いいえ (No)」をクリックすると、プログラムから *.BAT ファイルおよび *.INI ファイルのバックアップ・コピーを作成するかどうかをたずねるプロンプトが出されます。「はい (Yes)」をクリックすると、プログラムはバックアップ・ファイルを cmbroot に保管します。
4. 「はい (Yes)」または「いいえ (No)」をクリックしてから、「終了 (Finish)」をクリックします。
5. ワークステーションを再始動した後で、バックアップの *.INI ファイルや *.BAT ファイルを一時ディレクトリーにコピーします。
6. %CMBROOT ディレクトリーを削除します。

EIP Windows インストールのクイック・スタート

1. EIP Windows インストール CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。プログラムが自動的に開始したら、適切な言語を選択し、「次へ (Next)」をクリックします。インストールが自動的に開始しない場合には、CD-ROM ドライブに移動して、適切な言語ディレクトリーを選択してから、`setup.exe` をダブルクリックします。
2. 「同意する (Accept)」をクリックして、ご使用条件を受諾します。「マシン・タイプの選択 (Select Machine Type)」ウィンドウが表示されます。
3. マシン・タイプをクリックして「次へ (Next)」をクリックします。
 - クライアント
 - サーバー
 - 開発ワークステーション
4. 「次へ (Next)」をクリックして EIP 製品と構成ファイルのデフォルトのパスおよびディレクトリー名を受け入れるか、必要に応じてパスおよび名前を変更します。
5. 適切なコンポーネントおよびサブコンポーネントをクリックし、「次へ (Next)」をクリックします。
6. インストールするコンポーネント、およびシステムの計画に応じて、各種のインストール・ウィンドウが表示され、構成情報を入力するようプロンプトが出されます。
7. 「終了 (Finish)」をクリックして、サーバーを再始動します。

EIP のインストール・ウィンドウ

表 20 は、必ず表示される共通の EIP インストール・ウィンドウのリストです。選択するコンポーネントに関係なく、一般的な表示順に示されています。Information Center や IBM Web Crawler など、一部のコンポーネントのインストールでは、共通のインストール・ウィンドウのみ表示されます。

他のコンポーネントのインストールでは、固有のウィンドウが表示されます。59 ページの表 21 はこれをアルファベット順に示したリストです。インストールの順序と表示されるウィンドウは、インストールするコンポーネントに応じて異なります。たとえば CM for AS/400 コネクターを選択すると、「VisualInfo for AS/400 ネットワーク・テーブルの生成 (VisualInfo for AS/400 Network Table Generation)」ウィンドウのみ表示されます。

表 20. 共通の EIP インストール・ウィンドウ

共通のウィンドウ	詳細
プログラムのご使用条件 (License Agreement)	63 ページの『プログラムのご使用条件 (Software License Agreement)』を参照。
マシン・タイプの選択 (Select Machine Type)	63 ページの『マシン・タイプの選択 (Select Machine Type)』を参照。

表 20. 共通の EIP インストール・ウィンドウ (続き)

共通のウィンドウ	詳細
宛先の指定 (Specify Destination)	63 ページの『宛先の指定 (Specify Destination)』を参照。
コンポーネントの選択 (Component Selection)	63 ページの『コンポーネントの選択 (Component Selection)』を参照。
RMI ホスト名とポート番号の指定 (Specify RMI Host Name and Port Number)	64 ページの『RMI ホスト名とポート番号の指定 (Specify RMI Host Name and Port Number)』を参照。
システム構成 (System Configuration)	64 ページの『システム構成 (System Configuration)』を参照。
ファイル・コピーの開始 (Start Copying Files)	67 ページの『ファイル・コピーの開始 (Start Copying Files)』を参照。
製品の登録 (Product Registration)	67 ページの『製品の登録 (Product Registration)』を参照。
インストール完了 (Installation Complete)	67 ページの『インストール完了 (Installation Complete)』を参照。

表 21. 固有の EIP インストール・ウィンドウ

固有のウィンドウ	説明	詳細
リモート・データベースのカ タログ (Catalog remote database)	このパネルで定義した値により、 管理クライアントとリモート EIP データベース間の通信が使用可能 になります。	このウィンドウを記 入するのに必要な情 報の収集方法につい ては、151 ページの 『リモート管理デー タベースへの管理ク ライアントの接続』 を参照してくださ い。
LDAP コンポーネントの構成 (Configure components for LDAP)	このウィンドウは、管理データベ ースおよび / または管理クライア ントを使用可能にして LDAP 情 報を使用するために使用。	67 ページの『LDAP コンポーネントの構 成 (Configure components for LDAP)』を参照。

表 21. 固有の EIP インストール・ウィンドウ (続き)

固有のウィンドウ	説明	詳細
Content Manager V8 サーバー接続の構成 (Configure Content Manager V8 Server Connection)	Content Manager バージョン 8 コネクターのインストール時にのみ使用。	68 ページの『Content Manager V8 サーバー接続の構成 (Configure Content Manager V8 Server Connection)』を参照。
統合サーバー接続の構成 (Configure federated server connection)	次のもののインストール時にのみ使用。 <ul style="list-style-type: none"> 管理クライアント、および / または コネクター 	69 ページの『統合サーバー接続の構成 (Configure Federated Server Connection)』を参照。
LDAP サーバーの構成 (Configure LDAP Server)	次のもののインストール時にのみ使用。 <ul style="list-style-type: none"> LDAP サーバー共通の構成 統合コネクター Content Manager バージョン 8 コネクター 管理データベースまたは情報マイニング・データベース 	68 ページの『LDAP サーバーの構成 (Configure LDAP Server)』を参照。
LDAP サーバーの定義 (Define LDAP Server)	次のもののインストール時にのみ使用。 <ul style="list-style-type: none"> LDAP サーバー共通の構成 統合コネクター Content Manager バージョン 8 コネクター 管理データベースまたは情報マイニング・データベース 	70 ページの『LDAP サーバーの定義 (Define LDAP Server)』を参照。
Content Manager V7 コネクタ C-API の宛先パス (Destination Path for Content Manager V7 connector C-APIs)	Content Manager バージョン 7 コネクターのインストール時にのみ使用。	70 ページの『Content Manager V7 コネクタ C-API の宛先パス (Destination Path for Content Manager V7 Connector C-APIs)』を参照。

表 21. 固有の EIP インストール・ウィンドウ (続き)

固有のウィンドウ	説明	詳細
既存のデータベース (Existing database)	<p>次のもののインストール時にのみ使用。</p> <ul style="list-style-type: none"> 管理データベースおよび / または情報マイニング・フィーチャー Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバー・データベースの EIP テーブルを共用する場合 	70 ページの『既存のデータベース (Existing Database)』を参照。
管理データベースの識別 (Identify Administration Database)	管理データベースまたは情報マイニング・データベースのインストール時にのみ使用。	71 ページの『管理データベースの識別 (Identify Administration Database)』を参照。
イメージ検索サーバー / クライアントの構成 (Image Search Server/Client Configuration)	イメージ検索フィーチャーを選択した場合にのみ使用。	72 ページの『イメージ検索サーバー / クライアントの構成 (Image Search Server/Client Configuration)』を参照。
OnDemand のインストール (Install OnDemand?)	OnDemand ビューアーのインストール時にのみ使用。	73 ページの『OnDemand インストール (Install OnDemand?)』を参照。
ネットワーク・テーブルの生成 (Network Table Generation)	Content Manager バージョン 7 コネクタのインストール時にのみ使用。このウィンドウは、Content Manager バージョン 7 ネットワーク・テーブルの生成オプションを提供します。	73 ページの『ネットワーク・テーブルの生成 (Network Table Generation) (Content Manager バージョン 7 コネクタ用)』を参照。

表 21. 固有の EIP インストール・ウィンドウ (続き)

固有のウィンドウ	説明	詳細
ネットワーク・テーブルの生成 (Network Table Generation)	Content Manager バージョン 7 コネクターのインストール時にのみ使用。入力した値は、Content Manager バージョン 7 ネットワーク・テーブル (FRNROOT/FRNOLINT.TBL) にコピーされます。	74 ページの『ネットワーク・テーブルの生成 (Network Table Generation) (Content Manager バージョン 7 コネクター用)』を参照。
管理データベース・オプションの選択 (Select administration database options)	新規データベースをインストールするか、既存のデータベースを置き換える場合にのみ使用。	74 ページの『システム管理データベース・オプションの選択 (Select Administration Database Options)』を参照。
VisualInfo for AS/400 のバージョンの選択 (Select Version of VisualInfo for AS/400)	VisualInfo for AS/400 コネクターのインストール時にのみ使用。	75 ページの『VisualInfo for AS/400 のバージョンの選択 (Select Version of VisualInfo for AS/400)』を参照。
サーバー構成ユーティリティ (Server configuration utility)	ポート番号、データベース名、およびリモート・データベースに関するその他の情報の定義に使用します。	
テキスト検索サーバー / クライアントの構成 (Text Search Server/Client Configuration)	テキスト検索フィーチャーを選択した場合にのみ使用。	75 ページの『テキスト検索サーバー / クライアントの構成 (Text Search Server/Client Configuration)』を参照。
OnDemand のアップグレード (Upgrade OnDemand?)	OnDemand ビューアーをインストールし、かつサーバー上に既存の OnDemand クライアントがある場合にのみ使用。	76 ページの『OnDemand のアップグレード (Upgrade OnDemand?)』

表 21. 固有の EIP インストール・ウィンドウ (続き)

固有のウィンドウ	説明	詳細
VisualInfo for AS/400 ネットワーク・テーブルの生成 (VisualInfo for AS/400 Network Table Generation)	VisualInfo for AS/400 コネクターのインストール時にのみ使用。 VisualInfo for AS/400 ネットワーク・テーブルの一部の値を入力します。	

共通のインストール・ウィンドウ

このセクションでは、すべての EIP コンポーネントのインストールで表示されるインストール・ウィンドウについて説明します。

プログラムのご使用条件 (Software License Agreement)

「同意する (Accept)」をクリックして、ご使用条件を受諾します。「同意しない (Decline)」をクリックすると、インストールを終了します。

マシン・タイプの選択 (Select Machine Type)

「クライアント (Client)」、「サーバー (Server)」、または「開発ワークステーション (Development Workstation)」をクリックして、「次へ (Next)」をクリックします。

サーバー構成ユーティリティー (Server Configuration Utility)

このウィンドウでは、データベース名、サーバー・ポート番号、およびリモート・データベースへの接続に必要なその他の情報を入力します。

宛先の指定 (Specify Destination)

このウィンドウでは、CMBROOT および CMgmt のデフォルトのインストール・パスおよびディレクトリー名を変更することができます。CMBROOT は EIP プログラムを、CMgmt は共通の構成ファイルを含みます。このウィンドウで定義した内容は、Windows システム環境変数に保管されます。

一方または両方のフィールドに新規に入力するか、「次へ (Next)」をクリックしてデフォルトのパスおよびファイル名を受け入れます。

コンポーネントの選択 (Component Selection)

このウィンドウでは、インストール・コンポーネントを選択します。すべてのコンポーネントを同時にインストールするか、個々のコンポーネントを選択することができます。

サブコンポーネントの隣に Installed とある場合、これはインストール・プログラムがサーバー上にサブコンポーネントを検出したことを示します。インストール済みのサブコンポーネントを選択すると、既存のサブコンポーネントを上書きするオプションまたは保持するオプションが示されます。

サブコンポーネントの隣に **Installed** とある場合、これはインストール・プログラムがサーバー上にサブコンポーネントを検出したことを示します。インストール済みのサブコンポーネントを選択すると、既存のサブコンポーネントを上書きするオプションまたは保持するオプションが示されます。

RMI ホスト名とポート番号の指定 (Specify RMI Host Name and Port Number)

このウィンドウには、RMI サーバーの RMI ホスト名とポート番号を定義します。また、ワークフローまたは情報マイニング RMI サーバーの RMI ホスト名とポート番号も定義することができます。

システム計画にマスター RMI サーバーが含まれる場合は、このウィンドウ上部のフィールドに、マスター・サーバーのホスト名とマスター・サーバーのポート番号を入力します。デフォルトのホスト名はローカル・サーバー名であり、デフォルトのポート番号は 1919 です。RMI 情報が `x:¥<CMCOMMON>¥cmbclient.ini` にコピーされます。**ヒント:** 完全修飾マスター RMI サーバー・ホスト名を入力する必要がある場合は、管理者にご連絡ください。

システム計画で、ワークフローまたは情報マイニング用の別個の RMI サーバーが含まれる場合は、このウィンドウ下部のフィールドにワークフローまたは情報マイニング RMI サーバーのホスト名とポート番号を入力します。この RMI 情報は `x:¥<CMBROOT>¥cmbsvclient.ini` にコピーされます。

ヒント: システム計画に RMI が含まれる場合は、クライアントで RMI サーバーを使用できるようにする前に、別のステップで RMI サーバーにコネクタをインストールして構成する必要があります。

システム構成 (System Configuration)

EIP バージョン 8 は、EIP コンポーネントがネットワークまたは Web サーバー経由でリモート・システム構成ファイルにアクセスできるようにする新規オプションを提供します。

たとえば、構成ファイルをシカゴにあるネットワーク上のサーバーにインストールし、管理データベースをシアトルとサンフランシスコのオフィスにインストールし、管理クライアントをニューヨークにインストールすることができます。すべてのユーザーは、ネットワーク・ドライブを経由してシカゴにある構成ファイルにアクセスします。

「システム構成 (System Configuration)」ウィンドウでの選択により、システム構成ファイルの場所が定義されます。システム構成ファイルは、ディレクトリー CMgmt にあります。CMgmt のファイルには、管理クライアント、コネクタ、および他の EIP コンポーネントで使用される情報が含まれています。たとえば管理クライアントは、管理データベースへの接続に、構成ファイル `cmbds.ini` に保管された情報を必要とします。別の構成ファイル `cmbicmsrvs.ini` には、Content Manager バージョン 8 サーバーのカタログ

作成、接続および検索に必要なデータが含まれます。ウィンドウには、LDAP サーバーに保管されたデータ・ソース・ファイルに対してリモート・コンポーネントをポイントするオプションもあります。

制約事項

- パスを定義する際、構成ファイルをネットワークまたは Web サーバーにインストールする必要はありませんが、ユーザーが EIP を操作できるようにするにはファイルがインストールされている必要があります。ネットワークまたは Web サーバーへの構成ファイルのインストールには、EIP インストール CD-ROM を使用するか、他のサーバーに構成ファイルがインストール済みの場合は、ネットワークまたは Web サーバーに CMgmt ディレクトリーをコピーすることができます。
- リモート EIP コンポーネントがネットワーク・サーバー上の構成ファイルにアクセスしてこれを使用するには、次のプロパティを構成する必要があります。
 - 構成ファイル・ディレクトリーおよびサブディレクトリーの共用を設定します。ネットワーク経由でアクセス可能な構成ファイルは CMgmt にインストールされます (サブディレクトリーは、admin、doc)。
 - 共用構成ファイルをインストールしたサーバーのリモート・ユーザーのユーザー ID およびパスワードを定義します。
 - ユーザー ID およびパスワードには読み取り / 書き込み特権が必要です。読み取り / 書き込みアクセスが必要となるのは、クライアントおよび他のコンポーネントがログ・ファイルなどの共用構成ファイルを更新するためです。
- Web サーバーに構成ファイルをインストールする場合は、共用、およびリモート EIP ユーザーの読み取り / 書き込みパラメーターの構成方法について、Web 管理者にご連絡ください。
- Information Center をインストールする場合は、システム構成ファイルのインストールで「ローカル (Local)」を選択する必要があります。Information Center ファイルは、CMgmt/infoctr にインストールされます。ユーザーは、ネットワークまたは Web サーバーからは Information Center にアクセスできません。
- LDAP サーバーに保管されたデータ・ソース構成情報にリモート・ユーザーをポイントするには、ご使用の LDAP 製品に固有のユーティリティーを使用して、データ・ソース構成ファイルのみをインストールしてください。詳しくは LDAP 管理者にご連絡ください。データ・ソース・ファイルの名前は cmbds.ini です。
- LDAP サーバーに保管されたデータ・ソース・ファイルにリモート・ユーザーをポイントするオプションは、次の場合にのみ選択可能となります。
 - Content Manager バージョン 8 コネクタをインストールする場合で、
 - 統合コネクタを単独でインストールする、および / または
 - 管理データベース、情報マイニング・データベース、または管理クライアントをインストールする場合 (統合コネクタは常にこれらのコンポーネントと一緒にインストールされる)。

このセクションでは、「システム構成 (System Configuration)」ウィンドウのフィールドについて説明します。

ローカル (Local)

「**ローカル (Local)**」をクリックして、構成ファイルをローカル・サーバーにインストールします。構成ファイルは <CMgmt> にインストールされます (「宛先の指定 (Specify Destination)」ウィンドウで定義したパスおよびディレクトリ一名が使用される)。

リモート (Remote)

「**リモート (Remote)**」をクリックして、ネットワーク・サーバーに構成ファイルがインストールされている、またはインストールする予定のパスを入力します。

ヒント: Content Manager バージョン 8 がすでにインストールされている、またはインストールする予定の場合、EIP はネットワーク上で Content Manager 構成ファイルを共用できます。「**リモート (Remote)**」をクリックして、Content Manager 構成ファイルがインストールされている、またはインストールされる予定のパスを入力します。

Web サーバー (Web Server)

構成ファイルがインストールされている、またはインストールされる予定の Web サーバーの URL を入力します。URL を入力する際、構成ファイルを Web サーバーにインストールする必要はありませんが、ユーザーが EIP を操作できるようにするにはファイルがインストールされている必要があります。リモート EIP ユーザーが Web サーバー上の構成ファイルに接続し更新できるようにするための方法については、Web 管理者にご連絡ください。

ヒント: Content Manager バージョン 8 がすでにインストールされている、またはインストールする予定の場合、EIP は Content Manager 構成ファイルを共用できます。Content Manager バージョン 8 構成ファイルがインストールされている、またはインストールされる予定の URL を入力します。

LDAP サーバーに保管されたデータ・ソース構成情報の使用 (Use datasource configuration information stored on an LDAP server)

このボックスをクリックして、LDAP サーバー情報の定義および構成処理を開始し、後で cmbds.ini 構成ファイルをインストールできるようにします。このオプションを選択するために LDAP サーバーをインストールする必要はありません。ただし、LDAP サーバー固有の情報は分かっている必要があります。このボックスをクリックして「**次へ (Next)**」をクリックすると、インストール・プログラムにより「**LDAP サーバーの定義 (Define LDAP Server)**」および「**LDAP サーバーの構成 (Configure LDAP Server)**」ウィンドウが表示されます。これら 2 つのウィンドウで定義した内容は、cmbcmenv.properties ファイルに保管され、後で管理クライアントや他の EIP コンポーネントで使うことができます。**ヒント:** インストール・プログラムが既存の cmbcmenv.properties ファイルを検出した場合、「LDAP サーバーの定義

(Define LDAP Server)」および「LDAP サーバーの構成 (Configure LDAP Server)」ウィンドウのフィールドを変更することはできません。

LDAP サーバーへの構成ファイルのインストールは、EIP をインストール後、LDAP ユーティリティを使用して別のステップで行います。詳しくは LDAP サーバーの資料を参照してください。

「LDAP サーバーの定義 (Define LDAP Server)」および「LDAP サーバーの構成 (Configure LDAP Server)」ウィンドウは、次の場合にのみ表示されます。

- 「システム構成 (System Configuration)」ウィンドウで LDAP サーバーをクリックし、
- Content Manager バージョン 8 コネクターをインストールする場合、
- 統合コネクターを単独でインストールするか、管理データベースまたは情報マイニング・データベースの一部としてインストールする場合

ファイル・コピーの開始 (Start Copying Files)

このウィンドウには、インストールで選択したすべてのコンポーネントが表示されます。「次へ (Next)」をクリックしてインストールを開始するか、「戻る (Back)」をクリックしてコンポーネントの選択を変更します。「次へ (Next)」をクリックすると、EIP にコンポーネントのインストール状況を示す複数のメッセージが表示されます。

製品の登録 (Product Registration)

EIP バージョン 8.2 の登録に必要な情報を入力します。「次へ (Next)」をクリックすると IBM に登録情報を送信します。後から登録情報を送信する場合は、「終了 (Exit)」をクリックします。

インストール完了 (Installation Complete)

「はい、すぐにコンピューターを再起動します (Yes, I want to restart my computer now)」をクリックするか、または「いいえ、後でコンピューターを再起動します (No, I will restart my computer later)」をクリックして「終了 (Finish)」をクリックします。

固有のインストール・ウィンドウ

このセクションでは、管理データベースなど一部のコンポーネントに固有のウィンドウについて説明します。システム設計に応じて、一部のウィンドウが表示される場合と、すべてのウィンドウが表示される場合があります。**ヒント:** ウィンドウは、インストールするコンポーネントによって表示順が異なるため、アルファベット順に説明されています。

LDAP コンポーネントの構成 (Configure components for LDAP)

このウィンドウでは、LDAP サーバーからインポートした情報を使用するようシステム管理データベースおよびクライアントを使用可能にするよう選択できます。「システム管理データベース (System administration database)」をクリックして LDAP 用データベ

ースを使用可能にするか、「システム管理クライアント (System administration client)」をクリックしてクライアントが LDAP サーバーからユーザーをインポートできるようにします。一方または両方のオプションを選択できます。システム計画に LDAP が含まれない場合は、「次へ (Next)」をクリックします。

LDAP サーバーの構成 (Configure LDAP Server)

このウィンドウでは、LDAP サーバーの基本識別名とユーザー認証属性を定義します。このウィンドウの情報は `cmbcmenv.properties` に保管されます。**ヒント:** このウィンドウで要求される情報を定義する前に、いずれの LDAP サーバーもインストール、構成または開始する必要はありません。

基本識別名 (Base distinguished name)

IBM Secureway または Microsoft Active Directory を選択します。基本識別名を入力します。

ホスト名 (Hostname)

LDAP サーバー・ホスト名を入力します。

ポート (Port)

LDAP サーバーのポート番号を入力します。

LDAP 管理者 ID (LDAP administration ID)

LDAP 管理者ユーザー ID を入力します。

パスワード (Password)

LDAP 管理者パスワードを入力します。

Content Manager V8 サーバー接続の構成 (Configure Content Manager V8 Server Connection)

このウィンドウでは、Content Manager バージョン 8 サーバーへの接続に必要な情報を定義します。このウィンドウは、Content Manager バージョン 8 コネクターをインストールする場合にのみ表示されます。管理者が定義を行い Content Manager バージョン 8 サーバーに接続する場合、EIP は、このウィンドウに定義された値を使用してサーバーに接続します。デフォルトで EIP は、このウィンドウの情報を `cmbicmsrvs.ini` および `cmbicmenv.ini` にコピーします。

データベース名 (Database name)

Content Manager バージョン 8 データベース名を入力します。データベースをカタログした場合は、このフィールドに別名を入力します。

スキーマ名 (Schema name)

データベースのインストール時に Content Manager バージョン 8 データベースに割り当てられたスキーマ名を入力します。

認証タイプ (Authentication type)

サーバーのデフォルト設定のままにすると、Content Manager バージョン 8 データベースのユーザー ID およびパスワードが Content Manager バージョン 8 サーバーに送られ検証されます。

「クライアント (Client)」をクリックすると、DB2 による検証は行われず、システム・ログインで入力したユーザー ID により Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバーに接続します。

制約事項: クライアント・ワークステーションにログインするには、DB2 接続特権を持つユーザー ID を入力する必要があります。

データベース接続 ID (Database connection ID)

Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバー・データベースのインストール時にデータベース接続 ID として定義されたものと同じユーザー ID とパスワードを入力する必要があります。

サインオン使用可能 (Enable sign-on)

EIP システムの計画で必要な場合、サインオンを使用可能にするには「True」をクリックします。

統合サーバー接続の構成 (Configure Federated Server Connection)

このウィンドウでは、管理クライアントから管理データベースへの接続に必要な情報を定義します。このウィンドウは、コネクターを選択した場合、または管理クライアントをインストールする場合にのみ表示されます。EIP は、このウィンドウの情報を構成ファイル cmbds.ini および cmbfedenv.ini にコピーします。

データベース名 (Database name)

管理データベース名を入力します。

スキーマ名 (Schema name)

管理データベースのインストール時に管理データベースに割り当てられたスキーマ名を入力します。

認証タイプ (Authentication type)

サーバーのデフォルト設定のままにすると、管理データベースのユーザー ID およびパスワードが管理データベースに送られ検証されます。

「クライアント (Client)」をクリックすると、データベースによる検証は行われず、システム・ログインで入力したユーザー ID により管理データベースに接続します。

制約事項: クライアント・ワークステーションにログインするには、DB2 接続特権を持つユーザー ID を入力する必要があります。

データベース接続 ID (Database connection ID)

管理データベースのインストール時に定義されたユーザー ID およびパスワードを入力します。ユーザー ID およびパスワードは、サーバー上でローカルに定義されたものである必要があります。

単一サインオン使用可能 (Single sign-on enabled)

EIP システムの計画で必要な場合、サインオンを使用可能にするためにクリックします。

リモート EIP データベースのカatalog (Catalog remote EIP database)

管理クライアントがリモート・データベースに接続できるようにするリモート・サーバーの指定を定義する場合にクリックします。リモート・データベースは、カatalogしてからでないと、接続できません。リモート EIP データベース・カatalog・オプションは、管理クライアントをインストールし、ローカル管理データベースがインストールされていない場合にのみ選択できます。

リモート・データベースのカatalog (Catalog remote database)

このウィンドウのフィールドの入力方法については、151 ページの『リモート管理データベースへの管理クライアントの接続』を参照してください。

LDAP サーバーの定義 (Define LDAP Server)

このウィンドウ上で、LDAP サーバー・タイプ、ホスト名、ポートおよび認証方式を定義します。EIP は、このウィンドウで入力した情報を `cmbenv.properties` に保管します。

ヒント: このウィンドウで要求される情報を定義する前に、いずれの LDAP サーバーもインストール、構成または開始する必要はありません。

LDAP サーバー・タイプ (LDAP server type)

IBM Secureway または Microsoft Active Directory を選択します。

ホスト名 (Hostname)

LDAP サーバー・ホスト名を入力します。

ポート (Port)

LDAP サーバーのポート番号を入力します。

LDAP 管理者 ID (LDAP administration ID)

LDAP 管理者ユーザー ID を入力します。

パスワード (Password)

LDAP 管理者パスワードを入力します。

Content Manager V7 コネクター C-API の宛先パス (Destination Path for Content Manager V7 Connector C-APIs)

このウィンドウでは、Content Manager バージョン 7 コネクターで必要とされる API のインストール・ロケーションを指定します。デフォルトのパスおよびファイル名を変更するには、「**ブラウズ (Browse)**」をクリックします。

要件: Content Manager コネクター C-API は、管理クライアントをインストールしたサーバーと同じサーバーにインストールする必要があります。

既存のデータベース (Existing Database)

このウィンドウは、EIP データベースの名前を再利用した場合、または Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバーの名前を入力した場合にのみ表示されます。

既存のデータベースを置き換えますか? (Replace the existing database?)

このオプションをクリックすると、既存のデータベースが除去され、EIP データベースが作成されます。

ヒント: 既存のデータベースを置き換える場合、確認のためのプロンプトが二度表示されます。

管理データベースの識別 (Identify Administration Database)

インストール・プログラムは、このウィンドウの入力情報を使用して DB2 に接続し、サーバー上のデータベースをリストして、「データベース名 (Database name)」フィールドで定義した名前とサーバー上の既存のデータベースを比較します。

ヒント: Content Manager バージョン 8 データベースを共用する場合で、Content Manager バージョン 8 データベース名を確認する、または新規 EIP データベースをインストールする際にデータベース名が重複するのを避けるには、DB2 コマンド行プロセッサを使用して、サーバー上のデータベースをリストします。「スタート」→「プログラム」→「IBM DB2 コマンド行プロセッサ (IBM DB2 Command Line Processor)」とクリックして、db2 プロンプトで LIST DATABASE DIRECTORY と入力します。

プログラムは、同じ名前のデータベースを検出すると、データベースを上書きするオプションを示します。Content Manager バージョン 8 データベースに EIP テーブルを追加する場合は、データベースを上書きしないでください。同じ名前の既存のデータベースが検出されなければ、データベースの作成が指示されます。以下のガイドラインに従い、管理データベースの識別情報を定義してください。

データベース名 (Database name)

管理データベース名を入力します。**ヒント:** 問題の発生を避けるため、クライアントからホスト・データベースにリモート接続する予定の場合は、データベース名に特殊文字 @、#、および \$ を使用しないでください。また、これらの文字は、すべてのキーボードに共通ではないので、他国でデータベースを使用する予定の場合は、使用しないでください。特に指定がない場合は、すべての名前には次の文字を使用することができます。

- A ～ Z。ほとんどの名前では、A ～ Z は小文字から大文字に変換されます。
- 0 ～ 9
- @、#、\$、および _ (下線)

特に指定がない場合は、すべての名前は次のいずれかの文字で始まる必要があります。

- A ～ Z
- @、#、および \$

- 管理データベースまたは情報マイニング・データベースをインストールする場合は、デフォルトのデータベース名を使用するか、新しい名前を入力します。
- Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバー・データベースを共用する場合は、ライブラリー・サーバーのインストール時に定義された Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバー・データベース名を入力します。

スキーマ名 (Schema name)

- 管理データベースまたは情報マイニング・データベースをインストールする場合、デフォルト名 (データベース管理者 ID のデフォルト・ユーザー ID と同じ) を使用するか、デフォルトのスキーマ名を変更することができます。「スキーマ名 (Schema name)」フィールドに新しいデータベース名を入力してください。スキーマ名は最大 8 文字であり、数値を使用することができ、大文字で表示されます。
- Content Manager バージョン 8 データベースを共用する場合は、ライブラリー・サーバーのインストール時に定義された Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバー・データベース・スキーマ名を入力します。

スキーマは名前付きオブジェクトの集合です。また、スキーマは、データベース内のオブジェクトの論理種別を提供します。スキーマには、別名、テーブル、ビュー、索引、トリガー、特殊タイプ、関数、およびパッケージなどのオブジェクトを含めることができます。スキーマは、オブジェクトの作成時に暗黙に作成できます。スキーマは、データベース内でオブジェクトとして存在します。スキーマ名が指定されない場合は、オブジェクトの作成者の許可名の最初の 8 文字がデフォルトとして使用されます。

データベース管理者 ID (Database administration ID)

このフィールドに定義した ID とパスワードは、データベースの作成用にのみ使用されます。これは、ローカルに定義され、DB2 管理者特権を持っている必要があります。

制約事項: 管理データベースを作成する前に、DB2 管理者特権を持つユーザー ID でサーバーにログインする必要があります。

データベース接続 ID (Database connection ID)

このフィールドに定義したユーザー ID とパスワードにより、ユーザーは管理データベースにアクセスできます。ユーザー ID はローカルに定義されている必要があります。

イメージ検索サーバー / クライアントの構成 (Image Search Server/Client Configuration)

このウィンドウで、イメージ検索サーバー名、ホスト名、ポート番号およびライブラリー・サーバー名を定義します。EIP はこの情報を使用してイメージ検索サーバーを見つけて接続します。

サーバー名 (Server name)

サーバーのインストール時に定義されたイメージ検索サーバーの名前を入力します。

ホスト名 (Host Name)

イメージ検索サーバーのホスト名を入力します。完全修飾ホスト名を入力する必要があるかどうかは、管理者にご連絡ください。

ポート番号 (Port Number)

サーバーのインストール時に定義されたポート番号を入力します。

ライブラリー・サーバー名 (Library Server Name)

イメージ検索に関連した Content Manager バージョン 7 ライブラリー・サーバー・データベースの名前を入力します。

OnDemand インストール (Install OnDemand?)

OnDemand クライアントのインストール確認を要求するプロンプトが出たら、「はい (Yes)」または「いいえ (No)」をクリックします。

ネットワーク・テーブルの生成 (Network Table Generation) (Content Manager バージョン 7 コネクター用)

このウィンドウでは、Content Manager バージョン 7 ネットワーク・テーブルの情報を指定する 3 つのオプションのいずれかを選択します。EIP 管理者が Content Manager バージョン 7 サーバーを定義すると、EIP はネットワーク・テーブルの情報を使用して Content Manager バージョン 7 サーバーに接続します。

ヒント: Content Manager バージョン 7 コネクターのネットワーク・テーブル

(x:¥<FRNROOT>.FRNOLINT.TBL) および CM for AS/400 コネクターのネットワーク・テーブル (x:¥<CMBROOT>.FRNOLINT.TBL) は、同じ名前の別ファイルです。

新規ネットワーク・テーブルの生成 (Generate a new network table)

このオプションを選択して「次へ (Next)」をクリックすると、Frnolint.tbl の生成に必要なデータ入力ウィンドウが表示されます。新しいネットワーク・テーブルは x:¥<FRNROOT>¥Frnolint.tbl に保管されます (x:¥<FRNROOT> は、「Content Manager V7 コネクター C-API の宛先パス (Destination Path for Content Manager V7 connector C-APIs)」ウィンドウで定義したパス)。

既存のネットワーク・テーブルをコピー (Copy an existing network table)

このオプションをクリックすると、EIP インストール・プログラムは以下を想定します。

- Frnolint.tbl が、「Content Manager V7 コネクター C-API の宛先パス (Destination Path for Content Manager V7 connector C-APIs)」ウィンドウで指定したパスに既に存在する。
- Frnolint.tbl を再生成せずに既存のものを使用する。

ネットワーク・テーブルを後で生成する (Generate a network table later)

このオプションをクリックすると、EIP のインストール後に Content Manager バージョン 7 ネットワーク・テーブルを生成するものと想定されます。後からネットワーク・テーブルを生成するには、frnnlinc.exe を使用します。これは、「Content Manager V7 コネクター C-API の宛先パス (Destination Path for Content Manager V7 Connector C-APIs)」ウィンドウで指定したパスにインストールされています。新しいネットワーク・テーブルは x:\¥<FRNR00T>¥Frnnlinc.tbl に保管されます。

frnnlinc.exe を使用するには、次のようにします。

1. frnnlinc.exe をダブルクリックします。
2. 1 - Add Server Entry と入力します。
3. プロンプトに従ってサーバー・ロケーション、サーバー・タイプ、オペレーティング・システム情報などを定義します。

ヒント: frnnlinc.exe を使用して Content Manager バージョン 7 サーバーの情報を削除および更新することもできます。

ネットワーク・テーブルの生成 (Network Table Generation) (Content Manager バージョン 7 コネクター用)

このウィンドウでは、接続先の Content Manager バージョン 7 ライブラリー・サーバーに関連したステム・タイプ、ライブラリー・サーバー名、ポート番号、ホスト名、および TP 名を定義します。

タイプ (Type)

NT、OS/2、AIX または MVS をクリックします。

サーバー名 (Server name)

Content Manager バージョン 7 ライブラリー・サーバーの名前を入力します。

ポート番号 (Port Number)

Content Manager バージョン 7 ライブラリー・サーバーのインストール時に定義されたポート番号を入力します。

ホスト名 (Host name)

Content Manager バージョン 7 ライブラリー・サーバーがインストールされているサーバーのホスト名を入力します。

システム管理データベース・オプションの選択 (Select Administration Database Options)

このウィンドウは、既存の管理データベースの名前を再利用せずに EIP 管理データベースをインストールする場合で、Content Manager バージョン 8 データベースに EIP テーブルを追加しない場合にのみ表示されます。

データベース・ロケーション (Database location)

「データベース・ロケーション (Database location)」フィールドに、データベースをインストールするドライブのドライブ文字を指定します。

制約事項: 管理データベースは、リモート・ネットワーク・ドライブにはインストールできません。

ユニコードの使用可能化 (Enable Unicode)

情報マイニングまたは管理データベースをインストールし、これに情報マイニング・テーブルを追加する場合は、「ユニコードの使用可能化 (Enable Unicode)」をクリックします。

LDAP サーバーからのユーザー認証の使用可能化 (Enable User Authentication from an LDAP server)

このボックスをクリックすると、LDAP サーバーからのユーザー認証を可能にします。

VisualInfo for AS/400 のバージョンの選択 (Select Version of VisualInfo for AS/400)

このウィンドウでは、接続先の VisualInfo for AS/400 サーバーのバージョンを指定します。バージョン 4.3 またはバージョン 5.1 をクリックします。

テキスト検索サーバー / クライアントの構成 (Text Search Server/Client Configuration)

このウィンドウでは、テキスト検索サーバー名、サーバー・ホスト名、サーバー・ポート番号を定義します。EIP 管理者がテキスト検索サーバーを定義すると、EIP はこの情報を使用してサーバーに接続します。

ユーザー ID (User ID)

テキスト検索ユーザー ID を入力します。

サーバー名 (Server name)

テキスト検索サーバーの名前を入力します。

サーバー・ホスト名 (Server host name)

テキスト検索サーバーの完全修飾ホスト名を入力します。

サーバー・ポート番号 (Server port number)

テキスト検索サーバーのインストール時に割り当てられたポート番号を入力します。

グローバル設定 (Global setting)

「はい (yes)」または「いいえ (No)」をクリックします。

VisualInfo for AS/400 ネットワーク・テーブルの生成 (VisualInfo for AS/400 Network Table Generation)

このウィンドウでは、AS/400 サーバー名、ホスト名、およびポート番号を定義します。定義した情報は `x:¥<CMBROOT>¥frnolint.tbl` にコピーされます (`x:¥<CMBROOT>` は「宛

先の指定 (Specify Destination)」ウィンドウで定義したパス)。 **制約事項:** AS/400 ネットワーク・テーブルは、管理クライアントをインストールしたドライブと同じドライブにインストールする必要があります。EIP 管理者が AS/400 サーバーを定義すると、EIP は fronlint.tbl の情報を使用して AS/400 サーバーに接続します。

サーバー

接続先のデータベース名を入力します。たとえば、FRNLS400 などです。

ホスト名 (Hostname)

VI/400 サーバーのホスト名または TCP/IP アドレスを入力します。

ヒント: 完全修飾ホスト名を入力する必要があるかどうかは、VI/400 管理者にご連絡ください。

ポート (Port)

サーバーのインストールに使用されたポート番号を入力します。

OnDemand のアップグレード (Upgrade OnDemand?)

インストール・プログラムがサーバーで OnDemand クライアントを検出すると、OnDemand クライアント・バージョン 7.1.0.2 にアップグレードするかどうかを決めるようプロンプトが出されます。「はい (Yes)」または「いいえ (No)」をクリックします。

EIP コンポーネントを Windows にインストールした後に

151 ページの『Windows でのコンポーネントの構成』を参照して EIP コンポーネントを構成してください。

第 7 章 Windows での Enterprise Information Portal の正常なインストールの検証

このセクションに記載されている情報を使用して、Windows システム上に Enterprise Information Portal が正常にインストールされているか検証します。以下の手順が記載されています。

- 『システム管理データベースおよびシステム管理クライアント通信の検証』
- 78 ページの『Enterprise Information Portal システム管理データベースの検証』
- 79 ページの『低レベル接続テストの実行による接続の検証』
- 80 ページの『Enterprise Information Portal First Steps の実行によるインストールの検証』

システム管理データベースおよびシステム管理クライアント通信の検証

管理クライアントとデータベースが同一のサーバーにインストールされている場合は、このセクションに記載のステップに従います。管理クライアントとデータベースが異なる Windows サーバーにインストールされている場合、またはデータベースが AIX または Solaris にインストールされている場合は、151 ページの『リモート管理データベースへの管理クライアントの接続』を参照してください。

以下の 2 とおりの方法のどちらかで、Windows システム上で Enterprise Information Portal Administration Client を開始します。

「スタート」->「プログラム」->「Enterprise Information Portal V8.2」->「管理 (Administration)」

または

「スタート」->「プログラム」->「IBM Content Manager for Multiplatforms V8.2」->「システム管理 (System Administration)」

System Administration Client ログオン・パネルが表示されるはずです。Enterprise Information Portal と正しいデータベースがドロップダウン・リストから選択されていることを確認します。

icmadmin と password を使ってログインします。

ログオンが正しく実行されると、Enterprise Information Portal システム管理データベースとシステム管理クライアントとの間の通信が機能します。また、Enterprise Information Portal データベースが正常に作成されている (該当する場合) という点でもあります。

Enterprise Information Portal データベースを Content Manager ライブラリー・サーバーと共用する場合、正常にログオンできるということは、共用データベースが正しく構成されていることも意味します。

管理クライアントにログインすると、ウィンドウの左上部分にあるドロップダウンを使用して、Content Manager および Enterprise Information Portal のインターフェースを切り替えることができます。

Content Manager インターフェースが表示されているか調べて、システム管理クライアントへの Content Manager の接続がまだそのままの状態であるか確認してください。

Enterprise Information Portal システム管理データベースの検証

次のようにして、システム管理データベースが正しくインストールされているか検証します。

1. DB2 コマンド・ウィンドウを開きます（「スタート」->「プログラム」->「DB2」->「コマンド・ウィンドウ」）
2. 次のように入力してデータベース接続を検査します。

```
db2 connect to <icmnlbdb> user <icmadmin> using <password>
```

以下のような出力が表示されるはずです。

Database Connection Information

```
Database server      = DB2/NT 7.2.0
SQL authorization ID = ICMADMIN
Local database alias = ICMNLSDB
```

3. 次のように入力してデータベース・テーブルを検査します。

```
db2 list tables
```

いくつかのテーブル（約 100 個）が表示されるはずです。「FA」で始まる名前を持つテーブルもあれば（29 個）、「ICM」で始まる名前を持つものもあります（109 個）。

Content Manager First Steps で追加された、「XYZ」で始まるテーブルも表示されるはずです（6 個）。

Enterprise Information Portal のインストール時に既存のデータベースを使用するよう選択していなければ、%CMBROOT%\logs\icmcrldb.log を調べ、エラー・メッセージを見つけるための用語 SQLSTATE= を検索することもできます。いくつかの SQLSTATE メッセージは正常であり、前後のテキストを読んで、問題があった可能性があるか判断する必要があります。たとえば、CONNECT RESET コマンドの後、ログ内には SQLSTATE=08003 メッセージがあるものと予想できます。

低レベル接続テストの実行による接続の検証

接続を検証するには、次のようにして Enterprise Information Portal 開発ウィンドウを開きます。

「スタート」->「プログラム」->「**Enterprise Information Portal for Multiplatforms V8.2**」

または

DOS コマンド・ウィンドウを開き、cmbenv81.bat を実行します。

— 1. 次のようにして統合コネクタをテストします。

```
cd %CMBROOT%\samples\java\fed
javac TConnectFed.java
java TConnectFed <icmnsdb> <icmadmin> <password>
```

予想される出力:

```
java TConnectFed icmnsdb icmadmin password

*** connecting to datastore : icmnsdb
*** datastore connected ***
user icmadmin dsName icmnsdb
datastore disconnected
```

— 2. 次のようにして **Content Manager v8** コネクタをテストします。

```
cd %CMBROOT%\samples\java\icm
javac SConnectDisconnectICM.java
java SConnectDisconnectICM <icmnsdb> <icmadmin> <password>
```

予想される出力:

```
java SConnectDisconnectICM icmnsdb icmadmin password
=====
IBM Enterprise Information Portal v8
Sample Program: SConnectDisconnectICM
-----
Database: icmnsdb
UserName: icmadmin
=====
Connecting to datastore (Database 'icmnsdb', UserName
'icmadmin')...
Connected to datastore (Database 'icmnsdb', UserName
'icmadmin').
Disconnecting from datastore & destroying reference...
Disconnected from datastore & destroying reference.
=====
Sample program completed.
=====
```

Enterprise Information Portal First Steps の実行によるインストールの検証

Enterprise Information Portal First Steps より、サンプル・データを Enterprise Information Portal にロードできます。Enterprise Information Portal のすべてのコンポーネントが 1 つのシステム上にあるか、それとも複数のシステムにインストールするかにより、実行する First Steps の手順が異なります。

Enterprise Information Portal のすべてのコンポーネントが 1 つのシステム上にある場合、『Enterprise Information Portal コンポーネントが単一マシン上にインストールされている場合の First Steps の実行』のセクションに記載されている開始ステップ・プロセスから始めます。

Enterprise Information Portal システム管理データベース をシステム管理クライアントとは別のマシンにインストールした場合は、81 ページの『Enterprise Information Portal コンポーネントが複数のマシン上にインストールされている場合の First Steps の実行』のセクションに記載されている First Steps の手順を実行します。

Enterprise Information Portal コンポーネントが単一マシン上にインストールされている場合の First Steps の実行

単一の Windows オペレーティング・システム・マシン上にすべての Enterprise Information Portal コンポーネントをインストールした場合は、ここに記載されている開始ステップから始めてください。

1. 「スタート」->「プログラム」->「Enterprise Information Portal V8.2」->「EIP 開始ステップ (EIP First Steps)」をクリックします。
2. 「サンプル・データのロード (Load Sample Data)」をクリックします。入力パネルが表示されます。以下に、インストール時にデフォルト値を選択した場合に入力する値を示します。

Database schema:	ICMADMIN
User Id:	icmadmin
Password:	password

数分待つと、サンプル・データベース (EIPSAMPL、XYZSAMPL、IBMPRESS) とデータがロードされます。ウィンドウがポップアップし、進行メッセージが表示されます。サンプル・データベースが正常に作成されたことを示すメッセージが表示されたら、「OK」をクリックします。

3. 「サンプル・データでの作業 (Work with Sample Data)」をクリックします。これにより、System Administration Client が開始されます。
4. 続いて、84 ページの『First Steps の検証』に進みます。

Enterprise Information Portal コンポーネントが複数のマシン上にインストールされている場合の First Steps の実行

Enterprise Information Portal コンポーネントが複数のマシン上にインストールされている場合は、コンポーネントが異なるオペレーティング・システムで実行されている場合でも、ここに記載されている開始ステップを始めます。

- 1. システム管理クライアントがリモート・システム管理データベースに接続するよう構成されていることを確認します。
- 2. icmadmin という DB2 管理ユーザー ID と password というパスワードを使用して、リモート・データベース・マシン上に 3 つのサンプル・データベースを手動で作成します。次のようにして、目的のデータベースを作成します。
 - a.

コマンド:

EIP データベース・インストール・スクリプト:

「スタート」->「プログラム」->「Enterprise Information Portal V8.2」->「データベース・インストール (Database Install)」

または

c:\%cmbroot%\config%\dbutil %eipcreate%sdb.bat

データベース名 (Database name):

EIPSAMPL

既存のデータベースの置き換え (Replace existing database):

はい (Yes)

データベース接続 ID (Database connection ID):

ICMCONCT

LS データベース管理 ID (LS database administrator ID):

ICMADMIN

スキーマ名 (Schema name):

ICMADMIN

データベース・ドライブ (Database drive):

DB2 デフォルト

ライブラリー・サーバーがインストールされたパス (Path into which the library server was installed):

C:\Program Files\IBM\CM81

Unicode サポートの使用可能 (Enable Unicode support):

はい (Yes)

テキスト検索サポートの使用可能 (Enable text search support):

はい (Yes)

時間単位のトークン継続時間 (Token duration time in hours):

48

ホスト名 (Host name):

指定なし (データベースがリモートの場合に指定)

ポート番号 (Port number):

指定なし (データベースがリモートの場合に指定)

ノード番号 (Node number):

指定なし (データベースがリモートの場合に指定)

SSO サポートの使用可能 (Enable SSO support):

いいえ (No)

サーバー認証 (Server authentication):

はい (Yes)

__ b.

コマンド:

DB2 作成データベース・スクリプト:

```
DB2 CREATE DATABASE IBMPRESS  
USING CODESET UTF-8 TERRITORY US COLLATE  
USING SYSTEM
```

Database name: IBMPRESS

__ c.

コマンド:

DB2 作成データベース・スクリプト:

```
DB2 CREATE DATABASE XYZSAMPL USING  
CODESET UTF-8 TERRITORY US COLLATE USING  
SYSTEM
```

Database name: XYZSAMPL

__ 3. ローカル・クライアント上でリモート・データベースをカタログします。

__ a. DB2 Client Configuration Assistant を実行します

db2cca

または

「スタート」->「プログラム」->「IBM DB2」->「クライアント構成アシスタント (Client Configuration Assistant)」

__ b. 「クライアント構成 (Client Configuration)」ウィンドウで、「追加 (Add)」をクリックします。

__ c. 「データベースの追加 (Add Database)」ウィザード・ウィンドウで、「ソース (Source)」タブをクリックし、「ネットワークの検索 (Search network)」を選択して、「次へ (Next)」をクリックします。

- d. 「データベースの追加 (Add Database)」ウィザード・ウィンドウで、「データベース名 (Database name)」タブをクリックし、次に「システムの追加 (Add System)」をクリックします。
- e. 「システムの追加 (Add System)」ウィンドウで、「プロトコル (Protocol)」を選択し、ホスト名を入力します。
- f. 「データベースの追加 (Add Database)」ウィザード・ウィンドウで、「データベース名 (Database name)」タブをクリックし、「カタログするリモート・システムからのデータベース (database from remote system to catalog)」を選択し、「次へ (Next)」をクリックします。
- g. 「データベースの追加 (Add Database)」ウィザード・ウィンドウで、「別名 (Alias)」タブをクリックし、必要ならデータベースの別名を変更してから、「次へ (Next)」をクリックします。
- h. 「データベースの追加 (Add Database)」ウィザード・ウィンドウで、「ODBC」タブをクリックし、「ODBC のためのデータベースの登録 (register database for ODBC)」と「システム・データ・ソースとして (As a system data source)」を選択して、「終了 (Finish)」をクリックします。
- i. 「確認 (Confirmation) -<データベース名 (Database name)>」パネルで、「接続のテスト (Test connection)」をクリックします。
- j. 「DB2 データベースへの接続 (Connect to DB2 Database)」ウィンドウで、データベースに接続するのに使用されたユーザー ID とパスワードを入力して、「OK」をクリックします。
- k. リモート・データベースごとに、ステップ 3a ~ 3j を繰り返します。
- 4. EIP システム管理クライアントと使用できるように EIPSAMPL リモート・データベースを構成します。
 - a. 「スタート」->「プログラム」->「Enterprise Information Portal V8.2」->「サーバー構成ユーティリティ (Server Configuration Utility)」をクリックします。
 - b. 以下の情報を入力します。
 - サーバー・タイプ (Server type):
Enterprise Information Portal
 - サーバー名 (Server name):
EIPSAMPL
 - スキーマ名 (Schema name):
ICMADMIN
 - ホスト名 (Host name):
<ホスト名>

オペレーティング・システム (Operating system):

<オペレーティング・システム>

ポート番号 (Port number):

50000 (デフォルトの DB2 ポート番号)

セキュリティー・オプション (Security options):

サーバー認証 (デフォルト)

ユーザー ID (User ID):

icmadmin

パスワード (Password):

<パスワード>

- __ 5. 「サンプル・データのロード (Load Sample Data)」をクリックします。以下に、インストール時にデフォルト値を選択した場合に入力する値を示します。

Database name:	EIPSAMPL
Database schema:	ICMADMIN
User Id:	icmadmin
Password:	password

数分待つと、サンプル・データベース (EIPSAMPL、XYZSAMPL、IBMPRESS) とサンプル・データがロードされます。ウィンドウがポップアップし、進行メッセージが表示されます。サンプル・データベースが正常に作成され、ロードされたことを示すメッセージが表示されたら、「OK」をクリックします。

- __ 6. 「サンプル・データでの作業 (Work with Sample Data)」をクリックします。システム管理クライアントが開始されます。
- __ 7. 続いて『First Steps の検証』に進みます。

First Steps の検証

- __ 1. System Administration Client にログインします。「Enterprise Information Portal と EIPSAMPL (Enterprise Information Portal and EIPSAMPL)」を選択します。icmadmin と password を入力します。
- __ 2. First Steps が EIP サンプル・データベース (EIPSAMPL) に接続し、サンプルが正常にロードされるはずです。
- __ 3. データがロードされていることを検証します
- 定義済みサーバー (たとえば、EIPSAMPL、IBMPRESS、XYZSAMPL)
- 検索テンプレート (たとえば、SearchLongBySource、SearchXYZClaimForms)
- 統合エンティティー (たとえば、fed_xyz_claimforms、fed_long_article)

第 8 章 AIX の場合の前提条件プログラムのインストールおよびアップデート

このセクションには、次の 2 つの項があります。

1. 『AIX でのソフトウェア前提条件の検証』。システム上にすでにインストール済みの前提条件のレベルの検査方法を説明します。
2. 『前提条件プログラムのインストールまたは更新』。独自に予定された構成に必要な前提条件プログラムのインストールおよび構成方法を詳しく説明します。このセクションで扱われる前提条件プログラムは、次のものです。
 - 『AIX オペレーティング・システム』
 - 86 ページの『IBM VisualAge C++ Professional Batch Compiler』
 - 88 ページの『IBM DB2 Universal Database』
 - 93 ページの『IBM DB2 Net Search Extender (NSE) および Text Information Extender (TIE)』
 - 93 ページの『IBM WebSphere Application Server (WAS)』

AIX でのソフトウェア前提条件の検証

前提条件プログラムのインストールまたは更新

このセクションでは、Content Manager の各前提条件プログラムのインストールを案内します。

前提条件をインストールする際の経験法則は、基本コンポーネントのインストール後に必ずフィックスパックを適用することです。たとえば、DB2 インストールで DB2 UDB Application Development Client が見つからない場合、最初にこのコンポーネントをインストールしてから、フィックスパック・コードをインストールしてください。そうでない場合は、新しい DB2 コンポーネントを追加後にフィックスパック・コードを再度インストールする必要があります。

AIX オペレーティング・システム

Content Manager パージョン 8 リリース 2 には、以下の AIX オペレーティング・システムの 1 つが必要です。

- AIX 4.3.3 (保守レベル 9 以上付き)
- AIX 5.1 (保守レベル 1 以上付き)

ご使用のシステムはすでに AIX 4.3.3 または AIX 5.1 であるはずですが。

- AIX 4.3.3 用の保守レベル 9 をダウンロードするには、以下の Web サイトにアクセスします。

<http://techsupport.services.ibm.com/server/mlfixes/43>

- AIX 5.1 用の保守レベル 1 をダウンロードするには、以下の Web サイトにアクセスします。

<http://techsupport.services.ibm.com/server/aix.fdc51? toggle=DNLDML>

AIXダウンロード・サイトで提供されているダウンロードおよびインストールの手順に従います。更新をダウンロード後に、システムをリブートします。

システムが正しいレベルになっていることを検証するには、次のようにして `oslevel` コマンドを再実行します。

```
oslevel -r
```

以下のように表示されるはずです。

```
4330-09
```

IBM VisualAge C++ Professional Batch Compiler

Content Manager、バージョン 8 リリース 2 ライブラリー・サーバーを実行するには、IBM VisualAge C++ Professional Batch Compiler、バージョン 5.0.2.0 以上が必要です。

IBM Visual Age C++ Compiler プログラムの入手先

IBM Visual Age C++ Compiler プログラムを入手する方法は、次の 2 とおりが考えられます。

- IBM 営業担当員を通じて入手できます。
- プログラムのお試し版をダウンロードできます。

以下のサイトで VisualAge C++ Compiler の **60 日間お試し & 購入版**をダウンロードできます。

<http://www.ibm.com/software/ad/vacpp/>

1. 「VisualAge C++ Professional for AIX5.0、60 日間お試し版 (VisualAge C++ Professional for AIX5.0, try it for 60 days!)」を選択します。
2. 登録情報を記入します。

修正のダウンロード:

- レベル 5.0.2.0 を入手するか、または
- AIX バージョン 5.1 に必要な PTFs **IY18426** および **IY23677** については、同じ vacpp Web サイト (以下に繰り返します) にアクセスし、

<http://www.ibm.com/software/ad/vacpp/>

以下のステップを実行します。

- __ 1. 左のパネルで「**ダウンロード (Downloads)**」を選択します。
- __ 2. 次のものを選択して、検索を制限します。
 - platform/operating system: **AIX**
 - version: **5.0**
- __ 3. 「検索エンティティ (Search entry)」フィールドに、5.0.2.0 か、または必要な修正のダウンロード・パッケージを識別する PTF 名を入力します。

IBM Visual Age C++ Compiler のインストールまたは更新方法

IBM Visual Age C++ をインストールするには、プログラム・コードに付属のインストール手順に従います。

システム管理 (System Management) ユーティリティを使用して、IBM VisualAge C++ ソフトウェアをインストールします。たとえば、**smitty** を使用できます。

- 「ソフトウェアのインストールおよび保守 (**Software Installation and Maintenance**)」を選択します。
- 「ソフトウェアのインストールおよび更新 (**Install and Update Software**)」を選択します。
- 「入手可能な最新のソフトウェアのインストールおよび更新 (**Install and Update from LATEST Available Software**)」を選択します。
- 「インストール (Install)」ウィンドウで、「*** INPUT device/directory for software**」の横に、IBM Visual Age C++ コードが入っているディレクトリーを入力します。
- 「インストール (Install)」画面のすべてのオプションを検査し、すべての値が正しいことを確認します。
- **Enter** を押すと、確認ダイアログが現れて、インストールの確認を求めます。

IBM Visual Age C++ のインストールの検証方法

IBM Visual Age C++ のインストールを検証するには、次のように `lslpp` コマンドを再実行します。

```
lslpp -l vacpp.cmp*
```

以下のように表示されるはずです。

vacpp.cmp.C	5.0.2.0	COMMITTED	VisualAge C++ C Compiler
vacpp.cmp.aix43.lib	5.0.2.0	COMMITTED	VisualAge C++ Libraries
			for AIX 4.3
vacpp.cmp.batch	5.0.2.0	COMMITTED	VisualAge C++ Batch Compiler
vacpp.cmp.core	5.0.2.0	COMMITTED	VisualAge C++ Compiler
vacpp.cmp.extension	5.0.2.0	COMMITTED	VisualAge C++ Extension Interface
vacpp.cmp.include	5.0.2.0	COMMITTED	VisualAge C++ Compiler
			Include Files
vacpp.cmp.incremental	5.0.2.0	COMMITTED	VisualAge C++ Incremental
			Compiler
vacpp.cmp.lib	5.0.2.0	COMMITTED	VisualAge C++ Libraries

vacpp.cmp.rte	5.0.2.0	COMMITTED	VisualAge C++ Compiler
			Application Runtime
vacpp.cmp.tools	5.0.2.0	COMMITTED	VisualAge C++ Tools

IBM DB2 Universal Database

サーバー・データベースに DB2 を使用する場合、Content Manager バージョン 8 リリース 2 サーバーに IBM DB2 Universal Database Enterprise Edition バージョン 7.2 または Enterprise Extended Edition バージョン 7.2.1 以上が必要です。IBM DB2 Universal Database Enterprise Server Edition バージョン 8.1 (フィックスバック1 コード・レベルのもの) は Content Manager パッケージに付属しています。

IBM DB2 Universal Database のインストールを始める前に

IBM DB2 Universal Database のインストールを始める前に、次のステップを実行します。

1. インストールに必要なメモリーおよびディスク・スペースがあることを確認します。要件については、下記にある DB2 オンライン・サポート Web サイトで DB2 製品資料を参照してください。

www.ibm.com/cgi-bin/db2www/data/db2/udb/win02unix/support/v8pubs.d2w/en_main

2. 前のバージョンの DB2 がすでにマシン上にインストールされていないか確認します。前のバージョンの DB2 がインストールされている場合、インストールされているバージョンによって、サーバーとインスタンスをマイグレーションする必要があります。この場合、以下の手順は行いません。その代わりに、下記にある DB2 オンライン・サポート Web サイトで DB2 製品資料を参照してください。

www.ibm.com/cgi-bin/db2www/data/db2/udb/win02unix/support/v8pubs.d2w/en_main

3. ご使用の DB2 データベース・サーバーは、WebSphere Application Server と同じマシン上に常駐します。この構成と、これらの説明書に記載されたデフォルト設定の使用は、開発環境および小さな実稼働環境にのみ適しています。DB2 Server をリモート・マシン上に構成する方が望ましい、大きな環境では、WebSphere Application Server をインストールしたマシンと同じマシン上に DB2 クライアントをインストールして構成し、リモート・データベース接続を検証する必要があります。この構成のインプリメントについて詳しくは、下記のところにある IBM レッドブックの Web サイトで、IBM Redbook, *WebSphere V3.5* ハンドブック を参照してください。

www.redbooks.ibm.com/redbooks/SG246161.html

重要: WebSphere Application Server をインストールする前に DB2 をインストールしてください。

- 4. パッケージの DB2 CD には、圧縮イメージが含まれています。これを使用する前に、`untar` しなければならない場合があります。

DB2 Universal Database のインストール

DB2 をインストールするには、以下のステップを実行します。

- 1. スーパーユーザー (root) 権限でマシンにログインしていることを確認します。
- 2. CD-ROM ドライブがマシン上にインストールされ、構成されていることを確認します。CD-ROM ドライブがマシン上にインストールまたは構成されていない場合は、ドライブに付属の説明書に従ってインストールおよび構成してください。
- 3. DB2 UDB V8.1 CD-ROM を CD-ROM ドライブに挿入します。
- 4. 必要に応じて `mkdir` コマンドを使用して CD-ROM のマウント・ポイントを作成します。このコマンドを実行すると、ディレクトリ `/cdrom` にマウント・ポイントが作成されます。CD-ROM は、マシンのローカル・ファイル・システムの任意の場所にマウントすることができます。

```
# mkdir /cdrom
```

このステップでは、CD-ROM が `/cdrom` にマウントされていることにします。別の場所に CD-ROM をマウントする場合は、該当する場所をコマンドで指定してください。

- 5. 次のコマンドを入力して CD-ROM ドライブをマウントします。

```
# mount -o ro -v cdrfs /dev/cdnumber /cdrom
```

このコマンドの `number` は、システムの CD-ROM の数で、通常は 0 (ゼロ) です。このコマンドでは、CD-ROM が `/cdrom` にマウントされているものと想定しています。

- 6. `/cdrom` ディレクトリに移動します。
- 7. 次のように DB2 Setup Utility (`db2setup`) を呼び出して DB2 のインストールを開始します。
- ```
./db2setup
```
- 8. 「IBM DB2 セットアップ・ランチパッド (ようこそ)」ウィンドウから、インストールの前提条件およびリリース情報を見ることができます。インストールの前提条件およびリリース情報を検討して最新の緊急情報を入手しなければならない場合があります。「**プロダクトのインストール (Install Products)**」をクリックして、インストールを開始してください。
- 9. 「セットアップ (Setup)」ウィンドウがオープンします。「DB2 UDB Enterprise ServerEdition」を選択して、「次へ (Next)」をクリックします。
- 10. インストールを開始したら、セットアップ・プログラムのプロンプトに従って進みます。

プロンプトが出たら、「インストールのタイプ (installation type)」として「標準 (Typical)」を選択し、Content Manager をサポートするのに必要なすべての DB2 コンポーネントをインストールします。ほとんどのデフォルト・オプションをとることができます (独自の特定の要件がある場合を除く)。

オンライン・ヘルプを使用して、残りのステップを進むことができます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「ヘルプ (Help)」をクリックするか、「F1」を押します。いつでも「キャンセル (Cancel)」を押して、インストールを終了できます。DB2 ファイルがコンピューターにコピーされるのは、「DB2 セットアップ」ウィザードの最後のインストール・パネルで「終了 (Finish)」をクリックした場合だけです。

- \_\_ 11. CD-ROM ドライブから CD-ROM を取り出す前に、次のように **umount** コマンドを使用して CD-ROM をアンマウントします。

```
umount /cdrom
```

## DB2 をインストールしてから Content Manager をインストールするまでに 実行するステップ

DB2 をインストール後、以下に示す Content Manager のステップを実行してください。

- \_\_ 1. 以下のステップを実行して、root というユーザーが **db2grp1** という名前のグループ・セットのメンバーであることを確認します。

- \_\_ a. 次のコマンドを入力して SMIT を起動し、ユーザーの特性を変更します。

```
smit chuser
```

「ユーザーの特性の変更/表示 (Change/Show Characteristics of a User)」ダイアログ・ボックスがオープンします。

- \_\_ b. 「ユーザー名 (User NAME)」フィールドに、root と入力して「戻る (Return)」を押します。

- \_\_ c. 「グループ・セット (GROUP SET)」フィールドで、グループ db2grp1 がリストされていることを確認します。リストされていない場合は、これをグループのリストの終わりに追加して、「戻る (Return)」を押します。

- \_\_ d. プロセスが完了したら、SMIT を終了します。

- \_\_ 2. 以下のように db2ln スクリプトを実行して、インスタンス所有者のホーム・ディレクトリーから DB2 インストール・ディレクトリーまでシンボリック・リンクを作成します。

```
/usr/opt/db2_08_01/cfg/db2ln
```

- \_\_ 3. 次のようにして、ログイン時に db2profile または db2cshrc を実行するようにユーザー root を構成します。

- Korn シェル (ksh) について、root の /.profile ファイルに以下のテキストを追加します。ピリオド (.) と最初のスラッシュ ( / ) との間にスペースが入っていることに注意してください。

```
| . /home/db2inst1/sqllib/db2profile
```

- | • C シェル (csh) について、root の /.cshrc ファイルに以下の行を追加しま
- | す。

```
| source /home/db2inst1/sqllib/db2cshrc
```

| 行った変更が有効になるように、いったんログアウトしてから、再度ログイン

| します。

## | 共用メモリーを使用させるためのデータベース・マネージャーの構成

| AIX で DB2 を開始する前に、次のようにして、拡張共用メモリーを使用するようデー

| タベース・マネージャーを構成する必要があります。

- | \_\_ 1. 以下のように、**su** コマンドを使用して、DB2 インスタンス所有者 **db2inst1** と
- | してログインします。

```
| # su - db2inst1
```

| db2inst1 としてログインすると、コマンド・プロンプトが # 記号からドル記号

| (\$) に変わり、ログイン識別での変更が示されます。

- | \_\_ 2. DB2 インスタンス所有者として初めてログインした場合は、プロンプトが出され
- | て、パスワードを変更できます。新しいパスワードを入力して「戻る (Return)」
- | を押します。DB2 では、最大 8 文字のパスワードが必要です。

- | \_\_ 3. プロンプトが出たら、新しいパスワードを再度入力して、「戻る (Return)」を押
- | します。

- | \_\_ 4. 以下のコマンドを入力して、EXTSHM 環境変数を設定します。

```
| $ EXTSHM=ON
| $ export EXTSHM
| $ db2set DB2ENVLIST=EXTSHM
```

| DB2 を開始するたびに EXTSHM 環境変数が設定されることを**確認**しま

| す。/home/db2inst1/sqllib/profile.env を編集してこれを確認し、以下の行を

| 追加するか、または変更します。

```
| DB2ENVLIST='EXTSHM'
```

| /home/db2inst1/sqllib/userprofile に以下の行も追加します。

```
| export EXTSHM=ON
```

## | IBM DB2 Universal Database インストールの検証

| DB2 が正しく機能していることを示すために、サンプル・データベースを作成し、それ

| にアクセスする Java アプリケーションをコンパイルして実行できます。環境が DB2

| および IBM Java 2 SDK 用に正しくセットアップされていること、JDBC プロバイダ

| ーが Java アプリケーションからアクセス可能であることが分かります。

以下のステップを実行し、サンプル・データベースを作成し、Java アプリケーションをコンパイルして実行します。

- 1. DB2 インスタンス所有者 **db2inst1** としてログインしていることを確認します。
- 2. 以下のように、echo コマンドを使用して DB2INSTANCE 環境変数の値を検証することにより、DB2 環境が正しくセットアップされていることを確認します。

```
$ echo $DB2INSTANCE
```

**db2inst1** という値が返されれば、正しくセットアップされています。

- 3. インスタンス所有者 /home/db2inst1 のホーム・ディレクトリーが書き込み許可を持っていることを確認します。
- 4. 次のように db2samp1 スクリプトを実行して、サンプル・データベースを作成します。

```
$ db2samp1
```

このプロセスは、完了するのに数分かかることがあります。

- 5. インスタンス所有者のホーム・ディレクトリー /home/db2inst1 に入っていることを確認します。
- 6. 次のように javac コマンドを使用して、Java アプリケーションの例をコンパイルします。

```
$ javac -d . sqllib/samples/java/DB2Appl.java
```

その結果生じるクラス・ファイルは、ローカル・ディレクトリーに作成されます。

- 7. 次のように db2start コマンドを使用して DB2 を開始します。

```
$ db2start
```

- 8. 次のように java コマンドを使用して、Java サンプルを実行します。

```
$ java DB2Appl
```

正しい出力は、以下ようになります。

```
Retrieve some data from the database...
Received results:
empno= 000010 firstname= CHRISTINE
empno= 000020 firstname= MICHAEL
empno= 000030 firstname= SALLY
. . .
Update the database...
Changed 1 row.
```

最終検証のために、次のコマンドを入力します。

```
db2level
```

以下のようなデータが表示されるはずです。

```
DB21085I Instance "db2inst1" uses DB2 code release "SQL08010"
with level identifier "01010106".
Informational tokens are "DB2 v8.1.1.0", "s021023", "" and FixPak "0".
Product is installed at "/usr/opt/db2_08_01".
```

## IBM DB2 Net Search Extender (NSE) および Text Information Extender (TIE)

DB2 バージョン 7 Text Information Extender (TIE) の高度なテキスト検索機能は Net Search Extender (NSE) バージョン 8 にマージされます。Content Manager の (オプションの) テキスト検索機能を使用する予定の場合、次のものをインストールする必要があります。

IBM Text Information Extender (TIE)、バージョン 7.2 (IBM DB2 Enterprise Edition バージョン 7.2 および Enterprise Extended Edition バージョン 7.2.1 付き)

または

IBM Net Search Extender (NSE)、バージョン 8 (IBM DB2 Enterprise Server Edition、バージョン 8.1 付き)

IBM Net Search Extender (NSE)、バージョン 8 は、Content Manager、バージョン 8.2 と一緒にパッケージに入れて提供されます。

### IBM DB2 NSE のインストール

DB2 Net Search Extender (NSE) と一緒に提供される資料 CD に入っているインストール手順を参照してください。

ライブラリー・サーバーと同じワークステーション上に NSE をインストールする必要があります。

### DB2 NSE インストールの検証

NSE インストールが適切であるか検証するために、DB2 が開始されていることを確認し、以下のコマンドを実行して DB2 NSE を開始します。

```
db2start
db2text start
```

以下のように表示されるはずです。

```
CTE0001 Operation completed successfully.
```

## IBM WebSphere Application Server (WAS)

IBM WebSphere Application Server、バージョン 5 は、Content Manager バージョン 8.2 と一緒にこのパッケージに入れて提供されます。以下のものが含まれています。

- IBM HTTP Server
- Java Development Kit (JDK)

## IBM WebSphere Application Server のインストール

IBM WebSphere Application Server をインストールするには、このセクションを使用します。

1. Application Server の構成については、以下のサイトの WebSphere 5.0 InfoCenter オンライン資料をご使用の言語で入手できます。  
<http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/infocenter.html>
2. 「バージョン 5 InfoCenters:」というセクションの、「分散オペレーティング・システムの **Application Server (Application Server for distributed operating systems)**」の横にあるドロップダウン・ボックスで、ご使用の言語を選択します。
3. WebSphere InfoCenter の左のナビゲーション・パネルで「始めに (Getting Started)」->「WebSphere Application Server のインストール (Installing WebSphere Application Server)」->「製品のインストール (Installing the product)」を展開します。
4. ご使用のオペレーティング・システムに当てはまったところで、右のパネルに表示される WebSphere のインストール手順に従います。

### インストールの検証

WebSphere のインストールを検証するには、(上記のインストール手順中に開いた)

WebSphere InfoCenter の「始めに (Getting Started)」->「WebSphere Application Server のインストール (Installing WebSphere Application Server)」->「インストール検証ステップの使用 (Using the installation verification steps)」に記載されている情報を使用します。

## MQSeries Workflow の AIX へのインストール

MQSeries for AIX バージョン 5.2 は、AIX バージョン 4.2 を実行できる任意のサーバーにインストールすることができます。

### MQSeries の AIX へのインストール

MQSeries for AIX をインストールする前に、/var/mqm ファイル・システム、または /var/mqm、/var/mqm/log、および /var/mqm/errors ファイル・システムを作成し、マウントする必要があります。

複数のファイル・システムを別々に作成する場合は、少なくとも /var/mqm 用に 30 MB、/var/mqm/errors 用に 2 MB、そして /var/mqm/log 用に 20 MB のストレージが必要となります。

SMIT を使用したインストール方法は以下のとおりです。

- root 権限で SMIT にログインする。シェルから、smit と入力します。
- このウィンドウのシーケンスを使用して、インストール先のシステムに適した装置を選択します。



- ソフトウェアのインストールおよび保守
- ソフトウェアのインストールおよび更新
- 入手可能な最新のソフトウェアのインストールおよび更新

代わりに、ファースト・パス・コマンドを使用することもできます。

- `smitty install_latest`

「リスト (**List**)」を押して、「単一選択リスト (Single Select List)」ウィンドウを表示します。

/dev/cd0 (CD-ROM ドライブ) を選択します。「実行 (**Do**)」を選択して、「最新レベルのインストール (Install Latest Level)」のパラメーターを表示します。

**F4** を押して、インストールするコンポーネントのリストを表示します。

**Enter** を押します。

マシンに製品の旧バージョンが入っている場合は、「前提条件ソフトウェアの自動インストール (Auto Install prerequisite software)」を「いいえ (**No**)」変更して、「既存のバージョンを上書き (Overwrite existing version)」を「はい (**Yes**)」にします。

「実行 (**Do**)」を選択してソフトウェアをインストールします。

**ヒント:** root として検証を行う場合は、mqm グループに **Root** を追加する必要があります。

## MQSeries AIX インストールの検証の手順

このセクションでは、他の MQSeries マシンへの通信リンクを含まない、ローカル (スタンドアロン) インストールの検証方法について説明します。

このセクションの以下のステップに従って、1 つのキュー・マネージャーと 1 つのキューから成る簡単な構成をインストールしてテストします。この処理では、サンプル・アプリケーションを使用して、メッセージのキューへの書き込み、およびキューからの読み取りを行います。

1. ワークステーションに MQSeries for AIX (最小限の基本サーバー・コンポーネントを組み込み) をインストールします。
2. デフォルトのキュー・マネージャーを作成します (この例では `venus.queue.manager` とします)。
  - a. ウィンドウのコマンド・プロンプトで `crtmqm -q venus.queue.manager` を入力します。
  - b. **Enter** を押します。メッセージが表示され、キュー・マネージャーおよびデフォルトの MQSeries オブジェクトが作成されたことを通知します。

ヒント: MQSeries の以前のリリースでは、amqscom.tst というスクリプト・ファイルを実行して、デフォルトの MQSeries オブジェクトを定義する必要がありました。本リリースでは、このステップを実行する必要がなくなりました。

3. デフォルトのキュー・マネージャーを開始します。

- strmqm と入力して **Enter** を押します。
- キュー・マネージャーが開始されたことをメッセージが通知します。

4. MQSC コマンドを使用可能にするには、runmqsc と入力して **Enter** を押します。

ヒント: 「MQSeries コマンドを開始しています (Starting MQSeries Commands)」というメッセージが表示されたら、MQSC が開始されたことを意味します。MSQC には、コマンド・プロンプトがありません。

5. ローカル・キューを定義します (この例では、ORANGE.QUEUE とします)。

- define qlocal (orange.queue) と入力して Enter を押します。単一引用符で囲まない限り、小文字で MQSC に入力されたテキストはすべて自動的に大文字に変換されます。つまり、orange.queue という名前のキューを作成した場合は、MQSC 以外のすべてのコマンドにおいて、このキューを ORANGE.QUEUE と指定する必要があります。キューが作成されると、「MQSeries キューが作成されました (MQSeries queue created)」というメッセージが表示されます。

これで、venus.queue.manager という名前のデフォルトのキュー・マネージャーと、ORANGE.QUEUE という名前のキューが定義されました。

6. MQSC を停止するには、Ctrl-D を押すか、end とタイプして **Enter** を押します。「Enter」というメッセージが表示されます。

次のメッセージが表示されます。

- 「1 つの MQSC コマンドを読み取りました (One MQSC commands read)」どのコマンドにも構文エラーはありません。すべての有効な MQSC コマンドが処理されました。

再び、コマンド・プロンプトが表示されます。

キューおよびキュー・マネージャーをテストするには、サンプル amqsput (メッセージをキューに書き込むため) とサンプル amqsget (キューからメッセージを取り出すため) を使用します。以下のステップを行ってください。

1. /usr/mqm/samp/bin に移動します。

2. メッセージをキューに書き込むには、amqsput ORANGE.QUEUE と入力して Enter を押します。

次のメッセージが表示されます。

サンプル amqsput0 の開始 (sample amqsput0 start)

ターゲット・キューは ORANGE.QUEUE です (target queue is ORANGE.QUEUE)

3. 任意のメッセージ・テキストを入力して Enter を **2** 回押します。

次のメッセージが表示されます。 サンプル amqsput0 の終了 (Sample amqsput0 end)

必要に応じて、/usr/mqm/samp/bin に移動します。

メッセージを取り出すために、amqsget ORANGE.QUEUE と入力し Enter を押すと、以下が行われます。

- サンプル・プログラムが開始されます。
- メッセージが表示されます。
- サンプルが終了します。
- 再び、コマンド・プロンプトが表示されます。

これで検証が完了しました。

## IBM MQSeries Workflow の AIX へのインストール

### 前提条件:

1. AIX バージョン 4.3 以上
2. IBM WebSphere MQSeries for AIX バージョン 5.3.0.1 以上
3. IBM DB2 Universal Database for AIX バージョン 7.2 以上

### AIX へのインストール

#### ユーザー ID およびグループの作成

1. root としてログオンします。
2. コマンド `mkgroup fmcgrp` を入力します。
3. MQSeries Administrator **mqm** が存在することを確認します。
4. DB2 データベース管理者グループ **db2iadml** が存在することを確認します。

存在しない場合は、DB2 が正しくインストールされているか検査してください。

DB2 の管理グループにデフォルト以外の名前を指定している場合は、デフォルトの `db2iadml` が出てくるたびに指定した名前に置き換える必要があるので注意してください。

5. 次のステップに従って、MQ Workflow の管理ユーザーを作成します。MQ Workflow Administration ユーザー ID (たとえば `fmc`) は MQSeries および DB2 の管理権限を持っている必要があることに注意してください。以下のコマンドを使用して、ユーザーを作成します。以下の例では、`db2` インスタンスは `db2iadml` グループのものであると想定しています。

```
mkuser -a pgrp=fmcgrp groups=mqm,db2iadml fmc
```

6. コマンド `passwd fmc` を使用して、ユーザー `fmc` のパスワードを設定します。あるいは、SMIT を使用して、`fmc` ユーザーと `fmcgrp` グループを作成することもできます。

7. ロケール情報を含むように、fmc のログイン・ファイルを変更します。たとえば、`export LANG=en_US` と入力します。MQSeries Workflow ランタイムは、メッセージ・バンドルを検索するのにそのロケール情報を必要とします。
8. fmc のプロファイルで db2 環境の使用を設定します。これは、MQSeries Workflow ランタイム・データベースを所有する db2 インスタンスの db2profile を fmc のプロファイルに組み込むと、実現できます。たとえば、fmc のプロファイルに以下のものを組み込みます。この例では、db2inst1 はインスタンス所有者であり、db2inst1 は MQSeries Workflow ランタイム・データベースに使用されるものと想定しています。

```
export DB2INSTANCE=db2inst1

if [-e /home/$DB2INSTANCE/sql1lib/db2profile];
then . /home/$DB2INSTANCE/sql1lib/db2profile fi
```

### MQSeries Workflow の AIX へのインストール

MQSeries Workflow ランタイム・データは、特に指定のない限り、/var/fmc を使用します。使用法により、100MB ~ 400MB のディスク・スペースが必要になります。インストールを試みる前に、システムに十分なディスク・スペースがあるか調べてください。

1. root として AIX にログインします。
2. MQ Workflow インストール・ディスクを CD-ROM ドライブに挿入します。
3. 次のコマンドを入力して、CD-ROM をマウントします。

```
Mount -oro -v cdrfs /dev/cd0 /cdrom
```

```
.
```
4. CD-ROM の WFInstall ディレクトリーに入っているすべてのファイルを一時ディレクトリー（たとえば /tmp/WFInstall）にコピーします。
5. 以下の構成セッションのほか、このインストールのロケールを指定します。たとえば、`export LANG=en_US` と入力します。
6. CMBWFAIXInstall.sh /cdrom と入力して、MQSeries Workflow のインストールを開始します。**ヒント:** MQSeries Workflow をインストールするのに smitty を選択した場合は、fmcdefault (デフォルト構成) パッケージを選択しないでください。代わりに、必ず、次のセクションに従って、MQSeries Workflow 構成を EIP ワークフローに合うように準備してください。

### AIX での MQSeries Workflow の構成:

1. まだ root としてログオンしている間に、CMBWConfig.AIX.dat ファイルを見つけ、編集のために開きます。
2. MQCommunicationAddress 項目を更新して、ローカル・ホストをご使用のマシン名または IP アドレスで置き換えます。たとえば、`MQCommunicationAddress=hayes.svl.ibm.com` と入力します。

3. fmc が db2inst1 を使用しない場合、以下の項目を更新して、適切な db2 インスタンス所有者を反映させます。

```
RTDB2Instance, RTDB2LocalInstance, RTDatabaseContainerDirectory
RTDatabaseLocation, RTDatabaseLogLocation
```

4. MQ Workflow のデフォルト・キュー・マネージャーはポート 5010 を listen しています。/etc/services が使用されているかどうか調べてください。必要なら、ファイル内の MQPort 項目を別の番号に更新します。
5. 編集した CMBWFConfig.AIX.dat ファイルを保管します。
6. 必ず、fmc ユーザーが構成ログ・ファイルをこのディレクトリーに書き込めるだけでなく、それらの EIP 構成ファイルを読み取って実行できるようにします。
7. 構成スクリプトが fmc に対して su するときに fmc ユーザーの .profile にエラーがないことを確認します。
8. root の下で CMBWFAIXConfig.sh を実行します。fmc のパスワードを入力するようプロンプトが出ます。このスクリプトにより、MQSeries Workflow FMC 構成、MQSeries Workflow ランタイム・データベース FMCDB、FMCQM キュー・マネージャーが作成され、EIP ワークフロー・コンテナ・データ構造が定義されます。

**ヒント:** MQSeries Workflow マニュアルで MQSeries Workflow のユーティリティー fmczcfg および fmczutil の参照箇所を見つけてください。MQSeries Workflow 構成のカスタマイズ方法が詳しく説明してあります。MQSeries Workflow FMC 構成および FMCQM キュー・マネージャーでのみ機能するデフォルトは EIP であることに注意してください。MQSeries Workflow 構成でこれらの設定を変更しないでください。

9. dspmq と入力します。システムに登録されている FMCQM キュー・マネージャーが表示されるはずです。たとえば、次のように示されます。

```
QMNAME(FMCQM) STATUS(Ended normally)
```

10. fmczcfg -o=1 と入力します。システムに登録されている MQSeries Workflow FMC 構成が表示されるはずです。たとえば、次のように示されます。

```
- FMC33611I The following configurations are defined: FMC
```

これで、EIP ワークフローに合わせた MQSeries Workflow のカスタマイズは完了です。

**AIX での EIP インストールの開始:** EIP Advanced ワークフローは、MQSeries Workflow を、ワークフロー機能を送達するための基本となるワークフロー・エンジンとして使用します。そのため、EIP ワークフローを開始するのに、MQSeries Workflow を開始するステップが必要です。

1. fmc としてログオンします。
2. MQSeries Workflow を開始するために、CMBWFAIXStart.sh と入力します。  
MQSeries Workflow の開始中にコンソール・メッセージへの報告が表示されます。

3. EIP コレクション・ポイント・モニターを開始するために EIP Administrator ユーザー ID (たとえば icmadmin) とパスワードの入力を求めるプロンプトが出ます。

EIP コレクション・ポイント・モニターは、その開始状況をコンソールを通じて報告します。CMBWFAIXStart.sh が cmbupes81.sh を呼び出して、それにユーザー ID とパスワードを与える行を変更できます。そうすると、次に CMBWFAIXStart.sh スクリプトを実行したときにユーザー ID とパスワードを求めるプロンプトが出なくなります。cmbupes81.sh ñh と入力すると、可能なオプションが表示されます。

**ヒント:** コレクション・ポイント機能が必要でない場合は、「quit」と入力して UPES サーバーをシャットダウンしてください。UPES サーバーをシャットダウンしても、MQSeries Workflow はシャットダウンされません。

**ヒント:** EIP System Administration クライアントで Workflow Service オプションを使用可能にしてからでないと、Administration クライアントを介して EIP Workflow オブジェクト (たとえば Workflow プロセスおよびアクション) を定義できません。EIP で Workflow Service を使用可能にした後は、必ず、System Administration クライアントにログオンするときに MQSeries Workflow を実行させておいてください。このことは、Workflow オブジェクト定義を EIP Administration データベースと MQSeries Workflow ランタイム・データベース間で同期させておくのに必要です。EIP System Administration クライアントは Windows プラットフォーム上でのみ実行するため、AIX システム上では、統合コネクタ用に RMI サーバーと、ワークフロー・サービス用に RMI サーバーを開始する必要があります。また、EIP 管理クライアントが AIX 上で EIP 管理データベースを管理できるように Windows マシン上で INI ファイルを変更することも必要です。

**ヒント:** デフォルトの MQSeries Workflow システム管理者 (構成管理者ではない) ID は ADMIN で、「password」というデフォルトのパスワードを持つものです。セキュリティ上の理由から、これは後で変更する必要があります。これを変更するには、最初に MQSeries Workflow を開始し、fmcautil ユーティリティを使用して、Workflow システムに接続してパスワードを変更します。パスワードの変更が済んだら、必ず CMBWFAIXStart.sh を変更して、行った変更を反映させます。以下にその手順を示します。

1. fmcautil ñu admin ñp password
2. 「u, p」を選択してパスワードを変更し、ユーティリティを終了します。
3. CMBWFAIXStart.sh を更新します。たとえば、次のようにします。  
fmcxspea -y=\$ConfigurationID -u=\$RuntimeAdminID -p=myPassword -f &

---

## 第 9 章 AIX でのプリインストール手順の実行

Content Manager and Enterprise Information Portal をインストールする前に、すべての必要な前提条件をインストールするほかに、以下の作業を完了する必要があります。

- 『正しいバージョンの Java の確認』
- 『ユーザー ID の作成』
- 103 ページの『新しいユーザー ID の .profiles の更新』
- 103 ページの『DB2 インスタンスの profile.env ファイルの更新』
- 103 ページの『Content Manager 環境設定に合わせた userprofile ファイルの作成』
- 103 ページの『データベース環境の確立』

Content Manager V8 ソフトウェアの以前のインストールが残っている場合は、必ず、製品をアンインストールして、環境をクリーンアップしてください。構成ファイルなど一部の製品ファイルやデータベースは、アンインストール後も意図的に残されています。このことが、インストールが正常に行われるかどうかに影響する場合があります。

---

### 正しいバージョンの Java の確認

正しいバージョンの Java を使用しているか確認するには、以下のコマンドを実行します。

```
java -version
```

Java バージョン 1.3.0 以上が使用されていることを確認してください。

```
java version "1.3.0"
```

---

### ユーザー ID の作成

以下のように、Enterprise Information Portal で使用するためにユーザー ID を作成する必要があります。

- このワークステーション上にライブラリー・サーバーをインストールする場合は、ライブラリー・サーバー「管理」ユーザー ID (たとえば icmadmin)。このユーザー ID は、DB2 Admin グループに属するものでなければなりません。
- このワークステーション上にライブラリー・サーバーをインストールする場合は「データベース接続」ユーザー ID (たとえば icmconct)。(これは、DB2 Admin グループに属するのではなく、通常の特権を持つ通常のユーザー ID でなければなりません。

icmadmin ユーザー ID は DB2 Admin グループの一部でなければなりません。以下のステップに従って、各ユーザーを db2iadml という名前の db2 管理サーバー・グループ (すなわち、db2 インスタンスのために使用されるのと同じグループ) の一部として作成します。

— 1. 次のようにして、ユーザー ID を作成します。

```
mkuser pgrp=db2iadml groups=staff,db2iadml icmadmin#
mkuser pgrp=db2iadml groups=staff,db2iadml rmdadmin#
mkuser icmconct
```

— 2. 初期パスワードを割り当てます。初期パスワード値は、任意のもの (たとえば「firstone」) に設定できます。最初のログインでパスワードの変更を求めるプロンプトが出ます。)

```
passwd icmadmin#
passwd rmdadmin#
passwd icmconct
```

— 3. 初期ログインを実行します。パスワードの変更を求めるプロンプトが出されます。

```
login icmadmin#
login rmdadmin#
login icmconct
```

**重要:** インストール時に入力できるように、これらのユーザー ID とそれぞれのパスワードを覚えておく必要があります。インストール中 (それらの入力が必要な時点で) にそれらを思い出していただきます。それらの名前をここに書き留めてください。

表 22. 管理および接続 ID

|                               | デフォルト名/情報 | ご使用の値をここに記録します |
|-------------------------------|-----------|----------------|
| ライブラリー・サーバーのデータベース管理 ID       | icmadmin  |                |
| ライブラリー・サーバーのデータベース管理 ID パスワード |           |                |
| データベース接続 ID                   | icmconct  |                |
| データベース接続 ID パスワード             |           |                |
|                               |           |                |
|                               |           |                |



---

## 新しいユーザー ID の .profiles の更新

/home/icmadmin/.profile ファイルに以下の行を追加します。

```
. /home/db2inst1/sqllib/db2profile
```

ピリオド (.) と最初のスラッシュ (/) との間にスペースが入っていることに注意してください。これにより、ユーザーを db2inst1 DB2 インスタンスと関連付ける DB2 環境が確立されます。

---

## DB2 インスタンスの profile.env ファイルの更新

データがまだファイルに入っていない場合は、以下の行を

/home/db2inst1/sqllib/profile.env ファイルに追加します。

```
DB2ENVLIST='LIBPATH ICMROOT ICMDDL ICMCOMP EXTSHM CMCOMMON'
DB2COMM='tcPIP'
DB2AUTOSTART='TRUE'
```

---

## Content Manager 環境設定に合わせた userprofile ファイルの作成

/home/db2inst1/sqllib/userprofile というファイルを作成するか、ファイルを更新して、以下のデータを含めます。

```
ICMROOT=/usr/lpp/icm
ICMDLL=/home/db2fenc1
ICMCOMP=/usr/vacpp/bin
CMCOMMON=/usr/lpp/cmb/cmgt
EXTSHM=ON
PATH=$PATH:$ICMROOT/bin/DB2
LIBPATH=$ICMROOT/lib:$ICMROOT/inso:$LIBPATH
DB2INSTANCE=db2inst1
export ICMROOT ICMDDL ICMCOMP CMCOMMON EXTSHM PATH LIBPATH DB2INSTANCE
```

/home/db2inst1/sqllib/db2profile を変更しないでください。このファイルは、DB2 フィックスパックの適用により上書きされる可能性があるためです。その代わりに、**userprofile** に必要な変更を入れてください。**db2profile** は、呼び出されると、**userprofile** を実行します。**db2profile** が **userprofile** を実行すると、**userprofile** に追加されたすべての設定が、**db2profile** 内のユーザーに合わせて設定されます。このアクションにより、**db2profile** を使って DB2 環境が確立されます。

---

## データベース環境の確立

DB2 環境を確立することは、**極めて重要**です。**db2profile** を実行すると、**PATH** および **CLASSPATH** が設定され、Content Manager が使用する DB2 インストールも識別されます。

```
. /home/db2inst1/sqllib/db2profile
```

このステップは、必ず、実行してください。実行しないと、**Content Manager** は正常にインストールされません。

---

## 第 10 章 AIX での Enterprise Information Portal コンポーネントのインストール

このセクションでは、AIX サーバーにおける EIP コンポーネントのインストール方法について説明します。AIX には、管理クライアントを除くすべての Enterprise Information Portal コンポーネントをインストールすることができます。

コンポーネントは、インストール・ウィザードを使用したインストールのみが可能です。smitty または installp を使用したインストールはお勧めできません。これは、インストールにも構成が必要となるからです。

---

### AIX での Enterprise Information Portal コンポーネントのインストール

AIX コンポーネントをインストールするには、次のようにします。

1. 101 ページの『第 9 章 AIX でのプリインストール手順の実行』に記載されているすべての操作を実行します。
2. Enterprise Information Portal インストール CD をマウントします。
3. CD ROM ディレクトリー cd/ cdrom に移動します。
4. ディレクトリー release/ に移動して、次のように入力します。

```
./frnxsetup.sh
```

インストール・プログラムが起動します。

5. 「次へ (Next)」をクリックして、ウェルカム・ウィンドウをクローズします。
6. 必要なコンポーネントおよびサブコンポーネントを選択します。デフォルトでは、すべてのコンポーネントとサブコンポーネントが選択されます。インストール・ウィンドウにデータを入力します。詳しくは、106 ページの『EIP AIX インストールのウィンドウ』を参照してください。
7. プログラムの指示に従い、選択したコンポーネントの設定を定義します。
8. 「インストールの終了 (Installation Completion)」ウィンドウが表示されたら「終了 (Finish)」をクリックします。
9. 環境変数およびクラスパスを構成します (115 ページの『AIX でのクラスパス、環境変数のエクスポート』を参照)。

---

## EIP AIX インストールのウィンドウ

このセクションでは、AIX インストールのウィンドウを順に説明します。**ヒント:** すべてのウィンドウを使用するわけではありません。たとえば、テキスト検索クライアントをインストールしない場合、テキスト検索クライアントに関連した 2 つのウィンドウは表示されません。

### コンポーネントの選択 (Component Selection)

コンポーネントおよびサブコンポーネントを選択し、「次へ (Next)」をクリックします。すべてのコンポーネントを同時にインストールするか、個々のコンポーネントを選択することができます。

### システム構成 (System Configuration)

EIP バージョン 8 では、リモート EIP コンポーネントがネットワークまたは Web サーバー経由でシステム構成ファイルにアクセスできるようにする新規オプションが提供されています。

共通の構成ファイル用のデフォルト・インストールは次のとおりです。

`CM_COMMON=/usr/lpp/cmb/cmgmt`

「システム構成 (System Configuration)」ウィンドウでの選択により、システム構成ファイルの場所が定義されます。たとえば、構成ファイル `cmbicmsrvs.ini` には、Content Manager バージョン 8 サーバーへの接続および検索に必要なデータが含まれます。ウィンドウには、LDAP サーバーに保管されたデータ・ソース・ファイルに対してリモート・コンポーネントをポイントするオプションもあります。

#### 制約事項

- パスを定義する際、構成ファイルをネットワークまたは Web サーバーにインストールする必要はありませんが、リモート・ユーザーが EIP を操作できるようにするにはファイルがインストールされている必要があります。ネットワークまたは Web サーバーへの構成ファイルのインストールには、EIP インストール CD-ROM を使用するか、他のサーバーに構成ファイルがインストール済みの場合は、ネットワークまたは Web サーバーに `cmgmt` ディレクトリーをコピーすることができます。
- リモート EIP コンポーネントがネットワーク・サーバー上の構成ファイルにアクセスしてこれを使用するには、次のプロパティを構成する必要があります。
  - 構成ファイル・ディレクトリーおよびサブディレクトリーの共用を設定します。
  - 共用構成ファイルをインストールしたサーバーのリモート・ユーザーのユーザー ID およびパスワードを定義します。
  - ユーザー ID およびパスワードには読み取り / 書き込み特権が必要です。読み取り / 書き込みアクセスが必要となるのは、クライアントおよび他のコンポーネントがログ・ファイルなどの共用構成ファイルを更新するためです。

- Web サーバーに構成ファイルをインストールする場合は、共用、およびリモート EIP ユーザーの読み取り / 書き込みパラメーターの構成方法について、Web 管理者にご連絡ください。
- Information Center をインストールする場合は、システム構成ファイルのインストールで「ローカル (Local)」を選択する必要があります。Information Center ファイルは /usr/lpp/infoctr にインストールされます。ユーザーは、ネットワークまたは Web サーバーからは Information Center にアクセスできません。
- LDAP サーバーに保管されたデータ・ソース構成情報にリモート・ユーザーをポイントするには、ご使用の LDAP 製品に固有のユーティリティを使用して、データ・ソース構成ファイルのみをインストールしてください。詳しくは LDAP 管理者にご連絡ください。データ・ソース・ファイルの名前は cmbds.ini です。
- LDAP サーバーに保管されたデータ・ソース・ファイルにリモート・ユーザーをポイントするオプションは、次の場合にのみ選択可能となります。
  - Content Manager バージョン 8 コネクタをインストールする場合で、
  - 統合コネクタを単独でインストールする、および / または
  - 管理データベースまたは情報マイニング・データベースをインストールする場合 (統合コネクタは常にこれらのコンポーネントとともにインストールされる)。

このセクションでは、「システム構成 (System Configuration)」ウィンドウのフィールドについて説明します。

### ローカル (Local)

「ローカル (Local)」をクリックして、構成ファイルをローカル・サーバーにインストールします。

### リモート (Remote)

「リモート (Remote)」をクリックして、ネットワーク・サーバーに構成ファイルがインストールされている、またはインストールされる予定のパスを入力します。

**ヒント:** Content Manager バージョン 8 がすでにインストールされている、またはインストールする予定の場合、EIP はネットワーク上で Content Manager 構成ファイルを共用できます。「リモート (Remote)」をクリックして、Content Manager 構成ファイルがインストールされている、またはインストール予定のパスを入力します。

### HTTP Web サーバー (HTTP web server)

構成ファイルがインストールされている、またはインストールされる予定の Web サーバーの URL を入力します。URL を入力する際、構成ファイルを Web サーバーにインストールする必要はありませんが、リモート・ユーザーが EIP を操作できるようにするにはファイルがインストールされている必要があります。リモート EIP ユーザーが Web サーバー上の構成ファイルに接続し更新できるようにするための方法については、Web 管理者にご連絡ください。

**ヒント:** Content Manager バージョン 8 がすでにインストールされている、またはインストールする予定の場合、EIP は Content Manager 構成ファイルを共用できます。Content Manager バージョン 8 構成ファイルがインストールされている、またはインストールされる予定の URL を入力します。

### システム構成の使用 (Use system configuration)

このボックスをクリックして、LDAP サーバー情報の定義および構成処理を開始し、後で cmbds.ini 構成ファイルをインストールできるようにします。このボックスをクリックして「次へ (Next)」をクリックすると、インストール・プログラムにより「LDAP サーバーの定義 (Define LDAP Server)」および「LDAP サーバーの構成 (Configure LDAP Server)」ウィンドウが表示されます。これら 2 つのウィンドウで定義した内容は、cmbcmenv.properties ファイルに保管され、後で EIP コンポーネントで使用されます。**ヒント:** インストール・プログラムが既存の cmbcmenv.properties ファイルを検出します。「LDAP サーバーの定義 (Define LDAP Server)」および「LDAP サーバーの構成 (Configure LDAP Server)」ウィンドウのフィールドを変更することはできません。

LDAP サーバーへの構成ファイルのインストールは、EIP をインストール後、LDAP ユーティリティを使用して別のステップで行います。詳しくは LDAP サーバーの資料を参照してください。

「LDAP サーバーの定義 (Define LDAP Server)」および「LDAP サーバーの構成 (Configure LDAP Server)」ウィンドウは、次の場合にのみ表示されません。

- ・「システム構成 (System Configuration)」ウィンドウで LDAP サーバーをクリックし、
- ・ Content Manager バージョン 8 コネクタをインストールする場合で、
- ・ 統合コネクタを単独でインストールするか、管理データベースまたは情報マイニング・データベースの一部としてインストールする場合

## LDAP サーバーの定義 (Define LDAP Server)

このウィンドウ上で、LDAP サーバー・タイプ、ホスト名、ポートおよび認証方式を定義します。EIP は、このウィンドウで入力した情報を cmbenv.properties に保管します。**ヒント:** このウィンドウで要求される情報を定義する前に、いずれの LDAP サーバーもインストール、構成または開始する必要はありません。

### LDAP サーバー・タイプ (LDAP server type)

IBM Secureway または Microsoft Active Directory を選択します。

### ホスト名 (Host name)

LDAP サーバー・ホスト名を入力します。

### ポート番号 (Port number)

LDAP サーバーのポート番号を入力します。

### **LDAP サーバー管理者 ID (LDAP server administration ID)**

LDAP 管理者ユーザー ID を入力します。

### **パスワード (Password)**

LDAP 管理者パスワードを入力します。

## **LDAP サーバーの構成 (Configure LDAP Server)**

このウィンドウでは、LDAP サーバーの基本識別名とユーザー認証属性、検索範囲および参照方式を定義します。

### **基本識別名 (Base distinguished name)**

組織または国の基本識別名を入力します。

### **ユーザー認証属性 (User authentication attribute)**

属性を入力します。たとえば、uid などです。

### **検索範囲 (Search scope)**

「サブツリー (Subtree)」または「1 レベル (Onelevel)」をクリックします。

### **参照 (Referral)**

「無視 (Ignore)」または「従う (Follow)」をクリックします。

## **LDAP サーバー・セットアップ情報の確認 (Confirm LDAP Server Setup Information)**

このウィンドウには、「LDAP サーバーの定義 (Define LDAP Server)」および「LDAP サーバーの構成 (Configure LDAP Server)」ウィンドウで入力した値が表示されます。データを確認して「次へ (Next)」をクリックするか、「戻る (Back)」をクリックしてデータを変更します。

## **Content Manager V8 サーバー接続の構成 (Configure Content Manager V8 Server Connection)**

このウィンドウでは、Content Manager バージョン 8 サーバーへの接続に必要な情報を定義します。このウィンドウは、Content Manager バージョン 8 コネクタをインストールする場合にのみ表示されます。管理者が定義を行い Content Manager バージョン 8 サーバーに接続する場合、EIP は、このウィンドウに定義された値を使用してサーバーに接続します。デフォルトで EIP は、このウィンドウの情報を cmbicmsrvs.ini および cmbicmenv.ini にコピーします。

### **データベース名 (Database name)**

Content Manager バージョン 8 データベース名を入力します。データベースをカタログした場合は、このフィールドに別名を入力します。

### **スキーマ名 (Schema name)**

データベースのインストール時に Content Manager バージョン 8 データベースに割り当てられたスキーマ名を入力します。

### 認証タイプ (Authentication type)

サーバーのデフォルト設定のままにすると、Content Manager バージョン 8 データベースのユーザー ID およびパスワードが Content Manager バージョン 8 サーバーに送られ検証されます。

「クライアント (Client)」をクリックすると、DB2 による検証は行われず、システム・ログインで入力したユーザー ID により Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバーに接続します。**制約事項:** クライアント・ワークステーションにログインするには、DB2 接続特権を持つユーザー ID を入力する必要があります。

### データベース接続 ID (Database connection ID)

Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバー・データベースのインストール時にデータベース接続 ID として定義されたものと同じユーザー ID とパスワードを入力する必要があります。

### サインオン使用可能 (Enable sign-on)

EIP システムの計画で必要な場合、サインオンを使用可能にするには「True」をクリックします。

## Content Manager V8 コネクター: サーバー・セットアップ情報の確認 (Content Manager V8 Connector: Confirm Server Setup Information)

このウィンドウには、Content Manager バージョン 8 接続情報の構成で入力した値が表示されます。

「次へ (Next)」をクリックして値を受け入れるか、「戻る (Back)」をクリックして値を変更します。

## 統合接続の構成 (Configure Federated Connection)

このウィンドウでは、管理クライアントから管理データベースへの接続に必要な情報を定義します。このウィンドウは、コネクターを選択した場合、または管理クライアントをインストールする場合にのみ表示されます。EIP は、このウィンドウの情報を構成ファイル cmbds.ini および cmbfedenv.ini にコピーします。

### データベース名 (Database name)

管理データベース名を入力します。

### スキーマ名 (Schema name)

管理データベースのインストール時に管理データベースに割り当てられたスキーマ名を入力します。

### 認証タイプ (Authentication type)

サーバーのデフォルト設定のままにすると、管理データベースのユーザー ID およびパスワードが管理データベースに送られ検証されます。



「クライアント (Client)」をクリックすると、データベースによる検証は行われず、システム・ログインで入力したユーザー ID により管理データベースに接続します。**制約事項:** クライアント・ワークステーションにログインするには、DB2 接続特権を持つユーザー ID を入力する必要があります。

#### **データベース接続 ID (Database connection ID)**

管理データベースのインストール時に定義されたユーザー ID およびパスワードを入力します。ユーザー ID およびパスワードは、サーバー上でローカルに定義されたものである必要があります。

#### **シングル・サインオン使用可能 (Enable single sign-on)**

EIP システムの計画で必要な場合、サインオンを使用可能にするには「True」をクリックします。

### **統合コネクタ: サーバー・セットアップ情報の確認 (FED Connector: Confirm Server Setup Information)**

このウィンドウには、統合コネクタ接続情報の構成で入力した値が表示されます。

「次へ (Next)」をクリックして値を受け入れるか、「戻る (Back)」をクリックして値を変更します。

### **システム管理データベースの構成 (Configure system administration database)**

インストール・プログラムは、このウィンドウの入力情報を使用して DB2 に接続し、サーバー上のデータベースをリストして、「データベース名 (Database name)」フィールドで定義した名前とサーバー上の既存のデータベースを比較します。

**ヒント:** Content Manager バージョン 8 データベースを共用する場合で、Content Manager バージョン 8 データベース名を確認する、または新規 EIP データベースをインストールする際にデータベース名が重複するのを避けるには、DB2 コマンド行プロセッサを使用して、サーバー上のデータベースをリストします。db2 プロンプトで LIST DATABASE DIRECTORY と入力します。

プログラムは、同じ名前のデータベースを検出すると、データベースを上書きするオプションを示します。Content Manager バージョン 8 データベースに EIP テーブルを追加する場合は、データベースを上書きしないでください。同じ名前の既存のデータベースが検出されなければ、データベースの作成が指示されます。以下のガイドラインに従い、管理データベースの識別情報を定義してください。

#### **データベース名 (Database name)**

管理データベース名を入力します。**ヒント:** 問題の発生を避けるため、クライアントからホスト・データベースにリモート接続する予定の場合は、データベース名に特殊文字 @、#、および \$ を使用しないでください。また、これらの文字は、すべてのキーボードに共通ではないので、他国でデータベースを使用

する予定の場合は、使用しないでください。特に指定がない場合は、すべての名前には次の文字を使用することができます。

- A ～ Z。ほとんどの名前では、A ～ Z は小文字から大文字に変換されます。
- 0 ～ 9
- @、#、\$、および \_ (下線)

特に指定がない場合は、すべての名前は次のいずれかの文字で始まる必要があります。

- A ～ Z
- @、#、および \$
- 管理データベースまたは情報マイニング・データベースをインストールする場合は、デフォルトのデータベース名を使用するか、新しい名前を入力します。
- Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバー・データベースを共用する場合は、ライブラリー・サーバーのインストール時に定義された Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバー・データベース名を入力します。

### スキーマ名 (Schema name)

- 管理データベースまたは情報マイニング・データベースをインストールする場合、デフォルト名 (データベース管理者 ID のデフォルト・ユーザー ID と同じ) を使用するか、デフォルトのスキーマ名を変更することができます。「スキーマ名 (Schema name)」フィールドに新しいデータベース名を入力してください。スキーマ名は最大 8 文字であり、数値を使用することができ、大文字で表示されます。
- Content Manager バージョン 8 データベースを共用する場合は、ライブラリー・サーバーのインストール時に定義された Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバー・データベース・スキーマ名を入力します。

スキーマは名前付きオブジェクトの集合です。また、スキーマは、データベース内のオブジェクトの論理種別を提供します。スキーマには、別名、テーブル、ビュー、索引、トリガー、特殊タイプ、関数、およびパッケージなどのオブジェクトを含めることができます。スキーマは、オブジェクトの作成時に暗黙に作成できます。スキーマは、データベース内でオブジェクトとして存在します。スキーマ名が指定されない場合は、オブジェクトの作成者の許可名の最初の 8 文字がデフォルトとして使用されます。

### データベース管理者 ID (Database administration ID)

このフィールドに定義した ID とパスワードは、データベースの作成用にのみ使用されます。これは、ローカルに定義され、DB2 管理者特権を持っている必

必要があります。**制約事項:** 管理データベースを作成する前に、DB2 管理者特権を持つユーザー ID でサーバーにログインする必要があります。

#### **データベース接続 ID (Database connection ID)**

このフィールドに定義したユーザー ID とパスワードにより、ユーザーは管理データベースにアクセスできます。ユーザー ID はローカルに定義されている必要があります。

### **データベースはすでに存在 (Database Already Exists)**

このウィンドウは、EIP データベースの名前を再利用した場合、または Content Manager バージョン 8 ライブラリー・サーバーの名前を入力した場合にのみ表示されます。

#### **既存のデータベースを置き換えますか? (Replace the existing database?)**

このオプションをクリックすると、既存のデータベースが除去され、EIP データベースが作成されます。 **ヒント:** 既存のデータベースを置き換える場合、確認のためのプロンプトが二度表示されます。

### **システム管理サーバー・オプションの選択 (Select System Administration Server Options)**

このウィンドウは、既存の管理データベースの名前を再利用せずに管理データベースをインストールする場合で、Content Manager バージョン 8 データベースに EIP テーブルを追加しない場合にのみ表示されます。

#### **ユニコードの使用可能化 (Enable unicode)**

情報マイニングまたは管理データベースをインストールし、これに情報マイニング・テーブルを追加する場合は、「True」をクリックします。

#### **テキスト検索の使用可能化 (Enable text search)**

このボックスをクリックしてテキスト検索を使用可能にします。

### **システム管理データベース・セットアップ情報の確認 (Confirm System Administration Database Setup Information)**

このウィンドウには、管理データベースの定義で入力した値が表示されます。「次へ (Next)」をクリックして値を受け入れるか、「戻る (Back)」をクリックして値を変更します。

### **イメージ検索: クライアント・セットアップ情報の入力 (Image Search: Enter Client Setup Information)**

このウィンドウでは、EIP がイメージ検索サーバーの検出および接続に使用する値を定義します。

**イメージ検索ユーザー ID (Image Search user ID)**

サーバーのインストール時に定義されたイメージ検索サーバーの名前を入力します。

**イメージ検索サーバー名 (Image Search Server name)**

イメージ検索サーバーのホスト名を入力します。完全修飾ホスト名を入力する必要があるかどうかは、管理者にご連絡ください。

**ホスト名 (Host name)**

イメージ検索サーバーのインストール時に定義されたホスト名を入力します。

**ポート番号 (Port number)**

サーバーのインストール時に定義されたポート番号を入力します。

**制御データ・パス (Control data path)**

イメージ検索クライアントの制御データ・パスの名前を入力します。

**イメージ検索クライアント: セットアップ情報の確認 (Image Search Client: Confirm Setup Information)**

このウィンドウには、イメージ検索クライアントに定義された値が表示されます。「次へ (Next)」をクリックして値を受け入れるか、「戻る (Back)」をクリックして値を変更します。

**テキスト検索: クライアント・セットアップ情報の入力 (Text Search: Enter Client Setup Information)**

このウィンドウでは、EIP がテキスト検索サーバーの検出および接続に使用する値を定義します。

**テキスト検索クライアント・ユーザー ID (Text Search Client user ID)**

テキスト検索サーバーへの接続に必要なユーザー ID を入力します。

**テキスト検索サーバー名 (Text Search server name)**

テキスト検索サーバーの名前を入力します。

**テキスト検索ホスト名 (Text Search Host Name)**

テキスト検索サーバーの完全修飾ホスト名を入力します。

**テキスト検索ポート番号 (Text Search Port number)**

テキスト検索サーバーのインストール時に定義されたポート番号を入力します。

**テキスト検索クライアント: セットアップ情報の確認 (Text Search Client: Confirm Setup Information)**

このウィンドウには、テキスト検索クライアントに定義された値が表示されます。「次へ (Next)」をクリックして値を受け入れるか、「戻る (Back)」をクリックして値を変更します。

## インストール状況 (Installation Status)

このウィンドウには、選択したコンポーネントのインストール状況が表示されます。コンポーネントのインストールが完了したら、「次へ (Next)」をクリックします。

## RMI ホスト名とポート番号の指定 (Specify RMI Host Name and Port Number)

このウィンドウには、RMI サーバーのホスト名とポート番号を定義します。また、ワークフローまたは情報マイニング RMI サーバーの RMI ホスト名とポート番号も定義することができます。

システム計画にマスター RMI サーバーが含まれる場合は、このウィンドウ上部のフィールドに、マスター・サーバーのホスト名とマスター・サーバーのポート番号を入力します。デフォルトのホスト名はローカル・サーバー名であり、デフォルトのポート番号は 1919 です。RMI 情報が `cmbclient.ini` にコピーされます。**ヒント:** 完全修飾ホスト名を入力する必要があるかどうかは、管理者に確認してください。

システム計画で、ワークフローまたは情報マイニング用の別個の RMI サーバーが含まれる場合は、このウィンドウ下部のフィールドにワークフローまたは情報マイニング RMI サーバーのホスト名とポート番号を入力します。この RMI 情報は `cmbsvclient.ini` にコピーされます。

**ヒント:** システム計画に RMI が含まれる場合は、クライアントで RMI サーバーを使用できるようにする前に、別のステップで RMI サーバーにコネクタをインストールして構成する必要があります。

## インストール完了 (Installation Complete)

「終了 (Finish)」をクリックして、AIX での EIP コンポーネントのインストールを完了します。**ヒント:** サーバーを再始動する必要はありません。

---

## AIX でのクラスパス、環境変数のエクスポート

EIP を使用する前に、構成プログラムを使用してクラスパス、環境変数およびその他の情報をエクスポートする必要があります。

1. `/usr/lpp/cmb/bin` に移動します。
2. `./cmbenv81.sh` と入力します。

---

## AIX での EIP インストールの検証

117 ページの『第 11 章 AIX での Enterprise Information Portal の正常なインストールの検証』を参照。



---

## 第 11 章 AIX での Enterprise Information Portal の正常なインストールの検証

このセクションに記載されている情報を使用して、AIX システム上に Enterprise Information Portal が正常にインストールされているか検証します。以下の手順が記載されています。

- 『Enterprise Information Portal First Steps』
- 『Enterprise Information Portal システム管理データベースの検証』
- 118 ページの『システム管理データベースおよびシステム管理クライアント通信の検証』
- 120 ページの『Content Manager バージョン 8 への Enterprise Information Portal 接続の検証』
- 118 ページの『低レベル接続テストの実行』

---

### Enterprise Information Portal First Steps

Enterprise Information Portal First Steps プログラムにより、サンプル・データを Enterprise Information Portal システム管理データベースにロードできます。Enterprise Information Portal のすべてのコンポーネントが 1 つのシステム上にインストールするか、それとも複数のシステムにインストールするかにより、実行する First Steps の手順が異なります。

システム管理データベースを AIX にインストールする場合、システム管理クライアント・コンポーネントをインストールした Windows システムから First Steps プログラムを実行する必要があります。81 ページの『Enterprise Information Portal コンポーネントが複数のマシン上にインストールされている場合の First Steps の実行』を参照。

---

### Enterprise Information Portal システム管理データベースの検証

Enterprise Information Portal システム管理データベースが正しくインストールされていることを検証するには、次のように行います。

1. 次のように入力してデータベース接続を検査します。

```
$ db2 connect to icmnlsdb user icmadmin using password
```

以下のような出力が表示されるはずです。

## Database Connection Information

Database server = DB2/6000 7.2.4  
SQL authorization ID = ICMADMIN  
Local database alias = ICMNLSDB

— 2. 次のように入力してデータベース・テーブルを検査します。

```
$ db2 list tables
```

いくつかのテーブル (約 150 個) が表示されるはずです。「FA」で始まる名前を持つテーブルもあれば、「ICM」で始まる名前を持つものもあります。

---

## システム管理データベースおよびシステム管理クライアント通信の検証

AIX には管理クライアントがないため、Windows 管理クライアントと AIX データベース間の接続を構成する必要があります。管理クライアントをリモート・データベースに接続する方法は 2 つあります。

- RMI サーバーを介して接続する (193 ページの『第 17 章 RMI サーバーの構成』を参照)。
- 151 ページの『リモート管理データベースへの管理クライアントの接続』に記載のステップに従って接続を定義する。

---

## 低レベル接続テストの実行

Enterprise Information Portal 統合コネクタと Content Manager バージョン 8 コネクタが正しくインストールされていることを検証し、このセクションに指示されているサンプル・プログラムを実行します。

### テストを実行する前に

接続テストを実行する前に、次のことを行います。

- 1. EIP アプリケーション開発作業に使用されるユーザー ID はいずれも、db2 インスタンス・ユーザー ID が属しているグループ (たとえば、**db2iadm1** という、db2inst1 が属しているグループ) のものでなければなりません。
- 2. **icmadm**in としてログインします。EIP サンプル・プログラムを実行するために、以下のセットアップを実行します。java サンプルを、ホーム・ディレクトリから離れたローカル・ディレクト eipsamps にコピーします。

```
$ cp -R /usr/lpp/cmb/samples/java $HOME/eipsamps
```

これにより、ファイルの所有権も現行ユーザーに変更されます。

- 3. 適切な Enterprise Information Portal 開発環境が用意できているか確認します。EIP アプリケーション開発作業を実行するユーザーの .profile に、以下の 2 行を追加してください。ピリオド (.) と最初のスラッシュ (/) との間にスペースが入っていることに注意してください。



```

__ a. DB2 環境を確立します。
 $. /home/db2inst1/sqllib/db2profile
__ b. EIP 環境を確立します。
 $. /usr/lpp/cmb/bin/cmbenv81.sh

```

## 接続テストの実行

次の 2 つのテストを実行します。

### \_\_ 1. 統合コネクター・テスト:

```

$ cd $HOME/eipsamps/java/fed
$ javac TConnectFed.java
$ java TConnectFed icmnlbdb icmadmin password

```

予想される出力:

```

$ java TConnectFed icmnlbdb icmadmin password
*** connecting to datastore : icmnlbdb
*** datastore connected ***
user icmadmin dsName icmnlbdb
datastore disconnected
user icmadmin dsName icmnlbdb

```

### \_\_ 2. Content Manager V8 コネクター・テスト:

```

$ cd $HOME/eipsamps/java/icm
$ javac SConnectDisconnectICM.java
$ java SConnectDisconnectICM icmnlbdb icmadmin password

```

予想される出力:

```

$ java SConnectDisconnectICM icmnlbdb icmadmin password
=====
IBM Enterprise Information Portal v8
Sample Program: SConnectDisconnectICM

Database: icmnlbdb
UserName: icmadmin
=====
Connecting to datastore (Database 'icmnlbdb', UserName
'icmadmin')...
Connected to datastore (Database 'icmnlbdb', UserName
'icmadmin').
Disconnecting from datastore & destroying reference...
Disconnected from datastore & destroying reference.
=====
Sample program completed.
=====

```

以下のタイプのエラーが発生した場合:

```
TConnectFed.java:33: package com.ibm.mm.sdk.common does not
exist
import com.ibm.mm.sdk.common.*;
^
```

忘れずに、EIP 環境を確立します。ピリオド (.) と最初のスラッシュ (/) との間にスペースが入っていることに注意してください。

次を実行します。

```
$. /usr/lpp/cmb/bin/cmbenv81.sh
```

---

## Content Manager バージョン 8 への Enterprise Information Portal 接続の検証

Enterprise Information Portal から Content Manager への接続を検証するには、次のように行います。

- \_\_ 1. Windows システムで、次のようにして Enterprise Information Portal システム管理クライアントを開始します。  
「スタート」->「プログラム」->「Enterprise Information Portal V8.2」->「管理 (Administration)」
- \_\_ 2. ウィンドウの左側で、「サーバー (Servers)」を右クリックして、「新規 (New)」を選択します。
- \_\_ 3. リストから、「Content Manager v8」を選択します。
- \_\_ 4. 以下のように、接続情報を入力します。  
サーバー名 (Server Name): ICMNLSDB
- \_\_ 5. 「接続のテスト (Test Connection)」ボタンをクリックします。
- \_\_ 6. 接続が正常であることが分かるはずです。

## 第 12 章 Solaris の場合の前提条件プログラムのインストールおよびアップデート

このセクションには、次の 2 つの項があります。

- 1. 『Solaris でのソフトウェア前提条件の検証』。システム上にすでにインストール済みの前提条件のレベルの検査方法を説明します。
- 2. 123 ページの『前提条件のインストール/アップデート』。独自に予定された構成に必要な前提条件プログラムのインストールおよび構成方法を詳しく説明します。
  - 実行する必要があるステップは、*Start Here CD* から「Planning Assistant」を使用中に行った選択によって決まります。
  - 「Planning Assistant」により、選択したコンポーネントについてインストールする必要があるプログラムとコンポーネントの出力シート (チェックリスト付き) が作成されます。

このセクションで扱われる前提条件プログラムは、次のものです。

- 123 ページの『Solaris 8 操作環境のパッチ』
- 124 ページの『Sun Forte C++ Compiler バージョン 6.1』
- 124 ページの『IBM DB2 Universal Database』
- 131 ページの『IBM DB2 Net Search Extender (NSE) および Text Information Extender (TIE)』
- 132 ページの『IBM WebSphere Application Server (WAS)』

### Solaris でのソフトウェア前提条件の検証

以下の確認検査を行って、インストールまたはアップデートする必要がある前提条件を判別してください。インストールされていないか、あるいは予想したレベルでない前提条件の場合は、次のセクションを使用してそれらの前提条件をインストールします。

表 23. 基本的な前提条件

| 前提条件                   | 検査方法                              | 予想される値               |
|------------------------|-----------------------------------|----------------------|
| Solaris バージョン 2.8      | uname -r                          | level#: 5.8          |
| Solaris パッチ 108528     | showrev   grep version            | level#: 108528-08 以上 |
| Sun Forte C++ Compiler | pkginfo -l SPR0vws   grep VERSION | level#: 6.1 以上       |

表 23. 基本的な前提条件 (続き)

| 前提条件                                                           | 検査方法                                                                                                          | 予想される値                                                                                                                                                                                                            |
|----------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| DB2 UDB V8.1                                                   | pkginfo -l db2engn71  <br>grep VERSION<br>pkginfo -l db2engn81  <br>grep VERSION                              | level#: 8.1.1.0                                                                                                                                                                                                   |
| DB2 UDB Enterprise Server Edition バージョン 8.1 (フィックスパック 1 を適用済み) | DB2 コマンド・ウィンドウから db2level と入力します。                                                                             | level が SQL08010 か、あるいは「DB2 v8.1.1.27」と示される必要があります。フィックスパック情報が「FixPak "1"」と示され、フィックスパック・レベルがリストされる必要があります。たとえば、「s021124」は、2002 年 11 月 24,2002 日に使用可能であったフィックスパックです。Oracle の場合、フィックスパック・レベルは S021110 以上でなければなりません。 |
| DB2 Text Information Extender v7.2                             | pkginfo -l db2tie72  <br>grep VERSION                                                                         | level#: 7.2.0.0                                                                                                                                                                                                   |
| Net Search Extender (DB2 バージョン 8.1 を使用する場合に必要)                 | DB2 コマンド・ウィンドウから、以下のように入力してテキスト検索プログラムを開始します。<br><br>db2text start<br><br>次に、以下のように入力します。<br><br>db2textlevel | CTE0350 Instance 「DB2」は、レベル ID 「tx9_26a」の DB2 Net Search Extender コード・リリース「tx9_81」を使用します。                                                                                                                         |
| Tivoli Storage Manager API Client バージョン 4.2.1                  | /opt/tivoli/tsm/client/api/samprun<br><br>ここで opt はインストール・ディレクトリです                                            | API Library Version = 4.2.1.0                                                                                                                                                                                     |

表 23. 基本的な前提条件 (続き)

| 前提条件                                         | 検査方法                                                                                                                            | 予想される値                                                                    |
|----------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------|
| Tivoli Storage Manager<br>Server バージョン 4.2.1 | 以下の、TSM Server<br>Administration の Web ページに<br>ログオンします。<br><br>http://<hostname>:1580<br><br>ここで、<hostname> は TSM<br>サーバーの名前です。 | バージョンが Web ページ<br>に示されます。「Version<br>4, Release2, Level1.0」と示<br>されるはずです。 |
|                                              | grep /version<br>/opt/WebSphere/AppServer<br>/properties/com/ibm<br>/websphere/product.xml                                      | <version>4.0.3 </version>                                                 |

## 前提条件のインストール/アップデート

以下のセクションでは、フィックスパック、それらのインストール方法、インストール後のそれらの検証方法を含め、各前提条件のインストール方法を説明します。

前提条件をインストールする際の経験法則は、基本コンポーネントのインストール後に必ずフィックスパックを適用することです。たとえば、DB2 インストールで DB2 UDB Application Development Client が見つからない場合、最初にこのコンポーネントをインストールしてから、フィックスパック・コードをインストールしてください。そうでない場合は、新しい DB2 コンポーネントを追加後にフィックスパック・コードを再度インストールする必要があります。

## Solaris 8 操作環境のパッチ

ご使用のシステム上に Solaris バージョン 2.8 がインストールされている必要があります。そのことを前提として、SunSolve Online の Web サイトを使用して、必要なパッチ (108528) をダウンロードできます。以下の SunSolve ダウンロード・サイトで提供されているダウンロードおよびインストールの手順に従います。

<http://sunsolve.sun.com/pub-cgi/show.pl?target=patches/patch-access>

パッチのインストールを検証するために、次のように showrev コマンドを再実行します。

```
showrev | grep version
```

以下のように表示されるはずです。

```
108528-08 (or later)
```

## Sun Forte C++ Compiler バージョン 6.1

システム上で Forte C++ Compiler が使用可能になっている必要があります。そのことは、以下のコマンドを使用して検証できます。

```
pkginfo -l SP00vws | grep VERSION
```

Forte C++ Compiler がインストールされている場合は、以下が表示されます。

```
VERSION: 6.1
```

## IBM DB2 Universal Database

サーバー・データベースに DB2 を使用する場合、Content Manager バージョン 8 リリース 2 サーバーに IBM DB2 Universal Database Enterprise Edition バージョン 7.2 または Enterprise Extended Edition バージョン 7.2.1 以上が必要です。IBM DB2 Universal Database Enterprise Server Edition バージョン 8.1 (フィックスパック1 コード・レベルのもの) は Content Manager パッケージに付属しています。

### IBM DB2 Universal Database のインストールを始める前に

IBM DB2 Universal Database のインストールを始める前に、次のステップを実行します。

1. インストールに必要なメモリーおよびディスク・スペースがあることを確認します。要件については、下記にある DB2 オンライン・サポート Web サイトで DB2 製品資料を参照してください。

```
www.ibm.com/cgi-bin/db2www/data/db2/udb/win02unix/support
/v8pubs.d2w/en_main
```

2. 前のバージョンの DB2 がすでにマシン上にインストールされていないか確認します。前のバージョンの DB2 がインストールされている場合、インストールされているバージョンによって、サーバーとインスタンスをマイグレーションする必要があります。この場合、以下の手順は行いません。その代わりに、下記にある DB2 オンライン・サポート Web サイトで DB2 製品資料を参照してください。

```
www.ibm.com/cgi-bin/db2www/data/db2/udb/win02unix/support
/v8pubs.d2w/en_main
```

3. ご使用の DB2 データベース・サーバーは、WebSphere Application Server と同じマシン上に常駐します。この構成と、これらの説明書に記載されたデフォルト設定の使用は、開発環境および小さな実稼働環境にのみ適しています。DB2 Server をリモート・マシン上に構成する方が望ましい、大きな環境では、WebSphere Application Server をインストールしたマシンと同じマシン上に DB2 クライアントをインストールして構成し、リモート・データベース接続を検証する必要があります。この構成のインプリメントについて詳しくは、下記のところにある IBM レッドブックの Web サイトで、IBM Redbook, *WebSphere V3.5* ハンドブック を参照してください。

**重要:** WebSphere Application Server をインストールする前に DB2 をインストールしてください。

- 4. パッケージの DB2 CD には、圧縮イメージが含まれています。これを使用する前に、`untar` しなければならない場合があります。

## IBM DB2 Universal Database のインストール

DB2 をインストールするには、以下のステップを実行します。

- 1. スーパーユーザー (root) 権限でマシンにログインしていることを確認します。
- 2. 以下の UNIX カーネル、共用メモリー、およびセマフォ・パラメーターを正しく設定してあるか確認します。

```
MSGMAX
MSGMNB
MSGMAP
MSGMNI
MSGSSZ
MSGTQL
MSGSEG
SHMMAX
SHMSEG
SHMMNI
SEMMNI
SEMMAP
SEMMNS
SEMMNU
SEMUME
```

(これらのパラメーターの適切な値に関する情報を入手するために) 以下の DB2 Online Support Web サイトで、*DB2 Quick Beginnings for UNIX* および関連する DB2 UDB 資料を参照してください。

[www.ibm.com/cgi-bin/db2www/data/db2/udb/winix2unix/support/v8pubs.d2w/en\\_main](http://www.ibm.com/cgi-bin/db2www/data/db2/udb/winix2unix/support/v8pubs.d2w/en_main)

これらの設定をシステム管理者と一緒に検討して、システム上の他のソフトウェア・プログラムに必要な設定と矛盾しないか確認してください。以下のサンプル・ファイルを使用して、これらのパラメーターの設定を更新できます。ファイルは、DB2 Software CD-ROM の `/db2/install/samples` ディレクトリーまたはインストール済み DB2 製品の `/opt/IBMdb2/V8.1/cfg` ディレクトリーにあります。

```
kernel.param.64MB for systems with 64 - 128 MB physical memory
kernel.param.128MB for systems with 128 - 256 MB physical memory
kernel.param.256MB for systems with 256 - 512 MB physical memory
kernel.param.512MB for systems with 512 MB to 1 GB physical memory
```

- a. ご使用のシステムに当てはまるファイルを選択します。
- b. それを `/etc/system` ファイルに追加します。

- \_\_ c. 必要なら SHMMAX パラメーターを変更します (DB2 製品資料に概説されています)。
  - \_\_ d. コマンドを入力してください。  
# touch /reconfigure
  - \_\_ e. マシンを再始動します。
- \_\_ 3. DB2 UDB CD-ROM を挿入し、必要であれば、CD-ROM ドライブをマウントします。
- ヒント:** ほとんどの Solaris システムでは、ボリューム管理デーモン (**vol**) が CD-ROM を自動的かつ迅速にマウントします。これはマシンが再始動する度に行われます。ローカル・マシンで **vol** 処理が実行されていない場合は、Solaris システムの資料で CD-ROM ドライブのマウント方法を調べてください。
- 以下のステップでは、CD-ROM ドライブが /cdrom にマウントされているものと想定しています。
- \_\_ 4. 次のコマンドを入力して、DB2 UDB CD-ROM の正しいディレクトリーに移動します。
- # cd /cdrom/cdrom0
- \_\_ 5. DB Setup Utility を使用して DB2 インストールを開始するために、以下のコマンドを入力します。
- # ./db2setup
- 重要:** DB2 Setup Utility は、bash、Bourne、および Korn シェルと連動します。
- \_\_ 6. 「IBM DB2 セットアップ・ランチパッド (ようこそ)」ウィンドウから、インストールの前提条件およびリリース情報を見ることができます。インストールの前提条件およびリリース情報を検討して最新の緊急情報を入手しなければならない場合があります。「**プロダクトのインストール (Install Products)**」をクリックして、インストールを開始してください。
- \_\_ 7. 「セットアップ (Setup)」ウィンドウがオープンします。「DB2 UDB Enterprise ServerEdition」を選択して、「**次へ (Next)**」をクリックします。
- \_\_ 8. インストールを開始したら、セットアップ・プログラムのプロンプトに従って進みます。
- プロンプトが出たら、「インストールのタイプ (installation type)」として「**標準 (Typical)**」を選択し、Content Manager をサポートするのに必要なすべての DB2 コンポーネントをインストールします。ほとんどのデフォルト・オプションをとることができます (独自の特定の要件がある場合を除く)。
- オンライン・ヘルプを使用して、残りのステップを進むことができます。オンライン・ヘルプを呼び出すには、「**ヘルプ (Help)**」をクリックするか、「**F1**」を押します。いつでも「**キャンセル (Cancel)**」を押して、インストールを終了できま



す。DB2 ファイルがコンピューターにコピーされるのは、「DB2 セットアップ」ウィザードの最後のインストール・パネルで「終了 (Finish)」をクリックした場合だけです。

- 9. CD-ROM ドライブから CD-ROM を取り出す前に、以下のコマンドを入力して CD-ROM をアンマウントします。

```
umount cdrom/cdrom0
```

## DB2 をインストールしてから Content Manager をインストールするまでに 実行するステップ

DB2 をインストール後、以下に示す Content Manager のステップを実行してください。

- 1. スーパーユーザー (root) 権限でマシンにログインしていることを確認します。
- 2. DB2 Instance、DB2 Fenced User、および DB2 Administration Server のホーム・ディレクトリーを作成します。これらのディレクトリー名は、ステップ 7、8 (128 ページ)、および 12 (129 ページ) にリストされている手順で DB2 Instance、DB2 Fenced User、および DB2 Administration Server を構成するときに指定した「ホーム・ディレクトリー (Home Directory)」オプションの値と一致している必要があります。
- 3. 以下のコマンドを入力して、DB2 Setup Utility が入っているディレクトリーに移動します。

```
cd /opt/IBMdbs2/V8.1/install
```
- 4. 以下のコマンドを入力して、DB2 Setup Utility を開始します。

```
./db2setup
```
- 5. 「**DB2 Instance、Administration Server、または Data Links Manager Administrator**」を作成するため (To create a DB2 Instance, an Administration Server, or a Data Links Manager Administrator)」というラベルのオプションの横にある「作成 (Create)」ボタンを強調表示して、「作成 (Create)」を選択し、「戻る (Return)」を押します。
- 6. 「DB2 Services の作成 (Create DB2 Services)」ウィンドウで、「**DB2 Instance の作成 (Create a DB2 Instance)**」オプションを強調表示して、「戻る (Return)」を押します。
- 7. 「DB2 Instance」ウィンドウで、入力または受け入れた値を今後の参照用に残しながら、以下のステップを実行します。
  - a. 「**ユーザー名 (User Name)**」オプションに、ユーザー名を入力するか、デフォルト値を受け入れます。WebSphere Application Server を構成するときにこのユーザー名を指定します。
  - b. ユーザー ID を入力するか、「**デフォルト UID を使用する (Use default UID)**」オプションの横にアスタリスク (\*) が付いていることを確認してデフォルトのユーザー ID を受け入れます。

- \_\_ c. 「グループ名 (Group Name)」 オプションにグループ名を入力するか、デフォルト値を受け入れます。
- \_\_ d. グループ ID を入力するか、「**デフォルト GID を使用する (Use default GID)**」オプションの横にアスタリスク (\*) が付いていることを確認してデフォルトのグループ ID を受け入れます。
- \_\_ e. 「ホーム・ディレクトリー (Home Directory)」オプションにホーム・ディレクトリーを入力するか、デフォルト値を受け入れます。WebSphere Application Server を構成するときにこのディレクトリーを指定します。
- \_\_ f. 「パスワード (Password)」および「**パスワードの検証 (Verify Password)**」オプションにユーザーのパスワードを入力します。DB2 では、最大 8 文字のパスワードが必要です。WebSphere Application Server を構成するときにこのパスワードを指定します。
- \_\_ g. 「OK」を強調表示して、「**戻る (Return)**」を押します。
- \_\_ 8. 「隔離ユーザー (Fenced User)」ウィンドウで、入力または受け入れた値を今後の参照用に書き留めながら、以下のステップを実行します。
  - \_\_ a. 「**ユーザー名 (User Name)**」オプションに、ユーザー名を入力するか、デフォルト値を受け入れます。
  - \_\_ b. ユーザー ID を入力するか、「**デフォルト UID を使用する (Use default UID)**」オプションの横にアスタリスク (\*) が付いていることを確認してデフォルトのユーザー ID を受け入れます。
  - \_\_ c. 「**グループ名 (Group Name)**」オプションに、グループ名を入力するか、デフォルト値を受け入れます。
  - \_\_ d. グループ ID を入力するか、「**デフォルト GID を使用する (Use default GID)**」オプションの横にアスタリスク (\*) が付いていることを確認してデフォルトのグループ ID を受け入れます。
  - \_\_ e. 「**ホーム・ディレクトリー (Home Directory)**」オプションにホーム・ディレクトリーを入力するか、デフォルト値を受け入れます。
  - \_\_ f. 「**パスワード (Password)**」および「**パスワードの検証 (Verify Password)**」オプションにユーザーのパスワードを入力します。DB2 では、最大 8 文字のパスワードが必要です。
  - \_\_ g. 「OK」を強調表示して、「**戻る (Return)**」を押します。
- \_\_ 9. 「DB2 Warehouse Control Database」ウィンドウで、「**DB2 Warehouse Control Database をセットアップしない (Do not set up DB2 Warehouse Control Database)**」というラベルのオプションを強調表示して、「**戻る (Return)**」を押します。
- \_\_ 10. 「OK」を強調表示して、「**戻る (Return)**」を押します。
- \_\_ 11. 「DB2 Services の作成 (Create DB2 Services)」ウィンドウで、「**Administration Server の作成 (Create the Administration Server)**」オプションを強調表示して、「**戻る (Return)**」を押します。

- 12. 「Administration Server」ウィンドウで、入力または受け入れた値を今後の参照用に書き留めながら、以下のステップを実行します。
- a. 「**ユーザー名 (User Name)**」オプションに、ユーザー名を入力するか、デフォルト値を受け入れます。
  - b. ユーザー ID を入力するか、「**デフォルト UID を使用する (Use default UID)**」オプションの横にアスタリスク (\*) が付いていることを確認してデフォルトのユーザー ID を受け入れます。
  - c. 「**グループ名 (Group Name)**」オプションに、グループ名を入力するか、デフォルト値を受け入れます。
  - d. グループ ID を入力するか、「**デフォルト GID を使用する (Use default GID)**」オプションの横にアスタリスク (\*) が付いていることを確認してデフォルトのグループ ID を受け入れます。
  - e. 「**ホーム・ディレクトリー (Home Directory)**」オプションにホーム・ディレクトリーを入力するか、デフォルト値を受け入れます。
  - f. 「**パスワード (Password)**」および「**パスワードの検証 (Verify Password)**」オプションにユーザーのパスワードを入力します。DB2 では、最大 8 文字のパスワードが必要です。
  - g. 「**OK**」を強調表示して、「**戻る (Return)**」を押します。
- 13. 通知ウィンドウで、DB2SYSTEM 環境変数のために作成される値が通知されます。「**OK**」が強調表示されていることを確認し、「**戻る (Return)**」を押します。
- 14. 「DB2 Services の作成 (Create DB2 Services)」ウィンドウで、「**OK**」を強調表示して、「**戻る (Return)**」を押します。
- 15. 「要約レポート (Summary Report)」ウィンドウに、これまでに行った選択が示されます。情報が正しいと確認したら、「**継続 (Continue)**」が強調表示されていることを確認して、「**戻る (Return)**」を押します。
- 16. 警告ウィンドウがオープンして、プロセスを取り消すオプションが示されます。「**OK**」が強調表示されていることを確認し、「**戻る (Return)**」を押します。
- 17. 通知ウィンドウで、プロセスが完了されると通知されます。「**OK**」が強調表示されていることを確認し、「**戻る (Return)**」を押します。
- 18. 「状況報告 (Status Report)」ウィンドウが、プロセスの正常実行および失敗を通知します。特定の失敗の訂正方法については、「**ログ・ファイル (Log File)**」を表示します。このウィンドウを終了するには、「**OK**」が強調表示されていることを確認し、「**戻る (Return)**」を押します。
- 19. 「DB2 セットアップ・ユーティリティ (DB2 Setup Utility)」ウィンドウで「**クローズ (Close)**」を強調表示して、「**戻る (Return)**」を押します。
- 20. 通知ウィンドウで、「**OK**」が強調表示されていることを確認し、「**戻る (Return)**」を押します。

- 21. /etc/group ファイルを編集することによって、Administrative Server の作成中に、root ユーザーを「**グループ名 (Group Name)**」オプションについて受け入れたか、または指定した管理グループのメンバーにします。
- 22. アプリケーションを開発または実行中で、製品ライブラリーおよび組み込みファイルへの絶対パスの指定を回避したい場合は、シンボリック・リンクを作成することを考えてください。以下のコマンドを入力することにより、DB2 ファイル用の、/usr/lib ディレクトリーまでのリンクと、/usr/include ディレクトリーまでの組み込みファイル用のリンクを作成します。
- ```
# /opt/IBMDB2/V8.1/cfg/db2ln
```
- 23. 以下の行をユーザー root の .profile または .dtprofile ファイルに追加することによって、ログイン時に **db2profile** スクリプトを実行するよう root ユーザーを構成します (ユーザー root は Korn または Bourne シェルを使用し、/export/home/db2inst1 はインスタンス所有者の例 db2inst1 のホーム・ディレクトリーであると想定しています)。
- ```
./export/home/db2inst1/sql1lib/db2profile
```
- このアクションは、WebSphere Application Server のインストールおよび実行に必要です。ユーザー root が Korn シェルまたは Bourne シェル以外のシェルを使用する場合は、この情報を適宜変更してください。
- 24. 行った変更が有効になるように、いったんログアウトしてから、再度ログインします。

## IBM DB2 Universal Database インストールの検証

DB2 が正しく機能していることを示すために、サンプル・データベースを作成し、それにアクセスする Java アプリケーションをコンパイルして実行できます。環境が DB2 および IBM Java 2 SDK 用に正しくセットアップされていること、JDBC プロバイダーが Java アプリケーションからアクセス可能であることが分かります。

以下のステップを実行し、サンプル・データベースを作成し、Java アプリケーションをコンパイルして実行します。

- 1. DB2 インスタンス所有者 **db2inst1** としてログインしていることを確認します。
- 2. 以下のように、echo コマンドを使用して DB2INSTANCE 環境変数の値を検証することにより、DB2 環境が正しくセットアップされていることを確認します。

```
$ echo $DB2INSTANCE
```

**db2inst1** という値が返されれば、正しくセットアップされています。

- 3. インスタンス所有者 /export/home/db2inst1 のホーム・ディレクトリーが書き込み許可を持っていることを確認します。
- 4. 次のように db2sampl スクリプトを実行して、サンプル・データベースを作成します。

```
$ db2sampl
```

このプロセスは、完了するのに数分かかることがあります。

— 5. インスタンス所有者のホーム・ディレクトリー /export/home/db2inst1 に入っていることを確認します。

— 6. 次のように javac コマンドを使用して、Java アプリケーションの例をコンパイルします。

```
$ javac -d . sqllib/samples/java/DB2App1.java
```

その結果生じるクラス・ファイルは、ローカル・ディレクトリーに作成されます。

— 7. 次のように db2start コマンドを使用して DB2 を開始します。

```
$ db2start
```

— 8. 次のように java コマンドを使用して、Java サンプルを実行します。

```
$ java DB2App1
```

正しい出力は、以下のようになります。

```
Retrieve some data from the database...
Received results:
empno= 000010 firstname= CHRISTINE
empno= 000020 firstname= MICHAEL
empno= 000030 firstname= SALLY
. . .
Update the database...
Changed 1 row.
```

## IBM DB2 Net Search Extender (NSE) および Text Information Extender (TIE)

DB2 バージョン 7 Text Information Extender (TIE) の高度なテキスト検索機能は Net Search Extender (NSE) バージョン 8 にマージされます。Content Manager の (オプションの) テキスト検索機能を使用する予定の場合、次のものをインストールする必要があります。

IBM Text Information Extender (TIE)、バージョン 7.2 (IBM DB2 Enterprise Edition バージョン 7.2 および Enterprise Extended Edition バージョン 7.2.1 付き)

または

IBM Net Search Extender (NSE)、バージョン 8 (IBM DB2 Enterprise Server Edition、バージョン 8.1 付き)

IBM Net Search Extender (NSE)、バージョン 8 は、Content Manager、バージョン 8.2 と一緒にパッケージに入れて提供されます。

### IBM DB2 NSE のインストール

DB2 Net Search Extender (NSE) と一緒に提供される資料 CD に入っているインストール手順を参照してください。

ライブラリー・サーバーと同じワークステーション上に NSE をインストールする必要があります。

### DB2 NSE インストールの検証

NSE インストールが適切であるか検証するために、DB2 が開始されていることを確認し、以下のコマンドを実行して DB2 NSE を開始します。

```
db2text start
```

以下のように表示されるはずです。

```
CTE0001 Operation completed successfully.
```

## IBM WebSphere Application Server (WAS)

### IBM WebSphere Application Server のインストール

IBM WebSphere Application Server をインストールするには、このセクションを使用します。

1. Application Server の構成については、以下のサイトの WebSphere 5.0 InfoCenter オンライン資料をご使用の言語で入手できます。  
<http://www.ibm.com/software/webservers/appserv/infocenter.html>
2. 「バージョン 5 InfoCenters:」というセクションの、「分散オペレーティング・システムの **Application Server (Application Server for distributed operating systems)**」の横にあるドロップダウン・ボックスで、ご使用の言語を選択します。
3. WebSphere InfoCenter の左のナビゲーション・パネルで「始めに (Getting Started)」->「WebSphere Application Server のインストール (Installing WebSphere Application Server)」->「製品のインストール (Installing the product)」を展開します。
4. ご使用のオペレーティング・システムに当てはまったところで、右のパネルに表示される WebSphere のインストール手順に従います。

### インストールの検証

WebSphere のインストールを検証するには、(上記のインストール手順中に開いた) WebSphere InfoCenter の「始めに (Getting Started)」->「WebSphere Application Server のインストール (Installing WebSphere Application Server)」->「インストール検証ステップの使用 (Using the installation verification steps)」に記載されている情報を使用します。

## MQSeries Workflow の Solaris へのインストール

### 前提条件

- Solaris バージョン 2.8 以上
- IBM WebSphere MQSeries for Solaris バージョン 5.3.0.1 以上

- IBM DB2 Universal Database for AIX バージョン 7.2 以上

## ユーザーおよびグループの作成

1. root としてログオンします。
2. コマンド `groupadd fmcgrp` を入力します。
3. MQSeries Administrator `mqm` が存在することを確認します。
4. DB2 データベース管理者グループ `db2iadm1` が存在することを確認します。  
存在しない場合は、DB2 が正しくインストールされているか検査してください。  
DB2 の管理グループにデフォルト以外の名前を指定している場合は、デフォルトの `db2iadm1` が出てくるたびに指定した名前に置き換える必要があるので注意してください。
5. 次のステップに従って、MQ Workflow の管理ユーザーを作成します。MQ Workflow Administration ユーザー ID (たとえば `fmc`) は MQSeries および DB2 の管理権限を持っている必要があることに注意してください。以下のコマンドを使用して、ユーザーを作成します。以下の例では、`db2` インスタンスは `db2iadm1` グループのものであると想定しています。

```
useradd -g fmcgrp -G mqm,db2iadm1 -d /export/home
/fmc -s /usr/bin/ksh -m fmc
```

6. コマンド `passwd fmc` を使用して、ユーザー `fmc` のパスワードを設定します。
7. ロケール情報を含むように、`fmc` のログイン・ファイルを変更します。たとえば、次のようにします。

```
export LANG=en_US
```

MQSeries Workflow ランタイムは、メッセージ・バンドルを検索するのにそのロケール情報を必要とします。

8. `fmc` のプロファイルで `db2` 環境の使用を設定します。これは、MQSeries Workflow ランタイム・データベースを所有する `db2` インスタンスの `db2profile` を `fmc` のプロファイルに組み込むと、実現できます。たとえば、`fmc` のプロファイルに以下のものを組み込みます。この例では、`db2inst1` はインスタンス所有者であり、`db2inst1` は MQSeries Workflow ランタイム・データベースに使用されるものと想定しています。

```
export DB2INSTANCE=db2inst1

if [-e /home/$DB2INSTANCE/sql1lib/db2profile];
then . /home/$DB2INSTANCE/sql1lib/db2profile fi
```

## MQ Workflow の Solaris へのインストール

MQSeries Workflow ランタイム・データは、特に指定のない限り、`/var/fmc` を使用します。使用法により、100MB ~ 400MB のディスク・スペースが必要になります。インストールを試みる前に、システムに十分なディスク・スペースがあるか調べてください。

1. root として Solaris システムにログオンします。
2. MQ Workflow インストール・ディスクを CD-ROM ドライブに挿入します。
3. CD-ROM の WFInstall ディレクトリーに入っているすべてのファイルを一時ディレクトリー (たとえば /tmp/WFInstall) にコピーします。
4. 以下の構成セッションのほか、このインストールのロケールを指定します。たとえば、LANG=en\_US と指定します。
5. CMBWFSUNInstall.sh を使用して MQSeries Workflow をインストールします。たとえば、CMBWFSUNInstall.sh/cdrom/fmc-3.4.0.pkg と入力します。**制約事項:** admintool を使用して MQSeries Workflow for Solaris をインストールすることはできません。

**重要:** 以下のカーネル構成パラメーター情報は、MQSeries Workflow 3.3 マニュアルから取られます。使用できるその他の推奨更新がないか、MQSeries Workflow 3.4 を調べます。

### カーネル構成パラメーター

以下は、Sun Solaris カーネル構成パラメーターの推奨値です。以下に、マニュアル「*IBM DB2 Connect:Quick Beginnings*」および「*MQSeries for Sun Solaris: Quick Beginnings*」からの要件を要約します。

- set msgsys:msginfo\_msgmax =65535
- set msgsys:msginfo\_msgmnb =65535
- set msgsys:msginfo\_msgmap =1026
- set msgsys:msginfo\_msgmni =256
- set msgsys:msginfo\_msgssz =16
- set msgsys:msginfo\_msgtql =1024
- set msgsys:msginfo\_msgseg =32767
- set shmsys:shminfo\_shmmax = 483183820 (ご使用の物理メモリーの 90%)
- set shmsys:shminfo\_shmseg =1024
- et shmsys:shminfo\_shmmni = 1024
- set shmsys:shminfo\_shmmni =1
- set semsys:seminfo\_semaem =16384
- set semsys:seminfo\_semvmx =32767
- set semsys:seminfo\_semmni = 1024 (semmni < semmns)
- set semsys:seminfo\_semmap =1026 (semmni +2)
- et semsys:seminfo\_semmns = 16384
- set semsys:seminfo\_semmns = 100 set semsys:seminfo\_semopm = 100
- set semsys:seminfo\_semmnu =2048
- set semsys:seminfo\_semtime =256



- `set maxusers = 32` (これは最小値で、これより大きい数値が望ましい。)

**注:** `maxusers` のデフォルトは、MB 単位のメイン・メモリーのサイズから 2 をマイナスしたものです。たとえば、512 MB のメモリーがある場合、`maxusers` のデフォルトは 510 です。`/etc/system` ファイルから `set maxusers` コマンドを除外できます。

## Solaris での MQWorkflow の構成

1. まだ `root` としてログオンしている間に、`CMBWFConfig.SUN.dat` ファイルを見つけ、編集のために開きます。
2. `MQCommunicationAddress` 項目を更新して、ローカル・ホストをご使用のマシン名または IP アドレスで置き換えます。たとえば、次のようにします。  
`MQCommunicationAddress=hayes.svl.ibm.com`
3. `fmc` が `db2inst1` を使用しない場合、以下の項目を更新して、適切な `db2` インスタンス所有者を反映させます。  
`RTDB2Instance, RTDB2LocalInstance, RTDatabaseContainerDirectory,`  
`RTDatabaseLocation, RTDatabaseLogLocation`
4. MQ Workflow のデフォルト・キュー・マネージャーはポート 5010 を `listen` しています。`/etc/services` が使用されているかどうか調べてください。必要なら、ファイル内の `MQPort` 項目を別の番号に更新します。
5. 編集した `CMBWFConfig.SUN.dat` ファイルを保管します。
6. 必ず、`fmc` ユーザーが構成ログ・ファイルをこのディレクトリーに書き込めるだけでなく、それらの EIP 構成ファイルを読み取って実行できるようにします。
7. 構成スクリプトが `fmc` に対して `su` するときに `fmc` ユーザーの `.profile` にエラーがないことを確認します。
8. `root` の下で `CMBWFSUNConfig.sh` を実行します。`fmc` のパスワードを入力するようプロンプトが出ます。このスクリプトにより、MQSeries Workflow FMC 構成、MQSeries Workflow ランタイム・データベース `FMCDB`、`FMCQM` キュー・マネージャーが作成され、EIP ワークフロー・コンテナ・データ構造が定義されます。  
**ヒント:** MQSeries Workflow マニュアルで MQSeries Workflow のユーティリティー `fmczkcfcg` および `fmczutil` の参照箇所を見つけてください。MQSeries Workflow 構成のカスタマイズ方法が詳しく説明してあります。MQSeries Workflow FMC 構成および `FMCQM` キュー・マネージャーでのみ機能するデフォルトは EIP であることに注意してください。MQSeries Workflow 構成でこれらの設定を変更しないでください。
9. `dspmq` と入力します。システムに登録されている `FMCQM` キュー・マネージャーが表示されるはずです。たとえば、次のように示されます。  
`QMNAME(FMCQM) STATUS(Ended normally)`
10. `fmczkcfcg -o=1` と入力します。システムに登録されている MQSeries Workflow FMC 構成が表示されるはずです。たとえば、次のように示されます。

- FMC33611I The following configurations are defined: FMC

これで、EIP ワークフローに合わせた MQSeries Workflow のカスタマイズは完了です。

## Solaris での EIP ワークフローの開始

EIP Advanced ワークフローは、MQSeries Workflow を、ワークフロー機能を送達するための基本となるワークフロー・エンジンとして使用します。そのため、EIP ワークフローを開始するのに、MQSeries Workflow を開始するステップが必要です。

1. `fmc` としてログオンします。
2. MQSeries Workflow を開始するために、`CMBWFSUNStart.sh` と入力します。MQSeries Workflow の開始中にコンソール・メッセージへの報告が表示されます。
3. EIP コレクション・ポイント・モニターを開始するために EIP Administrator ユーザー ID (たとえば `icmadmin`) とパスワードの入力を求めるプロンプトが出ます。

EIP コレクション・ポイント・モニターは、その開始状況をコンソールを通じて報告します。`CMBWFSUNStart.sh` が `cmbupes81.sh` を呼び出して、それにユーザー ID とパスワードを与える行を変更できます。そうすると、次に `CMBWFSUNStart.sh` スクリプトを実行したときにユーザー ID とパスワードを求めるプロンプトが出なくなります。`cmbupes81.sh nh` と入力すると、可能なオプションが表示されます。

**ヒント:** コレクション・ポイント機能が必要でない場合は、「quit」と入力して UPES サーバーをシャットダウンしてください。UPES サーバーをシャットダウンしても、MQSeries Workflow はシャットダウンされません。

**ヒント:** デフォルトの MQSeries Workflow システム管理者 (構成管理者ではない) ID は ADMIN で、「password」というデフォルトのパスワードを持つものです。セキュリティ上の理由から、これは後で変更する必要があります。これを変更するには、最初に MQSeries Workflow を開始し、`fmcautil` ユーティリティを使用して、Workflow システムに接続してパスワードを変更します。パスワードの変更が済んだら、必ず `CMBWFSUNStart.sh` を変更して、行った変更を反映させます。以下にその手順を示します。

1. `fmcautil nh admin np password`
2. 「u, p」を選択してパスワードを変更し、ユーティリティを終了します。
3. `CMBWFAIXStart.sh` を更新します。たとえば、次のようにします。  
`fmcxspea -y=$ConfigurationID -u=$RunTimeAdminID -p=myPassword -f &`

---

## 第 13 章 Solaris でのプリインストール手順の実行

Content Manager and Enterprise Information Portal をインストールする前に、すべての必要な前提条件をインストールするほかに、以下の作業を完了する必要があります。

- 『正しいバージョンの Java の確認』
- 『ユーザー ID の作成』
- 139 ページの『新しいユーザー ID の .profiles の更新』
- 139 ページの『Content Manager 環境設定に合わせた userprofile ファイルの作成』
- 140 ページの『インストールを始める前のデータベース環境の確立』

Content Manager V8 ソフトウェアの以前のインストールが残っている場合は、必ず、製品をアンインストールして、環境をクリーンアップしてください。構成ファイルなど一部の製品ファイルやデータベースは、アンインストール後も意図的に残されています。このことが、インストールが正常に行われるかどうかに影響する場合があります。

---

### 正しいバージョンの Java の確認

正しいバージョンの Java を使用しているか確認するには、以下のコマンドを実行します。

```
java -version
```

Java バージョン 1.3.0 以上が使用されていることを確認してください。

```
java version "1.3.1_02"
```

---

### ユーザー ID の作成

以下のように、Enterprise Information Portal で使用するためにユーザー ID を作成する必要があります。

- このワークステーション上にライブラリー・サーバーをインストールする場合は、ライブラリー・サーバー「管理」ユーザー ID (たとえば icmadmin)。このユーザー ID は、DB2 Admin グループに属するものでなければなりません。
- このワークステーション上にライブラリー・サーバーをインストールする場合は「データベース接続」ユーザー ID (たとえば icmconct)。(これは、DB2 Admin グループに属するものではなく、通常の特権を持つ通常のユーザー ID でなければなりません。

icmadmin ユーザー ID は DB2 Admin グループの一部でなければなりません。以下のステップに従って、各ユーザーを db2iadml という名前の db2 管理サーバー・グループ (すなわち、db2 インスタンスのために使用されるのと同じグループ) の一部として作成します。

\_\_ 1. 次のようにして、ユーザー ID を作成します。

```
useradd -g staff -G db2iadml
icmadminuseradd -g staff -G db2iadml
```

\_\_ 2. 初期パスワードを割り当てます。簡単にするために、パスワード値を「password」に設定します。最初のログインでパスワードの変更を求めるプロンプトは出ません。) 新規ユーザーとしてログオンしていても、以下のコマンドを実行すると、後でパスワードを変更できます。(ここでの説明を容易にするために、パスワード値は「password」のままにしておきます。)

```
passwd icmadmin
passwd icmconct
```

\_\_ 3. 追加ユーザーについて初期ログインを実行します。追加ユーザーについてパスワードの変更を求めるプロンプトが出されます。

```
login icmadmin
login icmconct
```

**重要:** インストール時に入力できるように、これらのユーザー ID とそれぞれのパスワードを覚えておく必要があります。インストール中 (それらの入力が必要な時点で) にそれらを思い出していただきます。それらの名前をここに書き留めてください。

表 24. 管理および接続 ID

|                               | デフォルト名/情報 | ご使用の値をここに記録します |
|-------------------------------|-----------|----------------|
| ライブラリー・サーバーのデータベース管理 ID       | icmadmin  |                |
| ライブラリー・サーバーのデータベース管理 ID パスワード |           |                |
| データベース接続 ID                   | icmconct  |                |
| データベース接続 ID パスワード             |           |                |
|                               |           |                |
|                               |           |                |

---

## 新しいユーザー ID の .profiles の更新

/export/home/icmadmin/.profile ファイルおよび /export/home/rmadmin/.profile ファイルに、以下の行を追加します。

```
. /export/home/db2inst1/sqlllib/db2profile
```

ピリオド (.) と最初のスラッシュ (/) との間にスペースが入っていることに注意してください。これにより、ユーザーを db2inst1 DB2 インスタンスと関連付ける DB2 環境が確立されます。

---

## DB2 インスタンスの profile.env ファイルの更新

データがまだファイルに入っていない場合は、以下の行を /export/home/db2inst1/sqlllib/profile.env ファイルに追加します。

```
DB2ENVLIST='LIBPATH ICMROOT ICMDDL ICMCOMP CMCOMMON'
DB2COMM='tcPIP'
DB2AUTOSTART='TRUE'
```

---

## Content Manager 環境設定に合わせた userprofile ファイルの作成

/export/home/db2inst1/sqlllib/userprofile というファイルを作成するか、ファイルを更新して、以下の情報を含めます。

```
ICMROOT=/opt/IBMicm
ICMDLL=/export/home/db2fenc1
ICMCOMP=/opt/SUNWspro/bin
CMCOMMON=/opt/IBMcmb/cmgmt
PATH=$PATH:$ICMROOT/bin/DB2
LD_LIBRARY_PATH=$ICMROOT/lib:$ICMROOT/inso:$LD_LIBRARY_PATH
export ICMROOT ICMDDL ICMCOMP CMCOMMON PATHLD_LIBRARY_PATH
```

/export/home/db2inst1/sqlllib/db2profile を変更しないでください。このファイルは、DB2 フィックスパックの適用により上書きされる可能性があるためです。その代わりに、次のことを行います。

1. userprofile に必要な変更を入れます。
2. db2profile は、呼び出されると、userprofile を実行します。
3. db2profile が userprofile を実行すると、userprofile に追加されたすべての設定が、db2profile をエクスポートするプロファイルを持つユーザーに合わせて設定されます。

---

## インストールを始める前のデータベース環境の確立

以下の手順で sqllib ディレクトリー内に userprofile をセットアップして、CM 用の DB2 環境を確立することは**極めて重要**です。db2profile を実行すると、PATH および CLASSPATH が設定され、CM が使用する DB2 インスタンスも識別されます。

```
. /export/home/db2inst1/sqllib/db2profile
```

CM をインストールする前に、上記が root として実行されていることを確認してください。このステップは、必ず、実行してください。実行しないと、**Content Manager** は正常にインストールされません。

---

## 第 14 章 Solaris での Enterprise Information Portal コンポーネントのインストール

EIP コンポーネントは、`cmbsuninst.sh` という名前のコマンド行インストール・プログラムを使用して Solaris にインストールされます。このプログラムでは、以下の 6 つのオプションを提供しています。

1. インストールおよび構成 (Install and configure)
2. インストールのみ (Install only)
3. アンインストール (Uninstall)
4. 構成 (Configure)
5. インストール済みコンポーネントのリスト (List installed components)
6. 終了 (Quit)

表 25 には、EIP コンポーネントのインストール・パッケージ名とその説明が示されています。Uninstall Base パッケージおよび Development Toolkit Base のパッケージは、すべてのコンポーネント・パッケージとともにインストールされます。

表 25. EIP インストール・パッケージ

| パッケージ                    | 説明                                                       |
|--------------------------|----------------------------------------------------------|
| アプリケーション<br>cmbcomub     | Content Manager EIP バージョン 8.2 Uninstall Base             |
| アプリケーション<br>cmbcomdtb    | Content Manager EIP バージョン 8.2 Development Toolkit Base   |
| 1: アプリケーション<br>cmbfedc   | Content Manager EIP バージョン 8.2 Federated コネクター            |
| 2: アプリケーション<br>cmbrdbc   | Content Manager EIP バージョン 8.2 リレーショナル・データベース・コネクター       |
| 3: アプリケーション<br>cmbdlc    | Content Manager EIP バージョン 8.2 CM V7 コネクター                |
| 4: アプリケーション<br>cmbodc    | Content Manager EIP バージョン 8.2 OnDemand コネクター             |
| 5: アプリケーション<br>cmbip390c | Content Manager EIP バージョン 8.2 ImagePlus for OS/390 コネクター |
| 6: アプリケーション<br>cmbas400c | Content Manager EIP バージョン 8.2 AS/400 コネクター               |

表 25. EIP インストール・パッケージ (続き)

| パッケージ                    | 説明                                                          |
|--------------------------|-------------------------------------------------------------|
| 7: アプリケーション<br>cmbddc    | Content Manager EIP バージョン 8.2 Domino .Doc コネクタ              |
| 8: アプリケーション<br>cmbesc    | Content Manager EIP バージョン 8.2 Extended Search コネクター         |
| 9: アプリケーション<br>cmbicc    | Content Manager EIP バージョン 8.2 Information Catalog コネクター     |
| 10: application cmbcmc   | Content Manager EIP バージョン 8.2 Content Manager バージョン 8 コネクター |
| 11: アプリケーション<br>cmbgcs   | IBM Web Crawler                                             |
| 12: アプリケーション<br>cmbikfsv | Content Manager EIP バージョン 8.2 Information Mining            |
| 13: アプリケーション<br>cmbic    | Content Manager EIP バージョン 8.2 Information Center            |
| 14: アプリケーション<br>cmbddb   | Content Manager EIP バージョン 8.2 システム管理データベース                  |

## EIP コンポーネント・パッケージのインストール

EIP のインストールを始める前に、必ず、137 ページの『第 13 章 Solaris でのプリインストール手順の実行』にリストされているすべての作業を実行してください。

インストール・プログラムを開始するには、インストール・ディレクトリーに移動して、コマンド・プロンプトで `./cmbsuninst.sh` と入力します。プログラムは、DISPLAY 環境変数が設定されているかどうかを確認します。プログラム使用条件の確認ウィンドウが表示されます。「同意する (ACCEPT)」を選択してインストールを続けるか、「同意しない (DECLINE)」を選択して終了します。**要件:** 使用許諾契約書は GUI パネルであるため、EIP をインストールするためには、ディスプレイをローカル・システムにエクスポートする必要があります。

前提条件が検出されると、プログラムは以下の 6 つのインストール・オプションを表示します。

1. インストールおよび構成 (Install and configure)
2. インストールのみ (Install only)
3. アンインストール (Uninstall)
4. 構成 (Configure)
5. インストール済みコンポーネントのリスト (List installed components)



## 6. 終了 (Quit)

インストール・オプション番号を入力し、システム・プロンプトに従います。デフォルト・オプションは「1. インストールおよび構成 (Install and configure)」です。

## 1. インストールおよび構成 (Install and configure)

1. インストールおよび構成 (Install and Configure) を入力すると、プログラムはインストールおよび構成のタイプを選択するようプロンプトを出します。

1. すべてのコンポーネントのインストールおよび構成 (Install and configure all components)
2. 選択したコンポーネントのインストールおよび構成 (Install and configure selected components)
3. 再始動 (Restart)
4. 終了 (Quit)

1 または 2 と入力して、EIP コンポーネント・パッケージのインストールおよび構成を開始してください。

プログラムは、141 ページの表 25 に示されているコンポーネント・インストール・パッケージを表示します。インストール・オプション 2. 選択したコンポーネントのインストールおよび構成 (Install and configure selected component) を選択した場合には、プログラムによって入力行が表示されるので、インストールおよび構成を行うべきパッケージ番号を入力してください。パッケージ番号を区切るには、スペースやコンマを使用します。

システム・プロンプトに従って、すべてのコンポーネント・パッケージまたは選択されたコンポーネント・パッケージを検査し、受け入れてください。プログラムは、ユーザー入力を行わずにサーバーにパッケージをインストールします。プログラムがプロンプトを出すのは、構成情報に関する場合です。

すべてのパッケージが、エラーなくインストールおよび構成された場合には、インストールは成功です。インストールが失敗した場合には、プログラムによって通知されるので、選択したパッケージをアンインストールし、出力をログ・ファイルに送信してください。

プログラムは、すべてのインストール情報およびアンインストール情報をコンソールに書き込み、さらに、/tmp/cmb/cmbinst.log のログ・ファイルにも書き込みます。

## 2. インストールのみ (Install Only)

2. インストールのみ (Install Only) を選択すると、プログラムによって、インストールのタイプを選択するようプロンプトが出されます。

1. すべてのコンポーネントのインストール (Install all components)

2. 選択したコンポーネントのインストール (Install selected components)
3. 再始動 (Restart)
4. 終了 (Quit)

1 または 2 と入力して、EIP コンポーネント・パッケージのインストールを開始してください。プログラムは、141 ページの表 25 に示されているコンポーネント・インストール・パッケージを表示します。オプション 2 を選択した場合には、プログラムによって入力行が表示されるので、インストールするパッケージ番号を入力してください。パッケージ番号を区切るには、スペースやコンマを使用します。

システム・プロンプトに従って、すべてのコンポーネント・パッケージまたは選択されたコンポーネント・パッケージを検査し、受け入れてください。プログラムは、ユーザー入力を行わずにサーバーにパッケージを追加します。

パッケージがエラーなくインストールされた場合には、インストールは成功です。インストールが失敗した場合は、インストールが続けられ、選択したコンポーネントすべてについて試行されます。出力はログ・ファイルに送られます。プログラムは、すべてのインストール情報をコンソールに書き込み、さらに、 /tmp/cmb/cmbuninst.log にあるログ・ファイルにも書き込みます。

### 3. アンインストール (Uninstall)

オプション 3. アンインストール (Uninstall) を選択すると、プログラムによって、アンインストールのタイプを選択するようプロンプトが出されます。

1. すべてのコンポーネントのアンインストール (Uninstall all components)
2. 選択されたコンポーネントのアンインストール (Uninstall selected components)
3. 再始動 (Restart)
4. 終了 (Quit)

1 または 2 と入力して、EIP コンポーネント・パッケージのアンインストールを開始してください。オプション 2 を選択した場合には、プログラムによって入力行が表示されるので、アンインストールするパッケージ番号を入力してください。パッケージ番号を区切るには、スペースやコンマを使用します。

選択したコンポーネントのアンインストールが失敗した場合、プログラムは、選択したコンポーネントすべてについてアンインストールを実行するまで、処理を継続します。

### 4. 構成 (Configure)

4. 構成 (Configure) を選択すると、プログラムによって、構成のタイプを選択するようプロンプトが出されます。

1. すべてのコンポーネントの構成 (Configure all components)
2. 選択したコンポーネントの構成 (Configure selected components)

3. 再始動 (Restart)

4. 終了 (Quit)

1 または 2 と入力して、インストール済みコンポーネントの構成を開始してください。構成プログラムには、ユーザー入力が必要です。

構成が終了すると、「構成の終了 (Configuration Completed)」ウィンドウが表示され、ログ・ファイル /tmp/cmb/cmbinst.log にエラーがないかチェックするよう指示されます。

## 5. インストール済みコンポーネントのリスト (List installed components)

インストール・プログラムは、すべての EIP コンポーネントを表示します。すでにインストールされているコンポーネントは、隣にアスタリスクが付けられます。これで、プログラムは終了します。

## 6. 終了 (Quit)

オプション 6 を選択すると、インストール・プログラムは終了します。

---

## Solaris でのクラスパス、環境変数のエクスポート

EIP を使用する前に、構成プログラムを使用してクラスパス、環境変数およびその他の情報をエクスポートする必要があります。

1. /opt/IBMcmb/bin に移動します。
2. . ./cmbenv81.sh と入力します。

---

## EIP インストールの検証

147 ページの『第 15 章 Solaris での Enterprise Information Portal の正常なインストールの検証』を参照。



---

## 第 15 章 Solaris での Enterprise Information Portal の正常なインストールの検証

このセクションに記載されている情報を使用して、Solaris システム上に Enterprise Information Portal が正常にインストールされているか検証します。以下の手順が記載されています。

- 『Enterprise Information Portal First Steps』
- 『Enterprise Information Portal システム管理データベースの検証』
- 148 ページの『システム管理データベースおよびシステム管理クライアント通信の検証』
- 148 ページの『低レベル接続テストの実行』
- 150 ページの『Content Manager バージョン 8 への Enterprise Information Portal 接続の検証』

---

### Enterprise Information Portal First Steps

Enterprise Information Portal First Steps プログラムにより、サンプル・データを Enterprise Information Portal システム管理データベースにロードできます。Enterprise Information Portal のすべてのコンポーネントが 1 つのシステム上にインストールするか、それとも複数のシステムにインストールするかにより、実行する First Steps の手順が異なります。

システム管理データベースを Solaris にインストールする場合、システム管理クライアント・コンポーネントをインストールした Windows システムから First Steps プログラムを実行する必要があります。81 ページの『Enterprise Information Portal コンポーネントが複数のマシン上にインストールされている場合の First Steps の実行』を参照。

---

### Enterprise Information Portal システム管理データベースの検証

Enterprise Information Portal システム管理データベースが正しくインストールされていることを検証するには、次のように行います。

1. 次のように入力してデータベース接続を検査します。

```
$ db2 connect to icmnlsdb user icmadmin using password
```

以下のような出力が表示されるはずです。

## Database Connection Information

```
Database server = DB2/SUN 7.2.4
SQL authorization ID = ICMADMIN
Local database alias = ICMNLSDB
```

— 2. 次のように入力してデータベース・テーブルを検査します。

```
$ db2 list tables
```

いくつかのテーブル (約 125 個) が表示されるはずです。「FA」で始まる名前を持つテーブルもあれば、「ICM」で始まる名前を持つものもあります。

---

## システム管理データベースおよびシステム管理クライアント通信の検証

Solaris には管理クライアントがないため、Windows 管理クライアントと Solaris データベース間の接続を構成する必要があります。管理クライアントをリモート・データベースに接続する方法は 2 つあります。

- RMI サーバーを介して接続する (193 ページの『第 17 章 RMI サーバーの構成』を参照)。
- 151 ページの『リモート管理データベースへの管理クライアントの接続』に記載のステップに従って接続を定義する。

---

## 低レベル接続テストの実行

Enterprise Information Portal 統合コネクタと Content Manager バージョン 8 コネクタが正しくインストールされていることを検証し、このセクションに指示されているサンプル・プログラムを実行します。

### テストを実行する前に

接続テストを実行する前に、次のことを行います。

- 1. EIP アプリケーション開発作業に使用されるユーザー ID はいずれも、db2 インスタンス・ユーザー ID が属しているグループ (たとえば、**db2iadm1** という、db2inst1 が属しているグループ) のものでなければなりません。
- 2. **icmadmin** としてログインします。EIP サンプル・プログラムを実行するために、以下のセットアップを実行します。java サンプルを、ホーム・ディレクトリから離れたローカル・ディレクト **eipsamps** にコピーします。

```
$ cp -R /opt/IBMcmb/samples/java $HOME/eipsamps
```

これにより、ファイルの所有権も現行ユーザーに変更されます。

- 3. 適切な Enterprise Information Portal 開発環境が用意できているか確認します。EIP アプリケーション開発作業を実行するユーザーの **.profile** に、以下の 2 行を追加してください。ピリオド (.) と最初のスラッシュ (/) との間にスペースが入っていることに注意してください。

```

__ a. DB2 環境を確立します。
 $. /export/home/db2inst1/sqllib/db2profile
__ b. EIP 環境を確立します。
 $. /opt/IBMcmb/bin/cmbenv81.sh

```

## 接続テストの実行

次の 2 つのテストを実行します。

### \_\_ 1. 統合コネクター・テスト:

```

$ cd $HOME/eipsamps/java/fed
$ javac TConnectFed.java
$ java TConnectFed icmnlbdb icmadmin password

```

予想される出力:

```

$ java TConnectFed icmnlbdb icmadmin password
*** connecting to datastore : icmnlbdb
*** datastore connected ***
user icmadmin dsName icmnlbdb
datastore disconnected
user icmadmin dsName icmnlbdb

```

### \_\_ 2. Content Manager V8 コネクター・テスト:

```

$ cd $HOME/eipsamps/java/icm
$ javac SConnectDisconnectICM.java
$ java SConnectDisconnectICM icmnlbdb icmadmin password

```

予想される出力:

```

$ java SConnectDisconnectICM icmnlbdb icmadmin password
=====
IBM Enterprise Information Portal v8
Sample Program: SConnectDisconnectICM

Database: icmnlbdb
UserName: icmadmin
=====
Connecting to datastore (Database 'icmnlbdb', UserName
'icmadmin')...
Connected to datastore (Database 'icmnlbdb', UserName
'icmadmin').
Disconnecting from datastore & destroying reference...
Disconnected from datastore & destroying reference.
=====
Sample program completed.
=====

```

以下のタイプのエラーが発生した場合:

```
TConnectFed.java:33: package com.ibm.mm.sdk.common does not
exist
import com.ibm.mm.sdk.common.*;
^
```

忘れずに、EIP 環境を確立します。ピリオド (.) と最初のスラッシュ (/) との間にスペースが入っていることに注意してください。

次を実行します。

```
$. /opt/IBMcmb/bin/cmbenv81.sh
```

---

## Content Manager バージョン 8 への Enterprise Information Portal 接続の検証

Enterprise Information Portal から Content Manager への接続を検証するには、次のように行います。

- \_\_ 1. Windows システムで、次のようにして Enterprise Information Portal システム管理クライアント、Windows 上の Administration Client を開始します。  
「スタート」->「プログラム」->「Enterprise Information Portal V8.2」->「管理 (Administration)」
- \_\_ 2. ウィンドウの左側で、「サーバー (Servers)」を右クリックして、「新規 (New)」を選択します。
- \_\_ 3. リストから、「Content Manager v8」を選択します。
- \_\_ 4. 以下のように、接続情報を入力します。  
サーバー名 (Server Name): ICMNLSDB
- \_\_ 5. 「接続のテスト (Test Connection)」ボタンをクリックします。
- \_\_ 6. 接続が正常であることが分かるはずです。



---

## 第 16 章 Enterprise Information Portal コンポーネントの構成

このセクションでは、EIP コンポーネントの構成方法について説明します。

---

### Windows でのコンポーネントの構成

このセクションでは、管理クライアントをローカルおよびリモート管理データベースに接続し、ワークフローのサポートに必要なサービスおよびユーティリティを開始する方法を説明します。

**重要:** ローカル・データベースおよび/またはリモート・データベースの接続専用または管理者用のユーザー ID と、接続先データベースのパスワードを知っている必要があります。デフォルトの管理者情報は、ICMADMIN/password です。ローカル・データベースまたはリモート・データベースのいずれにログオンする場合でも、事前にローカル管理クライアントのワークステーションで管理者および接続専用のユーザー ID を作成しておく必要があります。

#### 管理クライアントのローカル管理データベースへの接続

管理データベースを、管理クライアントをインストールしたのと同じサーバー上にインストールする場合、ローカル・クライアントとサーバーに接続するのに必要な情報は、データベース接続情報が保管されているファイル `cmbds.ini` にすでに保管されています。ポストインストール構成を実行する必要はなく、ここに記載されているステップを使用して、即時に接続できます。**要件:** EIP Database Install ユーティリティを使用して追加のローカル・データベースを作成する場合、必要な情報を使って `cmbds.ini` を変更してからでないと、新しいデータベースに接続できません。

1. 「スタート」->「プログラム」->「IBM Enterprise Information Portal for Multiplatforms 8.2」->「管理 (Administration)」をクリックします。
2. 「サーバー (Server)」フィールドのドロップダウン・リストからローカル・データベースを選択します。
3. 管理者のユーザー ID およびパスワードを入力して「OK」を押します。
4. システム管理クライアントがオープンします。**ヒント:** EIP First Steps を使用した場合、サンプル・データベースがクライアントの左パネルに表示されます。

#### リモート管理データベースへの管理クライアントの接続

EIP 管理クライアントをリモート AIX、Windows、または Solaris データベースに接続する方法は 2 つあります。

- RMI サーバーを介して接続する（193 ページの『第 17 章 RMI サーバーの構成』を参照）。
- DB2 Configuration Assistant を使用してデータベースをカタログし、次に EIP Server Configuration Utility（サーバー構成ユーティリティ）を使用してサーバー接続パラメーターを定義することによって接続を定義します。このユーティリティにより、データベース・スキーマ名、別名、オペレーティング・システムなどの情報が、cmbds.ini という名前のファイルにコピーされます。システム管理クライアントを起動すると、ログイン可能なサーバーのリストが、cmbds.ini に定義されたサーバーから取られます。

**要件:** 各リモート・データベースを個別にカタログする必要があります。すべてのリモート・データベースが cmbds.ini ファイルにリストされていないと、管理クライアントからそれに接続することができません。

**ヒント:** 経験のあるユーザーであれば、サーバー構成ユーティリティのステップをスキップして、テキスト・エディターで cmbds.ini を変更できます。cmbds.ini へのデフォルトのパスは C:\Program Files\IBM\CMgmt です。

**重要:** 接続しようとするリモート・データベース用のデータベース・カタログ値を、製品をインストールした担当者がすでに構成している場合、そのデータベースについて DB2 CCA のステップを実行する必要はありません。しかし、インストール担当者がデータベース・カタログ値を入力していないか、追加のリモート・データベースに接続しようとしている場合は、DB2CCA を使用し、追加のデータベース（複数も可）の接続パラメーターを使って cmbds.ini ファイルを変更する必要があります。

## ステップ 1 - DB2 Configuration Assistant を使用してのリモート・データベースのカタログ

DB2 Configuration Assistant (CCA) は、リモート EIP データベースを DB2 にカタログします。DB2CCA を使用してリモート・データベースをカタログするには、リモート・サーバーのホスト名、データベース名、およびデータベース・インスタンス・ポート番号を知っている必要があります。さらに、リモート・データベースの別名を定義する必要があります。

ステップ 1a - データベース名、スキーマ名、および接続ポート番号の見つけ方の説明します。管理クライアントとリモート・データベース間の接続を構成するには、該当の名前と接続ポート番号を知っている必要があります。

1. 以下のようにして、リモート・データベース接続情報を見つけます。
  - a. DB2 管理権限を持つユーザー ID を使ってリモート AIX、Windows、または Solaris サーバーにログインします。
  - b. db2 list db directory と入力します。

- c. 接続しようとする管理データベースの名前を選択します。インスタンスが異なれば、接続ポート番号も異なることがあるため、データベースがインストールされている db2 インスタンスに注意してください。
- d. `db2 connect to <database> user <userID> using <password>` と入力します。
- e. `db2 list tables` と入力し、データベース・スキーマ名を書き留めます (サーバー構成ユーティリティに必要です)。
- f. 次のようにして、リモート管理データベースと関連する接続ポート番号を見つけます。

Windows の場合:

- 1) リモート Windows サーバーの DB2 Control Center を開きます。
- 2) ローカル・マシンの使用可能インスタンスの 1 つを右クリックします。
- 3) 「通信のセットアップ (Setup Communications...)」を選択します。
- 4) TCP/IP 選択項目の右にある「プロパティ (Properties)」ボタンを選択します。ポート番号がウィンドウにリストされます。

AIX または Solaris の場合

- 1) `cd /usr/etc` と入力します。
- 2) `cat services` と入力します。
- 3) サービスのリストをスクロールして、リモート・データベースのデータベース・インスタンスの接続ポート番号を見つけます。たとえば、データベースが `db2inst1` にインストールされている場合、接続ポートは 50000 であると考えられます。
- 4)

- 2. DB2 Configuration Assistant を使用して、リモート・データベースをカタログします。詳しくは、DB2CCA のヘルプ・ファイルを参照してください。
  - a. 管理クライアントがインストールされている Windows サーバーにログインします。完全 DB2ADM 特権を持つユーザー ID でログインする必要があります。
  - b. 「スタート」->「プログラム」メニューから DB2 Configuration Assistant に移動します。
  - c. DB2 Configuration Assistant のプロンプトに従ってカタログし、リモート・データベースへの接続をテストします。
  - d. DB2 CCA 接続テストが正常に実行されたら、『ステップ 2 - サーバー構成ユーティリティの使用』のステップを実行するか、または `cmbds.ini` ファイルを変更して、`cmbds.ini` に保管されているリモート・データベース接続パラメーターを直接定義します。

## ステップ 2 - サーバー構成ユーティリティの使用

サーバー構成ユーティリティでは、リモート・データベースの接続情報 (ポート番号、ホスト名など) の入力を求めるプロンプトを表示し、そのデータを `cmbds.ini` に保管します。

1. 「スタート」->「プログラム」->「IBM Enterprise Information Portal for Multiplatforms」->「サーバー構成ユーティリティ (Server Configuration Utility)」とクリックします。
2. フィールドに情報を入力します (表 26 を参照)。

表 26. サーバー構成ユーティリティ (Server configuration utility)

| フィールド         | 情報                                                     | 注                                                                                                                                                                                                |
|---------------|--------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| サーバー          | Content Manager または EIP のいずれかのデータベース・タイプを選択する。         | 「サーバー」はデータベース・タイプを意味しており、データベースがインストールされているサーバー名を意味するものではありません。<br><b>ヒント:</b> 管理クライアントを使用して両方のデータベース・タイプを管理することができます。ただし、これは、Content Manager 管理クライアントおよび EIP 管理クライアントがシステムの同一マシン上に存在する場合のみ可能です。 |
| サーバー名         | 接続先データベースの別名を入力する。要件: DB2CCA に定義したものと同一別名を使用する必要があります。 | 別名では、ワークステーション上のリモート・データベースを識別する固有の名前を指定できます。別名は 8 文字を超えることはできません。たとえば、リモート・データベース名が ICMNLSDB の場合、別名を REMOTE1 とすることができます。                                                                        |
| スキーマ名         | リモート・データベースを作成した時に割り当てたスキーマ名を入力する。                     | EIP データベースおよび Content Manager データベースのデフォルトのスキーマ名は ICMADMIN です。                                                                                                                                   |
| ホスト名          | リモート・データベースがインストールされているコンピューター名を入力する。                  | 完全修飾ホスト名を入力するか、リモート・データベースがインストールされているコンピューターの IP アドレスを入力します。                                                                                                                                    |
| オペレーティング・システム | ドロップダウン・ボックスからオペレーティング・システムを選択する。                      | AIX、Sun Solaris、または Windows を選択します。OS/390 オプションは、EIP 8.2 では機能しません。                                                                                                                               |

表 26. サーバー構成ユーティリティー (Server configuration utility) (続き)

| フィールド            | 情報                                                    | 注                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|------------------|-------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ポート番号            | リモート・データベースに割り当てたポート番号を入力する。                          | Windows、AIX、および Solaris にインストールされている、EIP データベースおよび Content Manager データベースのデフォルトの接続ポート番号は 50000 です。                                                                                                                                                                                         |
| リモート・データベース名     | リモート・データベース名を入力する。大文字を使用する。                           | EIP データベースおよび Content Manager データベースのデフォルト名は ICMNLSDB です。                                                                                                                                                                                                                                  |
| ノード名             | リモートの EIP データベースまたは Content Manager データベースのノード名を入力する。 | ノード名は、リモート・データベースに割り当てた固有の名前であり、リモート・データベースに指定した別名と似ています。<br>Windows、AIX、または Solaris サーバーにインストールされたデータベースのノード名を検索するには、以下のようになります。<br>a. DB2 コマンド行セッションをオープンします。<br>b. db2=> プロンプトで、LIST NODE DIRECTORY と入力します。<br>c. DB2 によって、リモート・サーバー上にインストールまたは定義されているすべてのデータベースのノード名およびその他のデータが表示されます。 |
| シングル・サインオンの使用可能化 | データベースのインストール時にシングル・サインオンが使用可能であった場合にクリックする。          | デフォルトの設定では、チェックされていません (使用不可)。                                                                                                                                                                                                                                                             |
| セキュリティ・オプション     | データベースの作成時にこのオプションを選択した場合は、クライアント認証をクリックする。           | デフォルトの設定値は、サーバーです。                                                                                                                                                                                                                                                                         |

3. 「OK」をクリックします。

4. リモート・データベースへの接続をテストします。
  - a. 「スタート」->「プログラム」->「IBM Enterprise Information Portal for Multiplatforms 8.2」->「管理 (Administration)」をクリックします。
  - b. 「サーバー (Server)」フィールドのドロップダウン・リストからリモート・データベース名を選択します。名前は、サーバー構成ユーティリティで定義した別名と一致しています。
  - c. リモート・データベースの管理者または接続専用のユーザー ID およびパスワードを入力して、「OK」をクリックします。

### ステップ 3 - リモート・データベース接続のテスト

1. 管理クライアントがインストールされている Windows サーバーにログインします。
2. 「スタート」->「プログラム」->「IBM Enterprise Information Portal for Multiplatforms 8.2」->「管理 (Administration)」をクリックします。
3. 「サーバー (Server)」フィールドのドロップダウン・リストからリモート・データベースの別名を選択します。名前は、サーバー構成ユーティリティおよび DB2 構成アシスタントで定義した別名と一致しています。
4. リモート・データベースと関連するユーザー ID およびパスワードを入力します。
5. 「OK」をクリックします。管理クライアントがオープンします。

## Windows でのワークフロー・サービスおよびユーティリティの構成

ワークフローを使用する前に、ワークフロー・サービスおよびユーティリティを開始する必要があります。必要なステップは、MQSeries 製品のインストールの仕方によって異なります。

**制約事項:** 管理データベースにはワークフローの使用に必要な機能が含まれるため、管理データベースは、DB2 Universal Database、MQSeries Server および MQ Workflow がインストールされているサーバーにインストールする必要があります。ワークフローの管理を行う管理クライアントは、ローカルまたはリモートとすることができます。

### EIP カスタム・インストールを使用した場合の MQSeries の構成

49 ページの『Windows での MQSeries Workflow の構成』を参照。

### EIP カスタム・インストールを使用しなかった場合の MQSeries Workflow の構成

1. MQSeries Server を NT サービスとして始動します。
2. CMBWFAdmin.fdl を MQSeries Workflow データベースにインポートして、デフォルト・ユーザーを作成します。
3. 次のユーティリティをコマンド・プロンプトから実行します。

```
fmcibie -i CMBWFAdmin.fdl -uadmin -ppassword -o
```
4. Windows のコマンド・プロンプトで、以下のコマンドを 1 行に入力します。

```
@ECHO DEFINE QLOCAL (EIPWFEVENT) DESCR('Local EIP WF queue for events')
| runmqsc FMCQM
```

---

## 開発ツールキットの環境変数の設定

コネクター・ツールキットおよびサンプルをインストールした場合、これらのサンプルを使用する前に環境を設定する必要があります。

Windows で、「スタート」->「プログラム」->「IBM Enterprise Information for Multiplatforms 8.2」->「Development Window」をクリックします。

環境変数は一度だけ設定すれば済みます。

---

## コネクター・ツールキットからのサンプル・プログラムの使用

以下の例では、Windows サーバー上でサンプル Java プログラムを使用して OnDemand サーバー上の接続をテストする方法を説明します。

1. 「スタート」->「プログラム」->「Enterprise Information Portal for Multiplatforms 8.2」->「開発ウィンドウ (Development Window)」をクリックして開発環境を設定します。コマンド・プロンプトに C:¥CMBROOT と表示されます。
2. SAMPLES¥java¥od に移動します。
3. javac TConnectOD.java と入力して、サンプル接続テスト・プログラムをコンパイルします。
4. java TConnectOD <libSrv> <userID> <pw> <connect string> と入力して、サンプル・プログラムをテストします。
5. 接続テストが正常に実行された場合、プログラムは接続および切断状況情報を表示します。テストが正しく実行されなかった場合、プログラムは例外メッセージを表示します。

すべてのサンプル・プログラムをテキスト・エディターで表示できます。サンプル・プログラムは、プログラムを実行するのに必要な変数をリストします。サンプルが入っている各ディレクトリーには、資料も含まれています。資料では、サンプル・プログラムで機能するシステム・パラメーターについて説明し、サンプル・プログラム名および各プログラムが実行できるタスクもリストしています。

---

## コンテンツ・サーバーの定義

このセクションでは、管理クライアントにログインし、コンテンツ・サーバーを定義する方法について説明します。

1. 「スタート」->「プログラム」->「IBM Enterprise Information for Multiplatforms 8.2」->「管理 (Administration)」をクリックします。
2. データベースを選択します。

3. データベースのカatalog作成または追加に使用した、データベース管理者 ID とパスワードを入力します。
4. 「**OK**」をクリックします。
5. 管理クライアント・ウィンドウが表示され、左側にデータベース名が表示されます。

DB2 コンテンツ・サーバーへの接続を定義してテストし、そのアイコンを作成するには、以下のステップを実行してください。

1. <database name> ツリーの「**サーバー (Server)**」を右クリックし、「**新規 (New)**」をクリックします。「新規サーバー接続 (New Server Connection)」ウィンドウがオープンします。
2. コンテンツ・サーバーのリストから、「**DB2**」を選択します。「新規サーバー: DB2 (New Server: DB2)」ウィンドウがオープンします。
3. 「**初期設定パラメーター (Initialization Parameters)**」タブをクリックします。
4. 「**接続ストリング (Connect string)**」フィールドで、SCHEMA=<サーバーのインストール時に定義したスキーマ名> を入力します。
5. 「**テスト接続 (Test Connection)**」をクリックします。
6. EIP では、クライアントへのログインで入力したユーザー ID とパスワードを使用してデータベースにログインできない場合、管理データベースのユーザー ID とパスワードが要求されます。
  - a. 「**ユーザー ID (User ID)**」フィールドに、<データベースのインストール時に定義したユーザー ID> を入力します。
  - b. 「**パスワード (Password)**」フィールドに、<データベースのインストール時に定義したパスワード> を入力します。
  - c. 「**OK**」をクリックしてログオンし、ウィンドウをクローズします。

「<データベース名> への接続が正常に行われました。(The connection to <database name> was successful.)」というメッセージが表示されます。「**OK**」をクリックします。
7. 「**OK**」をクリックすると「新規サーバー: DB2 (New Server: DB2)」ウィンドウがクローズされ、「<サーバー名>」アイコンが作成されます。

これでステップは完了です。正常に Enterprise Information Portal サーバーを DB2 コネクターと一緒にインストールできました。

Enterprise Information Portal からサンプル・メタデータにアクセスするには、以下のステップを完了してください。

1. 「Enterprise Information Portal 管理クライアント (Enterprise Information Portal administration client)」メイン・ウィンドウの「<サーバー名>」アイコンを右クリックし、「**サーバー・インベントリーの最新表示 (Refresh Server Inventory)**」をクリックします。



2. まだ Sample データベースにログオンしていない場合は、「Sample へのログオン (Logon Sample)」ウィンドウがオープンします。 <データベース名> データベースにログオンします。
  - a. 「ユーザー ID (User ID)」フィールドに、<データベースのインストール時に定義したユーザー ID> を入力します。
  - b. 「パスワード (Password)」フィールドに、<データベースのインストール時に定義したパスワード> を入力します。
  - c. 「OK」をクリックしてログオンし、ウィンドウをクローズします。

「サーバー・インベントリーが最新表示されました。(The server inventory has been refreshed)」というメッセージが表示されます。「OK」をクリックして、継続します。
3. 「ツール (Tools)」-> 「サーバー・インベントリー・ビューアー (Server Inventory Viewer)」をクリックします。サーバー・インベントリー・ビューアーがオープンし、サンプル・データを表示します。
4. サーバー・インベントリー・ビューアーをクローズします。
5. 管理クライアントのメイン・メニューをクローズします。

---

## AIX および Solaris でのワークフローの構成

ワークフローを使用する前に、ワークフロー・サービスおよびユーティリティを開始する必要があります。必要なステップは、MQSeries 製品のインストールの仕方によって異なります。

**制約事項:** 管理データベースにはワークフローの使用に必要な機能が含まれるため、管理データベースは、DB2 Universal Database、MQSeries Server および MQSeries Workflow がインストールされているサーバーにインストールする必要があります。

## EIP カスタム・インストールを使用した場合の MQSeries の構成

1. MQSeries が NT サービスとして実行されていることを確認します。
2. ワークフローのインストール・ディレクトリーに移動します。
3. コマンド・プロンプトから `./cmbwfstart.sh` を実行します。
4. ユーザー出口ユーティリティを開始します。コマンド・ウィンドウから `fmcxspea -u=ADMIN -p=password` を実行します。ユーザー出口ユーティリティにより、ワークフローがバッチ処理されます。

## EIP カスタム・インストールを使用しなかった場合の MQSeries の構成

1. MQSeries Server を開始します。

2. CMBWAdmin.fdl を MQSeries Workflow データベースにインポートして、デフォルト・ユーザーを作成します。コマンド・プロンプトからユーティリティ `fmcibie -u ADMIN -p password -i CMBWAdmin.fdl` を実行します。
3. 次のステートメントを除去 (またはコメント化) します。  

```
set PATH=C:¥progra~1¥MQSeri~1¥bin¥MQServer;%PATH%
```

ステートメントを除去するファイル:

  - cmbenv81.bat
  - cmbfestart81.bat
  - cmbsvregist81.bat
4. upes ユーティリティを開始します。  

```
./cmbupes81.sh
```
5. ユーザー出口ユーティリティを開始します。コマンド・ウィンドウから `fmcxspea -u=ADMIN -p=password` を実行します。

---

## EIP タグ・ライブラリーおよびサードパーティ用 Web アプリケーション・サーバーの構成

このセクションでは、コネクタ・ツールキットと一緒にインストールされたタグ・ライブラリーおよびサードパーティの構成方法について説明します。サードパーティおよびタグを使用することにより EIP アプリケーションの作成が容易になります。

サードパーティおよびタグを構成する前に、IBM WebSphere Application Server バージョン 5.0 のインストールおよび構成を行う必要があります。ハードウェアおよびソフトウェアの要件については、WebSphere の資料を参照してください。

### WebSphere アプリケーション・リソース (WAR) ファイルの作成

タグ・ライブラリーおよびサードパーティを構成する前に、サーバーに IBM WebSphere Application Server バージョン 5.0 がインストールされ、稼働している必要があります (ハードウェアおよびソフトウェアの要件については WebSphere の資料を参照してください)。

#### Web モジュールの作成

1. WebSphere 管理コンソールを開始します。
2. コンソール・メニューから「ツール (Tools)」→「アプリケーション・アセンブリ・ツール (AAT) (Application Assembly Tool (AAT))」と選択します。各種ウィザードを表示したウィンドウが表示されます。「キャンセル (Cancel)」をクリックします。
3. 「ファイル (File)」→「新規 (New)」→「Web モジュール (Web Module)」と選択して、新規 Web モジュールを作成します。

4. 表示名に eip を指定します。「適用 (Apply)」をクリックします。
5. 「ファイル (File)」-> 「別名保管 (Save As)」と選択し、ファイルを cmbroot¥samples¥modules¥eip.war として保管します。

### jar ファイルの追加

1. 「ファイル (Files)」カテゴリーを展開します。「クラス・ファイル (Class Files)」、「Jar ファイル (Jar Files)」、および「リソース・ファイル (Resource Files)」が表示されます。
2. Jar ファイルを右マウス・ボタン・クリックして、「ファイルの追加 (Add Files)」を選択します。「ファイルの追加 (Add Files)」ウィンドウが表示されます。
3. 「ブラウズ (Browse)」をクリックします。ルート・ディレクトリーとして cmbroot を選択します。
4. サブディレクトリー LIB をクリックして、LIB を「ファイル名 (File name)」ボックスに入れます。
5. 「選択 (Select)」をクリックします。「ファイルの追加 (Add Files)」ウィンドウの右上のボックスから、以下のファイルを選択します。**ヒント:** 複数のファイルを選択するには、**Ctrl** キーを押したままファイルをクリックします。

```
cmb81.jar
cmbcm81.jar
cmbsdk81.jar
cmbservelets81.jar
cmbtag81.jar
cmbview81.jar
esclisrv.jar
essrv.jar
log4j.jar
cmblog4j.jar
```

6. 「追加 (Add)」をクリックします。ファイルが「選択ファイル (Selected Files)」ボックスに表示されます。
7. 「OK」をクリックします。jar ファイルが AAT の右上のウィンドウに表示されます。

### JSP ファイルの追加

1. 「リソース・ファイル (Resource Files)」を右マウス・ボタン・クリックします。「ファイルの追加 (Add Files)」を選択します。「ファイルの追加 (Add Files)」ウィンドウが表示されます。
2. 「ブラウズ (Browse)」をクリックします。
3. ルート・ディレクトリーとして cmbroot を選択します。
4. サブディレクトリー samples をクリックして samples を下の「ファイル名 (File name)」ボックスに入れます。
5. 「選択 (Select)」をクリックします。右上のウィンドウで、jsp を選択します。

6. 「**追加 (Add)**」をクリックします。ファイルが「**選択ファイル (Selected Files)**」ボックスに表示されます。
7. 「**OK**」をクリックします。JSP および HTML ファイルが AAT の右上のウィンドウに表示されます。

### タグ・ライブラリーの追加

1. 「**リソース・ファイル (Resource Files)**」を右マウス・ボタン・クリックして、「**ファイルの追加 (Add Files)**」を選択します。「ファイルの追加 (Add Files)」ウィンドウが表示されます。
2. 「**ブラウズ (Browse)**」をクリックして、ルート・ディレクトリーとして cmbroot を選択します。
3. サブディレクトリー LIB をクリックして、LIB を下の「**ファイル名 (File name)**」ボックスに入れます。
4. 「**選択 (Select)**」をクリックします。右上のウィンドウで tld を選択します。
5. 「**追加 (Add)**」をクリックします。ファイル taglib.tld が「**選択ファイル (Selected Files)**」ボックスに表示されます。
6. 「**OK**」をクリックします。JSP ファイルおよび taglib.tld が AAT の右上のウィンドウに表示されます。

### タグ・ライブラリーの別名の定義

1. AAT の左側のウィンドウで「**タグ・ライブラリー (Tag Libraries)**」を右マウス・ボタン・クリックして、「**新規 (New)**」を選択します。
2. タグ・ライブラリー・ファイル名に cmb を指定します。タグ・ライブラリーの位置に taglib.tld を指定します。「**OK**」をクリックします。

### コントローラー・サーブレットの定義

1. AAT の左側のウィンドウで「**Web コンポーネント (Web Components)**」を右マウス・ボタン・クリックして、「**新規 (New)**」を選択します。
2. コンポーネント名として control を指定します。表示名として control servlet を指定します。コンポーネント・タイプの下「**サーブレット (Servlet)**」ラジオ・ボタンが選択されていることを確認します。
3. 「**クラス名 (Class name)**」フィールドの右側の「**ブラウズ (Browse)**」ボタンをクリックします。左側のウィンドウで、WEB-INF、lib、cmbservlets81.jar を展開して、com→ibm→mm→servlets を表示します。
4. サーブレット・サブディレクトリーをクリックします。右側のウィンドウで、CMBControlServlet.class を選択します。
5. 「**OK**」をクリックします。「**クラス名 (Class name)**」フィールドに com.ibm.mm.servlets.CMBControlServlet が表示されます。

次に、プロパティ・ファイルのロケーションを指定する初期設定パラメーターを定義します。左側のウィンドウの「Web コンポーネント (Web Components)」の下に、コントロール・サーブレットが表示されています。

6. コントロール・サーブレットを展開します。「初期設定パラメーター (Initialization Parameters)」を右マウス・ボタン・クリックして、「**新規 (New)**」を選択します。
7. パラメーター名として `servletPropertiesURL` を指定します。
8. パラメーター値として `/com/ibm/mm/servlets/cmbServlet.properties` を指定します。
9. 「**OK**」をクリックします。

### コントローラー・サーブレットのサーブレット・マッピングの定義

1. AAT の左側のウィンドウで「サーブレット・マッピング (Servlet Mapping)」を右マウス・ボタン・クリックします。「**新規 (New)**」を選択します。
2. URL パターンとして `/jsp/servlets/CMBControlServlet` を指定します。
3. サーブレットとして `control` を選択します。
4. 「**OK**」をクリックします。
5. 「**ファイル (File)**」→「**保管 (Save)**」と選択して、WAR ファイルを保管します。

## エンタープライズ・アプリケーション・リソース・ファイルの作成

このセクションでは、エンタープライズ・アプリケーション・リソース (EAR) ファイルの作成に使用するコンポーネントを構成します。

### EAR ファイルの作成

1. 「**ファイル (File)**」→「**クローズ (Close)**」と選択して WAR ファイルをクローズします。
2. 「**ファイル (File)**」→「**新規 (New)**」→「**アプリケーション (Application)**」と選択します。
3. 表示名として `eip.ear` を指定して、「**適用 (Apply)**」をクリックします。
4. WAR ファイルを追加します。「Web モジュール (Web Modules)」カテゴリを右マウス・ボタン・クリックして、「**インポート (Import)**」を選択します。
5. `cmbroot¥samples¥modules¥eip.war` を選択します。コンテキスト・ルートとして `/eip` を指定します。「**OK**」をクリックします。
6. 「**ファイル (File)**」→「**別名保管 (Save As)**」と選択して、名前として `cmbroot¥modules¥eip.ear` を指定します。

### アプリケーションのインストール

1. 「アプリケーション・アセンブリー・ツール (AAT) (Application Assembly Tool (AAT))」をクローズします。
2. WebSphere 管理コンソールを開始します。

3. 「コンソール (Console)」-> 「ウィザード (Wizards)」-> 「エンタープライズ・アプリケーションのインストール (Install Enterprise Application)」と選択します。「ノードのファイルをブラウズ (Browse for file on node)」フィールドで自分のノードが選択されていることを確認します。
4. 「アプリケーションのインストール (\*.ear) (Install Application (\*.ear))」を選択します。
5. 「パス (Path)」フィールドの右側の「ブラウズ (Browse)」ボタンをクリックします。
6. `cmbroot¥samples¥modules¥eip.ear` を選択します。「オープン (Open)」を選択します。「パス (Path)」フィールドに `C:¥cmbroot¥SAMPLES¥modules¥eip.ear` が表示されます。アプリケーション名として `eip.ear` を指定します。
7. 「アプリケーション・サーバーの選択 (Selecting Application Servers)」ページが表示されるまで「次へ (Next)」をクリックします。デフォルト・サーバー、または他の定義済みサーバーを選択することができます。
8. 「次へ (Next)」、「終了 (Finish)」とクリックします。

### サブプレットの実行

このセクションでは、サブプレットの実行方法を説明します。**要件:** WAS 5 セキュリティーが使用可能の場合は、サブプレットを実行する前に、`eip.ear¥META-INF` サブディレクトリに `was.policy` ファイルを作成します。

1. 「ノード (Nodes)」-> 「*your node*」-> 「アプリケーション・サーバー (Application Servers)」-> 「*your server*」として、アプリケーション・サーバーを停止して再始動します。
2. ブラウザーをオープンして `http://localhost:9080/eip/jsp/main.html` を参照し、タグ・ライブラリー・サンプルまたはサブプレット・アクションへのリンクをたどります。  
`http://localhost:9080/eip/jsp/servlets/actions.html` を参照して使用可能なサブプレット・アクションのリストに直接アクセスするか、  
`http://localhost:9080/eip/jsp/taglib/index.html` をポイントして使用可能なタグのリストに直接アクセスすることができます。

## Panagon Image Services (IDMIS) 3.5.0 コンテンツ・サーバーの使用

Panagon Image Services (IDMIS) 3.5.0 および Panagon Image Services Toolkit 3.5.0 をインストールする必要があります。「Content Connector For Panagon Image Services Install Guide」を参照してください。次の 2 つの修正もインストールする必要があります。

- SCR 133231 - `wal_sysv.dll` および `wal_ipc.exe` の修正
- SCR 133232 - `wal_sec.dll` の修正

これらの修正は、FileNET Corporation から入手可能です。適切なライセンスがある場合は、FileNET Web サイトから修正を FTP でダウンロードできます。ライセンスがない場合は、FileNET 販売担当者にご連絡ください。

また、次のことを行う必要もあります。

1. 次の jar ファイルを eip.ear ファイルに追加します。手順は、160 ページの『WebSphere アプリケーション・リソース (WAR) ファイルの作成』と同じです。
  - cmbfn81.jar
  - cmbfnc81.jar
2. WebSphere 管理コンソールに移動します。「アプリケーション・サーバー (Application Servers)」以下にある自分のサーバーを選択します。右側の「一般 (General)」タブで、「環境 (Environment)」ボタンを押します。環境エディターが表示されます。「追加 (Add)」を押します。名前に "PATH" を追加します。値に `c:%fnsfw%client%bin;c:%fnsfw%client%shobj` を追加します。「適用 (Apply)」を押します。サーバーを停止して再始動します。

ヒント: パス・システム環境変数にすでに値があれば、このステップは不要です。

## Domino.Doc コンテンツ・サーバーの使用

Domino.Doc デスクトップ・クライアントをインストールする必要があります。

### サービスの適用後

EIP サービス・アップデートを適用した場合は、eip.war の jar ファイルをリフレッシュする必要があります。次の jar ファイルを cmbroot¥lib から websphere¥appserver¥installedapps¥eip.ear¥eip.war¥WEB-INF¥lib: にコピーします。

- cmb81.jar
- cmbcm81.jar
- cmbsdk81.jar
- cmbservlets81.jar
- cmbtag81.jar
- cmbview81.jar
- esclisrv.jar
- essrv.jar
- cmblog4j.jar

次に、アプリケーション・サーバーを停止して再始動します。

---

## Web 用 IBM Web Crawler の構成および実行

このセクションでは、Web 用 IBM Web Crawler の構成および実行方法について説明します。Web 用 IBM Web Crawler は、HTTP、FTP、ニュース、またはファイル・サーバーにアクセスし、HTML 文書やその他のオブジェクトのサマリーを作成します。サマリーは、それぞれが文書やオブジェクトである複数のファイルであり、メタデータおよびフル・テキストを含みます。

## 基本構成

このセクションには、XML フォーマットで IBM Web Crawler 構成ファイルを編集する方法に関する指示を記載しています。開始するにあたって役立つ、次の 2 つのサンプル構成が提供されています。

- IBM Web Crawler を DB2 UDB と一緒に使用するための config-db2.xml ファイル。
- IBM Web Crawler を DB2 UDB なしで使用するための config-sample.xml ファイル。

1. コマンド・プロンプトをオープンします。
2. IBM Web Crawler のインストール先である run サブディレクトリーに移動します。たとえば、IBM Web Crawler を Windows サーバーにインストールしている場合には、`cd x:<cmbrroot>%gcs%run` と入力します。IBM Web Crawler を AIX にインストールしている場合には、`cd /usr/lpp/cmb/gcs` と入力します。

**ヒント:** 必ずオリジナル・ファイルのコピーをとっておくようにします。ファイルにエラーが発生すると、IBM Web Crawler が破損する可能性があります。編集は慎重に行ってください。

3. IBM Web Crawler を DB2 UDB データベースと一緒に実行する (比較的スケーラブルだが、低速) 場合、config-db2.xml ファイルを編集します。たとえば、コマンド・プロンプトで `edit config-db2.xml` と入力します。
4. IBM Web Crawler を DB2 UDB データベースなしで実行する (比較的スケーラブルではないが、高速) 場合、config-sample.xml ファイルを編集します。たとえば、コマンド・プロンプトで `config-sample.xml` と入力します。

$n$  個の URL のクロールをデータベースなしで実行するには、クロールした URL のメタデータを格納するために、マシン上に約  $n/1000$  MB の RAM が必要になります。たとえば、500,000 URL をクロールするためには、512 MB の RAM が必要です。このメモリーを有効に利用するために、crawlweb.bat ファイルを編集して、JVMXmx の値を増加させてください。

## IBM Web Crawler DB2 オプションの構成

DB2 オプションを構成するには、データベースを作成する必要があります。そのためには、DB2 管理者権限が必要です。DB2 管理者アカウントに切り替える必要がある場合があります。データベースには DB2 の許可する名前を付けることができますが、gcs 以外のデータベース名を使用する場合には、Web Crawler 構成ファイルの dbname を更新する必要があります。

データベース管理者権限を持っていれば、次のコマンドを DB2 コマンド・プロンプトで実行してデータベースを作成することができます。

```
db -createdb <user><password>[database_name]
```



データベース名を指定しないと、gcs が使用されます。データベースが作成されたら、次のコマンドを出して IBM Web Crawler テーブルを追加します。

```
db -createtables<user><password >[database_name]
```

IBM Web Crawler データベースおよびテーブルの作成が完了していないと、DB2 を IBM Web Crawler と一緒に使用することはできません。

以下の構成ファイル設定 (urlpool-config セクションの) は、新しいデータベース (dbname) を使用するために必須です。

- データベースの名前 (上記の方法で作成した): たとえば、gcs。
- ユーザー名: たとえば、db2admin。
- パスワード: ユーザーのパスワード。たとえば、db2admin。

データベース、ユーザー名、およびパスワードのプロパティを、適切な値に設定します。キャッシュ・サイズやドライバは変更しないでください。ファイルの編集を続けて、システムにクロールの有効範囲を設定します。

## クロールの有効範囲の設定

これらの構成ファイルの設定は、DB2 の使用の有無にかかわらず、クロールの有効範囲の確立に必要です。

クロールの構成セクションで以下の設定をチェックして、これらの項目を各ニーズに応じて設定してください。

### シード・リスト (seed list)

1 つ以上の、始動絶対 URL。この URL は、有効でなければなりません。ブラウザを使って検証してください。例: <http://www.<mysite>.com/>

### コンテンツ・タイプ・パターン・リスト (content-type-pattern-list)

ファイル拡張子がたとえば htm\* というパターンに一致する場合にのみ見つかるページの URL をクロールします。

### 組み込みパターン・リスト (include-pattern-list)

たとえば、<mysite>.com というパターンに一致する場合にのみ見つかるページの URL をクロールします。

以下の項目も設定可能です。

### 再帰の深さ (recursion-depth)

リンク内の任意の開始点からクロールする最大距離。深さを無制限に設定するには -1 を使用します。

### 排他パターン・リスト (exclude-pattern-list)

たとえば、\*cgi-bin\* というパターンに一致しない場合にのみ見つかるページの URL をクロールします。

## システム・プロパティ (system properties)

Socks 化されていないマシンから、ファイアウォールを経由してクロールするには、このファイルで socksProxy 値も指定する必要があります。

## IBM Web Crawler の開始

.xml 構成ファイルを編集した場合には、それを保管してください。

IBM Web Crawler を開始するには、crawlweb バッチ・ファイルと構成ファイルを使用します。コマンド・プロンプトをオープンして、以下を入力します。

- Windows の場合: crawlweb.bat<CONFIGFILE>
- AIX の場合: crawlweb.sh<CONFIGFILE>

DB2 UDB と一緒に実行するには、crawlweb config-db2.xml と入力して Enter を押します。DB2 UDB なしで実行するには、crawlweb config-sample.xml と入力して Enter を押します。

**ヒント:** クロールやサマリー作成の進行状況の報告を、定期的に行うように計画してください。ターゲットがクロールされるにつれて、summaries ディレクトリーに構成されたロケーションにサマリーが書き込まれます。デフォルトのサマリーでは、オリジナルのオブジェクトに加え、メタデータ・プロログが .html ファイルとしてツリー内に書き込まれます。クロールの間、または完了後に、ログ・ファイル内で追加の情報を参照することができます。

IBM Web Crawler の使用の詳細については、「*Managing Enterprise Information Portal*」を参照してください。

---

## 情報マイニングのインストールおよび構成

このセクションでは、Information Structuring Tool および WAS を使用した JSP サンプルのインストールと構成について説明します。

### インストールの手順

Information Structuring Tool および情報マイニング Java Server Page アプリケーション (詳しくは JSP を参照) は、単一のワークステーションまたは 2 つの異なるワークステーションに配置することができます。以下のセクションのインストールの説明は、Information Structuring Tool を対象としています。JSP については、Information Structuring Tool を JSP に置き換えてお読みください。

- Windows の場合:
  - <CMBROOT> は対応する環境変数の値です (例: d:\%cmbroot)。
  - <DB2HOME> は対応する環境変数の値です (例: d:\%sqllib)。
  - <CMCOMMON> は対応する環境変数の値です (例: c:\%Program Files\IBM\%CMGMT)。

- AIX の場合:
  - <DB2HOME> は DB2 のインストール先ディレクトリーです (例: /usr/lpp/db2\_07\_01 または /usr/opt/db2\_08\_01)。
  - <DB2JAVAHOME> は、Java 1.2 ライブラリー・ファイルがあるディレクトリーです。DB2 V7 の場合、これは、<DB2HOME>/java12 であり、DB2 V8 の場合は <DB2HOME>/java です。
- Solaris の場合:
  - <DB2HOME> は、DB2 のインストール・ディレクトリーです (例: /opt/IBMdb2/V7.1 または /opt/IBM/db2/V8.1)。
  - <DB2JAVAHOME> は、Java 1.2 ライブラリー・ファイルがあるディレクトリーです。DB2 V7 の場合、これは、<DB2HOME>/java12 であり、DB2 V8 の場合は <DB2HOME>/java です。

### 単一ワークステーション

1. Enterprise Information Portal サーバーを情報マイニング・フィーチャーとともにインストールします。
2. WAS をインストールします。
3. Information Structuring Tool を配置します。

### クライアント / サーバーのセットアップ

Information Structuring Tool および情報マイニング・フィーチャーが異なるワークステーションに配置されている場合は、次のように実行します。

#### ワークステーション A:

- Enterprise Information Portal サーバーを情報マイニング・フィーチャーとともにインストールします。
- RMI Server を開始します。
- Windows の場合:
  - c:\Program Files\IBM\CMGMT\cmbsvregist81.bat をオープンします。
  - 先頭が set CLASSPATH= の行を見つけます。
  - CLASSPATH のエントリーに <DB2HOME>%java%db2java.zip;<JARDIR>%cmbscm81.jar; が含まれていることを確認します。
  - cmbsvregist81.bat を保管します。
- AIX の場合:
  - ファイル /usr/lpp/cmb/cmgmt/cmbsvregist81.sh をオープンします。
  - 先頭が export CLASSPATH= の行を見つけます。

- CLASSPATH のエントリーに <DB2HOME>/java/db2java.zip:\$JARDIR/cmbcm81.jar: が含まれていることを確認します。
- cmbsvregist81.sh を保管します。
- Solaris の場合:
  - ファイル /opt/IBMcmb/cmgmt/cmbsvregist81.sh をオープンします。
  - 先頭が export CLASSPATH= の行を見つけます。
  - CLASSPATH のエントリーに <DB2HOME>/java/db2java.zip:\$JARDIR/cmbcm81.jar: が含まれていることを確認します。
  - cmbsvregist81.sh を保管します。

#### ワークステーション B:

- WAS をインストールします。
- Enterprise Information Portal クライアントをインストールします。
- 次の場所からファイル cmbsvclient.ini および cmbsvcs.ini を見つけます。
  - Windows の場合: <CMCOMMON>
  - AIX の場合: /usr/lpp/cmb/cmgmt
  - Solaris の場合: /opt/IBMcmb/cmgmt
- ファイル cmbsvclient.ini の中で、RemoteHost はワークステーション A の名前に設定されている必要があります。
- ファイル cmbsvcs.ini の中で、IKF は **remote** である必要があります。
- これらの 3 つのファイルを、Information Structuring Tool を配置するアプリケーション・サーバーの作業ディレクトリーにコピーします。
  - WAS Advanced Edition (AE) の場合:
    - Windows の場合: <WAS\_HOME>%bin
    - AIX の場合: /usr/WebSphere/AppServer/bin
    - Solaris の場合: /opt/WebSphere/AppServer/bin
  - WAS Advanced Edition (AE) の場合:
    - 管理コンソールをオープンします。
    - ツリー・ビューからアプリケーション・サーバーを選択します。
    - 「一般 (General)」タブを選択します。ディレクトリーは、「作業ディレクトリー (Working Directory)」の下にあります。
- Information Structuring Tool を配置します。

## Information Structuring Tool 用 Web アプリケーション・サーバーの構成

Websphere Application Server の Advanced Edition (WAS 4 AE) または Advanced Single Server Edition (WAS 4 AEs)、あるいは Websphere Application Server 5 Base ま

たは Websphere Application Server 5 Network Deployment (ND) に Information Structuring Tool をインストールするには、以下の情報が必要です。

- <Node> は、Information Structuring Tool のインストール先ワークステーションの名前です。
- <AppServer> は、Information Structuring Tool のインストール先 <Node> のアプリケーション・サーバーです (たとえば、WAS 4 の場合は Default Server、WAS 5 の場合は server1)。
- <VirtualHost> は、Information Structuring Tool を実行する仮想ホストの名前です (例: default\_host )。
- <WebPath> は、Information Structuring Tool へのアクセスに使用される URL のパスの部分です。このパスは、/IST で終了しなければなりません。たとえば、Information Structuring Tool をサーバー prefix にインストールするときに、<WebPath> が /webApps/IST であれば、Information Structuring Tool にアクセスするための URL は http://prefix/webApps/IST/login.html です。
- <WAS\_HOME> は、<Node> 上の WAS のインストール先ディレクトリーです (例: Windows の場合 d:\WebSphere\AppServer、AIX の場合 /usr/WebSphere/AppServer、Solaris の場合 /opt/WebSphere/AppServer)。
- WAS 5 のみ: <Cell> は管理接続の名前です。WAS 5 Base の場合、これは、<Node> と同じ名前です。WAS 5 ND の場合、これは、配置マネージャーが実行しているワークステーションの名前です。

## WAS V4

次のセクションでは、WAS AEs 内での IST 配置手順、続いて WAS AE 内のものについて説明します。

**WAS AEs:** WAS AEs および Enterprise Information Portal をインストールした後、WAS 管理者のコンソールをオープンし、以下の指示に従ってください。

1. コンソール・メニューから「ノード (Nodes)」->「<ノード (Node)>」->「アプリケーション・サーバー (Application Server)」->「<AppServer>」->「プロセス定義 (Process Definitions)」->「JVM 設定 (JVM Settings)」と選択します。
2. WAS と Enterprise Information Portal が同じワークステーション上にある場合には、以下の Classpath 情報を入力してください。

- Windows の場合:

```
<CMBROOT>%ikf%lib
<CMBROOT>%ikf%lib%ikf.jar
<CMBROOT>%lib%cmb81.jar
<CMBROOT>%lib%cmbsdk81.jar
<CMCOMMON>
<CMBROOT>%lib%cmblog4j81.jar
<CMBROOT>%lib%log4j.jar
<DB2HOME>%java%db2java.zip
```

- AIX の場合:

```
/usr/lpp/cmb/ikf/lib
/usr/lpp/cmb/ikf/lib/ikf.jar
/usr/lpp/cmb/lib
/usr/lpp/cmb/lib/cmb81.jar
/usr/lpp/cmb/lib/cmbstdk81.jar
/usr/lpp/cmb/cmgt
/usr/lpp/cmb/lib/cmblog4j81.jar
/usr/lpp/cmb/lib/log4j.jar
<DB2JAVAHOME>/db2java.zip
```

- Solaris の場合:

```
/opt/IBMcmb/ikf/lib
/opt/IBMcmb/ikf/lib/ikf.jar
/opt/IBMcmb/lib
/opt/IBMcmb/lib/cmb81.jar
/opt/IBMcmb/lib/cmbstdk81.jar
/opt/IBMcmb/cmgt
/opt/IBMcmb/lib/cmblog4j81.jar
/opt/IBMcmb/lib/log4j.jar
<DB2JAVAHOME>/db2java.zip
```

WAS と Enterprise Information Portal が別のワークステーション上にある場合には、Classpath 情報は次のとおりです。

- Windows の場合:

```
<CMBROOT>%ikf%lib%ikf.jar
<CMCOMMON>
<CMBROOT>%lib%cmb81.jar
```

- AIX の場合:

```
/usr/lpp/cmb/ikf/lib/ikf.jar
/usr/lpp/cmb/lib/cmb81.jar
/usr/lpp/cmb/cmgt
```

- Solaris の場合:

```
/opt/IBMcmb/ikf/lib/ikf.jar
/opt/IBMcmb/lib/cmb81.jar
/opt/IBMcmb/cmgt
```

3. 「最大ヒープ・サイズ (Maximum Heap Size)」を 512 に設定します。
4. ページの下部の「**OK**」をクリックします。
5. WAS 管理コンソールの上部のバーにある「**保管 (Save)**」をクリックして、構成設定値を保管します。
6. WAS と Enterprise Information Portal が同じワークステーション上にある場合は、以下のようにします。

- Windows の場合:

以下のようにして、PATH を WAS Administrative Console で設定する必要があります。

- コンソール・メニューから「ノード (Nodes)」-> 「<ノード (Node)>」-> 「アプリケーション・サーバー (Application Server)」-> 「<AppServer>」-> 「プロセス定義 (Process Definitions)」と選択します。
- 「詳細設定 (Advanced Settings)」の下で、「環境 (Environment)」を選択します。
- 「システム・プロパティ (System Properties)」で、「新規 (New)」を選択します。
- 「プロパティ名 (property name)」に PATH と入力し、「プロパティ値 (property value)」に <cmbr>%ikf%bin と入力します (たとえば、d:%cmbr>%ikf%bin となります)。
- 「OK」を選択します。
- WAS 管理コンソールの上部のバーにある「保管 (Save)」を選択します。

• AIX の場合:

アプリケーション・サーバーを開始する人 (たとえば「root」) は、.profile に次の行が入っている必要があります。

./usr/lpp/cmb/ikf/IST/bin/ISTSingleWorkstationEnv.sh

• Solaris の場合:

アプリケーション・サーバーを開始する人 (たとえば「root」) は、.profile に次の行が入っている必要があります。

./opt/IBMcmb/ikf/IST/bin/ISTSingleWorkstationEnv

7. コンソールの上部のバーにある「終了 (Exit)」をクリックして、終了します。

8. 以下のようにして、WAS をシャットダウンします。

• コマンド・シェルで <WAS\_Home>%bin ディレクトリーに切り替える。

• 以下のように入力する。

- Windows の場合: stopserver

- AIX の場合: ./stopServer.sh

- Solaris の場合: ./stopServer.sh

9. コマンド・シェルで、以下のように入力します。

• Windows の場合: seappinstall -install <CMBROOT>%ikf%IST%IST.war

• AIX の場合: ./SEAppInstall.sh -install /usr/lpp/cmb/ikf/IST/IST.war

• Solaris の場合: ./SEAppInstall.sh -install /opt/IBMcmb/ikf/IST/IST.war

以下のようなプロンプトが出されます。

• アプリケーション表示名を指定してください: IST と入力します。

- コンテキスト・ルートを指定してください。ご自分の <WebPath> を入力します (たとえば /webApps/IST )。<WebPath> が /IST で終わっていることを確認してください。
  - このアプリケーションのすべての JSP をプリコンパイルしますか: n と入力します。
  - 個々の Web アプリケーションをプリコンパイルしますか: n と入力します。
  - 以下の Web アプリケーション IBM Information Structuring Tool の仮想ホストを指定してください。ご自分の <VirtualHost> を入力します (たとえば default\_host)。
10. IST は、EIP データベース icmnlbdb を使用します。  
データベース名が異なる場合は、次のようにします。
- IST が配置されているディレクトリー (通常、<WAS\_HOME>%installedApps) に移動します。
  - ディレクトリー IST.ear/IST.war/WEB-INF に移動して、ファイル web.xml をオープンします。
  - icmnlbdb を検索して、自分の EIP データベース名に名前を変えます。
  - ファイルを保管します。
11. コマンド・シェルで以下のように入力して、WAS を再始動します。
- Windows の場合: startserver
  - AIX の場合: ./startServer.sh
  - Solaris の場合: ./startServer.sh
12. 以下のようにして、WAS の Web サーバー・プラグイン構成を再生成します。
- Administrative Console を開きます。
  - 「ノード (Nodes)」 --> 「<ノード (Node)>」 --> 「アプリケーション・サーバー (Application Server)」 --> 「<AppServer>」 と選択します。
  - 「詳細設定 (Advanced Settings)」の下で、「Web Server Plugin 構成 (Web Server Plugin Configuration)」を選択します。
  - 「生成 (Generate)」を選択します。
13. Information Structuring Tool にアクセスする URL は、[http://host\\_alias/WebPath/login.html](http://host_alias/WebPath/login.html) です。ここで、
- host\_alias は、VirtualHost に指定された別名の 1 つです。この値は、以下のようにして検出します。
    - WAS 管理コンソールをオープンします。
    - コンソール・メニューから、「仮想ホスト (Virtual Hosts)」 --> 「<VirtualHost>」 --> 「別名 (Aliases)」 と選択します。
    - リスト内の各項目 (ホスト名およびポート) は、有効なホスト名の別名です (例: prefix:9080 )。



- <WebPath> は、インストール時に指定した値です (例: /webApps/IST)。

**WAS AE:** WAS AE および Enterprise Information Portal をインストールした後、WAS 管理者のコンソールをオープンし、以下の指示に従ってください。

1. コンソール・メニューから「ノード (Nodes)」-> 「<Node>」-> 「アプリケーション・サーバー (Application Server)」-> 「<AppServer>」と選択します。
2. アプリケーション・サーバーが実行中の場合には、停止します。
3. 右側の「JVM 設定値 (JVM Settings)」タブを選択します。
4. WAS と Enterprise Information Portal が同じワークステーション上にある場合には、以下の Classpath 情報を入力してください。

- Windows の場合:

```
<CMBROOT>%ikf%lib
<CMBROOT>%ikf%lib%ikf.jar
<CMBROOT>%lib%cmbsdk81.jar
<CMBROOT>%lib%cmb81.jar
<CMCOMMON>
<CMBROOT>%lib%cmblog4j81.jar
<CMBROOT>%lib%log4j.jar
<DB2HOME>%java%db2java.zip
```

- AIX の場合:

```
/usr/lpp/cmb/ikf/lib
/usr/lpp/cmb/ikf/lib/ikf.jar
/usr/lpp/cmb/lib
/usr/lpp/cmb/lib/cmb81.jar
/usr/lpp/cmb/lib/cmbsdk81.jar
/usr/lpp/cmb/cmgmt
/usr/lpp/cmb/lib/cmblog4j81.jar
/usr/lpp/cmb/lib/log4j.jar
<DB2JAVAHOME>/db2java.zip
```

- Solaris の場合:

```
/opt/IBMcmb/ikf/lib
/opt/IBMcmb/ikf/lib/ikf.jar
/opt/IBMcmb/lib
/opt/IBMcmb/lib/cmb81.jar
/opt/IBMcmb/lib/cmbsdk81.jar
/opt/IBMcmb/cmgmt
/opt/IBMcmb/lib/cmblog4j81.jar
/opt/IBMcmb/lib/log4j.jar
<DB2JAVAHOME>/db2java.zip
```

WAS と Enterprise Information Portal が別のワークステーション上にある場合には、Classpath 情報は次のとおりです。

- Windows の場合:

```
<CMBROOT>%ikf%lib%ikf.jar
<CMCOMMON>
<CMBROOT>%lib%cmb81.jar
```

- AIX の場合:

```
/usr/lpp/cmb/ikf/lib/ikf.jar
/usr/lpp/cmb/lib/cmb81.jar
/usr/lpp/cmb/cmgmt
```

- Solaris の場合:

```
/opt/IBMcmb/ikf/lib/ikf.jar
/opt/IBMcmb/lib/cmb81.jar
/opt/IBMcmb/cmgmt
```

5. 「最大ヒープ・サイズ (Maximum Heap Size)」を 512 に設定します。
6. ページ下部の「適用 (Apply)」を選択します。
7. WAS と Enterprise Information Portal が同じワークステーション上にある場合は、以下のようにします。

- Windows の場合:

IST が配置されているサーバーに、以下のような追加の PATH 項目が含まれている必要があります。

- コンソール・メニューから「ノード (Nodes)」->「<Node>」->「アプリケーション・サーバー (Application Server)」->「<AppServer>」と選択します。
- 「全般 (General)」タブで、「環境 (Environment...)」を選択します。
- 「環境エディター (Environment Editor)」フレームで、「追加 (Add)」を選択します。
- 「名前 (Name)」に「PATH」、「値 (Value)」には <cmbroot>%ikf%bin を入力します (たとえば d:%cmbroot%ikf%bin となります)。
- 「OK」を選択します。
- 「適用 (Apply)」を選択します。

- AIX の場合:

アプリケーション・サーバー (たとえば「Default Server」) が実行しているユーザーは、.profile に次の行が入っている必要があります。

```
. /usr/lpp/cmb/ikf/IST/bin/ISTSingleWorkstationEnv.sh
```

- Solaris の場合:

アプリケーション・サーバー (たとえば「Default Server」) が実行しているユーザーは、.profile に次の行が入っている必要があります。

```
. /opt/IBMcmb/ikf/IST/bin/ISTSingleWorkstationEnv
```

8. Administrative Console を通じて IST を配置します。必要なステップは、以下のものです。
  - コンソール・メニューから、「コンソール (Console)」->「ウィザード (Wizards)」->「エンタープライズ・アプリケーションのインストール (Install Enterprise Application)」と選択します。

- 表示されたパネルで、次のように行います。
    - 「スタンドアロン・モジュールのインストール (Install stand-alone module)」を選択します。
    - 「**ブラウズ (Browse)**」を選択し、以下のところでファイル IST.war を見つけます。
      - Windows の場合: <cmbrroot>%ikf%IST
      - AIX の場合: /usr/lpp/cmb/ikf/IST
      - Solaris の場合: /opt/IBMcmb/ikf/IST
    - 「アプリケーション名 (Application Name)」について、IST と入力します。
    - 「Web モジュールのコンテキスト・ルート (Context Root for Web Module)」について <WebPath> と入力します (たとえば /webApps/IST)。<WebPath> が /IST で終わっていることを確認します。
    - 「**次へ (Next)**」をクリックします。
  - 「**次へ (Next)**」をクリックして、以下のパネルをう回します。
    - 役割へのユーザーのマッピング (Mapping users to roles)
    - ユーザーへの EJBRUNAS 役割のマッピング (Mapping EJBRUNAS Roles to Users)
    - JNDI 名への Enterprise Beans のバインディング (Binding Enterprise Beans to JNDI names)
    - Enterprise Beans への EJP 参照のマッピング (Mapping EJP References to Enterprise Beans)
    - リソースへのリソース参照のマッピング (Mapping Resource References to Resources)
    - EJB モジュールのデフォルト・データ・ソースの指定 (Specifying the Default Datasource for EJB Modules)
    - 個々の CMP Bean のデフォルト・データ・ソースの指定 (Specifying Data Sources for individual CMP beans)
  - 「Webmodules の仮想ホストの選択 (Selecting Virtual Hosts for Webmodules)」パネルで、必要な仮想ホストを選択して、「**次へ (Next)**」をクリックします。
  - 「アプリケーション・サーバーの選択 (Selecting Application Servers)」パネルで、必要な仮想ホストを選択して、「**次へ (Next)**」をクリックします。
  - 表示されたパネルで、「**終了 (Finish)**」をクリックします。
9. IST は、EIP データベース icmnlsdb を使用します。
- データベース名が異なる場合は、次のようにします。
- IST が配置されているディレクトリー (通常、<WAS\_HOME>%installedApps) に移動します。

- ディレクトリー IST.ear/IST.war/WEB-INF に移動して、ファイル web.xml をオープンします。
  - icmnlbdb を検索して、自分の EIP データベース名に名前を変えます。
  - ファイルを保管します。
10. アプリケーション・サーバーを再始動します。
  11. 以下のようにして、Web サーバー・プラグイン構成を再生成します。
    - 「管理コンソール (Administrative Console)」で、「ノード (Nodes)」->「<Node>」->「アプリケーション・サーバー (Application Server)」->「<AppServer>」を選択する。
    - 「<AppServer>」を右クリックし、「Web サーバー・プラグインの再生成 (Regen Web Server Plugin)」を選択する。
  12. Information Structuring Tool にアクセスする URL は、[http://host\\_alias/WebPath/login.html](http://host_alias/WebPath/login.html) です。ここで、
    - host\_alias は、VirtualHost に指定された別名の 1 つです。この値は、以下のようして検出します。
      - WAS 管理コンソールをオープンします。
      - コンソール・メニューから、「仮想ホスト (Virtual Hosts)」->「<VirtualHost>」->「別名 (Aliases)」と選択します。
      - リスト内の各項目 (ホスト名およびポート) は、有効なホスト名の別名です (例: prefix:9080 )。
    - <WebPath> は、インストール時に指定した値です (例: /webApps/IST)。

## WAS V5

これらの手順は、WAS 5 Base と WAS 5 Network Deployment (ND) の両方に適用されます。WAS 5 Network Deployment の場合、情報マイニング フィーチャー (単一ワークステーション・シナリオ) または Enterprise Information Portal クライアント (クライアント/サーバー・セットアップ) のどちらかがインストールされているワークステーションからステップ 3 および 4 を実行します。

WAS V5 および Enterprise Information Portal のインストール後、以下のことを実行してください。

1. アプリケーション・サーバーを開始します。
2. WAS 5 ND のみ: 配置マネージャーが開始されていることを確認します。
3. 必要な環境設定を使用して WAS 内に共有ライブラリーをセットアップします。
  - Windows の場合:
    - コマンド・シェルで、ディレクトリー <WAS\_HOME>%bin に切り替えます。
    - <CMBROOT>%ikf%IST%bin%SetupIMEnv <Cell> <Node> <AppServer> を入力します。たとえば WAS V5 Base の場合は d:%cmbroot%ikf%IST%bin%SetupIMEnv

prefix prefix server1で、WAS V5 ND の場合は  
d:¥cmbroot¥ikf¥IST¥bin¥SetupIMEnv runner prefix server1 です。

- AIX の場合:
    - コマンド・シェルで、ディレクトリー <WAS\_HOME>/bin に切り替えます。
    - /usr/lpp/cmb/ikf/IST/bin/SetupIMEnv.sh <Cell> <Node> <AppServer> を入力します。
  - Solaris の場合:
    - コマンド・シェルで、ディレクトリー <WAS\_HOME>/bin に切り替えます。
    - /opt/IBMcmb/ikf/IST/bin/SetupIMEnv.sh <Cell> <Node> <AppServer> を入力します。
4. Administrative Console を通じて IST を配置します。必要なステップは、以下のものです。
- Administrative Console ブラウザーを起動します。
  - 「ナビゲーション・バー (Navigation Bar)」で、「**アプリケーション (Applications)**」→「**新規アプリケーションのインストール (Install New Application)**」を選択します。
  - 「**パス (Path)**」の下で、ファイル IST.war をブラウズします。
    - Windows の場合: <cmbroot>¥ikf¥IST
    - AIX の場合: /usr/lpp/cmb/ikf/IST
    - Solaris の場合: /opt/IBMcmb/ikf/IST
  - 「コンテキスト・ルート (Context Root)」について <WebPath> と入力します (たとえば /webApps/IST)。<WebPath> が /IST で終わっていることを確認します。
  - 「**次へ (Next)**」をクリックします。
  - 「仮想ホスト (Virtual Host)」の下で、「Web モジュールのデフォルトの仮想ホスト名 (Default virtual host name for web modules)」にチェックマークが付いており、必要な仮想ホストに設定されているか確認します。
  - 「**次へ (Next)**」をクリックします。
  - 「**次へ (Next)**」をクリックして、「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」をう回します (ステップ 1)。
  - 「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」で、次のように行います (ステップ 2)。
    - 正しい仮想ホストが指定されていることを確認します。
    - 「**次へ (Next)**」をクリックします。
  - 「**次へ (Next)**」をクリックして、「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」をう回します (ステップ 3)。
  - 「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」で、「**終了 (Finish)**」をクリックします (ステップ 4)。

- メニュー・バーで、「保管 (Save)」をクリックします。
  - ナビゲーション・バーで、「アプリケーション (Applications)」->「Enterprise Applications」を選択します。
  - 「IST\_war」を選択します。
  - 「構成 (Configuration)」タブで、「一般プロパティ (General Properties)」に進み、「配布の使用可能 (Enable Distribution)」および「再ロード使用可能 (Reload Enabled)」のチェックマークを外します。
  - 「適用 (Apply)」を選択します。
  - 「その他のプロパティ (Additional Properties)」の下の「ライブラリー (Libraries)」を選択します。
  - 「追加 (Add)」をクリックします。
  - ドロップダウン・リストから「InformationMiningEnvironment」を選択して、「OK」を選択します。
  - メニュー・バーで、「保管 (Save)」をクリックして、設定を保管します。
5. Web サーバー・プラグイン構成を更新します。
    - ナビゲーション・バーで、「環境 (Environment)」->「Web サーバー・プラグインの更新 (Update Web Server Plugin)」と選択します。
    - 「OK」を選択します。
  6. アプリケーション・サーバーを停止します。
  7. 配置後は、次のようにします。
    - コマンド・シェルをオープンします。
    - 次の IST ソース・ディレクトリーに移動します。
      - Windows の場合: <CMBROOT>%ikf%IST%bin
      - AIX の場合: /usr/lpp/cmb/ikf/IST/bin
      - Solaris の場合: /opt/IBMcmb/ikf/IST/bin
    - コマンド・プロンプトで、次のように入力します。
      - Windows の場合: ISTconfig <WAS\_HOME> <Node> と入力して、**Enter** を押します。WAS\_HOME にスペースが含まれている場合は、たとえば ISTConfig "c:%Program Files%WebSphere%AppServer" prefix のように引用符を使用します。
      - Windows 2000 では、ファイルを置き換えるかどうかプロンプトが出されたら (3 回)、その度に **y** と入力します。
      - AIX の場合: ./ISTconfig.sh <Node> と入力して、**Enter** を押します。
      - Solaris の場合: ./ISTconfig <Node> と入力して、**Enter** を押します。
  8. IST は、EIP データベース icmnlbdb を使用します。  
データベース名が異なる場合は、次のようにします。

- IST が配置されているディレクトリー (通常、  
<WAS\_HOME>%installedApps%<Node>) に移動します。たとえば、  
d:%WebSphere%Appserver%installedApps%prefix。
  - ディレクトリー IST\_war.ear/IST.war/WEB-INF に移動して、ファイル web.xml  
をオープンします。
  - icmnlsdb を検索して、自分の EIP データベース名に名前を変えます。
  - ファイルを保管します。
9. アプリケーション・サーバーを再始動します。
10. Information Structuring Tool にアクセスする URL は、  
http://host\_alias/WebPath/login.html です。ここで、
- host\_alias は、VirtualHost に指定された別名の 1 つです。この値は、以下の  
ようにして検出します。
    - WAS 管理コンソールをオープンします。
    - ナビゲーション・パネルから、「環境 (Environment)」->「仮想ホスト  
(Virtual Hosts)」->「<VirtualHost>」->「ホストの別名 (Host  
Aliases)」と選択します。

リスト内の各項目 (ホスト名およびポート) は、有効なホスト名の別名です  
(例: prefix:9080 )。
  - <WebPath> は、インストール時に指定した値です (例: /webApps/IST)。

## ブラウザ設定

### ブラウザ言語の設定

Information Structuring Tool GUI で使用される言語は、使用している Web ブラウザーの言語設定によって決まります。これらの設定を変更するには、次のようにします。

- Internet Explorer の場合:
  - メニュー・バーから「ツール」->「インターネットオプション」->「言語」と  
選択します。
  - リストから希望する言語を選択します。
  - 「上へ」をクリックして、目的の言語をトップにリストします。
- Netscape の場合:
  - メニュー・バーから「編集」->「設定」->「Navigator」->「言語」を選択し  
ます。
  - 「追加」を選択して、言語を追加します。
  - リストから希望する言語を選択し、それをリストの最上段に移動します。

.../IST/login.html ページを使用して、選択した言語で Information Structuring Tool にア  
クセスします。

## キャッシュ設定

推奨 Web ブラウザー・キャッシュ設定は、次のとおりです。

- Internet Explorer の場合:
  - メニュー・バーから「ツール」->「インターネット オプション」と選択します。
  - 「インターネット一時ファイル」の下で、「設定」を選択します。
  - 「保存しているページの新しいバージョンの確認」の下で、「ページを表示するごとに確認する」を選択します。
- Netscape の場合:
  - 「編集」->「設定」->「詳細」->「キャッシュ」と選択します。
  - 「キャッシュにあるページとネットワーク上のページの比較」の下で、「ページにアクセスするたび」を選択します。

## Cookies および Javascript

Information Structuring Tool を使用するには、Cookies と Javascript の両方がブラウザで使用可能になっている必要があります。

## JSP サンプル用 Web アプリケーション・サーバーの構成

WebSphere Application Server の Advanced Edition (WAS 4 AE) または Advanced Single Server Edition (WAS 4 AEs)、あるいは WebSphere Application Server 5 Base または WebSphere Application Server 5 Network Deployment (ND) に JSP をインストールするには、以下の情報が必要です。

- <Node> は、JSP のインストール先ワークステーションの名前です。
- <AppServer> は、JSP のインストール先 <Node> のアプリケーション・サーバーです (例: WAS 4 の場合は Default Server、WAS 5 の場合は server1)。
- <VirtualHost> は、JSP を実行する仮想ホストの名前です (例: default\_host)。
- <WebPath> は、JSP へのアクセスに使用される URL のパスの部分です。たとえば、JSP をサーバー prefix にインストールするときに、<WebPath> が /miningSample であれば、JSP にアクセスする URL は `http://prefix:9080/miningSamples/logon.html` です。
- <WAS\_HOME> は、<Node> 上の WAS のインストール先ディレクトリーです (例: Windows の場合 `d:\WebSphere\AppServer`、AIX の場合 `/usr/WebSphere/AppServer`、Solaris の場合 `/opt/WebSphere/AppServer`)。
- WAS 5 のみ: <Cell> は管理接続の名前です。WAS 5 Base の場合、これは、<Node> と同じ名前です。WAS 5 ND の場合、これは、配置マネージャーが実行しているワークステーションの名前です。
- Windows の場合:
  - <CMBROOT> は対応する環境変数の値です (例: `d:\cmbroot`)。



- <DB2HOME> は対応する環境変数の値です (例: d:\sql\lib)。
- AIX の場合:
  - <DB2HOME> は DB2 のインストール先ディレクトリーです (例: /usr/lpp/db2\_07\_01 または /usr/opt/db2\_08\_01)。
  - <DB2JAVAHOME> は、Java 1.2 ライブラリー・ファイルがあるディレクトリーです。DB2 V7 の場合、これは、<DB2HOME>/java12 であり、DB2 V8 の場合は <DB2HOME>/java です。
- Solaris の場合:
  - <DB2HOME> は、DB2 のインストール・ディレクトリーです (例: /opt/IBMdb2/V7.1 または /opt/IBMdb2/V8.1)。
  - <DB2JAVAHOME> は、Java 1.2 ライブラリー・ファイルがあるディレクトリーです。DB2 V7 の場合、これは、<DB2HOME>/java12 であり、DB2 V8 の場合は <DB2HOME>/java です。

JSP は、Information Structuring Tool を配置したのと同じアプリケーション・サーバーに配置するようお勧めします。これにより、ステップ 7 の WAS AEs または WAS AE の JSP の配置を続けることができます。JSP が同じアプリケーション・サーバーに配置されていない場合は、168 ページの『インストールの手順』を参照してから、以下のセクションを続けてください。

## WAS V4

次のセクションでは、WAS 4 AEs 内での IST 配置手順、続いて WAS 4 AE 内のものについて説明します。

**WAS AEs:** WAS AEs および Enterprise Information Portal をインストールした後、WAS 管理者のコンソールをオープンし、以下の指示に従ってください。

1. コンソール・メニューから「ノード (Nodes)」->「<ノード (Node)>」->「アプリケーション・サーバー (Application Server)」->「<AppServer>」->「プロセス定義 (Process Definitions)」->「JVM 設定 (JVM Settings)」と選択します。
2. WAS と Enterprise Information Portal が同じワークステーション上にある場合には、以下の Classpath 情報を入力してください。

- Windows の場合:

```
<CMBROOT>%ikf%lib
<CMBROOT>%ikf%lib%ikf.jar
<CMBROOT>%lib%cmb81.jar
<CMBROOT>%lib%cmbsdk81.jar
<CMCOMMON>
<CMBROOT>%lib%cmblog4j81.jar
<CMBROOT>%lib%log4j.jar
<DB2HOME>%java%db2java.zip
```

- AIX の場合:

```

/usr/lpp/cmb/ikf/lib
/usr/lpp/cmb/ikf/lib/ikf.jar
/usr/lpp/cmb/lib
/usr/lpp/cmb/lib/cmb81.jar
/usr/lpp/cmb/lib/cmbsdk81.jar
/usr/lpp/cmb/cmgt
/usr/lpp/cmb/lib/cmblog4j81.jar
/usr/lpp/cmb/lib/log4j.jar
<DB2JAVAHOME>/db2java.zip

```

- Solaris の場合:

```

/opt/IBMcmb/ikf/lib
/opt/IBMcmb/ikf/lib/ikf.jar
/opt/IBMcmb/lib
/opt/IBMcmb/lib/cmb81.jar
/opt/IBMcmb/lib/cmbsdk81.jar
/opt/IBMcmb/cmgt
/opt/IBMcmb/lib/cmblog4j81.jar
/opt/IBMcmb/lib/log4j.jar
<DB2JAVAHOME>/db2java.zip

```

WAS と Enterprise Information Portal が別のワークステーション上にある場合には、Classpath 情報は次のとおりです。

- Windows の場合:

```

<CMBROOT>%ikf%lib%ikf.jar
<CMCOMMON>
<CMBROOT>%lib%cmb81.jar

```

- AIX の場合:

```

/usr/lpp/cmb/ikf/lib/ikf.jar
/usr/lpp/cmb/cmgt
/usr/lpp/cmb/lib/cmb81.jar

```

- Solaris の場合:

```

/opt/IBMcmb/ikf/lib/ikf.jar
/opt/IBMcmb/lib/cmgt
/opt/IBMcmb/lib/cmb81.jar

```

3. ページ下部の「OK」を選択します。
4. WAS 管理コンソールの上部のバーにある「保管 (Save)」をクリックして、構成設定値を保管します。
5. WAS と Enterprise Information Portal が同じワークステーション上にある場合は、以下のようにします。

- Windows の場合:

以下のようにして、PATH を WAS Administrative Console で設定する必要があります。

- コンソール・メニューから「ノード (Nodes)」->「<ノード (Node)>」->「アプリケーション・サーバー (Application Server)」->「<AppServer>」->「プロセス定義 (Process Definitions)」と選択します。

- 「詳細設定 (Advanced Settings)」の下で、「環境 (Environment)」を選択します。
  - 「システム・プロパティ (System Properties)」で、「新規 (New)」を選択します。
  - 「プロパティ名 (property name)」について PATH と入力し、「プロパティ値 (property value)」について <cmbrroot>%ikf%bin と入力します (たとえば、d:%cmbrroot%ikf%bin となります)。
  - 「OK」を選択します。
  - WAS 管理コンソールの上部のバーにある「保管 (Save)」を選択します。
  - AIX の場合:  
アプリケーション・サーバーを開始する人 (たとえば「root」) は、.profile に次の行が入っている必要があります。  
 . /usr/lpp/cmb/ikf/IST/bin/ISTSingleWorkstationEnv.sh
  - Solaris の場合:  
アプリケーション・サーバーを開始する人 (たとえば「root」) は、.profile に次の行が入っている必要があります。  
 . /opt/IBMcmb/ikf/IST/bin/ISTSingleWorkstationEnv
  - 6. コンソールの上部のバーにある「終了 (Exit)」をクリックして、終了します。
  - 7. 以下のようにして、WAS をシャットダウンします。
    - コマンド・シェルで <WAS\_Home>%bin ディレクトリーに切り替える。
    - 以下のように入力する。
      - Windows の場合: stopserver
      - AIX の場合: ./stopServer.sh
      - Solaris の場合: ./stopServer.sh
  - 8. コマンド・シェルで、以下のように入力します。
    - Windows の場合: seappinstall -install  
 <CMBROOT>%samples%jsp%infomining%jsp.war
    - AIX の場合: ./SEAppInstall.sh -install  
 /usr/lpp/cmb/samples/jsp/infomining/jsp.war
    - Solaris の場合: ./SEAppInstall.sh -install  
 /opt/IBMcmb/samples/jsp/infomining/jsp.war
- 以下のようなプロンプトが出されます。
- アプリケーション表示名を指定してください: InfoMiningSamples と入力します。

- コンテキスト・ルートを指定してください。ご自分の <WebPath> を入力します (たとえば /webApps/IST )。<WebPath> が /IST で終わっていることを確認してください。
  - このアプリケーションのすべての JSP をプリコンパイルしますか: n と入力します。
  - 個々の Web アプリケーションをプリコンパイルしますか: n と入力します。
  - 以下の Web アプリケーション IBM 情報マイニングの Sample JSP の仮想ホストを指定してください。ご自分の <VirtualHost> を入力します (たとえば default\_host)。
9. コマンド・シェルで以下のように入力して、WAS を再始動します。
- Windows の場合: startserver
  - AIX の場合: ./startServer.sh
  - Solaris の場合: ./startServer.sh
10. 以下のようにして、WAS の Web サーバー・プラグイン構成を再生成します。
- Administrative Console を開きます。
  - 「ノード (Nodes)」-> 「<ノード (Node)>」-> 「アプリケーション・サーバー (Application Server)」-> 「<AppServer>」と選択します。
  - 「詳細設定 (Advanced Settings)」の下で、「Web Server Plugin 構成 (Web Server Plugin Configuration)」を選択します。
  - 「生成 (Generate)」を選択します。
11. JSP にアクセスする URL は、http://host\_alias/WebPath/logon.html です。ここで、
- host\_alias は、VirtualHost に指定された別名の 1 つです。この値は、以下のようして検出します。
    - WAS 管理コンソールをオープンします。
    - コンソール・メニューから、「仮想ホスト (Virtual Hosts)」-> 「<VirtualHost>」-> 「別名 (Aliases)」と選択します。
    - リスト内の各項目 (ホスト名およびポート) は、有効なホスト名の別名です (例: prefix:9080 )。
  - <WebPath> は、インストール時に指定した値です (例: /webApps/JSPs )。

**WAS AE:** WAS AE および Enterprise Information Portal をインストールした後、WAS 管理者のコンソールをオープンし、以下の指示に従ってください。

1. コンソール・メニューから「ノード (Nodes)」-> 「<Node>」-> 「アプリケーション・サーバー (Application Server)」-> 「<AppServer>」を選択します。
2. アプリケーション・サーバーが実行中の場合には、停止します。
3. 右側の「JVM 設定値 (JVM Settings)」タブを選択します。

4. WAS と Enterprise Information Portal が同じワークステーション上にある場合には、以下の Classpath 情報を入力してください。

- Windows の場合:

```
<CMBROOT>%ikf%lib
<CMBROOT>%ikf%lib%ikf.jar
<CMBROOT>%lib%cmb81.jar
<CMBROOT>%lib%cmbsdk81.jar
<CMCOMMON>
<CMBROOT>%lib%cmblog4j81.jar
<CMBROOT>%lib%log4j.jar
<DB2HOME>%java%db2java.zip
```

- AIX の場合:

```
/usr/lpp/cmb/ikf/lib
/usr/lpp/cmb/ikf/lib/ikf.jar
/usr/lpp/cmb/lib
/usr/lpp/cmb/lib/cmb81.jar
/usr/lpp/cmb/lib/cmbsdk81.jar
/usr/lpp/cmb/cmgmt
/usr/lpp/cmb/lib/cmblog4j81.jar
/usr/lpp/cmb/lib/log4j.jar
<DB2JAVAHOME>/db2java.zip
```

- Solaris の場合:

```
/opt/IBMcmb/ikf/lib
/opt/IBMcmb/ikf/lib/ikf.jar
/opt/IBMcmb/lib
/opt/IBMcmb/lib/cmb81.jar
/opt/IBMcmb/lib/cmbsdk81.jar
/opt/IBMcmb/cmgmt
/opt/IBMcmb/lib/cmblog4j81.jar
/opt/IBMcmb/lib/log4j.jar
<DB2JAVAHOME>/db2java.zip
```

WAS と Enterprise Information Portal が別のワークステーション上にある場合には、Classpath 情報は次のとおりです。

- Windows の場合:

```
<CMBROOT>%ikf%lib%ikf.jar
<CMCOMMON>
<CMBROOT>%lib%cmb81.jar
```

- AIX の場合:

```
/usr/lpp/cmb/ikf/lib/ikf.jar
/usr/lpp/cmb/cmgmt
/usr/lpp/cmb/lib/cmb81.jar
```

- Solaris の場合:

```
/opt/IBMcmb/ikf/lib/ikf.jar
/opt/IBMcmb/cmgmt
/opt/IBMcmb/lib/cmb81.jar
```

5. ページ下部の「適用 (Apply)」を選択します。

6. WAS と Enterprise Information Portal が同じワークステーション上にある場合は、以下のようになります。
  - Windows の場合:
 

IST が配置されているサーバーに、以下のような追加の PATH 項目が含まれている必要があります。

    - コンソール・メニューから「**ノード (Nodes)**」->「**<Node>**」->「**アプリケーション・サーバー (Application Server)**」->「**<AppServer>**」と選択します。
    - 「全般 (General)」タブで、「環境 (Environment...)」を選択します。
    - 「環境エディター (Environment Editor)」フレームで、「追加 (Add)」を選択します。
    - 「名前 (Name)」に「PATH」、「値 (Value)」には `<cmbroot>%ikf%bin` を入力します (たとえば `d:%cmbroot%ikf%bin` となります)。
    - 「**OK**」を選択します。
    - 「**適用 (Apply)**」を選択します。
  - AIX の場合:
 

アプリケーション・サーバー (たとえば「Default Server」) が実行しているユーザーは、`.profile` に次の行が入っている必要があります。

```
. /usr/lpp/cmb/ikf/IST/bin/ISTSingleWorkstationEnv.sh
```
  - Solaris の場合:
 

アプリケーション・サーバー (たとえば「Default Server」) が実行しているユーザーは、`.profile` に次の行が入っている必要があります。

```
. /opt/IBMcmb/ikf/IST/bin/ISTSingleWorkstationEnv
```
7. Administrative Console を通じて JSP を配置します。必要なステップは、以下のものです。
  - コンソール・メニューから、「**コンソール (Console)**」->「**ウィザード (Wizards)**」->「**エンタープライズ・アプリケーションのインストール (Install Enterprise Application)**」と選択します。
  - 表示されたパネルで、次のように行います。
    - 「スタンドアロン・モジュールのインストール (Install stand-alone module)」を選択します。
    - 「**ブラウズ (Browse)**」を選択し、以下のところでファイル `jsp.war` を見つけます。
      - Windows の場合: `<cmbroot>%samples%jsp%infomining`
      - AIX の場合: `/usr/lpp/cmb/samples/jsp/infomining`
      - Solaris の場合: `/opt/IBMcmb/samples/jsp/infomining`

- 「アプリケーション名 (Application Name)」について、InfoMiningSamples と入力します。
  - 「Web モジュールのコンテキスト・ルート (Context Root for Web Module)」について、<webPath> と入力します (たとえば、/webApps/InfoMiningSamples)。
  - 「次へ (Next)」をクリックします。
  - 「次へ (Next)」をクリックして、以下のパネルをう回します。
    - 役割へのユーザーのマッピング (Mapping users to roles)
    - ユーザーへの EJBRUNAs 役割のマッピング (Mapping EJBRUNAs Roles to Users)
    - JNDI 名への Enterprise Beans のバインディング (Binding Enterprise Beans to JNDI names)
    - Enterprise Beans への EJP 参照のマッピング (Mapping EJP References to Enterprise Beans)
    - リソースへのリソース参照のマッピング (Mapping Resource References to Resources)
    - EJB モジュールのデフォルト・データ・ソースの指定 (Specifying the Default Datasource for EJB Modules)
    - 個々の CMP Bean のデフォルト・データ・ソースの指定 (Specifying Data Sources for individual CMP beans)
  - 「Webmodules の仮想ホストの選択 (Selecting Virtual Hosts for Webmodules)」パネルで、必要な仮想ホストを選択して、「次へ (Next)」をクリックします。
  - 「アプリケーション・サーバーの選択 (Selecting Application Servers)」パネルで、必要な仮想ホストを選択して、「次へ (Next)」をクリックします。
  - 表示されたパネルで、「終了 (Finish)」をクリックします。
8. コンソールでアプリケーション・サーバーを再始動します。
  9. 以下のようにして、Web サーバー・プラグイン構成を再生成します。
    - 「管理コンソール (Administrative Console)」で、「ノード (Nodes)」->「<Node>」->「アプリケーション・サーバー (Application Server)」->「<AppServer>」を選択する。
    - 「<AppServer>」を右クリックし、「Web サーバー・プラグインの再生成 (Regen Web Server Plugin)」を選択する。
  10. JSP にアクセスする URL は、http://host\_alias/WebPath/logon.html です。ここで、
    - host\_alias は、VirtualHost に指定された別名の 1 つです。この値は、以下のようして検出します。
      - WAS 管理コンソールをオープンします。

- コンソール・メニューから、「仮想ホスト (Virtual Hosts)」->「<VirtualHost>」->「別名 (Aliases)」と選択します。
- リスト内の各項目 (ホスト名およびポート) は、有効なホスト名の別名です (例: prefix:9080 )。
- <WebPath> は、インストール時に指定した値です (例、/miningSamples)。

## WAS V5

Information Structuring Tool と同じ <Cell> 上に Sample JSP を配置する場合、ステップ 3 をスキップできます。

これらの手順は、WAS 5 Base と WAS 5 Network Deployment (ND) の両方に適用されます。WAS 5 Network Deployment の場合、情報マイニング フィーチャー (単一ワークステーション・シナリオ) または Enterprise Information Portal クライアント (クライアント/サーバー・セットアップ) のどちらかがインストールされているワークステーションからステップ 3 および 4 を実行します。

WAS V5 および Enterprise Information Portal のインストール後、以下のことを実行してください。

1. アプリケーション・サーバーを開始します。
2. WAS 5 ND のみ: 配置マネージャーが開始されていることを確認します。
3. 必要な環境設定を使用して WAS 内に共用ライブラリーをセットアップします。
  - Windows の場合:
    - コマンド・シェルで、ディレクトリー <WAS\_Home>%bin に切り替えます。
    - <CMROOT>%ikf%IST%bin%SetupIMEnv <Cell> <Node> <AppServer> を入力します。たとえば WAS V5 Base の場合はd:%cmbroot%ikf%IST%bin%SetupIMEnv prefix prefix server1で、WAS V5 ND の場合はd:%cmbroot%ikf%IST%bin%SetupIMEnv runner prefix server1 です。
  - AIX の場合:
    - コマンド・シェルで、ディレクトリー <WAS\_Home>/bin に切り替えます。
    - /usr/lpp/cmb/ikf/IST/bin/SetupIMEnv.sh <Cell> <Node> <AppServer> を入力します。
  - Solaris の場合:
    - コマンド・シェルで、ディレクトリー <WAS\_Home>/bin に切り替えます。
    - /opt/IBMcmb/ikf/IST/bin/SetupIMEnv.sh <Cell> <Node> <AppServer> を入力します。
4. Administrative Console を通じて JSP を配置します。必要なステップは、以下のものです。
  - Administrative Console ブラウザーを起動します。



- 「ナビゲーション・バー (Navigation Bar)」で、「アプリケーション (Applications)」-> 「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」を選択します。
- 「パス (Path)」の下で、ファイル JSP.war をブラウズします。
  - Windows の場合: <cmbrroot>%samples%jsp%infomining
  - AIX の場合: /usr/lpp/cmb/samples/jsp/infomining
  - Solaris の場合: /opt/IBMcmb/samples/jsp/infomining
- 「コンテキスト・ルート (Context Root)」について、<WebPath> と入力します (たとえば /webApps/InfoMiningSamples)。
- 「次へ (Next)」をクリックします。
- 「仮想ホスト (Virtual Host)」の下で、「Web モジュールのデフォルトの仮想ホスト名 (Default virtual host name for web modules)」にチェックマークが付いており、必要な仮想ホストに設定されているか確認します。
- 「次へ (Next)」をクリックします。
- ステップ 1 で「次へ (Next)」をクリックして、「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」をう回します。
- ステップ 2 で「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」で、次のように行います。
  - 正しい仮想ホストが指定されていることを確認します。
  - 「次へ (Next)」をクリックします。
- ステップ 3 で「次へ (Next)」をクリックして、「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」をう回します。
- ステップ 4 で「新規アプリケーションのインストール (Install New Application)」で、「終了 (Finish)」をクリックします。
- メニュー・バーで、「保管 (Save)」をクリックします。
- ナビゲーション・バーで、「アプリケーション (Applications)」-> 「Enterprise Applications」を選択します。
- 「jsp.war」を選択します。
- 「構成 (Configuration)」タブで、「一般プロパティ (General Properties)」に進み、「配布の使用可能 (Enable Distribution)」のチェックマークを外します。
- 「適用 (Apply)」を選択します。
- 「その他のプロパティ (Additional Properties)」の下の「ライブラリー (Libraries)」を選択します。
- 「追加 (Add)」をクリックします。
- ドロップダウン・リストから「InformationMiningEnvironment」を選択して、「OK」を選択します。
- メニュー・バーで、「保管 (Save)」をクリックして、設定を保管します。

5. Web サーバー・プラグイン構成を更新します。
  - ナビゲーション・バーで、「環境 (Environment)」--> 「Web サーバー・プラグインの更新 (Update Web Server Plugin)」と選択します。
  - 「OK」を選択します。
6. アプリケーション・サーバーを停止します。
7. アプリケーション・サーバーを再始動します。
8. JSP にアクセスする URL は、http://host\_alias/WebPath/login.html です。ここで、
  - host\_alias は、VirtualHost に指定された別名の 1 つです。この値は、以下のようにして検出します。
    - WAS 管理コンソールをオープンします。
    - ナビゲーション・パネルから、「環境 (Environment)」--> 「仮想ホスト (Virtual Hosts)」--> 「<VirtualHost>」--> 「ホストの別名 (Host Aliases)」と選択します。

リスト内の各項目 (ホスト名およびポート) は、有効なホスト名の別名です (例 : prefix:9080 )。

  - <WebPath> は、インストール時に指定した値です (例: /webApps/InfoMiningSamples)。

---

## 第 17 章 RMI サーバーの構成

このセクションでは、RMI サーバーで以下のタスクを行うための手順について説明します。

- サーバーの構成
- クライアントの接続
- 情報マイニングの構成
- ワークフローの構成

---

### RMI サーバーの構成

RMI サーバーを構成するには次のようにします。

1. コマンド・プロンプトをオープンして、ディレクトリーを `cmbregist81.bat` (または `cmbregist81.sh`) ファイルおよび `policy` ファイルがあるディレクトリーに設定します。

**Windows の場合:** テキスト・エディターで `cmbregist81.bat` をオープンします。

**AIX の場合:** テキスト・エディターで、`/usr/lpp/cmb/bin/cmbregist81.sh` をオープンします。

**Solaris の場合:** テキスト・エディターで `/opt/IBMcmb/cmbregist81.sh` をオープンします。

2. 次の行のポート番号を変更することができますが、デフォルトのポート番号 1919 をそのまま使用しても構いません。

```
set remotePort=1919
```

3. 使用する構成と一致するように以下の行を変更します。

```
%JAVAHOME%\jre\bin\java -cp %CLASSPATH% -ms16M
Djava.security.policy=.%policy%Djava.rmi.server.codebase=http://com.
ibm.mm.sdk.remote.DKRemoteMainImp%remotePort% 0 13 TS QBIC DL JDBC
Fed V4 IP DD OD DES DB2 DJ
```

**0** 0 には、RMI サーバーが並行して処理できる接続の最大数を表す数を設定します。デフォルトは 0 で、この RMI サーバーに接続の最大数が指定されていないことを示します。単独で使用する RMI サーバーやマスター RMI サーバーではこの設定が推奨されています。

**13** この数値を後に続くサーバー・タイプの数と一致するように変更します。

**TS QBIC® DL JDBC Fed V4 IP DD OD DES DB2 DJ IC**

RMI サーバーがサポートしているサーバー・タイプ。RMI サーバー変数は、任意の順序で入力することができますが、文字は表 27 にリストされて

いるとおりに正確に入力してください。

表 27. RMI サーバー変数

| RMI サーバー変数  | 設定するタイミング                                                                     |
|-------------|-------------------------------------------------------------------------------|
| <b>DES</b>  | Domino 拡張検索サーバーにアクセスするとき                                                      |
| <b>DL</b>   | Content Manager サーバーにアクセスするとき                                                 |
| <b>Fed</b>  | Enterprise Information Portal データベースが RMI サーバーにインストールされているとき                  |
| <b>IP</b>   | Content Manager ImagePlus for OS/390 サーバーにアクセスするとき                            |
| <b>JDBC</b> | Enterprise Information Portal データベースが RMI サーバーにインストールされているとき                  |
| <b>DD</b>   | Domino.Doc サーバーにアクセスするとき                                                      |
| <b>OD</b>   | Content Manager OnDemand サーバーにアクセスするとき                                        |
| <b>QBIC</b> | イメージ・サーチ・サーバーで構成された Content Manager サーバーにアクセスするとき                             |
| <b>TS</b>   | テキスト・サーチ・サーバーで構成された Content Manager にアクセスするとき                                 |
| <b>V4</b>   | Content Manager for AS/400 サーバーにアクセスするとき                                      |
| <b>DB2</b>  | DB2 Universal Database サーバーにアクセスするとき                                          |
| <b>DJ</b>   | DB2 DataJoiner サーバーにアクセスするとき                                                  |
| <b>IC</b>   | インフォメーション・カタログ・コネクタを使用して DB2 UDB データウェアハウスセンターのインフォメーション・カタログ・マネージャーにアクセスするとき |

4. ファイル内の変数を変更した後、RMI サーバー変数のリストの前に入力した数が、リストされたサーバー変数の数と一致していることを確認してください。
5. cmbregist81.bat を保管します。
6. cmbregist81 コマンドを実行して RMI サーバーを始動します。

**Windows の場合:**

```
cmbregist81 hostname
```

ここで、*hostname* は、コマンドを実行している RMI サーバーの名前です。

**AIX の場合:**

```
./cmbregist81.sh hostname
```

ここで、*hostname* は、コマンドを実行している RMI サーバーの名前です。コマンド名の前に必ずピリオド (.) とブランク・スペースを入れてください。

7. これで、RMI サーバーを使用するための準備が完了しました。

---

## 複数の RMI サーバーの構成

複数の RMI サーバーで Enterprise Information Portal を構成することによって、クライアント要求を分散させることができます。RMI サーバーのグループは、サーバー・プールと呼ばれます。

RMI サーバー・プールをセットアップするには、1 つのサーバーをマスター RMI サーバーとして指定する必要があります。マスター・サーバーは RMI レジストリーに登録され、サーバー・プール内のクライアントや他の RMI サーバーから接続できるようになります。サーバー・プールのメンバーがマスター・サーバーに登録されると、マスター・サーバーはそのサーバー・プールのメンバーをリストに追加します。

すべてのクライアントは、マスター・サーバーに要求を送ります。マスター・サーバーは、クライアント要求をサーバー・プールのメンバーに平等に代行させます。サーバー・プールのメンバーは、クライアント要求に応じます。マスター・サーバーは、サーバー・プールのメンバーがすべて最大容量に達してしまった場合のみ接続に応じます。

たとえば、4 つの RMI サーバーを開始するとします。1 つはマスター・サーバーで、他の 3 つはサーバー・プールのメンバーです。マスター・サーバーは 3 つのクライアント要求を受け取ります。マスター・サーバーは最初の要求を 1 目のサーバーに送り、2 番目の要求を 2 目のサーバーに、3 番目の要求を 3 目のサーバーに送ります。4 番目の要求を受け取ると、マスター・サーバーはこれを再び 1 目のサーバーに送り、5 番目の要求を 2 目のサーバーに送ります。接続の数に限度が定められていない場合は、サーバーに対する要求がある限りこのサイクルが繰り返されます。

サーバー・プールの各メンバーとマスター・サーバーには、最低でも 1 つのコネクターがインストールされている必要があります。Enterprise Information Portal バージョン 8.1 の CD からコネクターをインストールすると、その接続のための RMI クラスがインストールされます。

マスター RMI サーバーとサーバー・プールのメンバーとの違いは、cmbregist81.bat ファイルの設定方法にあります。

追加の RMI サーバーをサーバー・プールの一部として構成するには、以下のようになります。

1. RMI サーバーに適切なコンテンツ・サーバー・コネクターがインストールされていることを確認してください。
2. コマンド・プロンプトをオープンして、ディレクトリーを cmbregist81.bat および policy ファイルがあるディレクトリーに設定します。

- Windows では、テキスト・エディターで cmbregist81.bat をオープンします。  
AIX および Solaris では、テキスト・エディターで cmbregist81.sh をオープンします。

- ファイルの先頭にある以下の行を探してください。

```
REM Note: To point to a master RMI server do the following
instead
REM of the statement below
REM java -cp %classpath% -xms32M
Djava.rmi.server.hostname=<hostname>Djava.security.policy=.%policy
-Djava.rmi.server.codebase=http://com.ibm.mm.sdk.remote.
DKRemoteMainImp 1919 5 MasterRMIServer<MasterRMIServer host name>
1922 5 DL TS QBIC JDBC Fed
```

- ここから、以下の行をコピーして set remotePort=1919 ステートメントの後にペーストします。

```
java -cp %classpath% -ms16MD-
java.rmi.server.hostname=<hostname>
-Djava.security.policy=.%policy -Djava.rmi.server.codebase=http://
com.ibm.mm.sdk.remote.DKRemoteMainImp 1919 5
MasterRMIServer <MasterRMIServer hostname> 1922 5
DL TS QBIC JDBC Fed
```

- set remotePort ステートメントを以下のようにします。

```
set remotePort=1919
```

ここでは、1919 を使用可能なポート番号に変更します。

- 以下の行を削除します。

```
%JAVAHOME%¥jre¥bin¥java -cp %CLASSPATH% -ms16M
-Djava.security.policy=.%policy
-Djava.rmi.server.codebase=http://
com.ibm.mm.sdk.remote.DKRemoteMainImp %remotePort%
0 13 TS QBIC DL JDBC Fed V4 IP DD OD DES DB2 DJ IC ICM
```

- ファイルの先頭からコピー & ペーストした行で、変数を、使用している構成と一致するように変更します。

```
java -cp %classpath% -ms16M -
Djava.rmi.server.hostname=<hostname>
-Djava.security.policy=.%policy -Djava.rmi.server.codebase=http://
com.ibm.mm.sdk.remote.DKRemoteMainImp 1919 5
MasterRMIServer <MasterRMIServer hostname>
1922 5 DL TS QBIC JDBC Fed
```

**1919** 1919 を、RMI サーバーのプール・メンバーが使用しているポート番号に変更します。

**5** 5 には、RMI サーバーが並行して処理できる接続の最大数を表す数を設定します。最大数に達すると、この数は自動的に増加することに注意してください。この RMI サーバーのプール・メンバーに接続の最大数を指定しない場合には、0 を入力します。

## hostname

hostname を RMI サーバーのプール・メンバーのホスト名に変更します。

## MasterRMIServer hostname

MasterRMIServer hostname を RMI マスター・サーバーのホスト名に変更します。

**1922** 1922 を RMI マスター・サーバーに設定したポート番号に変更します。

**5** この数値を後に続くサーバー・タイプの数と一致するように変更します。

## DL TS QBIC JDBC Fed

これらは、RMI プール・メンバーがサポートしているサーバー・タイプを表しています。RMI サーバー変数は、任意の順序で入力することができますが、文字は 194 ページの表 27 にリストされているとおりに正確に入力してください。表には、RMI 変数およびそれらを設定する場合がリストされています。

9. cmbregist81.bat を保管します。

10. マスター RMI サーバーが稼働していることを確認します。

**要件:** サーバー・プールのメンバーは、始動するとマスター RMI サーバーへの接続を試行します。したがって、マスター RMI サーバーは、サーバー・プールのメンバーを開始する前に始動する必要があります。

11. cmbregist81 コマンドを実行して RMI プール・メンバーを始動します。

### Windows の場合:

```
cmbregist81 hostname
```

ここで、hostname は、コマンドを実行している RMI サーバーのホスト名です。

### AIX の場合:

```
./cmbregist81.sh hostname
```

ここで、hostname は、コマンドを実行している RMI サーバーのホスト名です。コマンド名の前に必ずピリオド (.) とブランク・スペースを入れてください。

**要件:** 複数の RMI サーバーを構成する場合、サーバー・プール中の 1 つの RMI サーバーだけに統合コネクタをインストールする必要があります。

**ヒント:** ワークステーションにリソースがある場合は、同じワークステーション上で複数の RMI サーバーを実行することができます。ただしこの場合は、cmbregist81.bat ファイルをコピーして、そのコピーを RMI サーバーの 1 つに名前を変更してコピーする必要があります。たとえば、cmbregist81.bat を実行して 1 つ目の RMI サーバーを稼働させ、cmbregist812.bat を実行して 2 つ目の RMI サーバーを稼働させます。

## 情報マイニングの構成

情報マイニングをインストールしてから、情報マイニングのインストール先であるサーバーを RMI サーバーとして構成すると、他のクライアント・ワークステーションが情報マイニング・サービスにアクセスできるようになります。

### ローカル RMI サーバーにおける情報マイニングの構成

ローカル・サーバーを RMI サーバーとして構成する方法は、次のとおりです。

1. コマンド・プロンプトをオープンして、cmbsvregist81.bat (または cmbregist81.sh) および policy ファイルがあるディレクトリーに移動します。
2. **Windows の場合:** テキスト・エディターで cmbsvregist81.bat または cmbsvregist81.sh をオープンします。
3. 次の行のポート番号を変更することができますが、デフォルトのポート番号 1920 をそのまま使用しても構いません。

```
set remotePort=1920
```

4. 使用する構成と一致するように以下の行を変更します。

```
%JAVAHOME%\jre\bin\java -cp %classpath% -ms16M
Djava.security.policy=.%policy-
Djava.rmi.server.codebase=
http://com.ibm.mm.sdk.remote.DKRemoteServiceMainImp%
remotePort % 0 1 IKF
```

**0** 0 には、RMI サーバーが並行して処理できる接続の最大数を表す数を設定します。デフォルトは 0 で、この RMI サーバーに接続の最大数が指定されていないことを示します。これが推奨の設定です。

**1** RMI サーバーがサポートしているサーバー・タイプの数。RMI サーバーを情報マイニング・サーバーとして使用する場合、IKF というサーバー・タイプ 1 つのみがサポートされています。

**IKF** RMI サーバーがサポートしているサーバー・タイプです。

5. cmbsvregist81.bat または cmbsvregist81.sh を保管します。
6. RMI サーバーを始動するには、コマンド・プロンプトをオープンして cmbroot ディレクトリーに移動します。cmbsvregist81.bat または cmbsvregist81.sh を入力します。

### リモート RMI サーバーにおける情報マイニングの構成

Enterprise Information Portal 情報マイニング・サービスが、構成された RMI サーバーのある別のワークステーションにある場合、RMI サーバーに接続するには、情報マイニング・クライアント上の cmbsvcclient.ini ファイルを変更する必要があります。

1. テキスト・エディターで cmbsvcclient.ini をオープンします。
2. キーワード RemoteHost および RemotePort の横にある番号記号 (#) を削除します。番号記号は、ファイル内のコメントを示します。
3. 次のように、RMI サーバーのホスト名とポート番号を入力します。



```
RemoteHost=hostname
```

```
RemotePort=1920
```

ここで、*hostname* は RMI サーバーのホスト名を、*1920* は、RMI サーバーのポート番号を表しています。

4. `cmbsvcclient.ini` を保管します。

---

## RMI サーバーのロケーションを認識させるためのクライアントの構成

`cmbsclient.ini` は、管理クライアントと RMI サーバーに接続するすべてのクライアントに必ずインストールされるファイルです。構成の中に RMI サーバーが含まれている場合は、管理クライアントがインストールされているワークステーションで `cmbsclient.ini` を手動で設定できます。ただし、インストール時に、「RMI ホスト名とポート番号の指定 (Specify RMI Host Name and Port Number)」ウィンドウで、RMI サーバーの RMI ホスト名とポート番号を入力するようプロンプトが出されます。

`cmbsclient.ini` ファイルの手動による設定方法は、次のとおりです。

1. テキスト・エディターで `cmbsclient.ini` をオープンします。
2. キーワード `RemoteHost` および `RemotePort` の横にある番号記号 (#) を削除します。番号記号は、ファイル内のコメントを示します。
3. 次のように、RMI サーバーのホスト名とポート番号を入力します。

```
RemoteHost=ccrmi
RemotePort=1919
```

ここで、`ccrmi` は RMI サーバーのホスト名を表しており、`1919` は RMI サーバーのポート番号を表しています。

4. `cmbsclient.ini` を保管します。

---

## RMI サーバーでのワークフローの構成

ワークフロー・サーバーをインストールした後、ワークフロー・サーバーを RMI サーバーとして構成したり、また、リモート管理をサポートするためにワークフロー・サーバーを RMI サーバーと接続することもできます。

ワークフロー・サーバーを RMI サーバーとして構成するには、次のようにします。

1. コマンド・プロンプトから、`cmbregist81.bat` および `policy` ファイルがあるディレクトリに移動します。
2. **Windows の場合:** テキスト・エディターで `cmbsvregist81.bat` をオープンします。
3. 次の行のポート番号を変更することができますが、デフォルトのポート番号 `1920` をそのまま使用しても構いません。

```
set remotePort=1920
```

4. 以下の行を構成に応じて変更します。 %JAVAHOME%\jre\bin\java -cp  
%classpath%-ms16D -java.security.policy=.%policy  
-Djava.rmi.server.codebase=http://com.ibm.mm.sdk.remote.  
DKRemoteServiceMainImp %remotePort% 0 1 MQWF

**0** 0 には、RMI サーバーが並行して処理できる接続の最大数を表す数を設定します。デフォルトは 0 で、この RMI サーバーに接続の最大数が指定されていないことを示します。これが推奨の設定です。

**1** この値は、RMI サーバーがサポートしているサーバー・タイプの数を表します。RMI サーバーをワークフロー・サーバーとして使用する場合、MQWF というサーバー・タイプ 1 つのみがサポートされています。

**MQWF** RMI サーバーがサポートしているサーバー・タイプです。

5. cmbsvregist81.bat を保管します。
6. cmbsvregist81 コマンドを実行して RMI サーバーを始動します。

## リモート管理データベースの位置決め

Enterprise Information Portal 管理データベースが別のサーバーにある場合、ワークフロー・サーバー上の cmbsvclient.ini ファイルを、リモートの管理データベースに接続するように設定する必要があります。

1. テキスト・エディターで cmbsvclient.ini をオープンします。
2. キーワード RemoteHost および RemotePort の横にある番号記号 (#) を削除します。番号記号は、ファイル内のコメントを示します。
3. 次のように、RMI サーバーのホスト名とポート番号を入力します。

```
RemoteHost=yourserver
RemotePort=yourportnumber
```

ここで、*yourserver* は RMI サーバーのホスト名を、*yourportnumber* は RMI サーバーのポート番号を表しています。

4. cmbsvclient.ini を保管します。

---

## 第 18 章 構成ファイルの生成

このセクションでは、cmbcmenv.properties ファイル、INI ファイルのリスト、LDAP データ・ソース情報、およびこれらを簡単に作成したり更新したりできる Java ユーティリティについて説明します。

**Enterprise Information Portal の場合:** システム管理クライアントまたはコネクタをインストールした後、cmbenv81.bat (Windows) または cmbenv81.sh (AIX および Solaris) を実行して、自動的に Java ユーティリティのクラスパスを設定することができます。

**Content Manager の場合:** システム管理クライアントをインストールした後、cmbcmenv81.bat (Windows) を実行して、自動的に Java ユーティリティのクラスパスを設定することができます。

このセクションでは、次のトピックを扱います。

- 202 ページの『cmbcmenv.properties』
- 205 ページの『INI 構成ファイル』
- 216 ページの『Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) データ・ソース』

---

## cmbcmenv.properties

このプロパティ・ファイルは、INI ファイルが置かれている場所をコネクタに伝えます。これは、データ・ソース情報を含むことのできる LDAP サーバーを指定したり、ユーザー認証に使用することもできます。

**重要:** 括弧内は、コメントおよび情報であり、ユーティリティー・パラメーターではありません。

ユーティリティーの実行に必要な **JAR** ファイル: cmbutil81.jar

## 使用法

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbcmenv
```

## フラグ

デフォルト値がある場合、入力パラメーターはオプションとなります。

**-h** (help)

**-a <add>** (アクション) **-c <fileSystem>** (カテゴリー)

-p <構成ファイルのディレクトリー・パス・ロケーション>

-d <cmbcmenv.properties のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)

-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and delete operations (default TRUE))

**-a <update>** (アクション) **-c <fileSystem>** (カテゴリー)

-p <構成ファイルのディレクトリー・パス・ロケーション>

-d <cmbcmenv.properties のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)

-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and delete operations (default TRUE))

**-a <del>** (アクション) **-c <fileSystem>** (カテゴリー)

-d <cmbcmenv.properties のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)

-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and delete operations (default TRUE))

**-a <add>** (アクション) **-c <URL>** (カテゴリー)

-url <構成ファイルの URL ロケーション>

-d <cmbcmenv.properties のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)

-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and delete operations (default TRUE))

**-a <update>** (アクション) **-c <URL>** (カテゴリー)

-url <構成ファイルの URL ロケーション>

-d <cmbcmenv.properties のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)

-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and delete operations (default TRUE))

**-a <del>** (アクション) **-c <URL>** (カテゴリー)

-d <cmbcmenv.properties のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)

-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and delete operations (default TRUE))

**-a <add>** (アクション) **-c <LDAP>** (カテゴリー)

-ldapenabled <TRUE | FALSE> (LDAP 使用可能 (デフォルト: TRUE))

-ldapdatasourcesenabled <TRUE | FALSE> (LDAP データ・ソース使用可能 (デフォルト: FALSE))

-ldapuserauthentication <TRUE | FALSE> (LDAP ユーザー認証使用可能 (デフォルト: FALSE))

-ldapfactory <LDAP Java JNDI コンテキスト・ファクトリー> (デフォルト: com.sun.jndi.ldap.LdapCtxFactory)

-ldapstype <ACTIVE\_DIRECTORY | STANDARD\_LDAP> (LDAP サーバー・タイプ (デフォルト: STANDARD\_LDAP))

-ldapurl <LDAP サービス・プロバイダー URL>

-ldapref <follow | ignore> (LDAP 参照 (デフォルト: ignore))

-ldapauth <simple> (LDAP 参照 (デフォルト: simple))

-ldapuid <LDAP プリンシパル>

-ldapcred <LDAP 証明書>

-ldaprootdn <LDAP ルート・ドメイン・ネーム>

-ldapsrscope <SUBTREE\_SCOPE | ONELEVEL\_SCOPE> (LDAP 検索の有効範囲 (デフォルト: SUBTREE\_SCOPE))

```

-ldapprotocol <none> (LDAP プロトコル (デフォルト: none))
-ldapauthattr <LDAP 認証属性> (デフォルト: 値なし)
-ldapport <LDAP ポート> (デフォルト: 値なし)
-ldapdescattr <LDAP ユーザー記述属性> (デフォルト: DN)
-ldapsslkeyring <LDAP IBM SSL 鍵リング名> (デフォルト: 値なし)
-ldapsslpwd <LDAP IBM SSL パスワード> (デフォルト: 値なし)
-ldapsslcpkrs <LDAP IBM SSL ciphers> (default SSL_RSA_EXPORT_WITH_RC4_40_MD5
SSL_RSA_EXPORT_WITH_DES40_CBC_SHA SSL_RSA_EXPORT_WITH_RC2_CBC_40_MD5)
-d <cmbcmenv.properties のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)
-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and
delete operations (default TRUE))

-a <update> (アクション) -c <LDAP> (カテゴリー)
-ldapenabled <TRUE | FALSE> (LDAP 使用可能 (デフォルト: TRUE))
-ldapdatasourcesenabled <TRUE | FALSE> (LDAP データ・ソース使用可能 (デフォルト: FALSE))
-ldapuserauthenabled <TRUE | FALSE> (LDAP ユーザー認証使用可能 (デフォルト: FALSE))
-ldapfactory <LDAP Java JNDI コンテキスト・ファクトリー> (デフォルト: com.sun.jndi.ldap.LdapCtxFactory)
-ldapstype <ACTIVE_DIRECTORY | STANDARD_LDAP> (LDAP サーバー・タイプ (デフォルト: STANDARD_LDAP))
-ldapurl <LDAP サービス・プロバイダー URL>
-ldapref <follow | ignore> (LDAP 参照 (デフォルト: ignore))
-ldapauth <simple> (LDAP 参照 (デフォルト: simple))
-ldapuid <LDAP プリンシパル>
-ldapcred <LDAP 証明書>
-ldaprootdn <LDAP ルート・ドメイン・ネーム>
-ldapsrchscope <SUBTREE_SCOPE | ONELEVEL_SCOPE> (LDAP 検索の有効範囲 (デフォルト: SUBTREE_SCOPE))
-ldapprotocol <none> (LDAP プロトコル (デフォルト: none))
-ldapauthattr <LDAP 認証属性> (デフォルト: 値なし)
-ldapport <LDAP ポート> (デフォルト: 値なし)
-ldapdescattr <LDAP ユーザー記述属性> (デフォルト: DN)
-ldapsslkeyring <LDAP IBM SSL 鍵リング名> (デフォルト: 値なし)
-ldapsslpwd <LDAP IBM SSL パスワード> (デフォルト: 値なし)
-ldapsslcpkrs <LDAP IBM SSL ciphers> (default SSL_RSA_EXPORT_WITH_RC4_40_MD5
SSL_RSA_EXPORT_WITH_DES40_CBC_SHA SSL_RSA_EXPORT_WITH_RC2_CBC_40_MD5)
-d <cmbcmenv.properties のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)
-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and
delete operations (default TRUE))

-a (アクション) -c <LDAP> (カテゴリー)
-d <cmbcmenv.properties のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)
-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and
delete operations (default TRUE))

```

## 例

- 次の例では、INI ファイルが置かれているディレクトリーを指す `cmbcmenv.properties` ファイルに `CMCFGDIR` キーワードおよび値を追加しています。

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbcmenv -a add -c fileSystem -p "c:¥Program
Files¥IBM¥CMGMT"
```

- 次の例では、INI ファイルが置かれている Web サーバー・ディレクトリーを指す `cmbcmenv.properties` ファイルに `CMCOMMON_URL` キーワードおよび値を追加しています。

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbcmenv -a add -c URL -url
http://www.mycorp.com/cmgmt
```

- 次の例では、Java 統合データ・ストアまたは ICM データ・ストア (または両方) のデータ・ソースを保管する LDAP サーバーを指す `cmbcmenv.properties` ファイルに `CMCOMMON_LDAP` キーワードおよび LDAP 値を追加しています。この後で、以下に示す他の LDAP Java ユーティリティーを実行して、この LDAP サーバーに統合データ・ソースおよび/または ICM データ・ソースの項目を追加する必要があります。統合データ・ストアおよび/または ICM データ・ストアのデータ・ソースは、これらコネクタの Java バージョンにのみ使用することができます。

**IBM Secure Way の場合:**

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbcmenv -a add -c LDAP
-ldapdatasourcesenabled TRUE -ldapurl ldap://www.mycorp.com -ldapuid
cn=root -ldapcred mypwd -ldaprootdn o=IBM,c=US
```

**MS Active Directory の場合:**

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbcmenv -a add -c LDAP
-ldapdatasourcesenabled TRUE -ldapstype ACTIVE_DIRECTORY -ldapurl
ldap://www.mycorp2.com -ldapuid myuid -ldapcred mypwd -ldaprootdn
DC=mycorp,DC=org -ldapport 389
```

## INI 構成ファイル

このセクションでは、各種 INI ファイルとその目的、cmvcmenv.properties ファイルのキーワード、およびそれらの生成に必要なユーティリティ JAR ファイルについて説明します。また、Java ユーティリティの使用法、フラグ、および例についても説明します。ここにリストするファイルが存在しない場合は作成されます。cmbutil81.jar は必ず cmbutilicm81.jar、cmbutilfed81.jar、および cmbutiljdbc81.jar とともに組み込む必要があります。

**Enterprise Information Portal の場合:** システム管理クライアントまたはコネクタをインストールした後、cmbenv81.bat (Windows) または cmbenv81.sh (AIX および Solaris) を実行して、自動的に Java ユーティリティのクラスパスを設定することができます。

**Content Manager の場合:** システム管理クライアントをインストールした後、cmbicmenv81.bat (Windows) を実行して、自動的に Java ユーティリティのクラスパスを設定することができます。

**重要:** 括弧内は、コメントおよび情報であり、ユーティリティ・パラメーターではありません。「n/a」は、INI ファイルにユーティリティがないことを示します。

表 28. C++ INI ファイル

| INI ファイル       | コネクタ | cmvcmenv.properties<br>キーワード | 必要な<br>ユーティリティ<br>JAR ファイル         | ページ番号   |
|----------------|------|------------------------------|------------------------------------|---------|
| cmbcc2mime.ini | 共通   | CMCFGDIR                     | n/a                                | n/a     |
| cmbpool.ini    | 共通   | CMCFGDIR                     | n/a                                | n/a     |
| cmbicmenv.ini  | ICM  | CMCFGDIR、<br>CMCOMMON_URL    | cmbutil81.jar、<br>cmbutilicm81.jar | 207 ページ |
| cmbicmsrvs.ini | ICM  | CMCFGDIR、<br>CMCOMMON_URL    | cmbutil81.jar、<br>cmbutilicm81.jar | 208 ページ |
| cmbfedenv.ini  | 統合   | CMCFGDIR、<br>CMCOMMON_URL    | cmbutil81.jar、<br>cmbutilfed81.jar | 210 ページ |
| cmbds.ini      | 統合   | CMCFGDIR、<br>CMCOMMON_URL    | cmbutil81.jar、<br>cmbutilfed81.jar | 211 ページ |
| cmbdsod.ini    | OD   | CMCFGDIR                     | n/a                                | n/a     |
| cmbdes.ini     | DES  | CMCFGDIR                     | n/a                                | n/a     |

表 29. Java INI ファイル

| INI ファイル        | コネクター | cmbcmenv.properties<br>キーワード | 必要な<br>ユーティリティ<br>JAR ファイル          | ページ番号   |
|-----------------|-------|------------------------------|-------------------------------------|---------|
| cmbcc2mime.ini  | 共通    | CMCFGDIR、<br>CMCOMMON_URL    | n/a                                 | n/a     |
| cmbcs.ini       | 共通    | CMCFGDIR、<br>CMCOMMON_URL    | cmbutil81.jar                       | 213 ページ |
| cmbclient.ini   | 共通    | CMCFGDIR、<br>CMCOMMON_URL    | cmbutil81.jar                       | 214 ページ |
| cmbsvclient.ini | 共通    | CMCFGDIR、<br>CMCOMMON_URL    | n/a                                 | n/a     |
| cmbsvcs.ini     | 共通    | CMCFGDIR、<br>CMCOMMON_URL    |                                     |         |
| cmbpool.ini     | 共通    | CMCFGDIR、<br>CMCOMMON_URL    |                                     |         |
| cmbicmenv.ini   | ICM   | CMCFGDIR、<br>CMCOMMON_URL    | cmbutil81.jar、<br>cmbutilicm81.jar  | 207 ページ |
| cmbicmsrvs.ini  | ICM   | CMCFGDIR、<br>CMCOMMON_URL    | cmbutil81.jar、<br>cmbutilicm81.jar  | 208 ページ |
| cmbfedenv.ini   | 統合    | CMCFGDIR、<br>CMCOMMON_URL    | cmbutil81.jar、<br>cmbutilfed81.jar  | 210 ページ |
| cmbds.ini       | 統合    | CMCFGDIR、<br>CMCOMMON_URL    | cmbutil81.jar、<br>cmbutilfed81.jar  | 211 ページ |
| cmbjdbsrvs.ini  | JDBC  | CMCFGDIR、<br>CMCOMMON_URL    | cmbutil81.jar、<br>cmbutiljdbc81.jar | 215 ページ |
| cmbdsod.ini     | OD    | CMCFGDIR、<br>CMCOMMON_URL    |                                     |         |
| cmbdes.ini      | DES   | CMCFGDIR、<br>CMCOMMON_URL    |                                     |         |



## cmbicmenv.ini (ICM コネクター)

この INI ファイルには、データベース接続情報が記述されています。新規データベースのカatalogを作成する場合は、それをこの INI ファイルに追加する必要があります。

ユーティリティの実行に必要な JAR ファイル:

- cmbutil81.jar
- cmbutilicm81.jar

## 使用法

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbenvicm
```

## フラグ

デフォルト値がある場合、入力パラメーターはオプションとなります。

**-h (help)**

**-a <add> (アクション)**

-s <ライブラリー・サーバー・データベース名>  
-u <データベース・ユーザー ID>  
-p <データベース・パスワード>  
-d <cmbicmenv.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)  
-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and delete operations (default TRUE))

**-a <update> (アクション)**

-s <ライブラリー・サーバー・データベース名>  
-u <データベース・ユーザー ID>  
-p <データベース・パスワード>  
-d <cmbicmenv.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)  
-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and delete operations (default TRUE))

**-a <del> (アクション)**

-s <ライブラリー・サーバー・データベース名>  
-d <cmbicmenv.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)  
-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and delete operations (default TRUE))

## 例

- 次の例では、ライブラリー・サーバーの項目を追加しています。

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbenvicm -a add -s icmnlbdb -u icmconct -p mypwd
```

## cmbicmsrvs.ini (ICM コネクター)

この INI ファイルには、データ・ストアのデータ・ソース情報が記述されています。新規データベースのカatalogを作成する場合は、それをこの INI ファイルに追加する必要があります。

ユーティリティの実行に必要な JAR ファイル:

- cmbutil81.jar
- cmbutilicm81.jar

## 使用法

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbsrvsicm
```

## フラグ

デフォルト値がある場合、入力パラメーターはオプションとなります。

**-h (help)**

**-a <追加> (アクション)**

```
-s <ライブラリー・サーバー・データベース名>
-sm <データベース・スキーマ名>
-r <DB2> (データベース表記タイプ (デフォルト: DB2))
-ss <TRUE | FALSE> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: FALSE))
-dbauth <CLIENT | SERVER> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: SERVER))
-d <cmbicmenv.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)
-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and
delete operations (default TRUE))
-rs <TRUE | FALSE> (リモート・サーバー・インディケーター (デフォルト: FALSE))
-host <ホスト名> (デフォルト: 値なし)
-port <ポート番号> (デフォルト: 値なし)
-rdb <リモート・データベース名> (デフォルト: 値なし)
-node <ノード名> (デフォルト: 値なし)
-os <NT | MVS | AIX | SUN> (operating system type (default no value))
```

**-a <update> (アクション)**

```
-s <ライブラリー・サーバー・データベース名>
-sm <データベース・スキーマ名>
-r <DB2> (データベース表記タイプ (デフォルト: DB2))
-ss <TRUE | FALSE> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: FALSE))
-dbauth <CLIENT | SERVER> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: SERVER))
-d <cmbicmenv.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)
-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and
delete operations (default TRUE))
-rs <TRUE | FALSE> (リモート・サーバー・インディケーター (デフォルト: FALSE))
-host <ホスト名> (デフォルト: 値なし)
-port <ポート番号> (デフォルト: 値なし)
-rdb <リモート・データベース名> (デフォルト: 値なし)
-node <ノード名> (デフォルト: 値なし)
-os <NT | MVS | AIX | SUN> (operating system type (default no value))
```

**-a <del> (アクション)**

```
-s <ライブラリー・サーバー・データベース名>
-d <cmbicmenv.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)
-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and
delete operations (default TRUE))
```

## 例

- 次の例では、ライブラリー・サーバーの項目を追加しています。

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbsrvsictm -a add -s icmnlbdb -sm ICMADMIN
```

## cmbfedenv.ini (統合コネクター)

この INI ファイルには、データベース接続情報が記述されています。新規データベースのカタログを作成する場合は、それをこの INI ファイルに追加する必要があります。

ユーティリティの実行に必要な JAR ファイル:

- cmbutil81.jar
- cmbutilfed81.jar

## 使用法

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbenvfed
```

## フラグ

デフォルト値がある場合、入力パラメーターはオプションとなります。

**-h (help)**

**-a <add> (アクション)**

- s <統合データベース名>
- u <データベース・ユーザー ID>
- p <データベース・パスワード>
- d <cmbfedenv.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)
- seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and delete operations (default TRUE))

**-a <update> (アクション)**

- s <統合データベース名>
- u <データベース・ユーザー ID>
- p <データベース・パスワード>
- d <cmbfedenv.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)
- seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and delete operations (default TRUE))

**-a <del> (アクション)**

- s <統合データベース名>
- d <cmbfedenv.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)
- seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and delete operations (default TRUE))

## 例

- 次の例では、統合データベースの項目を追加しています。

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbenvfed -a add -s icmn1sdb -u icmconct -p mypwd
```

## cmbds.ini (統合コネクター)

この INI ファイルには、データ・ストアのデータ・ソース情報が記述されています。新規データベースのカタログを作成する場合は、それをこの INI ファイルに追加する必要があります。

ユーティリティの実行に必要な JAR ファイル:

- cmbutil81.jar
- cmbutilfed81.jar

## 使用法

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbdsfed
```

## フラグ

デフォルト値がある場合、入力パラメーターはオプションとなります。

```
-h (help)

-a <add> (アクション)
-s <統合データベース名>
-sm <データベース・スキーマ名>
-r <DB2> (データベース表記タイプ (デフォルト: DB2))
-sso <TRUE | FALSE> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: FALSE))
-dbauth <CLIENT | SERVER> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: SERVER))
-d <cmbsenv.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)
-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and
 delete operations (default TRUE))
-rs <TRUE | FALSE> (リモート・サーバー・インディケーター (デフォルト: FALSE))
-host <ホスト名> (デフォルト: 値なし)
-port <ポート番号> (デフォルト: 値なし)
-rdb <リモート・データベース名> (デフォルト: 値なし)
-node <ノード名> (デフォルト: 値なし)
-os <NT | MVS | AIX | SUN> (operating system type (default no value))

-a <update> (アクション)
-s <統合データベース名>
-sm <データベース・スキーマ名>
-r <DB2> (データベース表記タイプ (デフォルト: DB2))
-sso <TRUE | FALSE> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: FALSE))
-dbauth <CLIENT | SERVER> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: SERVER))
-d <cmbsenv.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)
-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and
 delete operations (default TRUE))
-rs <TRUE | FALSE> (リモート・サーバー・インディケーター (デフォルト: FALSE))
-host <ホスト名> (デフォルト: 値なし)
-port <ポート番号> (デフォルト: 値なし)
-rdb <リモート・データベース名> (デフォルト: 値なし)
-node <ノード名> (デフォルト: 値なし)
-os <NT | MVS | AIX | SUN> (operating system type (default no value))

-a (アクション)
-s <統合データベース名>
-d <cmbsenv.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)
-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and
 delete operations (default TRUE))
```

## 例

- 次の例では、統合データベースの項目を追加しています。

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbdsfed -a add -s icmnlbdb -sm ICMADMIN
```

## cmbcs.ini (Java コネクター)

この INI ファイルには、データ・ストアごとのローカルまたはリモート・キーワードが記述されています。ローカルの場合は RMI は使用しません。データ・ストアの CS パッケージは、そのデータ・ストアのサーバー・パッケージを内部的に使用します。リモートの場合は RMI を使用します。データ・ストアの CS パッケージは、そのデータ・ストアのクライアント・パッケージを内部的に使用します。

ユーティリティの実行に必要な JAR ファイル: cmbutil81.jar

### 使用法

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbcs
```

### フラグ

デフォルト値がある場合、入力パラメーターはオプションとなります。

```
-h (help)

-a <add> (アクション)
 -dstype <データ・ストア・タイプ>
 -local <TRUE | FALSE> (use local datastore if TRUE else use remote
 datastore if FALSE for a particular datastore type (default TRUE))
 -d <cmbsclient.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)
 -seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and
 delete operations (default TRUE))

-a <update> (アクション)
 -dstype <データ・ストア・タイプ>
 -local <TRUE | FALSE> (use local datastore if TRUE else use remote
 datastore if FALSE for a particular datastore type (default TRUE))
 -d <cmbsclient.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)
 -seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and
 delete operations (default TRUE))

-a (アクション)
 -dstype <データ・ストア・タイプ>
 -d <cmbsclient.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)
 -seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and
 delete operations (default TRUE))
```

### 例

- 次の例では、cmbcs.ini に項目を追加しています。

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbcs -a add -dstype ICM
```

## cmbclient.ini (Java コネクター)

この INI ファイルには、データ・ストアの RMI サーバー・ホスト名およびポート番号が記述されています。

ユーティリティの実行に必要な JAR ファイル: cmbutil81.jar

### 使用法

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbclient
```

### フラグ

デフォルト値がある場合、入力パラメーターはオプションとなります。

**-h (help)**

**-a <add> (アクション)**

- s <統合データベース名>
- sm <データベース・スキーマ名>
- r <DB2> (データベース表記タイプ (デフォルト: DB2))
- sso <TRUE | FALSE> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: FALSE))
- dbauth <CLIENT | SERVER> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: SERVER))
- d <cmblcmenv.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)
- seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and delete operations (default TRUE))

**-a <update> (アクション)**

- s <統合データベース名>
- sm <データベース・スキーマ名>
- r <DB2> (データベース表記タイプ (デフォルト: DB2))
- sso <TRUE | FALSE> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: FALSE))
- dbauth <CLIENT | SERVER> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: SERVER))
- d <cmblcmenv.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)
- seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and delete operations (default TRUE))

**-a <del> (アクション)**

- s <統合データベース名>
- d <cmblcmenv.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)
- seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and delete operations (default TRUE))

### 例

- 次の例では、cmbclient.ini に項目を追加しています。

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbclient -a add -hostname myhost.corp.com -port 1919
```



## cmbjdbsrvs.ini (JDBC コネクター)

この INI ファイルには、データ・ストアのデータ・ソースが記述されています。JDBC コネクターの `listDataSources` から戻されるすべての JDBC サーバーについて項目を追加する必要があります。

ユーティリティの実行に必要な JAR ファイル:

- `cmbutil81.jar`
- `cmbutiljdbc81.jar`

### 使用法

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbsrvsjdbc
```

### フラグ

デフォルト値がある場合、入力パラメーターはオプションとなります。

**-h (help)**

**-a <add> (アクション)**

-s <JDBC データ・ソース>

-jdbcdriver <JDBC ドライバー名>

-d <cmbjdbsrvs.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)

-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and delete operations (default TRUE))

**-a <update> (アクション)**

-s <JDBC データ・ソース>

-jdbcdriver <JDBC ドライバー名>

-d <cmbjdbsrvs.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)

-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and delete operations (default TRUE))

**-a <del> (アクション)**

-s <JDBC データ・ソース>

-d <cmbjdbsrvs.ini のディレクトリー・パス・ロケーション> (デフォルト: 現行ディレクトリー)

-seeerr <TRUE | FALSE> (display error messages for add, update and delete operations (default TRUE))

### 例

- 次の例では、`cmbjdbsrvs.ini` に項目を追加しています。

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbsrvsjdbc -a add -s jdbc:db2:sample -jdbcdriver
COM.ibm.db2.jdbc.app.DB2Driver
```

---

## Lightweight Directory Access Protocol (LDAP) データ・ソース

このセクションでは、各種 LDAP データ・ソースとその目的、およびそれらの生成に必要なユーティリティー JAR ファイルについて説明します。また、Java ユーティリティーの使用法、フラグ、および例についても説明します。cmbutil81.jar は必ず cmbutilicm81.jar、cmbutilfed81.jar、および cmbutiljdbc81.jar とともに組み込む必要があります。

**重要:** 括弧内は、コメントおよび情報であり、ユーティリティー・パラメーターではありません。

使用する LDAP データ・ソースのタイプに該当するページ番号については、表 30 を参照してください。ICM コネクタの場合、LDAP に含まれる情報は、208 ページの『cmbicmsrvs.ini (ICM コネクタ)』に記載する情報と同じです。統合コネクタの場合、LDAP に含まれる情報は、211 ページの『cmbds.ini (統合コネクタ)』に記載する情報と同じです。

表 30. LDAP データ・ソースのページ番号

| Java コネクタ<br>ー・タイプ | cmbcmenv.properties<br>キーワード | IBM Directory<br>Server | Microsoft Active<br>Directory |
|--------------------|------------------------------|-------------------------|-------------------------------|
| ICM                | CMCOMMON_LDAP                | 217 ページ                 | 220 ページ                       |
| 統合                 | CMCOMMON_LDAP                | 221 ページ                 | 224 ページ                       |

## Java ICM コネクター用の LDAP (IBM Directory Server) データ・ソース

このユーティリティーは、cmbscmenv.properties ファイルによりポイントされる LDAP サーバーに項目を追加します。

### IBM Directory Server:

1. LDAP サーバーが起動した後、IBM ディレクトリー管理ツールを使用して以下の属性およびオブジェクトを作成する必要があります。データ・ソースを追加できるようにするには、このステップを行う必要があります。

- a. スキーマ (Schema) --> 属性 (Attributes) --> 属性の編集 (Edit attribute)

```
ibm-dkdbAuth
ibm-dkdbSchema
ibm-dkdbType
ibm-dkdsName
ibm-dkdsType
ibm-dksso
ibm-dkscheduleAuth
ibm-dkscheduleDayOfWeek
ibm-dkscheduleEnable
ibm-dkscheduleTime
ibm-dkscheduleUID
ibm-dkscheduleUserGroup
ibm-dkRemote
ibm-dkHostName
ibm-dkPort
ibm-dkRemoteDatabase
ibm-dkNodeName
ibm-dkOSType
```

- b. スキーマ (Schema) --> オブジェクト・クラス (Object classes) --> オブジェクト・クラスの追加 (Add object class)

```
ibm-dkServerType
(必要な属性とともに) ibm-dkdsType
ibm-dkServerDef
(必要な属性とともに) ibm-dkdsName
(必要な属性とともに) ibm-dkdsType
(オプションの属性とともに) ibm-dkdbAuth
(オプションの属性とともに) ibm-dkdbSchema
(オプションの属性とともに) ibm-dkdbType
(オプションの属性とともに) ibm-dksso
(オプションの属性とともに) ibm-dkscheduleAuth
(オプションの属性とともに) ibm-dkscheduleDayOfWeek
(オプションの属性とともに) ibm-dkscheduleEnable
(オプションの属性とともに) ibm-dkscheduleTime
(オプションの属性とともに) ibm-dkscheduleUID
(オプションの属性とともに) ibm-dkscheduleUserGroup
(オプションの属性とともに) ibm-dkscheduleUID
(オプションの属性とともに) ibm-dkRemote
(オプションの属性とともに) ibm-dkHostName
(オプションの属性とともに) ibm-dkPort
```

(オプションの属性とともに) ibm-dkRemoteDatabase  
(オプションの属性とともに) ibm-dkNodeName  
(オプションの属性とともに) ibm-dkOSType

- LDAP 管理者は、必要に応じて LDAP に編成の階層を作成することができます。この編成の下に、データ・ソースを作成できます。また、編成に関する情報を含む LDIF ファイルをインポートすることができます。これはオプションです。

たとえば、以下のファイルでは、ルート o=IBM, c=US の下に SVL 編成を作成します。管理者はブラウザーから IBM ディレクトリー・サーバー Web 管理クライアントを使用して (つまり <http://myserver.corp.com/ldap/>)、**「データベース (Database)」** --> **「LDIF のインポート (Import LDIF)」** と選択することにより、LDIF ファイルをインポートすることができます。

### org.ldif

```
IBM Directory Server sample LDIF file
#
The suffix "o=IBM, c=US" should be defined before attempting to load
this data.
version: 1

dn: o=IBM, c=US
objectclass: top
objectclass: organization
o: IBM

dn: ou=SVL, o=IBM, c=US
objectclass: organizationalUnit
ou: SVL
```

DKDatastoreICM.listDataSources または listDataSourceNames を使用する場合、コネクターはデータ・ソースを LDAP サーバーから読み取ります。データ・ストアの構成ストリングで、LDAPORG=(<org>) と指定することにより、編成を指定することができます (たとえば、この例では、org を SVL にすることができます)。これは、IBM Directory LDAP サーバーを使用する場合にのみ有効です。

**ユーティリティの実行に必要な JAR ファイル:** (cmbcm81.jar, cmbicm81.jar) または icmsdk81.jar または cmbsdk81.jar

## 使用法

```
java com.ibm.mm.sdk.server.cmbswldapicm
```

## フラグ

デフォルト値がある場合、入力パラメーターはオプションとなります。

-h (help)

-a <add> (アクション)

-c <TRUE | FALSE> (LDAP server definition context under which server definitions will be stored (default FALSE))

-o <サーバー定義コンテキストを保管する LDAP 編成> (デフォルト: 値なし)

-a <del> (アクション)

```

-c <TRUE | FALSE> (LDAP server definition context under which server
 definitions will be stored (default FALSE))
-o <サーバー定義コンテキストを保管する LDAP 編成> (デフォルト: 値なし)

-a <add> (アクション)
-s <ライブラリー・サーバー・データベース名>
-schema <データベース・スキーマ名>
-r <DB2> (データベース表記タイプ (デフォルト: DB2))
-sso <TRUE | FALSE> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: FALSE))
-dbauth <CLIENT | SERVER> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: SERVER))
-o <サーバー定義コンテキストを保管する LDAP 編成> (デフォルト: 値なし)
-rs <TRUE | FALSE> (リモート・サーバー・インディケーター (デフォルト: FALSE))
-host <ホスト名> (デフォルト: 値なし)
-port <ポート番号> (デフォルト: 値なし)
-rdb <リモート・データベース名> (デフォルト: 値なし)
-node <ノード名> (デフォルト: 値なし)
-os <NT | MVS | AIX | SUN> (operating system type (default no value))

-a (アクション)
-s <ライブラリー・サーバー・データベース名>
-o <サーバー定義コンテキストを保管する LDAP 編成> (デフォルト: 値なし)

```

## 例

- 次の例では、LDAP に項目を追加しています。
  - コンテキストが作成されていない場合は、作成されます。
 

```
java com.ibm.mm.sdk.server.cmbswldapicm -a add -c TRUE -o ou=SVL
```
  - そのコンテキストの下にデータ・ソースが作成されていない場合は、作成されま
 す。(繰り返し)
 

```
java com.ibm.mm.sdk.server.cmbswldapicm -a add -s icmnlbdb -r DB2 -sso
FALSE -dbauth SERVER -schema ICMADMIN -o ou=SVL
```

## Java ICM コネクター用の LDAP (MS Active Directory) データ・ソース

このユーティリティは、cmbcmenv.properties ファイルによってポイントされる LDAP サーバーに項目を追加します。

ユーティリティの実行に必要な JAR ファイル: (cmbcm81.jar、cmbicm81.jar) または icmsdk81.jar または cmbsdk81.jar

### 使用法

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbadldapicm
```

### フラグ

デフォルト値がある場合、入力パラメーターはオプションとなります。

**-h (help)**

**-a <add> (アクション)**

-c <TRUE | FALSE> (LDAP server definition context under which server definitions will be stored (default FALSE))

**-a <del> (アクション)**

-c <TRUE | FALSE> (LDAP server definition context under which server definitions will be stored (default FALSE))

**-a <add> (アクション)**

-s <ライブラリー・サーバー・データベース名>

-schema <データベース・スキーマ名>

-r <DB2> (データベース表記タイプ (デフォルト: DB2))

-sso <TRUE | FALSE> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: FALSE))

-dbauth <CLIENT | SERVER> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: SERVER))

-rs <TRUE | FALSE> (リモート・サーバー・インディケーター (デフォルト: FALSE))

-host <ホスト名> (デフォルト: 値なし)

-port <ポート番号> (デフォルト: 値なし)

-rdb <リモート・データベース名> (デフォルト: 値なし)

-node <ノード名> (デフォルト: 値なし)

-os <NT | MVS | AIX | SUN> (operating system type (default no value))

**-a <del> (アクション)**

-s <ライブラリー・サーバー・データベース名>

### 例

- 次の例では、LDAP に項目を追加しています。

- コンテキストが作成されていない場合は、作成されます。

```
java com.ibm.mm.sdk.server.cmbadldapicm -a add -c TRUE
```

- そのコンテキストの下にデータ・ソースが作成されていない場合は、作成されます。(繰り返し)

```
java com.ibm.mm.sdk.server.cmbadldapicm -a add -s icmnlbdb -r DB2 -sso FALSE -dbauth SERVER -schema ICMADMIN
```

## Java 統合コネクタ用の LDAP (IBM Directory Server) データ・ソース

このユーティリティーは、cmbscmenv.properties ファイルによってポイントされる LDAP サーバーに項目を追加します。

### IBM Directory Server:

1. LDAP サーバーが起動した後、IBM ディレクトリー管理ツールを使用して以下の属性およびオブジェクトを作成する必要があります。データ・ソースを追加できるようにするには、このステップを行う必要があります。

- a. スキーマ (Schema) --> 属性 (Attributes) --> 属性の編集 (Edit attribute)

```
ibm-dkdbAuth
ibm-dkdbSchema
ibm-dkdbType
ibm-dkdsName
ibm-dkdsType
ibm-dksso
ibm-dkscheduleAuth
ibm-dkscheduleDayOfWeek
ibm-dkscheduleEnable
ibm-dkscheduleTime
ibm-dkscheduleUID
ibm-dkscheduleUserGroup
ibm-dkRemote
ibm-dkHostName
ibm-dkPort
ibm-dkRemoteDatabase
ibm-dkNodeName
ibm-dkOSType
```

- b. スキーマ (Schema) --> オブジェクト・クラス (Object classes) --> オブジェクト・クラスの追加 (Add object class)

```
ibm-dkServerType
(必要な属性とともに) ibm-dkdsType
ibm-dkServerDef
(必要な属性とともに) ibm-dkdsName
(必要な属性とともに) ibm-dkdsType
(オプションの属性とともに) ibm-dkdbAuth
(オプションの属性とともに) ibm-dkdbSchema
(オプションの属性とともに) ibm-dkdbType
(オプションの属性とともに) ibm-dksso
(オプションの属性とともに) ibm-dkscheduleAuth
(オプションの属性とともに) ibm-dkscheduleDayOfWeek
(オプションの属性とともに) ibm-dkscheduleEnable
(オプションの属性とともに) ibm-dkscheduleTime
(オプションの属性とともに) ibm-dkscheduleUID
(オプションの属性とともに) ibm-dkscheduleUserGroup
(オプションの属性とともに) ibm-dkscheduleUID
(オプションの属性とともに) ibm-dkRemote
(オプションの属性とともに) ibm-dkHostName
(オプションの属性とともに) ibm-dkPort
```

(オプションの属性とともに) ibm-dkRemoteDatabase  
(オプションの属性とともに) ibm-dkNodeName  
(オプションの属性とともに) ibm-dkOSType

- LDAP 管理者は、必要に応じて LDAP に編成の階層を作成することができます。この編成の下に、データ・ソースを作成できます。また、編成に関する情報を含む LDIF ファイルをインポートすることができます。これはオプションです。

たとえば、以下のファイルでは、ルート o=IBM, c=US の下に SVL 編成を作成します。ブラウザーから IBM ディレクトリー・サーバー Web 管理クライアントを使用して (つまり <http://myserver.corp.com/ldap>)、**「データベース (Database)」** → **「LDIF のインポート (Import LDIF)」** と選択することにより、LDIF ファイルをインポートすることができます。

### org.ldif

```
IBM Directory Server sample LDIF file
#
The suffix "o=IBM, c=US" should be defined before attempting to load
this data.
```

```
version: 1
```

```
dn: o=IBM, c=US
objectclass: top
objectclass: organization
o: IBM
```

```
dn: ou=SVL, o=IBM, c=US
objectclass: organizationalUnit
ou: SVL
```

dKDatastoreFed.listDataSources または listDataSourceNames を使用する場合、コネクターはデータ・ソースを LDAP サーバーから読み取ります。データ・ストアの構成ストリングで、LDAPORG=<org> と指定することにより、編成を指定することができます (たとえば、この例では、org を SVL にすることができます)。これは、IBM Directory LDAP サーバーを使用する場合にのみ有効です。

ユーティリティの実行に必要な **JAR** ファイル: (cmbcm81.jar、cmbfed81.jar) または cmbsdk81.jar

### 使用法

```
java com.ibm.mm.sdk.server.cmbswldapfed
```

### フラグ

デフォルト値がある場合、入力パラメーターはオプションとなります。

**-h (help)**

**-a <add> (アクション)**

**-c <TRUE | FALSE>** (LDAP server definition context under which server definitions will be stored (default FALSE))



```

-o <サーバー定義コンテキストを保管する LDAP 編成> (デフォルト: 値なし)

-a (アクション)
-c <TRUE | FALSE> (LDAP server definition context under which server
 definitions will be stored (default FALSE))
-o <サーバー定義コンテキストを保管する LDAP 編成> (デフォルト: 値なし)

-a <add> (アクション)
-s <ライブラリー・サーバー・データベース名>
-schema <データベース・スキーマ名>
-r <DB2> (データベース表記タイプ (デフォルト: DB2))
-sso <TRUE | FALSE> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: FALSE))
-dbauth <CLIENT | SERVER> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: SERVER))
-o <サーバー定義コンテキストを保管する LDAP 編成> (デフォルト: 値なし)
-rs <TRUE | FALSE> (リモート・サーバー・インディケーター (デフォルト: FALSE))
-host <ホスト名> (デフォルト: 値なし)
-port <ポート番号> (デフォルト: 値なし)
-rdb <リモート・データベース名> (デフォルト: 値なし)
-node <ノード名> (デフォルト: 値なし)
-os <NT | MVS | AIX | SUN> (operating system type (default no value))

-a (アクション)
-s <ライブラリー・サーバー・データベース名>
-o <サーバー定義コンテキストを保管する LDAP 編成> (デフォルト: 値なし)

```

## 例

- 次の例では、LDAP に項目を追加しています。
  - コンテキストが作成されていない場合は、作成されます。
 

```
java com.ibm.mm.sdk.server.cmbswldapfed -a add -c TRUE -o ou=SVL
```
  - そのコンテキストの下にデータ・ソースが作成されていない場合は、作成されま
 す。(繰り返し)
 

```
java com.ibm.mm.sdk.server.cmbswldapfed -a add -s icmnlsdb -r DB2 -sso
FALSE -dbauth SERVER -schema ICMADMIN -o ou=SVL
```

## Java 統合コネクタ用の LDAP (MS Active Directory) データ・ソース

このユーティリティーは、cmbcmenv.properties ファイルによってポイントされる LDAP サーバーに項目を追加します。

ユーティリティーの実行に必要な JAR ファイル: (cmbcm81.jar、cmbfed81.jar) または cmbsdk81.jar

### 使用法

```
java com.ibm.mm.sdk.util.cmbadldapfed
```

### フラグ

デフォルト値がある場合、入力パラメーターはオプションとなります。

**-h (help)**

**-a <add> (アクション)**

-c <TRUE | FALSE> (LDAP server definition context under which server definitions will be stored (default FALSE))

**-a <del> (アクション)**

-c <TRUE | FALSE> (LDAP server definition context under which server definitions will be stored (default FALSE))

**-a <add> (アクション)**

-s <ライブラリー・サーバー・データベース名>

-schema <データベース・スキーマ名>

-r <DB2> (データベース表記タイプ (デフォルト: DB2))

-sso <TRUE | FALSE> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: FALSE))

-dbauth <CLIENT | SERVER> (シングル・サインオンをサポート (デフォルト: SERVER))

-rs <TRUE | FALSE> (リモート・サーバー・インディケーター (デフォルト: FALSE))

-host <ホスト名> (デフォルト: 値なし)

-port <ポート番号> (デフォルト: 値なし)

-rdb <リモート・データベース名> (デフォルト: 値なし)

-node <ノード名> (デフォルト: 値なし)

-os <NT | MVS | AIX | SUN> (operating system type (default no value))

**-a <del> (アクション)**

-s <ライブラリー・サーバー・データベース名>

### 例

- 次の例では、LDAP に項目を追加しています。

- コンテキストが作成されていない場合は、作成されます。

```
java com.ibm.mm.sdk.server.cmbadldapfed -a add -c TRUE
```

- そのコンテキストの下にデータ・ソースが作成されていない場合は、作成されます。(繰り返し)

```
java com.ibm.mm.sdk.server.cmbadldapfed -a add -s icmnlbdb -r DB2 -sso
FALSE -dbauth SERVER -schema ICMADMIN
```

---

## EIP Version 7 データベースのマイグレーション

EIP バージョン 8.2 マイグレーション・ユーティリティーは、EIP バージョン 7.1 データベースに保管されている情報を、新規の EIP バージョン 8.2 データベースと互換性のあるフォーマットに変換します。必須の EIP 機能のほかに、新規の EIP バージョン 8 データベースには、Content Manager バージョン 8 データベースで検出されたすべての情報が含まれます (ただし使用はしません)。

---

### EIP Version 7 マイグレーションの計画

マイグレーション・プロセスは自動化されており、バージョン 7.1 データベースの必要な情報がすべてテキスト・ファイルにコピーされた後、テキスト情報が新しいデータベースにコピーされます。

制約事項: EIP マイグレーション・プロセスでは、バージョン 7.1 データベースからユーザーがマイグレーションされます。EIP バージョン 8.2 では、ワークフロー・データの自動マイグレーションは行われません。EIP バージョン 8.2 ワークフロー・ビルダーを使用してバージョン 7.1 ワークフロー図を再作成し、EIP バージョン 7.1 ワークフロー・プロセスを再展開してください。

以下のリストは、EIP バージョン 7.1 データベースのマイグレーションを計画する際に役立つ基本ガイドラインです。

- マイグレーションを計画している EIP バージョン 7.1 データベースごとに 1 つの EIP バージョン 8.2 データベースを作成しカタログする必要があります。
- データベースのマイグレーションは一度に 1 つのみ行うことができます。
- マイグレーション済みのデータベースには、未使用の Content Manager バージョン 8 機能を含む追加の行とテーブルを格納するための、バージョン 7.1 データベースよりも大きなスペースが必要になります。
- 情報マイニングのマイグレーションを計画する場合は、IBM 担当員にご連絡ください。情報マイニング・サービスまたは EIP のすべてのフィーチャーを除去する前に、情報マイニング・データベースのバックアップをとる必要があります。

以前のリリースの EIP を使用して情報マイニング・フィーチャーをインストールした場合は、EIP を除去すると情報マイニング・データベースが削除されます。このデータベース内のデータを保持したい場合には、アンインストールを行う前にバックアップをとっておいてください。db2cmd コマンド・ウィンドウで db2 list db directory と入力します。戻されたデータベースのリストに IKF が示されている場合は、情報マイニング・

データベースは存在しています。DB2 コマンド・ウィンドウで、db2 backup database IKF to <dir> と入力します。ここで、<dir> は、ユーザーの選択するディレクトリーです。

---

## EIP 7.1 データベースのマイグレーション

このセクションでは、EIP 7.1 データベースを EIP V8.2 にマイグレーションする方法について説明します。ヒント: EIP Version 8.1 からアップグレードする場合、データベース・マイグレーションは必要ありません。

EIP V8.2 のマイグレーション・ユーティリティーでは、ほとんどの EIP 7.1 データを単一の EIP 8.2 データベースにコピーします。EIP 7.1 データベースは保持されます。オプションで、マイグレーションする前に EIP 7.1 データベースをバックアップします。

EIP 7.1 データベースのマイグレーション方法は、以下の 2 つです。

- 複数の EIP 7.1 データベースを単一の EIP 8.2 データベースにマイグレーションする。または、
- 各 EIP 7.1 データベースを対応する新しい EIP 8.2 データベースにマイグレーションする。

マイグレーション・ユーティリティーでは、以下のデータを新しいデータベースにコピーします。

- サーバー定義
- ユーザー管理オブジェクト、権限オブジェクト、およびユーザー・マッピング
- 統合属性を持つ統合エンティティ、スキーマ・マッピング
- 検索基準が指定された検索テンプレート
- ユーザー定義のサーバー・タイプ
- MIME タイプ、アプリケーションの MIME
- データに関連付けられたワークフロー

**制約事項:** EIP V7.1 のワーク・リスト情報はマイグレーションされません。対応する EIP 8.2 データベースで、ワーク・リスト情報を再作成する必要があります。

### マイグレーションする前に

マイグレーション・ユーティリティーを使用する前に、必要な数の新しいデータベースを作成しておく必要があります。

マイグレーション・ユーティリティーを正常に実行するには、以下の EIP 8.2 コンポーネントをインストールして検証してください。

- EIP V8 統合コネクタ (マイグレーションを行うシステムのローカル)

- EIP V8 管理データベース (統合データベース) (データベース・マイグレーションを行うシステムのローカルまたはリモート)
- リモート・データベースから (またはリモート・データベースへ) マイグレーションを行う場合は、マイグレーション・ユーティリティを使用する前に、データベースをカタログする必要があります。DB2 Client Configuration Assistant、DB2 コマンド行プロセッサ、または EIP V8.2 サーバー構成ユーティリティを使用して、リモート・データベースをカタログします。

## マイグレーション・ユーティリティの使用

1. マイグレーション・ユーティリティを使用するコンピューターに、一時ディレクトリーを作成します。
2. EIP V8 のインストール CD を挿入し、EIP ルート・ディレクトリーにナビゲートします。
3. migration81.jar と、Windows の場合は Cmbmig7\_2\_8.bat、AIX の場合は Cmbmig7\_2\_8.sh を、ステップ 1 で作成した一時ディレクトリーにコピーします。
4. コマンド・プロンプトからマイグレーション・ユーティリティを開始します。たとえば、Windows の場合は `C:\temp %run cmbmig_7_2_8.bat` と入力します。AIX の場合は、コマンドは `# cd /tmp/run cmbmig_7_8.sh` となります。**ヒント:** マイグレーション・ユーティリティ・ソフトウェアは、新しいデータベースに必要なストレージ・スペースを自動的に構成します。
5. マイグレーション・ユーティリティの開始後、以下のプロンプトに応答します。
  - a. オリジナル・データベースの名前。例: CMBDB1
  - b. 古いデータベースの DB2 接続 ID。例: cmbadmin
  - c. DB2 接続パスワード。例: password
  - d. 古いデータベースのスキーマ名。例: cmbadmin
  - e. 新しいデータベースの名前。例: ICMNLSDB
  - f. ライブラリー・サーバーのユーザー ID。例: ICMADMIN
  - g. ライブラリー・サーバーのパスワード。例: password
  - h. ライブラリー・サーバー・データベースのスキーマ名。例: ICMADMIN

複数の EIP 7.1 データベースを単一の EIP 8.2 データベースにマイグレーションする場合、古いデータベースのそれぞれにつき 1 回ずつマイグレーション・ユーティリティを使用し、ステップ 5 ~ 8 について同じ応答を繰り返す必要があります。各 EIP 7.1 データベースを対応する EIP 8.2 データベースにマイグレーションする場合は、データベースごとにマイグレーション・ユーティリティを実行し、ステップ 5e ~ 5h についてそれぞれに固有の応答を行う必要があります。

## マイグレーションの検証

データベースのマイグレーションが完了すると、ユーティリティによってメッセージが表示されます。エラーが発生した場合は、例外メッセージがエラー・ログ・ファイル `dklog.log` に書き込まれます。

データベースのマイグレーションを検証するには、以下のようにします。

1. EIP V8.2 のシステム管理クライアントにログオンします。
2. クライアント・ログイン・ウィンドウの「サーバー (Server)」フィールドの隣にあるドロップダウン・リストをクリックします。
3. マイグレーション済みデータベースを選択します。
4. マイグレーション済みデータベースのユーザー ID およびパスワードを入力します。
5. 「OK」をクリックします。
6. クライアントがオープンし、マイグレーション済みデータベースの名前がクライアント・メイン・ウィンドウにリストされます。

---

## EIP サンプル・クライアントでの作業

EIP サンプル・クライアントで、Windows エンド・ユーザーは、コンテンツ・サーバーに保管されているデータの検索および表示を行えます。ユーザーは、直接接続でコンテンツ・サーバーを検索できます。あるいは、EIP 統合データベースに接続し、統合検索テンプレートを選択して同時に複数のサーバーを検索できます。サンプル・クライアントを作成するには、EIP をインストール後、Java コードをコンパイルします。EIP インストール・プログラムは、特に指定のない限り、サンプル・クライアントをインストールします。サンプル・クライアントは、複数の言語で使用できます。

サンプル・クライアントをコンパイルし、アクセスするには、次のように行います。

1. 開発環境を確立します。「スタート>プログラム> Enterprise Information Portal for Multiplatforms 8.2>開発ウィンドウ (Development Window)」とクリックします。
2. コマンド・ウィンドウから、`c:\%CMBROOT%\SAMPLES\%java%\beans\%gui` に移動します。
3. CMBCA Text Resources.xx.java というファイルのリストからご使用の地域の言語コードを選択します。ここで xx は、ご使用の地域の言語コードです。**ヒント:** エラー・フリー・コンパイルを確実にものにするために、ご使用の地域に適用されないすべての CMBCA Text Resource ファイルの名前を変更するか、あるいはそれらのファイルを別のディレクトリーに移動します。
4. `javac *.java` と入力して、サンプル・クライアントをコンパイルします。
5. `java SampleClient` と入力して、サンプル・クライアントを起動します。
6. コンテンツ・サーバーを選択するか、または統合データベースを選択します。
7. サーバーまたは統合データベースと関連するユーザー ID を入力します。
8. 統合データベースにログインする場合、統合検索テンプレートを使用して、異なるコンテンツ・サーバーから情報を取り出すことができます。
9. 戻された項目のリストから項目を 1 つ選択します。
10. Content Manager OnDemand サーバーを検索した場合は、OnDemand サーバーから戻されたデータを表示するために OnDemand Viewer をインストールする必要があります。





---

## 特記事項

本書は米国 IBM が提供する製品およびサービスについて作成したものであり、米国以外の国においては本書で述べる製品、サービス、またはプログラムを提供しない場合があります。

日本で利用可能な製品、サービス、および機能については、日本 IBM の営業担当員にお尋ねください。本書で IBM 製品、プログラム、またはサービスに言及していても、その IBM 製品、プログラム、またはサービスのみが使用可能であることを意味するものではありません。これらに代えて、IBM の知的所有権を侵害することのない、機能的に同等の製品、プログラム、またはサービスを使用することができます。ただし、IBM 以外の製品とプログラムの操作またはサービスの評価および検証は、お客様の責任で行っていただきます。

IBM は、本書に記載されている内容に関して特許権（特許出願中のものを含む）を保有している場合があります。本書の提供は、お客様にこれらの特許権について実施権を許諾することを意味するものではありません。実施権についてのお問い合わせは、書面にて下記宛先にお送りください。

〒106-0032

東京都港区六本木 3-2-31

IBM World Trade Asia Corporation

Licensing

**以下の保証は、国または地域の法律に沿わない場合は、適用されません。**

IBM およびその直接または間接の子会社は、本書を特定物として現存するままの状態を提供し、商品性の保証、特定目的適合性の保証および法律上の瑕疵担保責任を含むすべての明示もしくは黙示の保証責任を負わないものとします。国または地域によっては、法律の強行規定により、保証責任の制限が禁じられる場合、強行規定の制限を受けるものとします。

この情報には、技術的に不適切な記述や誤植を含む場合があります。本書は定期的に見直され、必要な変更は本書の次版に組み込まれます。IBM は予告なしに、随時、この文書に記載されている製品またはプログラムに対して、改良または変更を行うことがあります。

本書において IBM 以外の Web サイトに言及している場合がありますが、便宜のため記載しただけであり、決してそれらの Web サイトを推奨するものではありません。それらの Web サイトにある資料は、この IBM 製品の資料の一部ではありません。それらの Web サイトは、お客様の責任でご使用ください。

IBM は、お客様が提供するいかなる情報も、お客様に対してなんら義務も負うことのない、自ら適切と信ずる方法で、使用もしくは配布することができるものとします。

本プログラムのライセンス保持者で、(i) 独自に作成したプログラムとその他のプログラム（本プログラムを含む）との間での情報交換、および (ii) 交換された情報の相互利用を可能にすることを目的として、本プログラムに関する情報を必要とする方は、下記に連絡してください。

IBM Corporation  
J46A/G4  
555 Bailey Avenue  
San Jose, CA 95141-1003  
U.S.A.

本プログラムに関する上記の情報は、適切な使用条件の下で使用することができますが、有償の場合もあります。

本書で説明されているライセンス・プログラムまたはその他のライセンス資料は、IBM 所定のプログラム契約の契約条項、IBM プログラムのご使用条件、またはそれと同等の条項に基づいて、IBM より提供されます。

この文書に含まれるいかなるパフォーマンス・データも、管理環境下で決定されたものです。そのため、他の操作環境で得られた結果は、異なる可能性があります。一部の測定が、開発レベルのシステムで行われた可能性があります、その測定値が、一般に利用可能なシステムのものと同じである保証はありません。さらに、一部の測定値が、推定値である可能性があります。実際の結果は、異なる可能性があります。お客様は、お客様の特定の環境に適したデータを確かめる必要があります。

IBM 以外の製品に関する情報は、その製品の供給者、出版物、もしくはその他の公に利用可能なソースから入手したものです。IBM は、それらの製品のテストは行っておりません。したがって、他社製品に関する実行性、互換性、またはその他の要求については確証できません。IBM 以外の製品の性能に関する質問は、それらの製品の供給者をお願いします。

IBM の将来の方向または意向に関する記述については、予告なしに変更または撤回される場合があります、単に目標を示しているものです。

本書には、日常のビジネス・オペレーションで用いられるデータや報告書の例が含まれています。より具体性を与えるために、それらの例には、個人、企業、ブランド、あるいは製品などの名前が含まれている場合があります。これらの名称はすべて架空のものであり、名称や住所が類似する企業が実在しているとしても、それは偶然にすぎません。

## 著作権使用許諾:

本書には、さまざまなオペレーティング・プラットフォームでのプログラミング手法を例示するサンプル・アプリケーション・プログラムがソース言語で掲載されています。お客様は、サンプル・プログラムが書かれているオペレーティング・プラットフォームのアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。このサンプル・プログラムは、あらゆる条件下における完全なテストを経ていません。従って IBM は、これらのサンプル・プログラムについて信頼性、利便性もしくは機能性があることをほのめかしたり、保証することはできません。お客様は、IBM のアプリケーション・プログラミング・インターフェースに準拠したアプリケーション・プログラムの開発、使用、販売、配布を目的として、いかなる形式においても、IBM に対価を支払うことなくこれを複製し、改変し、配布することができます。

---

## 商標

以下は、IBM Corporation の商標です。

|                                  |               |                  |
|----------------------------------|---------------|------------------|
| IBM                              | DisplayWrite  | PowerPC          |
| 400                              | e-business    | PTX              |
| Advanced Peer-to-Peer Networking | HotMedia      | QBIC             |
| AIX                              | Hummingbird   | RS/6000          |
| AIXwindows                       | ImagePlus     | SecureWay        |
| APPN                             | IMS           | SP               |
| AS/400                           | Micro Channel | VideoCharger     |
| C Set ++                         | MQSeries      | Visual Warehouse |
| CICS                             | MVS/ESA       | VisualAge        |
| DATABASE 2                       | NetView       | VisualInfo       |
| DataJoiner                       | OS/2          | WebSphere        |
| DB2                              | OS/390        |                  |
| DB2 Universal Database           | PAL           |                  |

Approach、Domino、Lotus、Lotus 1-2-3、Lotus Notes、SmartSuite は、Lotus Development Corporation の商標です。

Intel および Pentium は、Intel Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Microsoft、Windows、Windows NT および Windows ロゴは、Microsoft Corporation の米国およびその他の国における商標です。

Java およびすべての Java 関連の商標およびロゴは、Sun Microsystems, Inc. の米国およびその他の国における商標または登録商標です。

UNIX は、The Open Group がライセンスしている米国およびその他の国における登録商標です。

他の会社名、製品名およびサービス名などはそれぞれ各社の商標または登録商標です。

---

## 用語集

この用語集では、本システムに固有の用語および略語を定義します。イタリック体の用語は、この用語集の他の場所で定義されています。

### 【ア行】

**アクション・リスト (action list).** システム管理者またはその他のワークフロー・コーディネーターによって定義され、ワークフロー または文書ルーティング処理においてユーザーが実行することが承認されたアクションのリスト。

**アクセス制御 (access control).** 許可ユーザーが、許可された方法でアクセスする場合に限り、特定の機能および保管オブジェクトにアクセスできるようにするプロセス。

**アクセス制御リスト (access control list).** 1 つまたは複数のユーザー ID やユーザー・グループ、およびそれらに関連する特権で構成されるリスト。およびオブジェクトに対するユーザー・アクセスを制御する場合に使用する。アクセス制御リストは、Enterprise Information Portal システムでは検索テンプレートに対するユーザー・アクセスを制御する場合に使用する。

**アプリケーション・プログラミング・インターフェース (API) (application programming interface (API)).** アプリケーションが相互に通信できるようにするソフトウェア・インターフェース。API はプログラム言語の構造体とステートメントの集合で、アプリケーション・プログラム中にコード化することにより、その基礎を成すライセンス・プログラムに備えられている特定の機能やサービスを利用できる。

**イテレーター (iterator).** オブジェクトのコレクションを、一度に 1 つずつステップスルーするために使用するクラスまたは構成。

**意味体系タイプ (semantic type).** 項目の使用法や規則。ベース、注釈、および注は、Content Manager によって提供される意味体系。ユーザーが独自の意味体系タイプを定義することもできる。

**イメージ・オブジェクト・コンテンツ・アーキテクチャー (Image Object Content Architecture (IOCA)).** イメージの交換と表示に使われる構成の集合。

**イメージ・コンテンツによる照会 (QBIC) (query by image content (QBIC)).** プレーン・テキストではなく、フィーチャーというビジュアル・コンテンツに基づく検索を可能にする照会のテクノロジー。QBIC を使用して、色、テキストなど、可視特性に基づいてオブジェクトを検索できる。

**永続 ID (PID) (persistent identifier (PID)).** 保管場所に関係なくオブジェクトを固有に識別する ID。PID は項目 ID とロケーションの両方から成る。

**オーバーレイ (overlay).** 印刷時にページ上の変数データとマージすることができる、事前定義されたデータのコレクション (線、陰影、テキスト、枠、ロゴなど)。

**オブジェクト (object).** 一つの単位として保管、検索、および操作できるデジタル・コンテンツ。たとえば、JPEG イメージ、MP3 オーディオ、AVI ビデオ、およびブックからのテキスト・ブロックなど。

**オブジェクトのリンクと組み込み (OLE) (Object Linking and Embedding (OLE)).** アプリケーションをリンクしたり埋め込んだりすることで、

他のアプリケーションからそのアプリケーションを活動化できるようにする、Microsoft 社による仕様。

**オブジェクト・サーバー (object server).** リソース・マネージャー (*resource manager*) を参照。

**オブジェクト・サーバー・キャッシュ (object server cache).** リソース・マネージャー・キャッシュ (*resource manager cache*) を参照。

## [力行]

**カーソル (cursor).** アプリケーション・プログラムで、行の配列集合中の特定の行を指すために使用される名前付きの制御構造。カーソルは、集合から行を取り出すために使用される。

**解放 (release).** 中断された基準を項目 から除去すること。中断された項目が解放されるのは、基準が満たされた場合か、または適切な権限を持つユーザーが基準をオーバーライドして手操作で解放する場合である。

**拡張データ・オブジェクト (XDO) (extended data object (XDO)).** アプリケーション・プログラムで、保管されている複雑なマルチメディア・オブジェクト がストレージから出し入れに使用される場合に、そのオブジェクトを総称した表現。XDO は DDO に含まれることが最も多い。

**キー・フィールド (key field).** 属性 (*attribute*) を参照。

**基数 (cardinality).** データベース表内の行数。

**キャッシュ (cache).** 主記憶装置より小さくて速い、特別な用途のバッファ。頻繁にアクセスされるデータのコピーを保管するために使用される。キャッシュの使用によりアクセス時間は削減されるが、メモリーの必要量が増える可能性がある。

**クライアント / サーバー (client/server).** 通信において、あるサイトのプログラムが他のサイトのプログラムへ要求を送って応答を待つという、分散データ処理における相互作用のモデル。要求するプログラムがクライアント、応答するプログラムがサーバーと呼ばれる。

**クライアント・アプリケーション (client application).** Enterprise Information Portal からコンテンツ・サーバー にアクセスする目的で、オブジェクト指向 API またはインターネット API を使用して作成されたアプリケーション。

**クラス (class).** オブジェクト指向の設計やプログラミングで、共通の定義でオブジェクトを作成するようインスタンス化できるモデルまたはテンプレート。したがって、プロパティ、操作、および動作も共通になる。オブジェクトはクラスのインスタンスになる。

**結合サーチ (combined search).** パラメトリック、テキスト、またはイメージのいずれかのタイプの検索 (サーチ) を 1 つまたは複数組み合わせた照会。

**検索基準 (search criteria).** Enterprise Information Portal では、管理者が定義する検索テンプレートの特定のフィールド。ユーザー が使用できる選択項目を制限したり定義を詳細化したりする。

**検索テンプレート (search template).** 管理者が設計した検索基準 から成る、特定のタイプの統合検索のフォーム。管理者は、個々の検索テンプレートにアクセスできるユーザー とユーザー・グループ も識別する。

**交換 (interchange).** ある Content Manager ImagePlus for OS/390 システムから別の ImagePlus システムへ、*Common Interchange File* や *Common Interchange Unit* を利用してイメージとその索引をインポートまたはエクスポートする能力。

**項目 (item).** Enterprise Information Portal が管理する最小の情報単位を総称した用語。個々の項目には ID がある。たとえば、項目は、フォルダー、または文書 である場合がある。

**項目タイプ (item type).** 項目などを定義して、後に位置決めをするためのテンプレート。ルート・コンポーネント、ゼロ以上の子コンポーネント、および種別で構成される。

**項目タイプ種別 (item type classification).** 項目をさらに識別する項目タイプ内でのカテゴリー化。同じ項目タイプの項目はすべて、同じ項目タイプ種別を持つ。

Content Manager は、次の項目タイプ種別を提供する。フォルダー、文書、オブジェクト、ビデオ、イメージ、およびテキスト。また、ユーザー独自の項目タイプ種別を定義することもできる。

**子コンポーネント (child component).** 項目タイプ階層の、2 番目以下のレベル (オプション)。子コンポーネントはそれぞれ、その上のレベルと直接関連している。

**コネクター・クラス (connector class).** 特定のコンテンツ・サーバーに固有な API へ標準アクセスを提供する、オブジェクト指向プログラミングのクラス。

**コモン・ゲートウェイ・インターフェース (CGI) (Common Gateway Interface (CGI)).** Web サーバーとその外部のプログラムとの間で情報を交換するための規格。外部プログラムを作成する際のプログラム言語は、Web サーバーを実行しているオペレーティング・システムでサポートされているものであればどれでもよい。CGI スクリプト (CGI script) を参照。

**固有エンティティ (native entity).** 特定のコンテンツ・サーバー上で管理され、固有属性から成るオブジェクト。たとえば、Content Manager 索引クラスは、Content Manager キー・フィールドから成る固有エンティティである。

**固有属性 (native attribute).** 特定のコンテンツ・サーバー上で管理され、そのコンテンツ・サーバーにとって固有のオブジェクトの特性。たとえば、キー・フィールド、policy num は Content Manager コンテンツ・サーバーの固有属性で、フィールド policy ID は Content Manager OnDemand コンテンツ・サーバーの固有属性。

**固有テキスト索引 (native text index).** 特定のコンテンツ・サーバー上で管理されるテキスト項目の索引。たとえば、Content Manager コンテンツ・サーバーの単一テキスト・サーチ索引など。

**コレクション (collection).** 類似した一連の管理規則を持つオブジェクトのグループ。

**コンストラクター (constructor).** プログラム言語において、クラスと同じ名前のメソッドのことで、そのクラスのオブジェクトの作成と初期化に使用される。

**コンテンツ・サーバー (content server).** マルチメディア・データや業務データ、またそのデータの処理に必要な関連メタデータを保管するためのソフトウェア・システム。コンテンツ・サーバーの例としては、Content Manager や Content Manager ImagePlus for OS/390 がある。

**コンポーネント (component).** ルート・コンポーネント または子コンポーネント を指す総称用語。

## [サ行]

**サーバー定義 (server definition).** Enterprise Information Portal で固有に識別できるようにするための、特定のコンテンツ・サーバーの特性。

**サーバー・インベントリー (server inventory).** 指定されたコンテンツ・サーバーの固有エンティティ および固有属性 の包括的なリスト。



**サーバー・タイプ定義 (server type definition).** 特定のタイプのカスタム・サーバーを、管理者が識別するように、Enterprise Information Portal でも固有に識別されるために必要な特性のリスト。

**作業項目 (work item).** 初期の Content Manager ワークフローおよび Enterprise Information Portal 拡張ワークフローにおいて、ワークフロー 内でアクティブになっている作業アクティビティ。

**作業状態 (work state).** 個々の作業項目、文書、またはフォルダー の状況。

**作業ステップ (work step).** 作業項目、文書、またはフォルダー が通過する必要のある、ワークフロー または文書ルーティング処理 における個別のポイント。

**索引 (index).** 特定の項目 やオブジェクト を識別する属性値を、後で検索できるように追加または編集する。

**索引クラス (index class).** 項目タイプ (item type) を参照。

**索引クラス・サブセット (index class subset).** 初期の Content Manager において、アプリケーションがフォルダーおよびオブジェクトの保管、検索、表示に使用する索引クラス のビュー。

**索引クラス・ビュー (index class view).** 初期の Content Manager において、索引クラス・サブセット の API で使用する用語。

**サスペンドする (suspend).** オブジェクト をワークフロー から取り除き、それを活動化させるために必要なサスペンド基準を定義すること。そのオブジェクトを後で活動化させると、処理を再開できる。

**サブクラス (subclass).** 別のクラスから派生するクラス。クラスとサブクラスの間に 1 つ以上のクラスがある場合がある。

**参照 (reference).** ルートまたは子コンポーネント と別のルート・コンポーネント との間の単一方向、1 対 1 の関係。リンク (link) と対比。

**照会ストリング (query string).** 照会のプロパティおよびプロパティ値を指定するための文字ストリング。アプリケーションで照会ストリングを作成して、照会に渡すことができる。

**情報マイニング (information mining).** テキストからの重要な情報の抽出 (要約)、文書の集合からの主要なテーマの検出 (カテゴリー化)、および強力で柔軟性のある照会を使用した適切な文書の検索を実行するための自動化されたプロセス。

**シン・クライアント (thin client).** ソフトウェアがほとんど、またはまったくインストールされていないが、接続先のネットワーク・サーバーで管理され送達されるソフトウェアに対するアクセス権があるクライアント。シン・クライアントは、ワークステーションなどの機能の充実したクライアントの代替になる。

**スーパークラス (superclass).** クラスの派生元のクラス。クラスとスーパークラスの間に 1 つ以上のクラスがある場合がある。

**ステージング (staging).** 保管オブジェクトを、オフラインまたは優先順位の低い装置から、オンラインまたは優先順位の高い装置に戻すためのプロセス。通常はシステムまたはユーザーの要求に基づいて行われる。ユーザーが永続記憶域に保管されているオブジェクトを要求すると、作業用コピーがステージング域 に書き込まれる。

**ステージング域 (staging area).** リソース・マネージャー の作業用ストレージ領域。リソース・マネージャー・キャッシュ ともいう。

**ストリーム化データ (streamed data).** ネットワーク接続を介して一定の速度で送信されるすべてのデータ。ストリームは、1 つのデータ・タイプまたは複数のタイプの組み合わせである。データ転送速度 (ビット / 秒で示される) は、ストリームやネットワークの種類によって異なる。



**属性 (attribute).** 項目の一定の特性またはプロパティ (名前、住所、年齢など) を記述し、その項目を探し出すために使用できるデータの単位。属性には、その属性によって保管される情報範囲を指示するタイプ、およびその範囲内の値が含まれる。たとえば、マルチメディア・ファイル・システム内のファイルについての、タイトル、実行時間、またはエンコード・タイプ (MPEG1、H.263 など) などの情報。Enterprise Information Portal については、**統合属性 (federated attribute)** および **固有属性 (native attribute)** も参照。

## [タ行]

**抽象クラス (abstract class).** 概念を表現する、オブジェクト指向プログラミングのクラス。概念から作成される複数のクラスは、概念のインプリメンテーションを表現する。抽象クラスのオブジェクトを構成することはできない。つまり、インスタンス化は不可能。

**データ・ストア (datastore).** (1) データを保管する場所 (データベース・システム、ファイル、ディレクトリーなど) を示す総称用語。(2) アプリケーション・プログラムでは、コンテンツ・サーバー の仮想表現。

**データ・フォーマット (data format).** *MIME* タイプ (*MIME type*) を参照。

**統合エンティティ (federated entity).** 統合属性 から成る Enterprise Information Portal メタデータ・オブジェクト。統合エンティティは、1 つ以上の統合テキスト索引 と関連付けることもできる。

**統合検索 (federated search).** 1 つ以上のコンテンツ・サーバー でデータを同時に検索する、Enterprise Information Portal から発行される照会。コンテンツ・サーバーは異機種混合でもかまわない。

**統合コレクション (federated collection).** 統合検索 の結果であるオブジェクトのグループ。

**統合属性 (federated attribute).** 1 つ以上のコンテンツ・サーバー で固有属性 にマップされる Enterprise Information Portal メタデータ・カテゴリ。たとえば、統合属性であるポリシー番号 (policy number) は、Content Manager では属性 policy num に、Content Manager ImagePlus for OS/390 では属性 policy ID にマップされる。

**統合データ・ストア (federated datastore).** 任意の数の特定のコンテンツ・サーバー (Content Manager など) を指す仮想表現。

**統合テキスト索引 (federated text index).** 1 つ以上のコンテンツ・サーバー で 1 つ以上の固有テキスト索引 にマップされる Enterprise Information Portal メタデータ・オブジェクト。

**動的データ・オブジェクト (DDO) (dynamic data object (DDO)).** アプリケーション・プログラムで、ストレージから出し入れされる保管オブジェクトを総称した表現。

**特権 (privilege).** 特定のオブジェクト に特定の方法でアクセスする権利。特権には、システムに保管されているオブジェクトの作成、削除、および選択を行う権利が含まれる。特権は、管理者が割り当てる。

**特権セット (privilege set).** システムのコンポーネントや機能进行处理するための特権 の集合。管理者は特権セットをユーザー (ユーザー ID) およびユーザー・グループ に割り当てる。

## [ナ行]

**ネットワーク・テーブル・ファイル (network table file).** Content Manager システムのそれぞれのノードのシステム固有の構成情報が含まれているテキスト・ファイル。システムのそれぞれの

ノードには、ノードを識別し、接続する必要のあるノードのリストを表示するネットワーク・テーブル・ファイルがある。

ネットワーク・テーブルの名前は  
FRNOLINT.TBL。

## [ハ行]

**パーツ (part).** オブジェクト (*object*) を参照。

**バイナリー・ラージ・オブジェクト (BLOB) (binary large object (BLOB)).** サイズが 0 バイト ~ 2 ギガバイトの、バイトのシーケンス。このストリングには関連したコード・ページや文字セットはない。イメージ、オーディオ、およびビデオの各オブジェクトは BLOB に保管される。

**ハイパーテキスト・マークアップ言語 (HTML) (Hypertext Markup Language (HTML)).** SGML 規格に準拠したマークアップ言語で、主にハイパーテキスト・リンクを含むテキスト情報とグラフィック情報のオンライン表示をサポートするために設計された。

**パッケージ (package).** 関連するクラス およびインターフェースのコレクション。アクセス保護とネーム・スペース管理を提供する。

**パラメトリック・サーチ (parametric search).** オブジェクトのプロパティ ーに基づく、オブジェクトの照会。

**ハンドル (handle).** オブジェクトを表す文字ストリング。オブジェクトを検索する場合に使用する。

**ヒストリー・ログ (history log).** ワークフローの活動履歴を保持するファイル。

**ファイル・システム (file system).** AIX で、ハード・ディスクのパーティションを区切ってストレージを作る方法。

**フォルダー (folder).** 種別に関係なく、フォルダー・セマンティック・タイプを持つ任意の項目タイプの項目。フォルダー意味体系タイプを持つ項目はいずれにも、すべての非リソース項目機能や、文書 またはリソース項目などの項目タイプ分類から使用できるその他の機能に加え、Content Manager が提供する特定のフォルダー機能が含まれる。フォルダーには、文書およびサブフォルダーを含め、任意のタイプの項目を任意の数だけ入れることができる。フォルダーには、属性別に索引を付けることができる。

**フィーチャー (feature).** イメージ・サーチ・サーバーに格納されたビジュアル・コンテンツ情報。さらに、イメージ・サーチ・アプリケーションが突き合わせに使用する可視特性。QBIC フィーチャーには、平均色、ヒストグラム色、定位置色、およびテクスチャーの 4 種類がある。

**フォルダー・マネージャー (folder manager).** データをオンライン文書とフォルダーとして管理する Content Manager モデル。フォルダー・マネージャー API は、アプリケーションと Content Manager コンテンツ・サーバーとの間の基本インターフェースとして使用できる。

**プロパティ ー (property).** オブジェクトの特性に関する説明。プロパティ ーは変更や修正が可能。プロパティ ーの例としては、たとえば書体などがある。

**文書 (document).** 単独の単位として、Content Manager システムとユーザーとの間で保管、検索、および交換可能な項目。文書セマンティック・タイプの項目は、文書を形成する情報を含んでいると予想されるが、必ずしも Content Manager 文書モデルのインプリメンテーションであることを意味しない。

文書分類項目タイプから作成された項目 (Content Manager 文書モデルの特定のインプリメンテーション) は、文書パートを含んでいなければならない。文書分類項目タイプを使用して、文書セマン

ティック・タイプまたはフォルダー・セマンティック・タイプのどちらかの項目を作成できる。

文書部分に、テキスト、イメージ、およびスプレッドシートなど、異なるタイプのコンテンツを含めることができる。

### 文書タイプ定義 (DTD) (document type

**definition (DTD)).** 特定クラスの XML 文書用の構造を指定する規則。DTD は、エレメント、属性、および表記によって構造を定義し、各エレメント、属性、および表記を文書の特定クラス内で使用する方法についての制約を確立する。DTD は、特定のマークアップ言語の構造を完全記述するという点で、データベース・スキーマに類似している。

**ボリューム (volume).** システムのオブジェクトが保管されている実際の物理ストレージ装置または物理ストレージ単位を表す。

## [マ行]

**マルチメディア (multimedia).** コンピューターから表示および制御できるように、異なるメディア・エレメント (テキスト、グラフィックス、オーディオ、静止画、ビデオ、アニメーション) を結合すること。

### マルチメディア・ファイル・システム

**(multimedia file system).** ビデオおよびオーディオの保管および送達用に最適化されたファイル・システム。

**メソッド (method).** Java 設計とプログラミングで、操作によって指定される動作がインプリメントされたソフトウェア。C++ におけるメンバー関数と同義。

**メディア・アーカイバー (media archiver).** オーディオおよびビデオのストリーム・データの保管に使用する物理装置。VideoCharger はメディア・アーカイバーの一種である。

**メディア・サーバー (media server).** Content Manager システムの AIX ベースのコンポーネント。ビデオ・ファイルを保管し、これらのファイルにアクセスするときに使う。

## [ヤ行]

**ユーザー (user).** Enterprise Information Portal では、Enterprise Information Portal 管理プログラム内で識別される人すべて。

**ユーザー出口 (user exit).** IBM 提供のプログラムのうち、ユーザー出口ルーチンが制御を受け取ることができる場所。

**ユーザー出口ルーチン (user exit routine).** 事前定義されたユーザー出口 で制御を受け取るユーザー作成ルーチン。

**ユーザー・グループ (user group).** 1 つ以上の定義済み個別ユーザー で成るグループ。単一グループ名によって識別される。

### ユーザー・マッピング (user mapping).

Enterprise Information Portal のユーザー ID とパスワードを、1 つ以上のコンテンツ・サーバー中の対応するユーザー ID とパスワードに関連付けること。ユーザー・マッピングにより、Enterprise Information Portal と複数のコンテンツ・サーバー にシングル・ログオンできる。

## [ラ行]

**ライブラリー・クライアント (library client).** ライブラリー・システムに低レベルのプログラミング・インターフェースを提供する Content Manager システムのコンポーネント。ライブラリー・クライアントには、ソフトウェア開発者キットの一部を成す API が含まれている。

**ライブラリー・サーバー (library server).** 項目上の照会を保管、管理、および処理する Content Manager システムのコンポーネント。

**ランク (rank).** 指定されたパーツと照会結果の関係を示す整数値。ランクが高いほど一致の度合いが高い。

**リソース交換ファイル・フォーマット (RIFF) (Resource Interchange File Format (RIFF)).** 異なるタイプのコンピューター装置上で再生する音またはグラフィックスを保管するために使用する。

**リソース・マネージャー.** オブジェクトを管理する Content Manager システムのコンポーネント。これらのオブジェクトは、ライブラリー・サーバー上に保管された項目によって参照される。

**リソース・マネージャー・キャッシュ (resource manager cache).** リソース・マネージャーの作業用ストレージ領域。ステージング域ともいう。

**リモート・メソッド呼び出し (Remote Method Invocation (RMI)).** プログラミングを分散できる API の集合。1 つの Java 仮想計算機 (JVM) 内のオブジェクトは、その他の JVM 内のオブジェクト上にメソッドを呼び出すことができる。

**リンク (link).** ソースおよびターゲットという 2 つの項目の間の方向関係。一連のリンクを使用して、1 対多の関係を作成することができる。  
*参照 (reference) と対比。*

**ルート・コンポーネント (root component).** 関連するシステム定義およびユーザー定義の属性から構成される、項目タイプ階層の最初または唯一のレベル。

**レンダリングする (render).** 通常であればイメージとは無関係なデータを、イメージとして捕らえて表示すること。Content Manager では、ワープロ文書を表示する目的で、それをイメージとしてレンダリングできる。

**ローカル・エリア・ネットワーク (LAN) (local area network (LAN)).** 一連の装置が通信のためお互いに接続されたネットワークで、より大規模なネットワークへ接続することも可能。

## [ワ行]

**ワークフロー (workflow).** Enterprise Information Portal において、ワーク・パケット、文書、またはフォルダーが、処理の過程で通過する一連の作業ステップおよびそれらのステップを管理する規則を指す。

たとえば、請求の認証 (claims approval) は、個々の保険金請求が認証を受けるために行う必要のある処理について説明している。

**ワークフロー状態 (workflow state).** ワークフロー全体の状況。

**ワーク・パケット (work packet).** Enterprise Information Portal バージョン 7.1 において、ある場所から別の場所に経路指定される文書の集合。ワーク・リストを介してワーク・パケットにアクセスして処理する。

**ワーク・リスト (worklist).** ユーザーに割り当てられる、作業項目、文書、またはフォルダーの集合。

**ワイルドカード文字 (wildcard character).** アスタリスク (\*) または疑問符 (?) などの特殊文字。1 つまたは複数の文字を表現するために使用することができる。文字または文字セットはワイルドカード文字で置き換えることができる。

## A

**ADSM.** *Tivoli Storage Manager* を参照。

**API.** アプリケーション・プログラミング・インターフェース (*application programming interface*) を参照。

**Audio Video Interleaved (AVI).** オーディオ・データおよびビデオ・データをファイルにインターリーブすることができる RIFF (リソース交換ファイル・フォーマット) ファイル仕様。分離トラックには、ファイル装置上の順次アクセスを保持しながら、再生や記録用の代替チャンク内でアクセス可能。

**AVI.** *Audio Video Interleaved* を参照。

## B

**BLOB.** バイナリー・ラージ・オブジェクト (*binary large object*) を参照。

## C

**CGI.** コモン・ゲートウェイ・インターフェース (*Common Gateway Interface*) を参照。

**CGI スクリプト (CGI script).** Web サーバー上で稼働するコンピューター・プログラムで、コモン・ゲートウェイ・インターフェース (*CGI*) を使用して、通常は Web サーバーでは行われないタスク (データベース・アクセスやフォーム処理など) を実行する。CGI スクリプトは、Perl などのスクリプト記述言語で書かれた CGI プログラムである。

**CIF.** 共通交換ファイル (*common interchange file*) を参照。

**CIU.** 共通交換単位 (*common interchange unit*) を参照。

**Common Interchange File (CIF).** ImagePlus Interchange Architecture (IPIA) データ・ストリームを 1 つ含んでいるファイル。

**Common Interchange Unit (CIU).** CIF で使われる、独立した転送単位。受信データベースとの関係を識別するのは CIF の一部である。1 つの CIF に CIU が複数含まれることもある。

## D

**DDO.** 動的データ・オブジェクト (*dynamic data object*) を参照。

**DTD.** 文書タイプ定義 (*document type definition*) を参照。

## H

**HTML.** ハイパーテキスト・マークアップ言語 (*Hypertext Markup Language*) を参照。

## I

**IOCA.** イメージ・オブジェクト・コンテンツ・アーキテクチャー (*Image Object Content Architecture*) を参照。

## J

**JavaBeans.** 『bean』 と呼ばれる再使用可能な Java コンポーネントを作成するための、プラットフォームから独立した、ソフトウェア・コンポーネント・テクノロジー。これらの Bean は、作成した後は、他のソフトウェア・エンジニアが使用することも、Java アプリケーションで使用することもできる。JavaBeans を使用して、ソフトウェア・エンジニアは、グラフィックなドラッグ・アンド・ドロップ開発環境で bean を操作したり、アセンブルすることができる。

**Joint Photographic Experts Group (JPEG).**

(1) デジタル化連続トーン・イメージの圧縮についての規格を確立したグループ。(2) このグループによって開発された静止画の規格。

**JPEG.** *Joint Photographic Experts Group* を参照。

## L

**LAN.** ローカル・エリア・ネットワーク (*local area network*) を参照。

## M

**MIME タイプ (MIME type).** インターネット上で転送されるオブジェクトのタイプを識別するためのインターネット標準。MIME タイプには、数種類のオーディオ、イメージ、およびビデオが含まれる。オブジェクトごとに 1 つの MIME タイプを持つ。

**Multipurpose Internet Mail Extensions (MIME).** *MIME* タイプ (*MIME type*) を参照。

## O

**OLE.** オブジェクトのリンクと組み込み (*Object Linking and Embedding*) を参照。

## P

**PID.** 永続 ID (*persistent identifier*) を参照。

## Q

**QBIC.** イメージ・コンテンツによる照会 (*query by image content*) を参照。

## R

**README ファイル (README file).** プログラムをインストールまたは実行する前に参照しなければならない、プログラム関連ファイル。README ファイルには、通常、最新の製品情報、インストール情報、または製品使用に関するヒントが含まれる。

**RIFF.** リソース交換ファイル・フォーマット (*Resource Interchange File Format*) を参照。

**RMI サーバー (RMI server).** Java リモート・メソッド呼び出し (*RMI*) 分散オブジェクト・モデルをインプリメントするサーバー。

## T

**Tivoli StorageManager (TSM).** 異種環境でのストレージ管理とデータ・アクセス・サービスを備えたクライアント / サーバー 製品。さまざまな通信メソッドをサポートし、ファイルのバックアップとストレージを管理する機能を備え、バックアップ操作のスケジューリング機能を備えている。

**TSM.** *Tivoli Storage Manager* を参照。

**TSM ボリューム (TSM volume).** *Tivoli Storage Manager* が管理する論理ストレージ域。

## U

**uniform resource locator (URL).** コンピューター上、またはインターネットなどのネットワーク内の情報リソースを表す文字列。この文字列には、情報リソースにアクセスするために使用されるプロトコルの省略名、および情報リソースを見つけるためにプロトコルによって使用される情報が含まれている。たとえば、インターネットのコンテキストでは、さまざまな情報リソースにアクセスするために使用されるいくつかのプロトコルの省略名 (*http*, *ftp*, *gopher*, *telnet*, および *news*) である。

## X

**XDO.** 拡張データ・オブジェクト (*extended data object*) を参照。

**XML.** *Extensible Markup Language* を参照。

**XML (Extensible Markup Language).** SGML から作成され、SGML のサブセットである、マークアップ言語定義のための標準メタ言語。XML は、SGML の複雑であり使用されない部分を省

略する。文書タイプを処理し、構造情報を作成および管理し、異なるコンピューター・システムに渡って構造化情報を伝送および共用するためのアプリケーションを作成することが非常に容易になる。XMLの使用は、耐久力のあるアプリケーションおよびSGMLに必要な処理を必要としない。XMLは、World Wide Web Consortium (W3C) の賛助で開発されている。





# 索引

日本語, 数字, 英字, 特殊文字の順に配列されています。なお, 濁音と半濁音は清音と同等に扱われています。

## [ア行]

イメージ検索オプション 6

## [カ行]

管理クライアント

概要 15

管理データベース

EIP 接続のテスト 157

キーワード 213

クライアント

構成の選択項目 19

クライアント/サーバーのサポート  
33

計画

システム管理、EIP 15

EIP ネットワーク・セキュリティ  
ー 16

EIP の構成 9

RMI サーバー 12

構成の選択項目 19

コネクタ 5

コンテンツ・ビューアー・オプション 7

## [サ行]

サーバー/クライアントのサポート  
33

サポート・マトリックス 33

システム管理クライアント

ハードウェアおよびソフトウェア  
要件 26, 27

選択項目

Java または C++ 20

Web またはデスクトップ・クライアント 19

## [タ行]

統合コネクタ

INI 構成ファイル名 205

トレードオフ

構成 19

## [ナ行]

ネットワーク・セキュリティ、計画 16

## [マ行]

マトリックス

クライアントのサポート 33

## [ヤ行]

ユーティリティ

構成、INI ファイル 205

構成、LDAP データ・ソース  
216

自動による使用可能化 205

cmvcmenv.properties ファイルの構成 202

## [ラ行]

リモート・メソッド呼び出し (RMI)

INI ファイル情報 214

リモート・メソッド呼び出し、  
参照: RMI サーバー

## [ワ行]

ワークフロー・サーバー 11

## A

Active Directory

統合コネクタのデータ・ソース  
224

ICM コネクタのデータ・ソース 220

AIX

インストール

EIP コンポーネント 105

ハードウェアおよびソフトウェア  
要件 28

## C

cmbclient.ini 214

cmbcmenv.properties 202

cmbds.ini 211, 213

cmbenv81.bat 205

cmbenv81.sh 205

cmbfedenv.ini 210

cmbicmenv81.bat 205

cmbicmsrvs.ini 208

cmbjdbcsrvs.ini 215

cmvicmenv.ini 207

Content Manager

EIP テーブルの追加 55

## E

EIP

イメージ検索クライアント 6

管理クライアント 15

管理コンポーネント 4

## EIP (続き)

- クライアント構成 13
  - 計画
    - 構成 9
    - ネットワーク・セキュリティ 16
  - コネクタ 5
  - コネクタ・ツールキット 7
  - コンテンツ・ビューアー・クライアント 7
  - 情報マイニング・オプション 6
  - テキスト検索クライアント 6
  - マシン・タイプの選択、
    - Windows 14
  - ワークフロー・サーバー 11
  - Content Manager へのテーブルの追加 55
  - Information Center コンポーネント 8
  - RMI サーバー 12
  - Web Crawler オプション 6
- ## EIP コンポーネント
- イメージ検索 6
  - インストール
    - AIX 105
    - Solaris 141
  - オペレーティング・システムの互換性 3, 4
  - 管理 4
  - 旧バージョンのアンインストール 57
  - コネクタ 5
  - コンテンツ・ビューアー 7
  - 情報マイニング 6
  - テキスト検索 6
  - Information Center 8
  - Web Crawler 6
- ## Enterprise Information Portal,
- 参照: EIP

## I

- ICM コネクタ
  - INI 構成ファイル名 205

- ## Information Structuring Tool
- Websphere アプリケーション・サーバー の配置 170, 182
- ## INI ファイル
- キーワード情報 213
  - 使用可能化、Java ユーティリティ 205
  - データベース接続情報
    - 統合コネクタ 210
    - ICM コネクタ 207
  - データ・ストア・データ・ソース
    - 統合コネクタ 211
    - ICM コネクタ 208
    - JDBC コネクタ 215
  - C++ 用のリスト 205
  - Java 用のリスト 206
  - RMI サーバー情報 214

## J

- ## JAR ファイル
- 自動による使用可能化 205
  - 必要なファイル、
    - cmbcmenv.properties ユーティリティ 202
  - 必要なファイル、INI ファイル・ユーティリティ 205
  - 必要なファイル、LDAP データ・ソース・ユーティリティ 216

## L

- ## Lightweight Directory Access Protocol (LDAP)
- 構成、IBM SecureWay 用
    - 統合コネクタ 221
    - ICM コネクタ 217
  - 構成、MS Active Directory 用
    - 統合コネクタ 224
    - ICM コネクタ 220
  - プロパティ・ファイルからのサーバーの指定 202, 203

## M

- ## MQSeries
- インストール
    - AIX 94
  - ワークフローのインストール
    - AIX 98

## R

- ## RMI サーバー
- 構成 193
  - 構成、複数 195
  - サーバー・プールの設定 195
  - サポートされるサーバー・タイプ 193
  - 情報マイニングの構成 198
  - プール 12
  - ホスト名とポート番号の設定 199

## S

- ## SecureWay
- 統合コネクタのデータ・ソース 221
  - ICM コネクタのデータ・ソース 217
- ## Solaris
- インストール
    - EIP コンポーネント 141
  - ハードウェアおよびソフトウェア要件 30

## W

- ## Web Crawler
- 開始 168
  - クロールの有効範囲の設定 167
  - 構成 165
  - DB2 オプション 166
  - EIP オプション 6
- ## Windows
- ハードウェアおよびソフトウェア要件 23





プログラム番号: 5724-B43

Printed in Japan

GC88-9203-01



日本アイ・ビー・エム株式会社

〒106-8711 東京都港区六本木3-2-12